

トナル是明治三十二年ヨリ明治三十六年ニ至ル五箇年間ニ於ケル年年ノ租額ニシテ之ヲ當初衆議院ノ修正案ニ依リ概算シタル増徴額

計	四千六百七拾七萬八千七百餘圓
田	參千參百貳拾九萬八百餘圓
畑	七百貳拾七萬九千七百餘圓
郡村宅地	參百五拾九萬八千貳百餘圓
市街宅地	百六拾貳萬四千四百餘圓
右以外ノ土地	九拾六萬千八百餘圓
計	四千六百七拾五萬貳千百餘圓
ニ比照スレハ	
田	六千七百餘圓 (増)
畑	八千四百餘圓 (減)
郡村宅地	七萬九千百餘圓 (減)
市街宅地	拾壹萬四千四百餘圓 (増)
右以外ノ土地	四千餘圓 (減)
計	貳萬六千五百餘圓 (増)

ヲ増減ス其郡村宅地市街宅地ニ於ケル差違ノ著シキハ宅地組換ノ爲メ生シタルモノトス而シテ前記増徴地租ハ明治三十六年ヲ以テ滿了スルカ故ニ明治三十七年以降ハ初頭ニ掲ケタル員額ノ

ミニ復歸スヘキモノナリ

三 宅地組換

地租ヲ増加スルニ當リ政府當初ノ經畫ハ土地ノ種類ニ依リ地租ノ課率ヲ異ニセサリシヲ以テ宅地ノ組換ハ其必要ヲ見サリシト雖モ衆議院カ地租條例中改正法案ヲ修正シ市街宅地ト郡村宅地トハ地租ノ課率ヲ異ニスルニ至リシヲ以テ地租改正當時ニ定メタル宅地ノ區別ニ依リ直ニ改正法律ヲ適用スルトキハ土地所有者ノ負擔ニ甚シキ不權衡ヲ生スルニ至ルヘシ抑郡村宅地市街宅地ノ區別ハ地租改正ノ際當時ノ狀況ニ依リ之ヲ定メタルモノニシテ世運ノ隆替交通機關ノ變化ニ伴ヒ各地盛衰消長ノ變遷ヲ免カレス今日ニ在リテハ其實ニ適セサルモノ尠カラス故ニ郡村宅地市街宅地ノ地租課率ヲ異ニスルニ於テハ勢ヒ實地ノ狀況ニ依リ彼此ノ組換ヲ爲シ負擔ノ適實ヲ謀ラサルヘカラス是ニ於テ貴族院ハ地租條例中改正法案ニ關スル衆議院ノ修正案ヲ可決スルト同時ニ宅地組換法案ヲ提出シ政府モ之ニ同意ヲ表シ終ニ明治三十二年法律第六十二號ヲ以テ公布セラル、ニ至レリ同法ハ組換ノ事ヲ以テ全ク命令ノ定ムル所ニ一任シタルヲ以テ勅令案起草ノ材料トシテ先以テ全國ニ於ケル市街ノ狀況ヲ呈スル土地ニ付キ其戶數、營業者數、物貨聚散ノ狀況著シキ工業場ノ有無及其數、銀行其他商會社ノ有無及其數、船舶出入ノ狀況、鐵道停車場ノ有無、重要ナル官衙公署ノ數、著名ナル神社佛閣ノ有無及土地ノ賃賃價格等ヲ調査セシメ仍吏員ヲ派遣シテ實地ヲ視察セシメ更ニ兩回各稅務管理局长ヲ召集シテ其意見ヲ徵シ反覆調査ノ上明治三十二年勅令第二百三十四號ヲ以テ組換ノ事ヲ發布セラレタリ今郡村宅地ヨリ新ニ市街宅地ニ組換ヘ又市街宅地ヨリ郡村宅地ニ組換タルモノノ總額ヲ舉クレハ

郡村宅地ヨリ市街宅地ニ組換タルモノ
 坪數 千六百參拾四萬參千貳百餘坪
 地價 參百八拾七萬七千四百餘圓
 地租 拾九萬參千九百餘圓
 內増徴地租九萬六千九百餘圓
 市街宅地ヨリ郡村宅地ニ組換タルモノ
 段別 貳千貳拾貳町餘步
 地價 百參拾六萬八千七百餘圓
 地租 四萬五千餘圓
 內増徴地租壹萬九百餘圓
 ニシテ其結果ハ
 市街宅地ニ於テ
 坪數 九百九拾六萬四千四百餘坪
 地價 貳百五拾萬八千七百餘圓
 地租 拾貳萬五千四百餘圓
 內増徴地租六萬貳千七百餘圓
 フ増シ
 郡村宅地ニ於テ

段別 參千參百貳拾五町餘步
 地價 貳百五拾萬八千七百餘圓
 地租 八萬貳千八百餘圓
 內増徴地租貳萬餘圓
 フ減シ即チ組換ノ爲ニ歳入ニ於テ増加シタル地租額ハ僅ニ四萬貳千六百餘圓ナリ而シテ前記宅地ニ對シテハ明治三十二年分地租ヨリ其組換タル地目ニ對スル租率ニ依リ地租ヲ徵收スヘキモノトス

四 沖繩縣土地整理

現今沖繩縣ニ於テ徵收スル地租ハ遠ク慶長年間ノ檢地ニ依リ石盛ヲ爲シタルモノニ基ツクモノニシテ享保元文ノ比本島ノ檢地ヲ行ヒタルコトアリト雖モ其結果ニ依リ課税シタルノ事蹟ハ之ヲ見ルヲ得サルノミナラス嗣後土地ノ異動アリタル場合ニ一之ヲ公簿ニ登記シタル如キ形跡ナク地籍錯亂シ段別實數ヲ得ス其石盛ノ如キハ地方ニ依テ其見積ヲ異ニシ且時ノ必要ニ依リ漸次之ニ増加セル事實アリテ負擔漸ク重ヲ加フルニ至リシニモ拘ラス首里那霸兩區内ノ土地ノ如キハ古來全ク租稅ヲ課セス偏重偏輕ノ甚シキ課税ノ衡平ハ殆ント之ヲ保維スルコト能ハス甚シキハ地租ノ名義ヲ以テ其實人頭ニ課税スルモノアリ要スルニ課税ノ目的確實ナラス稅率及稅額算出ノ方法亦明瞭ヲ缺ケリ加之納稅ニ金納アリ物品納アリ同シク物品納中ニ於テモ米納アリ雜穀納アリ砂糖納アリ反布納アリ徵稅上頗ル煩細ニ堪ヘス滯納者ニ對スル處分亦苛酷ニ失スルモノ尠カラス抑置縣以來仍此ノ如キ舊慣ヲ存續セシメタル所以ノモノ當時ノ事情已ムヲ得サルニ

出テタリト雖モ現今ニ於テハ該縣ノ狀況復昔日ノ比ニアラス漸次諸般制度ノ改善ヲ要スルニ至リ地租賦課法改正ノ如キ改善ノ第一著手トシテ目前其必要ヲ見ルモノナリ然ルニ該縣ニ於ケル土地ノ種類ヲ見ルニ期限ヲ定メテ地割ヲ爲スモノアリ役職ニ附屬シテ役職アル者ノ占有ニ歸スルモノアリ永代小作ニ付セラルルモノアリ開墾ニ因リ所有ト爲シタルモノアリ土地ニ關スル制度ハ畫一ナラスト雖モ概シテ云ヘハ沖繩縣ノ土地制度ハ村落共有制度ヨリ個人私有制度ニ變遷セントスル經過時期ニ在ルモノト謂フコトヲ得ヘシ故ニ地租ノ賦課法ヲ改メ内地同様ノ法律ニ從ハシメントセハ勢ヒ土地制度ヲ改メ個人私有制度ヲ認ムルノ手段ニ出テサルヘカラス依テ政府ハ大體現在ノ占有者ヲ以テ土地ノ所有者ト爲スノ方針ヲ以テ各種ノ土地ヲ調査シ一一其所有ノ歸スヘキ者ヲ定メテ沖繩縣ノ土地ヲ整理シ然ル後地租條例及國稅徵收法ノ施行ヲ爲スト同時ニ舊慣ニ依ル土地ニ關スル國稅ヲ廢止スル爲メ沖繩縣土地整理法ヲ第十議會ニ提出シ議會モ大體ニ於テ政府案ヲ可決シ明治三十二年法律第五十九號ヲ以テ公布セラレタリ

土地ノ整理ハ沖繩縣ニ於テ實ニ必要ニシテ且今ヤ正ニ其時機ノ熟シタルモノナリト雖モ其事タル亦縣民ノ休戚ニ關スル重大ノ事件ナルヲ以テ之ヲ實行スルニ當テハ鄭重慎重ノ手段ヲ盡ササルヘカラス依テ臨時沖繩縣土地整理事務局ナル官廳ヲ設置シ沖繩縣知事ヲシテ其長官ヲ兼ネシメ專ラ其事務ニ當ラシメ今後五年ヲ期シテ其業ヲ完成セシメントス今同局ニ於ケル事務ヲ大體ニ區別スレハ土地整理、土地丈量、地價査定ノ三事務ト爲スコトヲ得ヘシ而シテ土地整理事務ニ關シテハ種種ノ手段ヲ以テ人民ヲシテ法律ノ趣旨ヲ了解セシムルノ方法ヲ取り明治三十二年九月ニ至リ地割地ノ配當換ニ關スル協議等ハ一應完了セシメタルヲ以テ今後剩ス所ハ其協議ノ實行

セラル、コトヲ期スルニ在リ土地丈量ハ一等圖根測量二等圖根測量碎部測量ノ三段ニ分チ施行スルノ經畫ニシテ目下八重山宮古兩郡ノ一等圖根測量ヲ完成シ該二郡ノ二等圖根測量及中頭島尻兩郡ノ一等圖根測量ニ著手セリ地價ノ査定ハ碎部測量ヲ了シタル地ニ就キ之ヲ行フモノニシテ目下ハ地價査定ノ根基トナルヘキ收穫費目物價等ヲ調査シ同時ニ地押ヲ爲シテ地番ヲ付シ地目ヲ明ニシ他日地價査定ヲ爲スニ際シテ其用ニ供スルノ準備ヲ爲シ居レリ

第二 所得稅

所得稅ハ明治二十年勅令第五號ヲ以テ創始セラレタルモノニシテ爾來年ヲ閱スルコト十有餘年此間諸種ノ變遷ヲ經テ漸ク法規ノ不完備ナルコトヲ感シ其改正ヲ必要トスルニ至レリ今改正ヲ必要トスル重要ナル點ヲ擧クレハ

- 第一 納稅義務ノ發生ヲ明ニシ内外國ノ關係ニ依リ義務者ノ範圍ヲ定メサルヘカラス此必要ハ改正條約ノ實施ニ依テ特ニ速進セラレタルモノナリ
- 第二 民間ノ起業漸ク増進スルニ隨ヒ商事會社ノ勃興シタルモノ多ク之ニ對スル課稅方ヲ規定セサルヘカラス
- 第三 稅務機關ノ新設セラレタル以上ハ國稅ニ關スル事務ハ此機關ヲシテ執行セシムルノ必要アリ
- 第四 法律執行上徵稅ノ方法ニ於テ實地ノ適用ニ合セサルモノナリ

以上ノ原由ニ依リ稅法ノ整理ヲ必要トスルト同時ニ歲入増加ヲ謀ルノ必要アリタルヲ以テ改正法律案ヲ第十三議會ニ提出セシニ衆議院貴族院共ニ多少ノ修正ヲ加ヘタリシモ結局大體政府ノ

原案ノ趣旨ニ依リ法律案ヲ議決シ明治三十二年法律第十七號ヲ以テ發布セラレタリ
改正所得税法ヲ以テ之ヲ改正前ノ法律ニ對照スルトキハ其改正セラレタル要點ハ左ノ如シ

- 第一 内外國ニ於ケル納稅義務者ノ關係ヲ定メテ義務ノ範圍ヲ明ニシタルコト
- 第二 法人ノ所得ニ課稅スルノ制ヲ設ケタルコト
- 第三 公債社債ノ利子ニ關シテハ之ヲ他ノ所得ト區別シ利子支拂ノ際ニ於テ差引徵收ノ方法ヲ取リタルコト
- 第四 個人ノ所得ニ關シテモ稅率ヲ増加シタルコト
- 第五 稅務機關ヲシテ所得稅ノ事務ヲ取扱ハシムルコト

右改正法律ニ依リ明治三十二年ニ於テ收入スヘキ所得稅ノ概算額ハ

- 第一種 百貳拾五萬六千餘圓
- 第二種 參拾貳萬九千餘圓
- 第三種 貳百貳拾五萬六千餘圓

計 參百八拾參萬五千七百餘圓

ニシテ之ヲ第十三議會ニ當初提出シタル明治三十二年度豫算中ニ計上シタル所得稅額
貳百參拾四萬千貳百餘圓
ニ比較スレハ

百四拾九萬四千五百餘圓

ヲ増加スルノ見込ナリシカ改正法律施行以來今日マテノ現況ニ依レハ明治三十二年ニ於テ實

際收入スヘキ見込金額ハ

- 第一種 百參拾參萬七千八百餘圓
- 第二種 貳拾參萬四千餘圓
- 第三種 參百參萬六千五百餘圓

計 四百六拾萬八千六百餘圓

ニシテ之ヲ當初議會へ提出シタル豫算額ニ比スレハ

貳百貳拾六萬七千四百餘圓

ヲ増加シ之ヲ改正法律案提出當時ノ概算額ニ比スレハ

七拾七萬貳千八百餘圓

ヲ増加スヘシ但明治三十二年度實際收入見込高中第三種ハ調査委員會ノ調査ヲ經テ決定シタル
モノナリト雖モ第一種第二種ハ半年間ノ實收額ニ依リ年額ヲ豫算シタルモノナルカ故ニ多少ノ
變更ハ免レサルヘシ

第三 營業稅

明治二十七八年戰役ノ結果國家ノ歳出俄ニ膨大シタルカ爲メ新ニ歳入ヲ増加シテ之カ財源ニ充
ツルノ必要ヲ生シ營業稅ナルモノヲ設ケテ之カ必要ニ應スルコト、シ第九議會ニ其法律案ヲ提
出シタリ蓋シ營業稅ハ汎ク商工業者一般ニ涉リ其收入ノ確實ナルノミナラス將來世運ノ進歩ト
共ニ稅額ハ漸次増加スルノ望アルモノニシテ而モ之ヲ地方稅ヨリ移シテ國稅ト爲ストキハ一般
商工業者ヲシテ地方ニ依リ區區不同ノ負擔ヲ爲サシムルカ如キ結果ヲ避クルノ便宜アルヲ以テ

若シ新稅ヲ興スノ必要アリトセハ營業稅ノ如キ國稅ヲ興スヲ以テ最モ適當ト認メタルナリ
 政府提出ノ法案ニ依レハ營業稅ヲ課スヘキ營業ノ種類ハ法律ニ於テ之ヲ限定シ其課稅方法ハ賣
 上金額資本金額、建物賃賃價格報償金額、從業者等凡ソ營業ノ盛否ヲ見ルノ準的トナルヘキモノヲ
 擇テ之ヲ標準トシテ稅率ヲ設ケ以テ營業稅ノ負擔ヲシテ成ルヘク營業ノ盛否ニ隨伴セシメント
 シ且各營業稅ニハ皆其課稅標準一定ノ程度以下ニ在ルモノハ之ヲ國稅ヨリ除外シ地方ノ財源ト
 シテ存セシムルコト、セリ帝國議會ハ大體ニ於テ政府ノ原案ヲ認メテ之ヲ可決シタルヲ以テ明
 治二十九年法律第三十三號ヲ以テ公布セラレ明治三十年一月一日ヨリ施行セラレタリ
 然ルニ同法ニ於テハ資本金額ヲ標準トシテ營業稅ヲ課スヘキ者ニシテ内外國ニ涉リ又ハ營業稅
 法ヲ施行シタル地方ト之ヲ施行セサル地方トニ跨リ營業場ヲ有スル者ニ對スル規定不備ナリシ
 ヲ以テ改正條約實施ノ結果外國人ニ課稅スルニ當リ法律ノ適用ニ困難ナルヘキカ故ニ此ノ如キ
 場合ニ於テハ內國又ハ營業稅法ヲ施行スル地方ニ於テ使用スル資本金額ヲ見積リ之ヲ標準トシ
 テ營業稅ヲ課スヘキ趣旨ヲ以テ營業稅法中改正法律案ヲ第十三議會ニ提出シ議會モ亦之ヲ可決
 シ明治三十二年法律第三十二號ヲ以テ之ヲ公布セラレタリ
 第九議會ニ營業稅法律案ヲ提出シタル當時ニ於ケル其概算額ハ
 明治三十年度 五百八拾七萬四千百餘圓
 明治三十一年度以降 七百五拾五萬千參百餘圓
 ナリシモ實際收入シ又ハ收入スルコトニ確定シタル稅額ハ左ノ如シ
 明治三十年度 四百四拾壹萬六千貳百餘圓

明治三十一年度 五百四拾七萬八千餘圓

明治三十二年度 五百五拾九萬八千五百餘圓

此ノ如ク實收額ノ當初ノ概算ニ比シ減少シタルハ政府當初ノ概算ハ諸種ノ材料ニ因リ各課稅標
 準ノ金額ヲ見積リ其金額ト認ムヘキモノヲ以テ稅額ヲ算出シタリト雖モ事實ニ於テ營業稅ノ如
 キ直接稅ニ在リテハ其課稅標準ノ申告自ラ實際ノ金額以內トナルノ傾向ヲ免レサリシヲ以テナ
 リ

第四 登錄稅

登錄稅モ亦明治二十九年當時財政上ノ急需ニ應スルカ爲メ從來官公簿ニ登錄ヲ要スル地所、船舶、
 出版、版權、特許、意匠、辯護士、醫師、戶籍、商會社、礦業等ノ登錄ニ對シ登錄稅ヲ賦課シ以テ歲入ノ增加
 ヲ圖ラントシテ設ケタルモノナリト雖モ其中多クハ登記料又ハ手数料ナル名義ヲ以テ既ニ一定
 ノ金額ヲ納付スルヲ要シタルモノニ屬シ其全ク新設ニ係ルモノハ土地臺帳登錄、戶籍登錄等ナリ
 トス
 登錄稅法律案ハ一二衆議院ニ於テ修正セラレタル所アルモ大體ハ原案ヲ認メ明治二十九年法律
 第二十七號ヲ以テ公布セラレ同年四月一日ヨリ施行セラレタリ
 然ルニ第十議會ニ於テ衆議院ハ登錄稅法中戶籍ニ關スル登錄ヲ削除スルノ法律案ヲ提出シ貴族
 院ヲ通過シ明治三十年法律第三十一號ヲ以テ公布セラレタルヲ以テ戶籍ニ關スル登錄ニハ登錄
 稅ヲ課セサルコト、ナリ明治二十九年中戶籍ノ登錄稅トシテ收入シタル八拾七萬五千參百餘
 圓ハ明治三十年度以降之ヲ收入スル能ハサルコト、ナレリ

其後民法、商法、不動産登記法其他之ニ關聯セル諸法律ノ實施又ハ改正セラレタルノ結果官簿ニ登録スヘキ事項ニ増加又ハ異動ヲ生シタルカ爲メ登録税法ノ規定ヲシテ之ニ適應セシムルノ必要ト特許法、意匠法、商標法ノ制定ニ依リ特許、意匠、商標ニ關シテハ別ニ特許料、意匠料、商標料ヲ徵收スルコト、ナリタルヲ以テ登録税ヲ廢シテ重複ヲ避ケサルヘカラサルノ必要ト見ルニ至リタルト同時ニ明治三十二年度以降ニ於テ歳入ノ増加ヲ要シタルヲ以テ之ニ相當スル二箇ノ改正法律案ヲ第十三議會ニ提出シタルニ其一ハ衆議院貴族院共ニ政府案ニ對シテ修正ヲ加ヘ終ニ兩院協議會ヲ開キ不動産及船舶所有權ノ取得、土地臺帳登録中ノ三事項並演劇脚本及寫眞ノ著作權登録等ニ付キ税率ヲ増減シタル修正ヲ議決シ兩院ハ協議會ノ成案ヲ可決シ明治三十二年法律第八十三號ヲ以テ公布セラレ共ニ二ハ兩院共ニ政府ノ原案ヲ可決シ同年法律第六十號ヲ以テ公布セラレタリ

第九議會ニ始メテ登録税法案ヲ提出シタル當時ニ於ケル其概算額ハ

六百四拾貳萬參千九百餘圓

ナリシカ實際收入セラレタルハ

明治二十九年 度

五百八拾七萬四百餘圓

明治三十 年 度

五百五拾四萬四百餘圓

明治三十一年 度

五百八拾七萬四千七百餘圓

ニシテ當初ノ豫算ニ及ハスト雖モ明治三十年度以降當初百參拾萬圓以上ノ收入アリト概算シタル戶籍登録ノ登録税ヲ廢シタルニモ拘ラス其收入額ハ明治二十九年 度ニ比シ僅ニ參拾參萬餘圓

ヲ減シタルニ過キス而シテ明治三十一年度ニ於テハ戶籍登録ノ登録税ナキニモ拘ラス明治二十九年 度ノ登録税收入ヨリ多額ノ收入ヲ得タルヲ以テ見レハ本税ハ世運ノ隆盛ト共ニ漸次發達増加スヘキハ疑ヲ容レズ明治三十二年度以降ハ法律ノ改正ニ依リ收入大ニ増加スヘキハ言説ヲ須タサル所ナルモ今其實收入額ヲ計算スルニ由ナキヲ以テ此ニハ省略スヘシ

第五 酒 税

一 酒造税法ノ改正

明治二十七八年戦役後財政ノ必要ニ依リ歳入ノ増加ヲ計ルニ當テ産額ノ多クシテ而モ人生必要ノ品ニアラサル酒類ノ税ヲ増加シ之ニ依テ國庫ノ財源ヲ補フコト策ノ最モ得タルモノナルヲ以テ造石税ノ税率ヲ増加シ且營業者ノ便益ヲ謀ルト同時ニ脱税ノ取締ヲ爲スニ付キ從來ノ法規ノ不備ヲ補正スルノ必要ヲ認メ酒造税法案ヲ第九議會ニ提出シタリ改正法律案ノ舊法ニ比シ主要ナル點ハ

第一 造石税ヲ課スヘキ酒類ヲ酒名ニ依テ限定シタルコト

第二 酒造免許税ヲ廢シ一般ノ營業税法ニ依ラシムルコト

第三 造石税率ヲ増加シ從來一石ニ付キ四圓ノ割合ナリシ清酒濁酒及一石六圓ノ割合ナリシ白酒味淋ヲ一石ニ付キ七圓從來一石ニ付キ五圓ノ割合ナリシ燒酎酒精ヲ一石ニ付キ八圓トスルコト

第四 從來三類酒ト稱シタルモノノ内白酒味淋ヲ除ク外ハ別法ノ支配ヲ受ケシムルコト

第五 酒類製造免許ニ制限ヲ置カサルコト

第六 造石税ノ納期ヲ繰下ケタルコト
 第七 清酒ノ滓引減量ヲ許シタルコト
 第八 腐敗酒等免税ノ條件ヲ明ニシタルコト
 第九 納税保證ヲ一般ニ及ホシ造石税金額ニ相當スル保證物ヲ提供セシムルコト
 第十 制裁ノ規定ヲ完備セシムルコト

帝國議會ニ於テハ政府案中濁酒ノ税率七圓ヲ六圓トシ清酒製造ニ限リテハ免許ニ制限ヲ付シ十二月ノ納期ヲ翌年一月トシ滓引減量ノ率百分ノ一以内ヲ百分ノ二以内トシ納税保證物ハ造石税ノ半額ニ相當スルモノト爲スコトヲ可トシテ修正決議シ明治二十九年法律第二十八號ヲ以テ公布セラレタリ當時政府カ酒造税法ノ改正ニ依リ増加スヘキ收入ノ概算額ハ

九百貳拾八萬四千五百餘圓

ナリシカ實際ニ於テハ明治二十九年酒造年度ノ査定石高四百參拾四萬六千七百餘石ニシテ此稅額參千貳拾八萬四千九百餘圓ナルヲ以テ之ヲ前年度ノ稅額ニ比スレハ増加スルコト

千百拾七萬六千餘圓

ニシテ之ヲ概算額ニ比スレハ増加スルコト

百八拾九萬千五百餘圓

ナリ

然ルニ明治三十二年度ノ歲計ニ於テ更ニ歳入ノ増加ヲ必要トシタルヲ以テ再ヒ酒造税ニ向テ之ヲ求メサル可ラサルニ至リタルモ明治二十九年造石税ノ増加以來酒精ヲ密ニ酒類ニ混和シテ造

石税ノ負擔ヲ免ルルノ弊漸ク增長シタルヲ以テ單ニ税率ヲ増加スルノミヲ以テハ豫期ノ收入ヲ得ル能ハサルヘキヲ以テ之ニ對スル措置ヲ考慮スルト同時ニ取締上差支ナキ限リ營業者ノ利便ヲ謀ルノ目的ヲ以テ酒造税法中改正法律案ヲ第十三議會ニ提出シタリ今改正案ノ要領ヲ擧クレハ

- 第一 造石税率ハ清酒、濁酒、白酒、味淋一石ニ付キ拾貳圓、燒酎、酒精一石ニ付キ拾參圓トスルコト
 - 第二 酒類ニ包含スル酒精分ノ容量一定ノ容量ヲ超過スルトキハ含有酒精分ノ容量ニ從ヒ造石税率ヲ増加スルコト
 - 第三 酒類製造ノ免許制限ヲシテ有效ナラシメタルコト
 - 第四 造石税ノ納期ヲ繰下ケタルコト
 - 第五 腐敗酒等免税ノ範圍ヲ廣クシタルコト
 - 第六 納税保證物提供ニ便利ヲ與ヘ其額ヲ造石數一石ニ付四圓ノ割合ト爲シタルコト
- 帝國議會ハ大體ニ於テ政府案ヲ是認シ明治三十一年法律第二十三號ヲ以テ公布セラレタリ酒造税法中改正法律案ヲ第十三議會ニ提出セシ當時ニ於ケル造石税概算額ヲ以テ査定石數ニ對スル稅額ニ比較スルトキハ左ノ如シ

明治三十二年酒稅概算額ニ對スル課稅額比較表

自三十一年十二月査定	石數	稅額	概算額	比較増減
至同年十二月	七一三、八六一	四、九四四、二二〇	一、三五三、九二五	六、四〇〇、〇六四
			九、四五一、〇〇〇	四、五〇六、八八〇

自三十二年一月至同年九月	石數	稅額
三、六六八、一九〇	三、二二五、〇〇六	四四三、一八四
四四、一三〇、一〇〇	三八、七六三、六八三	五、三四九、三二七
四、三八二、〇五一	四、五七八、九三一	一九六、八八〇
四九、〇五七、二三〇	四八、二一四、七八三	八四二、四四〇
計	石數	稅額
	四九、〇五七、二三〇	四八、二一四、七八三

即チ課稅石數ハ合計ニ於テ概算石數ニ比シ拾九萬六千八百餘石ヲ減シタリト雖モ增稅前ニ査定ヲ受ケタルモノハ概算ニ比シテ少ク增稅後ニ査定ヲ受ケタルモノハ概算ニ比シテ多カリシカ爲メ稅額ニ於テハ却テ概算額ニ比シ八拾四萬貳千四百餘圓ヲ増加シタリ

酒造稅ハ兩三年中ニ兩回增稅セラレタルヲ以テ或ハ酒類ノ消費ヲ減シ爲ニ國庫ノ收入ニ影響ヲ及ホスコトナキヤ否ヤニ關シテハ時ニ之ヲ懸念シタルコトアリシカ左表ニ依テ見ルトキハ增稅ハ格別消費ニ影響セザリシカ如シ

明治二十七年年度以降酒類製成石數

明治二十七年	四百拾參萬千餘石
同 二十八年	四百七拾六萬貳千貳百餘石
增稅初年 同 二十九年	四百四拾參萬貳千貳百餘石
同 三十年	四百六拾七萬八千餘石
再增稅ノ年 同 三十一年	四百五拾萬九千參百餘石

(註)本石數ハ製成石數ヲ掲ケタルモノナルニ依リ査定石數トハ同額ナラス

明治二十九年ニ於テ造石高ヲ減シタルハ其前年ニ於テ增稅ヲ見込ミ多クノ製造ヲ爲シ持越酒類

ノ多カリシニ依ルモノニシテ增稅ノ結果ニアラサルコトハ之ヲ明治二十七年ニ比スレハ甚タ多キト明治三十年ニ至テ造石數ノ増加シタルトニ依テ明ナリ明治三十一年ニ於テ前年ニ比シ少ク減石セルモ亦增稅ヲ見込ミ前年ニ於テ多ク製造シタルト米價下落ノ爲メ農家ノ購買力ヲ減シ一般不景氣ナリシトニ依ルモノニシテ之ヲ增稅ノ結果ニ歸スヘカラサルナリ

二 自家用酒稅法ノ制定並廢止

酒類製造營業者ノ製造スル酒類ハ從來其石數ニ應シ一石四圓乃至六圓ノ造石稅ヲ課シタリト雖モ自家用ニ供スル爲メ毎年清酒ヲ除ク外一石以內ノ製造ヲ爲ス者ニハ免許鑑札料八拾錢ヲ納ムルノミニシテ別ニ造石稅ヲ課セス蓋シ細民カ依テ以テ終日勞働ノ疲勞ヲ醫スルカ爲ニ用ユル濁酒又ハ燒酎ノ負擔ヲ免レシメントスルノ旨趣ニ出テタルモノトス然ルニ實際ニ於テハ細民ニシテ自家用酒ヲ製造スル者ハ其數多カラスシテ之ヲ製造スル者ハ却テ相當資産アル者ニ多ク爲ニ細民ハ普通造石稅ノ負擔ヲ爲シ資産アル者却テ法律ノ特典ヲ享有スルノ現象ヲ呈シタリ依テ第九議會ニ酒造稅法律案ヲ提出スルト共ニ酒類造石稅ト權衡ヲ得セシムル爲メ自家用酒ノ製造稅ヲ増加シ且法律ノ精神ヲ一貫スル爲メ之カ免許ヲ受クルヲ得ヘキ者ニ一定ノ制限ヲ付スルコトトシ自家用酒稅法律案ヲ帝國議會ニ提出シ其協贊ヲ得明治二十九年法律第二十九號ヲ以テ公布セラレタリ該法律ノ實施ニ依リ自家用酒製造免許者ハ大ニ減少シ改正法律制定前ノ免許者ニ比シテ殆ント其十分ノ一ニ過キス

爾後再ヒ酒造稅法ヲ改正シ其造石稅率ヲ増加スルノ必要ヲ見ルニ至リ茲ニ再ヒ自家用酒ニ關スル處置ニ付キ考慮セサルヘカラサルノ時機ニ至リタリ元來自家用酒ナルモノハ其名稱ノ示ス如

ク各自ノ住家ニ於テ必要ニ應ジテ製造スルモノニシテ別ニ製造場ヲ要スルニアラサルヲ以テ其取締ハ頗ル困難ナルモノナリ隨テ自家用酒輕稅ノ特典アルトキハ自ラ法律規定ノ範圍ヲ超脱シ巧ニ課稅ナキ酒類ヲ製造スルノ因トナルヲ免レサルカ故ニ酒類造石稅ニシテ既ニ拾貳圓乃至拾參圓トナル以上ハ斷然此特典ヲ廢止シテ稅源ヲ保護スルニアラサレハ酒造稅ニ依テ收入ヲ増加スルノ目的ヲ達スル能ハサルヲ認メ廢止ノ法律案ヲ第十三議會ニ提出シ明治三十二年一月一日ヨリ自家用酒稅法ハ廢止セララルコトナレリ

自家用酒製造ハ經久ノ習慣ニ屬シ地方ニ依リテハ各戸殆ント皆之ヲ製造セサルナキカ如キノ風アリタルヲ以テ一朝特典ニ關スル法律ノ廢止ニ依リ其主旨ヲ體セサル者時ニ不知ノ間ニ犯則者タルカ如キニ至ルハ最モ痛歎スヘキ所ナルヲ以テ正義ハ地方長官ヲシテ普ネク管下人民ニ訓告ヲ與ヘシメ更ニ各地稅務管理局長ヲシテ地方官ト協議シ法律ノ旨趣ヲ各自ニ了得セシメ誤解ナカラシムルコトニ注意シ一方ニ於テハ其警告ニモ拘ラス尙ホ敢テ法禁ヲ犯ス者ニ對スル檢査監督ヲ嚴ニシタルヲ以テ從來自家用酒製造免許者ノ多カリシ地方ニ於テモ多クノ犯則者ヲ生スルニ至ラス酒造稅法ニ從ヒ共同シテ製造ヲ爲スカ如キ傾向ヲ見ルニ至レリ

三 酒精ノ取締

明治二十四五年ノ頃酒類ノ價格騰貴シタルニ當リ酒精ヲ清酒ニ混和シ之ニ多量ノ割水ヲ爲シ廉價ヲ以テ販賣シ或ハ酒類製造ノ免許ヲ受ケスシテ酒精ニ藥品砂糖水等ヲ混和シテ各種ノ銘酒ヲ製造シ之ヲ店頭ニ於テ販賣シ造石稅ノ負擔ヲ免ルルコトヲ圖ルノ弊漸ク流布シ造石稅ノ賦課ヲ受ケタル酒類ヲ販賣スル者ハ其競争ニ堪ヘサラントセシヲ以テ明治二十六年法律第十七號ヲ以

テ酒精ヲ販賣スル者ニハ販賣石高一石ニ付キ貳拾五圓ノ割合ヲ以テ營業稅ヲ課スルコト、シ以テ酒造稅ノ財源ヲ保護スルコトニ勉メタリト雖モ酒精ノ密賣者多ク且酒精販賣者ハ多クハ無資産ノ者ニシテ納期ニ至リ滯納ヲ爲スヲ期シテ營業スル如キ狀態ニシテ酒精營業稅法ハ酒精ノ取締ニ關シテハ其效ヲ奏スルコト尠カリシカ如シ依テ第九議會ニ酒造稅增加ニ關スル法律案ヲ提出スルニ當テハ混成酒稅法律案ナルモノヲ提出シ從來酒造稅則ニ於テ三類酒ト稱シタルモノ及酒類ニ酒精及水ヲ混和シタルモノハ之ヲ混成酒トシ一石ニ付キ六圓ノ割合ヲ以テ造石稅ヲ課スルコト、シ且製造場ヲ設ケス店頭ニ於テ混成酒ヲ製造シ小賣ヲ爲ス者ニハ造石稅ヲ課セスシテ小賣場一箇所毎ニ月稅貳圓ヲ課スルコト、シ其法律案ヲ第九議會ニ提出シタルニ衆議院ハ小賣場ノ月稅ヲ削除シ總テ造石稅賦課トスルヲ可トシ法律案ヲ修正シ貴族院モ亦衆議院ノ修正案ヲ可決シ明治二十九年法律第三十號ヲ以テ公布セラレタリ

然ルニ混成酒ノ製造ハ多クハ其方法頗ル簡單ニシテ何人ニテモ容易ニ之ヲ製造シ得ヘキカ故ニ之ヲ取締ヲ爲スコト容易ナラス故ニ混成酒稅法ノ制定ハ未タ以テ酒精取締ノ目的ヲ達シタリト謂フコト能ハス特ニ明治二十九年法律第三十號ニ規定スル混成酒ノ定義ハ總テ混和作用ニ依テ製成スル酒類ヲ包含セザリシヲ以テ法文ノ缺點ヲ利シ事實混成酒ト同一ノ酒類ヲ製造スルモ混成酒ノ課稅ヲ受ケサル者ヲ生シタリ是ニ於テ第十三議會ニ再ヒ酒造稅法ノ改正法律案ヲ提出スルニ當テハ混成酒稅法ノ改正案モ亦併セテ之ヲ提出シ混成酒ノ定義ヲ改メ其稅率六圓ヲ拾參圓トシ且混成酒中ニ含有スル酒精分ノ容量一定ノ度ヲ超過スルトキハ其含有酒精分ノ容量ニ應シ稅率ヲ増加スルコト、セントシタルニ帝國議會モ亦之ヲ認メ法律トシテ發布セララルニ至レリ

然レトモ酒精ノ取締ヲシテ完全ナラシメントセハ獨リ混成酒税法ノ改正ノミヲ以テ其目的ヲ達スヘキニアラス必スヤ輸入ノ際ニ於テ之ニ課税シ漏ルルモノナキヲ期セサルヘカラス依テ關稅定率法ヲ改正シ酒精ノ稅率從價四割ヲ増シテ從價二倍半トシ且一定ノ度ヲ超過シタル酒精分ヲ含有スル酒類ニハ酒精ト同率ノ稅ヲ課スルコト、シ之ト同時ニ酒精營業稅法ヲ廢止セゾコトヲ經畫シ第十三議會ノ協贊ヲ得明治三十二年八月十五日ヨリ實施セラレタリ

酒精ヲ酒類ニ混和スル者ニ對スル取締ハ此ノ如クシテ略ホ其目的ヲ達スルナルヘシ唯酒精ハ醫藥用又ハ工業用トシテ必要ナルモノナルヲ以テ課税ノ爲メ醫藥製造上又ハ工業上ニ甚シキ影響ヲ生セシムルハ事ノ宜ヲ得タルモノニアラス依テ相當官吏ノ承認ヲ得醫藥用又ハ工業用ニ供シタル酒精ニ關シテハ其造石稅ニ相當スル金額ヲ交付スルノ法律案ヲ第十三議會ニ提出シ其協贊ヲ得明治三十一年法律第二十七號ヲ以テ公布セラレタリ

第六 醬油稅

醬油稅則ニ關シテハ明治二十九年ニ於テ一部ヲ改正セラレタリト雖モ是營業稅法ヲ施行スルニ付キ醬油營業人ニモ之ヲ適用スル爲メ醬油稅則中ニ規定シタル特定ノ營業稅ヲ廢止スルヲ必要トシタルニ依ルノミ元來醬油ハ日用必須ノ消費品ニシテ其消費ハ貧富ノ程度ニ比例スルモノニアラス故ニ財政ノ許ス限リハ此ノ如キ物品ニハ課税セサルヲ可トスヘク特ニ其增稅ハ之ヲ避クルヲ以テ得策トスヘシト雖モ明治三十二年度以降ノ財政ヲ經畫スルニ付キ政府ハ地租ノ定率ヲ百分ノ四ニ改メ之ニ依テ歲入ヲ增加セントシタルモ帝國議會ハ之ヲ減少シタルヲ以テ勢ヒ他ニ財源ヲ求メテ之ヲ補充セサルヘカラス已ムヲ得ス醬油造石稅壹圓ヲ貳圓ニ改ムルノ法律案ヲ第

十三議會ニ提出スルコトナレリ衆議院ニ於テハ醬油ノ造石稅ヲ增加スル以上ハ自家用料ノ醬油ニハ製造石數ヲ制限シテ其制限以上ノ製造ヲ爲ス者ニハ一石ニ付キ壹圓ノ造石稅ヲ課スルヲ相當トシ且之ト同時ニ造石稅ノ納期ヲ繰下ケ原料醬油ノ造石稅ヲ免スル等營業者ニ便宜ヲ與フルヲ可トシ此ノ旨趣ニ依リ政府案ヲ修正シ貴族院モ亦衆議院ノ修正案ヲ可決シ明治三十二年法律第二十五號ヲ以テ公布セラレタリ

自家用料ノ醬油製造ハ都會ノ地ヲ除ク外全國殆ント皆其習慣アルヲ以テ之ニ制限ヲ付シタル法律ノ旨趣ヲ解セス不知不識犯罪者トナルモノアルハ憂慮スヘキコトナルヲ以テ正義ハ地方長官ヲシテ普ネク部下人民ニ訓告セシメ同時ニ稅務管理局長ヲシテ地方官ト協議シ人民ニ警告ヲ與フルコトヲ怠ラサラシメタル結果今日ニ至ルマテ法禁ヲ犯シタル者甚タ尠シ

醬油稅則中改正法律案ヲ帝國議會ニ提出シタル當時ニ於ケル醬油稅ノ概算額ヲ以テ明治三十二年ノ査定石數ニ對スル稅額ニ比スレハ左ノ如シ

△印ハ減

種別	至自一月 至二月 査定 稅額		至自三月 至十二月 査定 稅額		合計
	石數	稅額	石數	稅額	
概算	三四六、三一七	一、二五二、〇六九	一、二五二、〇六九	一、五九八、三八六	
査定	三四六、三一七	二、五〇四、一三八	二、五〇四、一三八	二、八五〇、四五五	
增加	〇	〇	六八一、六八六	一、八五四、二一一	
減少	〇	〇	一、二二三、三七二	二、四六五、八九七	
同比較	〇	〇	六四〇、三八三	二、五五、八二五	
同上	〇	〇	一、二八〇、七六六	三、八四、五五八	

即チ石數ニ於テハ概算額ニ比シ査定石數ハ貳拾五萬五千八百餘石ヲ増加シタリト雖モ稅額ニ於テハ參拾八萬四千五百餘圓ヲ減シタリ是増稅ヲ見込ミ改正法律實施前ニ一時ニ査定ヲ受ケタルモノ多カリシニ依ル而シテ此ノ如キハ一時ノ現象ニシテ後年度ニ至レハ既ニ査定ヲ受ケタル醬油ハ販賣シテ剩ス所少キニ至ルヘキカ故ニ政府ノ概算シタル増加收入ヲ得ヘキヤ疑ヲ容レス

第七 印紙稅

印紙稅ハ明治六年始メテ證券印稅規則ヲ以テ制定シ爾來世運ノ變遷ニ從ヒ課稅ノ均一ヲ得セシムル爲メ數次ノ改正ヲ加ヘタリシカ明治十七年ノ改正以來ハ十數年間格別ノ改正ヲ爲サスシテ之ヲ施行シタリ然ルニ今ヤ社會ノ進運ニ伴ヒ商業取引ノ發達進歩スルニ至リ從來ノ規定ハ經濟社會ノ實狀ニ適應セス漸ク其整理改正ノ必要ヲ見ルニ至レリ依テ印紙稅法ヲ制定シテ證券印稅規則ヲ廢止スル案ヲ立テ之ヲ第十三議會ニ提出シタリ改正法律案ノ要點ヲ擧ケレハ

- 第一 稅率ヲ單純ニシタルコト
- 第二 小切手ノ印紙稅ヲ免シタルコト
- 第三 頻繁ノ取引ニ關スル印紙稅額ヲ同額トシタルコト
- 第四 手形用紙ヲ廢止シタルコト
- 第五 免稅スヘキモノノ範圍ヲ限定シタルコト
- 第六 稅印押捺ノ便ヲ受クヘキ書類ヲ増加シタルコト
- 第七 印紙消印ノ手續ヲ簡ニシタルコト

印紙稅法律案ハ衆議院ニ於テ修正セリ貴族院カ衆議院ノ修正シタル爲替手形約束手形ニ關スル

稅率ニ付キ更ニ政府案ニ復活決議シタルヲ以テ終ニ兩院ノ協議會ヲ開クニ至リ明治三十二年法律第五十四號ヲ以テ其公布ヲ見ルコトナレリ
 印紙稅法施行當時ニ於テハ法律ノ解釋ニ關シ商業者中多少疑義ヲ有シタル者アリシカ如シト雖モ今日ニ至リテ凡ソ一定ノ見解ヲ施スニ至リ一般ニ改正法律ノ便利ヲ唱フルノ狀況ナリ
 印紙稅ハ登録稅賣藥印紙稅等ト共ニ印紙收入トシテ整理シアルヲ以テ年度經過ノ後他ノ金額ヲ計算スルニアラサレハ其稅額ヲ算出スル能ハサルカ故ニ法律ノ改正ニ依リ收入ニ如何ナル變更アリタルカハ今之ヲ知ルコト能ハスト雖モ大體ニ於テ從來ノ收入ニ比シ増スアルモ減スルコトナカルヘシ且該稅ノ性質トシテ世運ノ進歩ト共ニ漸次増加スヘキモノナルヲ以テ國庫ノ財源トシテハ實ニ良好ナルモノト謂ハサルヘカラス左ニ明治十七年證券印稅規則改正以來ノ印紙稅額ヲ擧テ該稅ノ漸次増加スルノ事實ヲ明ニセントス

年度別	證券印紙稅	手形用紙稅	小切手押印稅	計
明治十七年	六六〇、六八四 ^円	一六、九三四 ^円	二、七二七 ^円	六八〇、三四五 ^円
同十八年	四〇七、九二五	五、七四三	一、〇九三	四一四、七六一
同十九年	五七六、四七八	八、七一	一、八九五	五八七、〇八四
同二十年	五四九、四二八	二、七九四	一、八一八	五六四、〇四〇
同二十一年	九六八、一八六	一三、四一〇	二、九四五	九八四、五四一
同二十二年	六〇〇、二二三	一八、一六一	三、五五三	六二一、九三七
同二十三年	五五六、九四七	二四、〇〇三	三、七二四	五八四、六七四

明治二十四年	五五九、八六一	二五、六五二	三、七三一	五八九、二四四
同 二十五年	六三二、一八四	二五、七三三	五、五九七	六六三、五一四
同 二十六年	七一六、九〇八	三八、九四七	五、六九〇	七六一、五四五
同 二十七年	七三七、四四九	四六、六六七	九、三三一	七九三、四四七
同 二十八年	八二六、六〇九	六三、三二三	一一、〇六六	九〇〇、九九八
同 二十九年	一、〇〇五、三九二	九五、一〇二	一五、五五一	一、一六、〇四五
同 三十年	一、〇六〇、三二一	一二四、三三七	二五、二三六	一、二〇九、八九四

二十一年度ニ於テ殊ニ税額ノ多キハ登記手数料ノ納入ニ證券印紙ヲ貼用セシメタルニ依ルモノナリ

第三章 關稅制度

第一 關稅定率法及關稅法ノ制定

從來帝國關稅制度ハ渾テ各國トノ條約ニ起因セリ即チ安政五年英米佛露蘭五箇國ト約シ其六年六月ヲ以テ橫濱長崎函館ニ運上所ヲ置キ慶應三年ヲ以テ神戸港ヲ開キタリ慶應二年改稅約書ヲ締結シ輸出入税及貿易規則等ヲ規定セリ

爾後爰ニ四十有餘年關稅定率法ヲ起草スルノ議ハ明治二十七年以來其歩ヲ進メ著著調査ニ從事シ終ニ明治三十年法律第十四號關稅定率法ノ制定ヲ見ルニ至レリ該法ハ第一種ヲ有稅品トシ第二種ヲ免稅品トシ第三種ヲ禁制品トセリ其有稅品ハ最低ヲ五分トシ八進シテ四割ニ至リ之ヲ十六類ニ分ツ即チ普通ノ完製品ハ二割トシ之ヲ起點トシ第一天產物未製品第二學術器具原料品第

三器械類運搬用具第四半製品即チ多少加工シタルモノ第五日常消費品ニ其率ヲ低減シ第六奢侈品ハ昂加シ第七酒煙草モ亦昂加ス即チ其平均稅率ハ一割〇五厘貳毛ニ該當スルモノナリ明治三十三年一月一日ヨリ該法ノ施行ト共ニ其基本タル關稅制度ヲ定ムルノ法律ナカルヘカラス是即チ帝國關稅法ノ制定ナリトス從來稅關法規ナキニ非スト雖モ内外臣民ノ適用ノ均一ヲ計リシカ爲メ皆其模範ヲ慶應二年約定ノ貿易規則ニ採レリ而モ舊條約ハ單ニ通商ニ關スルモノナルヲ以テ其過半ハ皆關稅法ニ關スルモノナリ

帝國關稅制度ノ獨立ト共ニ完全ナル關稅法ノ制定ハ寔ニ維新以來ノ國是ヲ遂行スルノ一方法ナリトス是ニ於テ夙ニ諸外國ノ範例ヲ參酌シ帝國ノ實況如何ニ顧ミ關稅案法ヲ第十三議會ニ提出シ兩院共ニ原案ニ決セリ此法制定ノ爲ニ舊條約及舊條約附帶ノ貿易規則ニ約定セラレシモノ及之ニ附帶シテ各國トノ取極ト爲リシ倉庫規則借庫規則上屋規則等ハ皆其基礎ヲ新關稅法ニ取ルニ至レリ

從來關稅賦課ニ關スル故障ハ條約ノ解釋トシテ外交談判ト爲リシモノナリト雖モ本法ニ於テ特別訴訟法ヲ定メ又本法ニ依リテ勅令ヲ以テ訴訟委員ノ組織ヲ定ムルコトヲ得セシメタリ又開港ノ制度ノ如キモ將來ニ於テハ勅令ヲ以テ之ヲ規定スルヲ得ルニ至リタリ又此法ノ制定ニ依リテ明治三十年ニ規定セラレタル保稅倉庫法ノ如キモ爰ニ其體統ノ齊一ヲ保チ又從來行ヒシコトナキ内地通過及關稅通路ニ關スルコトヲ規定セリ

第二 噸稅法ノ制定

從來外國船ハ條約ニ附帶セル貿易章程ニ依リ入出港手数料ヲ課スルト雖モ噸稅ハ課スルコトナ

シトノ件アリ之ニ依リテ税關規則ニ於テモ亦同様ノコトヲ掲ケタリ但此手数料ナルモノハ如斯
條約ニ於テ定メラレタルカ故ニ船舶ノ大小ニ關ラス徴收スルモノニシテ從來不便ヲ極メ殊ニ内
國船ノ小形ナルモノニ於テ其負擔ニ苦ミシ所ナリ是ニ於テ一噸ニ付キ拾錢ヲ課スルノ法案ヲ第
十三議會ニ提出セリト雖モ兩院協議會ニ於テ審査ノ上之ヲ五錢ト改正シ其施行ヲ見ルニ至レリ

第四章 葉煙草專賣制度

葉煙草專賣法ハ本邦煙草產地ノ狀況及賣買ノ習慣等ヲ審査シ以テ國家永久ノ重要財源ト爲シ且
舊煙草印紙稅則ノ煩瑣ヲ除キ之ヲ自由ナラシムヘキ目的ヲ以テ第九議會ノ協贊ヲ經テ制定セラ
レ明治三十一年一月一日ヨリ施行セラレタリ次テ輸入葉煙草專賣ニ關スル規定ト葉煙草ノ賣渡
方法及犯則取締ニ關スル條項ノ改正法案ヲ第十三議會ニ提出セリ然ルニ議會ハ尙ホ葉煙草產地
ノ區域及耕作反別ノ制限ヲ設ケ且煙草營業者ニ對シ免許料ヲ徵收スルノ規定ヲ設クル等ノ修正
ヲ加ヘ之ヲ協贊シ改正案ノ一部ハ明治三十二年三月ヨリ其他ハ同年八月ヨリ施行セラレ、ニ至
レリ

葉煙草專賣法ノ改正ト同時ニ本法違犯事件ニ關シテハ普通ノ手續ニ依リテ處分シ難キモノアル
ヲ以テ間接國稅犯則者處分法ヲ準用スルノ必要ヲ認メ該法案ヲ第十三議會ニ提出シ明治三十二
年四月十五日ヲ以テ其公布ヲ見ルニ至レリ

葉煙草專賣法ノ制定ト共ニ葉煙草收納ニ對スル賠償ノ爲メ資金ヲ置キ特別會計ヲ設置スルノ必
要ヲ認メ葉煙草專賣資金會計法ヲ制定セリ然ルニ葉煙草專賣事業ハ漸次之ヲ擴張改良スルノ必
要アルヲ以テ之カ準備トシテ來ル明治三十三年度ヨリ資金會計ノ方法ヲ改メ純然タル作業會計

ト爲スノ目的ヲ以テ資金會計法廢止案及作業會計法中改正案ヲ提出シ之カ協贊ヲ經テ遂ニ其公
布ヲ見ルニ至レリ
以上ハ葉煙草專賣制度ノ沿革及設定ノ梗概ナリ左ニ專賣法實施後ニ於ケル專賣收入ノ實況ヲ列
掲ス

第一 明治三十年度(自三十一年一月)ノ實況

明治三十一年一月一日ハ新法實施ノ初期ニ當リ實ニ全國葉煙草ノ改革期ニシテ同年前内國ニ存
在スル總テノ葉煙草調査ノ結末ヲ了シタリ即チ同日ニ於ケル葉煙草持越高ハ七百九拾貳萬六千
九百餘貫匁ニシテ其内專賣法ノ支配ヲ受ケサル製造人ノ所持セシモノハ實ニ七百拾四萬九千參
百餘貫匁ノ多キニ達シ之ニ對シテハ印紙又ハ現金ニテ四百八拾四萬八千六百餘圓ノ收入ト爲リ
全ク專賣法ノ適用ヲ受ケタル仲買人及耕作人ノ所持セシモノハ僅ニ七拾七萬七千五百餘貫匁ニ
シテ三十年度ニ於テ七拾壹萬參千九百餘貫匁ヲ政府ニ收納シ同年度内ニ納付スルコト能ハスシ
テ貯藏認許ヲ與ヘシモノハ六萬餘貫匁ナリキ而シテ收納葉煙草ノ内七拾萬四千參百餘貫匁ハ年
度内ニ賣渡ヲ了シ年度末倉庫ニ現存セシモノハ九千參百餘貫匁ナルヲ以テ結局明治三十年度ノ
益金ハ貳拾九萬貳千餘圓ナリ而シテ此收入率ハ賠償價格ノ八割四分ヲ基礎トセリ
右ノ專賣收入ヲ以テ豫算ニ比スレハ五拾六萬七千五百餘圓ノ減少ヲ來セリト雖モ前述セシカ如
ク仲買人及耕作人ノ所持セシモノハ專賣法實施前ニ於テ殆ント製造人ノ買占ムル所トナリ即チ
印紙稅ニ於テ貳百六拾壹萬四千四百餘圓ヲ増加シタルカ故ニ結局歲入ノ上ニ於テハ貳百四萬六
千餘圓ノ增收ヲ見ルニ至レリ

第二 明治三十一年度ノ實況

葉煙草專賣法ノ下ニ於テ初メテ葉煙草ヲ耕作シタルハ實ニ明治三十一年度ニ在リトス而シテ當
初耕作届出收穫見込高ハ千五百拾貳萬千餘貫ナリシカ實際政府ヘ收納シタル高ハ八百貳拾六萬
貳千餘貫ナリキ(丙三十一年度ニ於テ八百拾貳萬千六百餘貫ヲ收納シ同年内ニ納付スルコ
ト能ハサルカ爲メ貯藏認許ヲ與ヘシモノ拾四萬四百貫及ヘリ又同年度ニ於テ輸出ニ供シタ
ルモノハ貳萬四千餘貫ナリ之ヲ明治三十一年度收納豫算高千參百九拾萬七千貫及ニ比スレハ
五百六拾四萬五千貫及ノ減少トナリ又之ヲ收穫見込高ニ比スレハ貳百貳拾參萬五千貫及ノ減少
ヲ見ルニ至レリ

又明治三十一年度ニ於ケル葉煙草受拂高ハ其受入ニ係ルモノハ八百拾九萬五千六百餘貫及ニシ
テ(丙前年度ヨリ繰越高ハ九千參百餘貫及本年度收納高八百拾八萬千六百餘貫及沒收等ノ爲メ受
入タルモノ四千六百餘貫及ナリ)拂出高ハ七百拾參萬八千四百餘貫及ナリトス(丙賣拂高ハ七百拾
參萬四千參百餘貫及亡失廢棄等ノ爲メ拂出シタルモノ四千餘貫及ナリ)依テ年度末倉庫ニ現存セ
シモノハ百五萬七千餘貫及ニシテ結局三十一年度ノ益金ハ五百拾四萬五千九百餘圓ナリ
而シテ此普通收入率ハ三十一年四月ヨリ六月マテハ賠償價格ノ八割四分又同年七月以降ハ十割
ヲ以テ基礎トセリ此專賣收入ヲ以テ豫算ニ比スレハ貳百拾七萬六千四百餘圓ヲ減少セリ是一面
ニ於テハ三十一年ニ於ケル耕作上ノ被害ノ爲ニ收穫減少シタルト密賣買ノ弊ヲ防遏スル能ハサ
リシニ基因セシト雖モ一面ニ於テハ耕作者カ專賣法實施後ニ於ケル葉煙草耕作ノ利益及其耕作
上ニ及ホスヘキ影響如何ヲ憂慮セシ傾向アリシ爲メ自然作付ヲ減少シタルト專賣法實施ノ際持

越シタル葉煙草ノ大部ハ同法ノ適用ヲ受ケサル製造人ノ買占ムル所トナリシヲ以テ之ニ對シ三
十一年度ニ於テモ尙ホ收ムヘカリシ專賣收入ハ却テ前年度ニ於テ一時ニ印紙稅ノ增收トナリシ
ニ由レリ故ニ差引上歲入ニハ大差ナキヲ得タリ

本邦人煙草ノ嗜好力ハ累年増加スルノ景況ニシテ需要年ヲ逐テ増進ノ傾向アルニ拘ハラズ内國
產葉煙草ハ既ニ專賣法實施前ヨリ供給之ニ伴ハサリシト專賣法ノ實施ハ價格ノ騰進スヘキヲ豫
測シタルカ爲メ三十年十月ヨリ十二月ニ至ルノ間市場價格ノ暴騰其底止スル所ヲ知ラサルノ勢
ナリキ然ルニ前ニ述ヘタル如ク三十一年ニ於ケル作柄ノ不頁ナリシト其產額減少セシトニ依リ
益々價格暴騰シ又需要ノ一時急切ナリシト關稅率ノ改正ヲ見込ミシトニ依リ明治三十一年中外國
產葉煙草ノ輸入ハ實ニ四百九拾參萬餘貫及ニシテ此價格四百五拾貳萬七千六百餘圓ノ多キニ達
セリ内參百八拾六萬千餘貫及此價格貳百九拾萬四千餘圓ハ支那葉煙草ナリキ今之ヲ明治三十年
中ニ於ケル葉煙草輸入額ニ比スレハ價格ニ於テ實ニ四百貳拾萬餘圓ノ増加ニシテ將來ニ於ケル
我專賣收入ニ如何ナル影響ヲ及ホスヘキカ實ニ考慮ヲ要スヘキモノアリ然ルニ適、改正條約實施
ノ期ヲ見ルニ至リシヲ以テ外國產葉煙草ハ需要ニ適當スル範圍ニ於テ政府之ヲ輸入專賣シ又一
面ハ外國製造煙草ニ對シテ關稅率ヲ増加スル等之ヲ救済スル方法ヲ設ケタリ

第三 明治三十二年度ノ實況

前ニ述ヘタル如ク政府ハ第十三議會ニ外國葉煙草輸入專賣ニ關スル規定ヲ初メ其他專賣法中改
正法案ヲ提出シ議會ハ又之ヲ修正セリ即チ葉煙草專賣收入ノ政府提出案ハ外國葉煙草輸入專賣
ヨリ生スル益金ヲ明治三十二年度ニ於テ五拾參萬八千九百餘圓同三十三年度以降ニ於テ百八萬

貳千百餘圓ノ增收ヲ得ルノ豫定ナリシモ議會ノ修正案ニヨレハ葉煙草專賣益金ハ三十二年
於テ百七拾萬九千貳百餘圓三十三年度以降ニ於テ貳百拾四萬五千五百餘圓ノ增收
許料ハ三十二年度以降ニ於テ八拾參萬千七百餘圓ノ收入ヲ得ルノ計算トナレリ
明治三十二年度ニ於ケル葉煙草ノ產額豫算ハ千四百壹萬四千餘貫匁ニシテ政府
達高ハ千參百九拾萬七千餘貫匁此内千參百貳拾壹萬貳千餘貫匁ヲ三十二年
度内ニ納付スルコト能ハスシテ貯藏認許ヲ與フヘキモノヲ六拾九萬五千餘貫匁
スルモノヲ拾萬六千餘貫匁ト豫定シタリ

明治三十二年度ニ於ケル内國產葉煙草ノ總受入豫算高ハ千五百九拾萬千餘貫匁
度ヨリ持越高ハ百九拾九萬四千餘貫匁三十二年度收納高ハ千參百九拾萬七千餘
高ハ千貳百七拾貳萬千餘貫匁ニシテ内賣拂高ハ千貳百七拾萬五千餘貫匁損傷等
壹萬五千餘貫匁ナリ依テ年度末倉庫ニ現存スヘキモノハ參百拾八萬參百餘貫匁
三十二年度ノ益金ハ當初七百七拾六萬百餘圓ノ豫算ナリシモ前述セシカ如ク專
ニ對スル議會修正案ノ結果ニヨリ結局八百九拾參萬五百餘圓ヲ得ルノ豫定ナリ
明治三十二年度ニ於ケル外國產葉煙草ノ輸入受入ノ豫算高ハ參拾萬八千餘貫匁
壹萬六千餘貫匁此内賣拂高貳拾壹萬五千餘貫匁損傷等ノ爲メ廢棄高參百餘貫匁
庫ニ現存スヘキモノハ九萬貳千餘貫匁ナリ之ニ對スル三十二年度ノ益金ハ五拾
圓ヲ得ルノ豫定ナリ
内外國產葉煙草ノ專賣ニヨリ生スル明治三十二年度益金ハ九百四拾六萬九千四百餘圓ノ豫定ニ

シテ此普通收入率ハ賠償又ハ輸入價格ノ十割ヲ基礎トセリ

明治三十二年度ニ於ケル内國產葉煙草ノ實況ヲ見ルニ耕作届出當時ノ收穫見込高ハ實ニ千五百
拾五萬貳千餘貫匁ニ達セシモ爾來風雨等ノ害ニ罹リ作柄不頁ヲ呈セシ地方アリ爲ニ幾分ノ減少
ヲ見ルニ至ルヘシト雖モ今日ニ於テハ未タ收納ノ初期ニ屬シ且需用ノ狀況ヲ明ニシ難シ又外國
產葉煙草ノ輸入專賣ハ明治三十二年八月十五日ヨリ施行シタルモノニシテ其實施前ニ於テ所謂
見越輸入ヲ爲シタルモノ多ク一月以降實施前ニ至ルマテノ輸入高ハ貳百五拾九萬七千餘貫匁此
價格五百八萬五千餘圓ノ多キニ達セリ内米國產葉煙草貳百參拾萬八千餘貫匁此價格四百八拾參
萬八千餘圓ナリ斯ノ如キ過多ノ輸入ヲ見ルニ至リタルヲ以テ從テ當初ノ豫算ニ對シテ多少ノ影
響ヲ及ホスニ至ラン

第三篇 貨幣公債及償金ニ關スル始末

第一章 貨幣法ノ制定及實施ノ顛末

明治三十年法律第十六號貨幣法ノ制定及實施ハ我邦從來ノ事實上ニ於ケル銀貨本位制ヲ一變シ
テ純然タル金貨本位制ト爲シタルモノニシテ實ニ戰後ノ財政及經濟ニ關スル諸般ノ經營中最モ
緊要ナルモノ、一ニ屬セリ故ニ其顛末ニ關シテハ既ニ明治三十二年五月十八日ヲ以テ上呈シタ
ル幣制改革始末報告書ニ於テ敘述スル所アリシト雖モ茲ニ戰後ノ財政及經濟ニ關スル諸般ノ經
營ヲ陳フルニ方リテハ到底之ヲ省略スヘカラサルヲ以テ左ニ其始末ノ大要ヲ陳述セン

第一 貨幣法制定ノ由來

我邦ノ貨幣制度ハ徳川幕府カ慶長六年ヲ以テ金銀貨幣ノ制度ヲ一變シタルヨリ以後幕府カ大政

ヲ返上スルニ至リシマテ二百六十餘年ノ間ハ該制度ヲ因襲シタリト雖モ徳川幕府ハ財政ノ困厄ニ遭遇スル毎ニ貨幣ノ改鑄ヲ行ヒ以テ享保ノ改正ヲ除クノ外ハ何時モ其品質ヲ粗惡ニシ且其重量ヲ輕減シタルノミナラス諸藩ニ於テモ亦或ハ私ニ貨幣ヲ鑄造スルモノアリ又ハ封内限り通用ノ紙幣ヲ發行スルモノアリシカ爲メ幕府ノ末年ニ至リテハ我邦ノ貨幣制度ハ其名ハ慶長ノ制度ニ依ルト雖モ其實ハ殆ント紊亂ノ極點ニ達シタリ

王政維新ノ後政府ハ貨幣制度紊亂ノ一日モ忽諸ニ付スヘカラサルコトヲ認メ銳意ノカ整理ヲ企圖シ先ツ造幣局ヲ大阪ニ設立シ次テ明治四年五月ヲ以テ新貨條例ヲ制定シ茲ニ金貨本位制ヲ布クコト、ナレリ然レトモ當時東洋諸國ノ外國貿易上一般ニ墨銀ヲ使用シタルカ故ニ新貨條例ニ於テハ外國貿易取引上ノ便利ヲ計リ本位貨幣ノ外別ニ墨銀ト品位重量ヲ均フセル貿易壹圓銀ナルモノヲ鑄造シテ開港場限り之ヲ通用セシムルコト、爲シタリ然ルニ當時我邦ニ於テハ不換紙幣ノ發行頻繁ナリシヲ以テ爲ニ正貨沿沿トシテ海外ニ流出シ東洋銀貨國ノ間ニ介在シテ獨リ金貨本位制ヲ維持スルノ甚タ困難ナル事情ニ陥リ終ニ明治十一年五月第十二號及第十三號布告ヲ以テ内地一般ニ貿易壹圓銀ヲ通用スルコトヲ許シタリ是ニ於テ我邦ノ貨幣制度ハ金貨本位制ヨリ轉シテ金銀複本位制ニ變スルコト、ナレリ是ヨリ先キ維新ノ初兵馬倥傯國用多端ニシテ國庫ノ歲入ハ以テ其歲出ニ應スルニ足ラス政府ハ已ムヲ得スシテ一時ノ急ヲ救ハンカ爲メ各種ノ紙幣ヲ發行シタリシカ明治四年廣瀨置縣ノコトアルヤ各藩發行ノ紙幣ハ又政府ノ負擔ニ歸スルコト、ナリ之カ整理ノ爲ニ更ニ少カラサル紙幣ノ増發ヲ爲スノ必要ニ逼ラレタリ加之明治十年西南ノ亂アリ之カ戰費ヲ支辨スルカ爲ニモ亦已ムヲ得ス一時ニ巨額ノ不換紙幣ヲ發行ヒサルヘカ

ラサルコト、ナリ紙幣ノ流通額ハ忽チ當時ノ經濟社會ニ於ケル需要額ヲ超過シタルヲ以テ其價格ハ明治十一年ノ春ヨリ頓ニ下落ノ傾向ヲ現ハスニ至リタリ而シテ尙ホ之ニ止マラス明治九年八月第百六號布告ヲ以テ國立銀行條例ノ改正アリ該銀行ノ設立容易トナリシカ爲メ之ヲ新設スルモノ少ナカラス從テ其發行紙幣モ亦頗ル増加シタルヲ以テ紙幣價格ノ下落ハ愈々急激トナリ爲ニ物價ハ騰貴シ正貨ハ流出シ外國貿易上ニ於ケル貨物ノ輸入ハ著シク輸出ニ超過シ農民ノ奢侈ニ赴クコト甚シク商工業者ハ頻ニ投機ニ流レ明治十三年四年ノ頃ニ至リテハ我邦ノ經濟社會ハ殆ント危急ノ形勢ニ陥リタリ然ルニ當時政府ハ紙幣下落ノ原因ヲ以テ銀貨ノ騰貴ニ歸シタルヲ爲メ或ハ銀貨ノ賣出ヲ爲シ又ハ洋銀取引所及廣瀨正金銀行ノ設立ニ依リテ銀ノ取引ヲ圓滑ニシ又ハ民間ニ隱匿セル正貨ヲ吸收シテ其供給ヲ増サンコトヲ務ムル等頻ニ銀貨ノ騰貴ヲ抑制センコトヲ試ミシモ勿論其效果ヲ見ルヘキニアラス紙幣下落ノ勢ハ滔滔トシテ進ミ明治十三年二月ヲ以テ創立シタル廣瀨正金銀行モ僅ニ一週年餘ニシテ殆ント破産ノ域ニ沈淪セントスルニ至リタリ是ニ於テ紙幣ノ下落ヲ抑制スルハ紙幣ヲ減少スルノ外他ニ其道ナキコト明白トナリ政府ハ明治十三年九月ヨリ始メテ紙幣銷却ニ著手スルコト、ナレリ然レトモ紙幣ノ下落ハ尙ホ停止スルニ至ラザリキ明治十四年十月正義之ヲ大藏卿ノ職ニ承ケ刻下ノ急務タル紙幣整理ノ事ニ從フコト、ナルヤ正義以爲ク紙幣ノ下落ヲ救治セントスルニハ單ニ之ヲ銷却シテ其流通高ヲ減少スルノミナラス尙ホ之カ引換準備ノ正貨ヲ増殖スルノ必要アリ且我經濟社會一般ノ金融ヲ疏通シテ貨幣制度ノ完美ヲ企圖スルニハ兌換券發行ノ特權ヲ專有セル中央銀行ノ設置ナカルヘカラスト乃チ詳ニ是等ノ方法ヲ調査シテ建議スル所アリシカ幸ニシテ廟議ノ容ル、所トナリ明治十五

年六月第三十二號布告ヲ以テ日本銀行ノ設立ヲ見更ニ明治十七年五月第十七號布告ヲ以テ日本銀行ヲシテ兌換銀行券ヲ發行セシムルコト、ナリ又政府歳入出ノ出納順序ヲ改定シ各應ノ經費ヲ節減シテ歳入ノ剩餘ヲ得其一半ヲ以テ直ニ紙幣銷却ノ用ニ供シ他ノ一半ヲ以テ政府ノ準備金ニ繰入シ且明治十四年ノ末ヨリ政府ノ準備金ヲ運用シテ海外輸出荷爲替ノ途ヲ開キ以テ輸出ヲ獎勵シ正貨ヲ吸收センコトヲ勉メタリ此ノ如クニシテ漸次ニ紙幣ヲ銷却シ正貨ヲ蓄積スルニ從ヒテ政府紙幣ノ信用次第ニ加ハルコト、ナリ明治十八年ノ末ニ及ヒ銀紙價格ノ差異殆ント消滅スルニ至リタリ是ニ於テカ正義ハ不換紙幣制度ヲ一變シテ兌換制度トナスノ時機方ニ熟セリト爲シ之ヲ建議シタルニ明治十八年六月第十四號布告ヲ以テ明治十九年一月一日ヨリ銀貨ヲ以テ紙幣交換ノ途ヲ開クコト、ナレリ而シテ是ヨリ先キ明治十六年五月第十四號布告ヲ以テ國立銀行條例ヲ改正シ銀行紙幣合同銷却ノ方法ヲ定メタリ斯ノ如クニシテ政府紙幣及銀行紙幣共ニ其交換ノ途ニ就キ終ニ明治二十九年法律第八號及明治三十一年法律第六號ヲ以テ銀行紙幣及政府紙幣共ニ明治三十二年十二月限り其通用ヲ禁止スルコト、ナリ我邦ノ兌換制度ハ確乎トシテ復タ動カスヘカラサルモノトナルニ至リタリ而シテ是等ノコトハ既ニ明治二十三年十月ヲ以テ呈出シタル紙幣整理始末報告書ニ於テ詳述シタル所ナリトス

然レトモ紙幣ノ整理ニ際シテ銀貨兌換ノ制度ヲ採リタルノ結果我邦ハ自ら事實上ノ銀貨本位國トナレリ是貨幣制度ノ整理上已ムヲ得ス經過セサルヘカラサリシ一段階ニシテ我邦經濟上ノ發達ヲ謀リ世界共通ノ經濟社會ニ立タントスルニハ到底世界ノ大勢ニ順應シテ早晚金貨本位制ヲ採ルノ必要アルヘキコト正義ノ夙ニ信シタル所ナリト雖モ金貨本位制ヲ施行スルニハ巨額ノ金

準備ヲ要スルカ爲メ先ツ銀貨兌換ノ制ヲ行ヒ以テ徐徐ニ最後ノ目的ニ到達スルノ準備ヲ爲シタルモノナリ

然ルニ多年殆ント一定ノ相場ヲ持續シタル銀ノ價格ハ明治六年獨乙帝國カ戰勝ノ餘利ニ依リテ金貨制度ヲ採用シ以テ銀ノ賣出ヲ開始シテヨリ以來下落ノ傾向ヲ生シ尋テ羅甸同盟ノ銀貨鑄造ノ制限及停止アリ又亞米利加大陸ニ於テ富饒ナル銀坑ノ發見セラレタル等ノ事情ニ依リ其下落ノ度頗ル著シク遂ニ明治二十六年印度カ幣制ヲ改革シテ金貨制度ヲ採用スルノ準備ヲナスヤ俄然トシテ銀貨ノ暴落ヲ來シタリ當時事實上ニ於テ銀貨本位國タリシ我邦ハ其影響ヲ蒙ルコト頗ル甚シク爲ニ外國爲替相場常ニ激變シテ止マサルノ結果外國貿易ヲシテ殆ント其適從スル所ヲ失ハシメ從テ其健全ナル發達ヲ阻害セラレタルノミナラス物價濫リニ昂騰シテ徒ニ投機ノ趨勢ヲ促進シタル等我經濟社會ノ狀況ハ將ニ紊亂セントスルノ傾向ヲ現ハシ此上銀本位制ヲ持續スルコトハ到底國家ノ利益ト背馳スルノ惧アルニ至リ斷然價格動搖ノ最モ少ナキ金貨ヲ以テ本位ト爲セル制度ヲ採用スルノ一日モ遲疑スヘカラサル時機ニ迫リタリ是ニ於テ當時ノ大藏大臣渡邊國武ハ之ニ對スル我邦幣制ノ方針ヲ調査スルノ必要ナルコトヲ建議シ明治二十六年十月勅令第三百十三號ヲ以テ貨幣制度調査會ヲ設置セラル、コト、ナリシカ同會ニ於ケル審査ノ結果其委員ノ多數モ亦金貨本位制ヲ採用スルノ可ナルコトヲ認メタリ而シテ此時ニ方リテ我邦カ金貨幣本位制度ヲ實行スルニ付キテ要スル巨額ノ金準備ニ對シ之カ供給ヲ得ルノ途ヲ開キタルモノハ實ニ明治二十七八年戰役ノ結果清國ヨリ貳億參千萬兩ノ賠償金ヲ領收シタルコトナリトス

第二 債金ノ領收及貨幣法ノ制定

明治二十七八年戰役ノ結果我邦カ清國ヨリ領收シタル償金ハ其額貳億參千萬兩ニシテ實ニ明治二十八年四月十七日ヲ以テ調印シタル下ノ關稅和條約及同年十一月八日ヲ以テ調印シタル遼東半島還付ニ關スル條約ノ規定ニヨルモノナリ而シテ其規定ニヨレハ該償金ハ庫平銀ヲ以テ領收スヘキモノナリト雖モ元來庫平銀ナルモノハ其實斯ノ如キ貨幣ノ存在セルニアラスシテ條約ノ規定セル所ハ單ニ償金トシテ授受スヘキ銀ノ額ヲ計算スルニ清國官用公秤ノ量目タル庫平兩ヲ以テシタリト云フニ止マレリ此時ニ方リテ世界ニ於ケル銀價ハ日日ニ下落ニ赴キ其動搖ノ勢朝ヲ以テ夕ヲ測ルヘカラサルモノアリ加フルニ我國ニ於テハ將來金貨本位制度ヲ採用セントスルノ點ヨリ考フルモ亦償金ノ庫平銀ヲ一時ニ英貨ニ換算シ以テ倫敦ニ於テ英貨ヲ以テ領收スルノ得策ナルヲ認メタルカ故ニ正義ハ之ヲ建議シ清國政府ト談判ノ結果償金ハ悉皆之ヲ一時ニ英貨ニ換算シ以テ英貨ニテ領收スルコトナリ始メテ金貨本位制ノ施行ニ要スル金準備供給ノ途ヲ得タリ

明治二十九年九月正義ノ再ヒ大藏大臣ノ職ニ就クヤ著々金貨本位制採用ノ準備ヲ遂ケ明治三十年三月ヲ以テ貨幣法案ヲ帝國議會ニ提出シ其協贊ヲ經同月二十九日ヲ以テ公布セラルコトナリ終ニ明治三十年十月一日以降金貨本位制ノ實施ヲ見ルニ至レリ

第三 新金貨ノ鑄造並壹圓銀貨ノ引揚

明治三十年三月貨幣法ノ公布セラルヤ正義ハ直ニ償金ノ一部ヲ以テ金塊ヲ購入スルコトニ著手セシカ一時ニ巨額ノ金塊ヲ購入スルトキハ爲ニ市場ヲ動搖セシメ國庫ニ損失ヲ招クノ惧アルカ故ニ勉メテ市場ノ動靜ニ注意シ或ハ金塊ヲ購入シ或ハ英貨ヲ現送スル等ノ手段ヲ執リ以テ可

成此等ノ危險ヲ避ケ著々金塊ヲ本邦ヘ輸送シ來リタリ而シテ此ノ如クニシテ本邦ヘ輸送シタル金塊ハ造幣局ニ於テ新金貨ヲ鑄造スルノ材料ニ供シ日夜之カ工程ヲ増シ明治三十年九月三十日即チ貨幣法實施ノ前日マテニ新金貨ヲ鑄造シタルコト四千九百五拾八萬七千六百六拾圓爾後更ニ明治三十一年四月マテニ貳千四百八拾六萬八千五百七拾五圓合計七千四百四拾五萬五千七百參拾五圓ニ及ヒ是等ノ新金貨ヲ以テ壹圓銀貨ノ引換準備ニ充テ明治三十年十月ヨリ之カ引換ヲ開始シ明治三十一年七月三十一日ヲ以テ之ヲ完了スルニ至リタリ其期間ニ於テ金貨ト交換シ又ハ租稅其他ノ公納ニヨリ國庫ニ收入シタルモノヲ金貨ト引換ノ手續ヲ爲シタル壹圓銀貨ノ總額ハ四千五百五拾八萬八千參百六拾九圓ニシテ尙ホ是等ノ引揚壹圓銀貨ノ外造幣局ニ於テ銀塊ヲ輸納セシモノニ對シ壹圓銀貨鑄造成ルノ後之ト引換ヲナスタメニ發行シタル壹圓銀貨成貨拂渡證書ノ額貨幣法發布ノ時ニ於テ貳千九百五拾萬五千四百五拾參圓ナリシモノヲ貨幣法第十六條ニ依リ悉ク之ヲ金貨ト引換ノ手續ヲ爲シタルカ故ニ壹圓銀貨及壹圓銀貨成貨拂渡證書ニ對スル銀塊ノ引揚總額ハ合計七千五百九萬參千八百貳拾貳圓トナリタリ今當初壹圓銀貨ヲ發行シテヨリ以來之カ引換完結ニ至ルマテノ計數ヲ概括スレハ左ノ如シ

一金壹億六千五百拾參萬參千七百拾圓

壹圓銀貨總發行高

內

金四拾六萬九百四圓

造幣局ニテ鑄造高

金九千九百五拾萬八千七百四拾圓

海外純輸出高

明治三十年九月末日ニ於ケル純輸出

金千百貳萬八千六百參拾參圓
金五百七拾參萬貳千貳拾七圓
金四千五百五拾八萬八千參百六拾九圓

高ハ壹億千參拾五萬五千貳百五圓アリシ内明治三十一年七月三十一日迄ニ千八拾四萬六千四百六拾五圓引換ノ爲メ復歸セシニヨリ本文ノ通
明治二十七八年戰役中戰地へ携帶使用高ノ本邦領土トナリシ後同地へ回送セシモノニシテ金貨ト引換ヲ請求セサリシモノ
金貨ト交換引揚總高

此内譯

金貳千七百八拾萬千八百參拾貳圓

内地ニテ直接金貨ト交換高

金千八拾四萬六千四百六拾五圓

海外ヨリ復歸セシモノヲ金貨ト交換高

金參百九拾七萬七千九拾九圓

内地ニテ租稅其他ノ公納ニヨリ引揚高

金貳百九拾六萬貳千九百七拾參圓

臺灣ニテ同上

金貳百八拾壹萬五千參拾七圓

内地ニ於テ金貨ト引換ノ請求ナカリシ高

如本文

外ニ

金貳千九百五拾萬五千四百五拾參圓四錢貳厘

壹圓銀貨成貨拂渡證書明治三十年三月末發行現在高ヲ引揚タル高

右ノ表ニ於テ内地ニ於テ引換殘トナリシモノ貳百八拾壹萬餘圓アリト雖モ引換期限經過後更ニ壹圓銀貨ノ引換洩トナリシモノアルヲ聞カサルヲ以テ見レハ此等壹圓銀貨ハ散逸毀損セラレ又ハ旅客ノ衣袂ノ裡ニ隠レテ海外ニ輸出セラレタルモノナルコト明ニシテ壹圓銀貨ノ引換ハ完全

ニ行ハレタルモノト謂フヘシ

斯ノ如ク債金ニ依リテ本邦ニ回收シタル金塊ヲ以テ金貨ヲ鑄造シ依テ以テ貨幣制度改革ノ事業ヲ完成シタリト雖モ是唯債金ノ運用上一時ノ作用ニ依リテ斯ノ如キ巨額ノ金貨準備ヲ供給シタリト云フニ止マリ債金ノ會計ハ之カ爲ニ厘毫モ費消シタル所アルニアラス即チ債金特別會計ノ保有セル金塊ヲ使用シテ金貨ヲ鑄造シ以テ壹圓銀貨ヲ交換引揚クルノ資ニ供シタリト雖モ其引揚タル壹圓銀貨ハ更ニ之ヲ地金トシテ市場ニ賣却シ以テ之カ代價トシテ得タル金貨ニ依リテ債金部ヘノ返償ヲ了シタリシナリ尙ホ此事ニツキテハ第四章債金ノ始末ニ於テ之ヲ陳述セシ
壹圓銀貨ノ引換ニ關シテハ貨幣法制定ノ際ニ當リ從來海外ニ輸出セラレタルモノ壹億圓ヲ超ニシカ爲メ其歸來シテ引換ヲ請求セラルルモノ多額ニシテ國庫ハ少カラサル損失ヲ負擔スルコトトナルヘキカヲ憂ヘタルモノアリシカ當時正義ハ上海香港及海峽殖民地等各地ノ狀況ヲ精査シテ其復歸スヘキモノ凡壹千萬圓ト見積リタリシニ實際引換ヲ爲スニ及テ其額千八拾四萬六千四百六拾五圓ナリシヲ見レハ粗ホ豫定額ト符合シタルモノニシテ國庫ニ意外ノ損失ヲ招カサルコトヲ得タリ

明治三十年九月貨幣法ノ將ニ實施セラレントスルヤ壹圓銀貨ノ通用ハ勅令第三百三十八號ヲ以テ明治三十一年四月一日限リ禁止セラレタリト雖モ貨幣法ノ規定ニヨレハ政府ハ其通用禁止後滿五箇年間之カ引換ヲ爲スヘキモノタリシナリ然ルニ其後引換ノ狀況ヲ見ルニ十分迅速ニ行ハレ徒ニ五箇年ノ引換期限ヲ存スルノ必要ナキノミナラス或ハ銀價ノ變動ニ乘シテ之カ贖造ヲ爲スモノ生センモ測リ難ク却テ國家ニ不慮ノ損失ヲ釀スノ恐アリシヲ以テ正義ハ明治三十年末ヲ

以テ壹圓銀貨引換期限短縮ノ法律制定ノコトヲ閣議ニ提出セシモ議會解散ノ爲メ之ヲ果タスコトヲ得スシテ其ノ職ヲ辭シタリシカ後任大藏大臣伯爵井上馨モ亦其必要ヲ認メ該法律案ヲ議會ニ提出シ明治三十一年六月十日ヲ以テ之カ公布ヲ見ルニ至リ茲ニ壹圓銀貨ハ明治三十一年七月三十一日限り其引換ヲ爲ササルコトナレリ而シテ貨幣法ノ實施ヨリ同日ニ至ルマテ十箇月ノ引換期間ニ於テハ特ニ注意シテ中央金庫及全國四百四十七箇所ノ本支金庫並日本銀行代理店ナル横濱正金銀行ノ本店及神戸支店ヲシテ引換ニ從事セシメタルノミナラス又交換ノ簡易手段トシテ通用禁止後モ壹圓銀貨ヲ租稅其他ノ公納ニ用キルコトヲ許シ以テ壹圓銀貨ノ引換ヲ完全ニ執行シタリ

第四 引揚壹圓銀貨ノ處分及補助銀貨ノ増鑄

明治三十年十月ヨリ明治三十一年七月ニ至ルマテノ間ニ引揚タル壹圓銀貨及壹圓銀貨成貨拂渡證書ニ對スル銀塊ノ總計七千五百九萬參千八百貳拾貳圓ノ内貳千七百五拾六萬七千拾貳圓ハ明治三十年度乃至明治三十二年度ノ補助貨鑄造ノ材料ニ供シ四千七拾八萬六千六百六拾貳圓ハ上海及香港等ニ於テ之ヲ賣却シ六百七拾四萬四百四拾八圓ハ臺灣及韓國等ニ輸送シテ其地ノ通用ニ供シ(時價ヲ以テ通用セシム)以テ明治三十一年十二月ニ至リ即チ貨幣法ノ實施ヨリ一年三箇月ニシテ全ク其處分ヲ了シタリ此圓銀ノ處分ニ付テハ若シ其處分緩慢ニ流レ徒ニ多額ノ銀ヲ貯藏スルトキハ銀貨ノ大勢下落ノ傾向アルカ故ニ將來或ハ不利益ヲ蒙ルコト多カルヘキノミナラス國庫金ノ運用上著シキ支障ヲ生スヘク左レハトテ若シ急激ニ失シ濫ニ一時ニ之ヲ賣却セントスルトキハ却テ銀價ノ下落ヲ誘致シ爲ニ損失ヲ來スコト少カラサルヘキヲ以テ市場ノ動靜ニ關シテ

ハ最モ周密ナル注意ヲ加ヘ以テ成ルヘク敏速ニ且高價ニ之ヲ賣却センコトヲ勉メタリシカ偶々清國南部ニ於テ金融逼迫ヲ來シ續キテ米西戰爭起リタルカ爲メ銀ノ需要增加シ其價格モ稍騰貴ニ傾ケルニ乘シテ之ヲ賣却シタルニヨリ當初一割以上ノ差損ヲ受クヘキカト憂ヒタリシモノモ僅ニ七分ノ差損ヲ以テ僅僅一年有餘ノ短期間ニ之カ賣却處分ヲ了シ其賣却平均價格モ亦之ヲ當時ノ倫敦銀塊平均相場ニ比シテ稍高價ナリシコトヲ得タリ而シテ此ノ引揚銀貨ノ處分ノ爲メ國庫ノ差損ニ歸セシモノハ五百參拾九萬七千五百八拾壹圓ニシテ之ニ其處分ニ要セシ諸費用拾五萬五千七百參拾壹圓ヲ加フレハ合計五百五拾五萬參千參百拾貳圓トナリシモ是等ハ主トシテ補助銀貨ノ鑄造ヨリ生シタル明治三十年度及三十一年度ノ造幣局作業益金五百六拾五萬千九百六拾壹圓ヲ以テ之ヲ補填シ却テ多少ノ剩餘アルヲ得タリ

又正義ハ夙ニ幣制ノ基礎ヲ鞏固ナラシムルニハ民間ニ於ケル日常生計上ノ小取引ニ硬貨ヲ使用セシムルコト極メテ必要ナルヲ認メ嚮ニ政府紙幣ノ整理ヲ爲スニ當リテモ貳拾錢拾錢ノ銀貨ヲ鑄造シテ五拾錢以下ノ紙幣ト引換ユルノ方針ヲ取リ拾錢紙幣ハ既ニ明治二十年六月三十日限り其通用ヲ禁止シ五拾錢貳拾錢ノ小紙幣モ亦漸次補助銀貨ト交換シタルカ爲メ其現ニ流通スルモノハ極メテ少額トナリシモ日本銀行ノ發行セル壹圓兌換券ノ流通額ハ貨幣法改正ノ當時六千六百餘萬圓ノ巨額ニ上リ主トシテ日常生計ノ小取引ニ供セラルルヲ以テ此ノ如キ小紙幣ヲ民間日常生計ノ小取引ニ用ユルコトハ一國幣制上其宜キヲ得タルモノニアラサルヲ信シ貨幣法ノ實施ト共ニ日本銀行ヲシテ壹圓兌換券ヲ回收セシメ其空位ノ幾分ハ五圓以上ノ兌換券ヲ以テ補充サルヘキモ其過半ハ補助銀貨ヲ以テ之ヲ補充スルモノトシ補助銀貨凡ソ四千萬圓ヲ増鑄シテ之ヲ

發行スルノ經畫ヲ立テタリ此増發補助銀貨ノ額ニ從來發行ノ補助貨ノ額ヲ合スレハ我邦補助貨ノ流通總額ハ八千八百八拾貳萬餘圓トナリ之ヲ人口ニ割當ツルニ一人當リ凡ソ貳圓トナルヘシ依テ各國ノ狀況ヲ參酌シ我邦現時ノ實況ヲ稽查シ之ヲ以テ補助貨ノ流通上其宜キヲ得タルモノト認メ爾來著著此經畫ヲ實行シ既ニ明治三十二年十二月マテニ參千六百拾七萬五千圓ノ鑄造ヲ了シ壹圓兌換券ノ回收ニ從テ之ヲ市場ニ流通セシメツツアリ

第五 正貨準備ノ供給

明治三十年三月貨幣法ノ制定ニ際シ我邦ハ從來金ヲ多量ニ產出セサルノ國ナルヲ以テ金地金準備ノ點ニ關シ危懼ノ念ヲ抱キタルモノアリ然レトモ當時正義ハ之ニ對シテ其方法宜キヲ得ルニ於テハ清國韓國及濠洲地方等ヨリ金ノ供給ヲ得ンコト敢テ困難ナラサルヘキコトヲ説明セシカ實ニ金地金ノ供給其宜キヲ得ルト否トハ金貨本位制ノ安危ニ關スルモノナルカ故ニ爾來之ヲ吸收スルノ方法ニ付テハ十分ニ注意シ今ヤ事實ニツキテ多少之カ報告ヲ爲シ得ルニ至リタリ即チ明治三十二年一月ヨリ十二月マテノ間ニ金貨及金地金ノ輸入セラレタルモノ合計貳千八百六十九拾七圓ニシテ明治三十一年ノ同期間ニ於ケル輸入額參千七百貳萬七千七百五拾參圓ニ比スレハ千六百九拾四萬七千五拾六圓ヲ減少セリト雖モ之ヲ其輸入先ニ付テ區分シ比較スレハ實ニ左ノ如キモノナリ

輸出入	先	比	較	ノ	差
支那	明治三十二年一月乃至十二月	明治三十一年一月乃至十二月			
韓	八、二四〇、三八六	一、一六、四五五			八、一二三、九三一
支	二、四三八、二五三	一、〇六二、六八二			一、三五七、五七一

△印ハ差減

香 港	比 律 賓 諸 島	英 國	其 他 地 方	合 計
一、一二〇、八四	九三二、七九〇	七、二二九、三七九	一、二七、八〇五	二、〇八〇、六九七
三、一三七	三五、七五九、一五七	五八、〇八八	三七、〇二七、七五三	一、六、九四七、〇五六
一、〇八〇、七一三	九三二、七九〇	二八、五二九、七七八	六九、七一七	

明治三十二年ニ於テ明治三十一年ニ比シテ金貨及金地金ノ輸入額ノ減少セシハ英國ヨリスルモノノ減少セシニヨルモノニシテ此英國等ヨリノ輸入ハ償金ノ回收ニ關係スルモノナルカ故ニ之ヲ除外スルトキハ支那及韓國等ヨリノ輸入ハ何レモ皆著シク増加シタルコトヲ見ルヘシ蓋シ此等諸國ノ金地ハ從來専ラ歐洲ニ向ヒテ輸送セラレタルモノナリシカ正義ハ先ツ此等ノ金地ヲ吸收スルノ必要ヲ認メ日本銀行兌換券發行ノ餘力ヲ以テ關係アル銀行ヲシテ爲替ノ便ヲ擴張セシメ又ハ其他ノ方法ニ依リテ金融ノ便ヲ與ヘシメ是等ノ作用ニヨリテ自然ニ隣國產出ノ金ヲ我邦ニ吸收スルノ途ヲ開キタルカ爲メ茲ニ漸ク其端緒ヲ得ルニ至リタリ若シ將來益々此方法ヲ擴張シ以テ隣國產出ノ金ヲ我邦ニ吸收スルコトヲ勉ムルニ於テハ金地金準備ノ供給ニ關シテ甚シク憂慮スルコトナカルヘシト信ス然レトモ唯正貨ノ流出ニ付テハ更ニ注意ヲ要スル所ノモノナクンハアラス今昨明治三十二年間ニ於ケル金ノ輸出ノ狀況ヲ見ルニ左ノ如シ

支 那	香 港	比 律 賓 諸 島	英 國	英 領 印 度	其 他	合 計
六、六三〇	八、〇〇〇					六、六三〇
						八、〇〇〇

計	十二月	十一月	十月	九月	八月	七月	六月	五月	四月	三月
一〇、二九八〇	七、二四五	八、五〇五	二五、九七二	一〇、七七七	七、八九六	二、四〇五	二、九五九	六、七四〇	一五、五六三	八、二八八
一〇、一五〇〇〇	二五、〇〇〇	三三、〇〇〇	三三、五〇〇							二〇、〇〇〇
五〇〇				五〇〇						
六、六一六、五六八	八四五、九三九	二、七〇一、五三四	二、六六三、五一二	四〇五、五八三						
一、〇三三、三一八	一、八九〇	五〇二、二三七		五〇〇、〇〇〇						
八、七六八、三六六	一、一〇五、〇七四	三、五四二、二七六	三、〇二四、四八四	九一六、八六〇	九三〇〇	六、五六〇	四、〇二〇	五、一五一	一二、〇五六	二八、二八八
						八、九六五	六、九七九	一一、八九一	二七、六一九	

前表ニ於ケル金ノ輸出ハ主トシテ九月以後ニ起リタルモノニシテ其内六百六拾壹萬六千五百六拾八圓ハ印度ニ向ヒタルモノナリ蓋シ印度ニ於テハ其多年經畫シタル金貨制度施行ノ時期ニ近ツキタルカ爲メ金塊ノ吸收ヲ努ムルニ加ヘ彼我ノ物品貿易ニ於テ我ハ常ニ彼ニ對シテ輸入品代金ヲ仕拂フヘキ地位ニ立ツノ狀況ニアリシノミナラス此際印度ニ對スル間接爲替ノ狀況モ亦我ニ不利ナルモノアリシカ爲メ終ニ我ヨリ彼ニ向テ金ノ流出ヲ見ルノ結果ヲ來スニ至リタルモノナリ正義ハ此等金ノ流出ニ對シテ豫防ノ處置ヲ爲スコトニ怠ラサリシカ十二月ニ入りテハ終ニ稍々其流出ヲ緩和スルコトヲ得タリ

既ニ金貨制度ヲ採用シタル以上ハ之カ維持ニ關シテ正貨ノ出入カ將來益々注意ヲ要スヘキ重大ノ事項トナルニ至リシコト亦已ヲ得サル所ナリ

第六 貨幣法實施ノ我財政及經濟ニ及ホシタル效果

貨幣法ハ明治三十年十月ヲ以テ實施セラレ之カ爲メ引揚タル壹圓銀貨ノ處分モ亦明治三十一年十二月ヲ以テ結了シ我邦ハ茲ニ純然タル金貨本位制トナルニ至リタリ抑貨幣制度ハ一國財政及經濟ノ基礎ヲ爲セルモノニシテ國家百年ノ事業ノ依テ係ル所ナルカ故ニ幣制改革ノ後僅ニ一二年ノ間ニ其效果ヲ見シコトハ到底期シ難キノミナラス當時明治二十七八年戰役ノ結果官民事業勃興ノ後ヲ承ケ金融逼迫商工業不振ノ狀況ニ在リ加フルニ米穀ノ不作及新關稅法ノ實施等ニ因リテ經濟社會ノ事情最モ錯雜ヲ極メタルカ故ニ今其效果ヲ明白ニ指示センコトハ頗ル困難ナリ然レトモ明治三十年十月以降ノ狀況ニ付テ之ヲ觀ルニ蓋シ其目的ノ幾分ヲ達シ得タルカ如シ即チ貨幣法ノ實施以來本位貨幣ノ價格自ラ一定シテ濫ニ動搖スルコトナク物價ハ需要供給ノ原則ニ基ツキテ昂低スル外貨幣ノ價格上ヨリ生スル急激ナル變動ヲ受クルコトヲ免レ從テ一般ノ商工業ハ漸ク著實ニシテ秩序アル發達ヲナシ得ルノ時機ニ至リ本邦外國貿易ノ大半ヲ占ムル金貨國ニ對スル貿易モ亦從來ノ如ク爲替相場激變ノ爲ニ阻害セララルノ憂ナクシテ健全ナル發達ヲ爲シ得ルニ至リタリ今之ヲ明治三十年十月以降ノ倫敦宛爲替相場ニ徵スルニ最低貳志〇片一二五〇最高貳志〇片八一二五ニシテ殆ント動搖ノ弊アルコトヲ見ス而シテ銀貨國ニ對スル貿易ニ付テハ貨幣法實施ノ當初或ハ我邦ヲシテ不利益ナル位置ニ立タシムルニ至ランコトヲ憂ヘタル者アリシモ爾來其實際ニ付テ之ヲ驗スルニ却テ大體ニ於テ頗ル増進ノ勢アリ即チ其輸出ニ於テ

ハ明治三十年ニハ五千四百貳拾萬餘圓ナリシモノ明治三十一年ニハ六千九百八萬餘圓トナリ更ニ明治三十二年ニハ八千五百貳拾萬餘圓トナリシノミナラス其輸入ニ於テモ亦明治三十年ニハ六千五百四拾五萬餘圓ナリシモノ明治三十一年ニハ七千七百拾七萬餘圓トナレリ尤モ明治三十二年ニハ五千參百貳拾壹萬餘圓ノ輸入ニ止マレリト雖モ是全ク内地ニ於テ前年米穀ノ豐作ナリシカ爲メ絶テ其輸入ヲ見サルニ至リタルト北海道漁業ノ好況ナリシカ爲メ肥料ノ輸入減少シタルト其他三十一年ニハ新關稅率實施ニ先チテ見越輸入ノ多カリシ等種種ノ事情ニ依ルモノニシテ幣制改革ノタメニアラサルナリ

貨幣法實施ノ效果トシテ特ニ一言スヘキモノハ我邦カ金貨制度ヲ採用シタルノ結果我金融市場ヲシテ世界ノ金融市場ト連絡ヲ通スルニ至ラシメタル事是ナリ之カ爲ニ漸次他ノ金貨國ニ於ケル低利ナル資本ノ流入ヲ來シ以テ我資本ノ缺乏ヲ補ヒ我カ生産事業ノ發達ヲ補助スルノ傾向ヲ生スルニ至レルハ明ナル事實ニシテ帝國四分利付公債壹千萬磅ヲ倫敦ニ於テ募集スルコトヲ得タルコトノ如キハ之カ先驅トシテ見ルヘキナリ

第七 臺灣ノ幣制

臺灣ノ貿易ハ對岸銀貨國ニ對スルモノ其十ノ九ヲ占ムルノミナラス土民ノ舊慣速ニ改メ難キモノアルヲ以テ直ニ貨幣法ヲ臺灣ニ施行スルノ時機ニ至ラサルモノアリ故ニ先ツ壹圓銀貨ニ時價ヲ付シテ通用スルコトヲ許シ今後漸ヲ以テ純然タル金貨本位制ヲ施行セントス是今日ノ狀況ニ於テ實ニ已ムヲ得サル所ナリ

第二章 政府發行紙幣ノ整理

政府發行紙幣整理ノコトニ關シテハ正義嚮ニ明治二十三年十月ヲ以テ閣下ニ報告スル所アリシカ爾來其方針ヲ變スルコトナク明治三十二年十二月限りノカ通用ヲ禁止セララルコトトナリ茲ニ政府紙幣ノ整理ヲ告グルニ至リタリ即チ明治初年以來各種政府紙幣ノ發行總額ハ壹億貳千參百貳拾參萬五千五百九拾七圓五拾貳錢六厘ニシテ其内明治三十三年一月末日マテニ銷却セラレ若クハ期滿免除トナリタルモノ壹億貳千五萬參千六百拾九圓五拾貳錢六厘ナリ故ニ差引殘存額ハ參百拾八萬千九百七拾八圓ニシテ此紙幣ハ既ニ其通用ヲ禁止セラレタレトモ尙ホ五箇年間ハ政府ニ於テ交換ノ義務アルモノナリ而シテ此交換基金ハ全額國庫ニ備ヘアルカ故ニ交換ノ請求ニ應シ何時ニテモ金庫ニ於テ直ニ正貨ト引換ヘラルヘキモノトス

明治二十三年法律第五十六號ヲ以テ紙幣交換基金特別會計法ノ改正セララルヤ貳千貳百萬圓ヲ日本銀行ヨリ借入レ之ニ國庫準備金ヨリ繰入レシタル壹千萬圓ヲ加ヘ合計參千貳百萬圓ヲ以テ壹圓以上紙幣ノ交換基金ニ供シ尙ホ明治二十三年度ヨリ明治三十年度ニ至ルマテノ間ニ一般會計ヨリ七百七拾萬五千參百拾壹圓七拾五錢ヲ繰入シテ五拾錢以下ノ紙幣ノ交換基金ニ充テタリ故ニ交換基金ノ總計ハ參千九百七拾萬五千參百拾壹圓七拾五錢ニシテ爾來其交換ヲ繼續シ明治三十三年一月末日マテニ壹圓以上ノ紙幣貳千九百七拾八萬七千七拾九圓五拾錢及五拾錢以下ノ紙幣六百七拾參萬六千貳百五拾貳圓五錢合計參千六百五拾貳萬參千參百參拾壹圓五拾五錢ヲ交換引揚タリ故ニ交換基金ノ殘額ハ差引參百拾八萬千九百八拾圓貳拾錢トナレリ而シテ右交換引揚高參千六百五拾貳萬參千參百參拾壹圓五拾五錢ノ外描改引揚及期滿免除トナリタルモノ參拾五萬九千九百四拾六圓參拾五錢アルヲ以テ之ヲ該引揚高ニ加ヘタル合計參千六百八拾八萬參千

貳百七拾七圓九拾錢ヲ明治二十三年度初頭ノ政府紙幣ノ流通高四千六萬五千貳百五拾五圓九拾錢ヨリ控除スルトキハ其現在ノ流通高ハ參百拾八萬千九百七拾八圓ニシテ正ニ紙幣交換基金ノ殘額ヲ以テ何時ニテモ交換銷却シ得ヘキモノタルナリ

明治三十年度ニ於テ紙幣交換ノ爲メ交換基金ニ繰入スヘキ金額ノ全額繰入ヲ了スルヤ政府紙幣交換ノ準備全ク成リシヲ以テ當時ノ大藏大臣伯爵井上馨ハ政府發行紙幣流通禁止ノ法律案ヲ議會ニ提出シ終ニ明治三十一年法律第六號ヲ以テ明治三十二年十二月三十一日限り其通用ヲ禁止シ其後滿五箇年間ヲ以テ引換期限トスルコトニ定メタリ

政府發行紙幣ノ内拾錢紙幣ニ付テハ明治十九年勅令第五十號ヲ以テ明治二十年六月三十日限り其通用ヲ禁止スルコトナリシカ明治二十三年二月二十八日ニ至リ法律第十三號ヲ以テ其交換ノ義務免除期限ヲ同法律發布ノ日ヨリ滿三箇年ト定メ明治二十六年二月二十七日ニ至リテ全ク拾錢紙幣ノ始末ヲ結了スルニ至リタリ今其結果ニ付テ之ヲ觀ルニ拾錢紙幣ノ發行總額ハ千百六拾九萬八千四百拾五圓八拾錢ニシテ其内他ノ紙幣ト交換引揚タルモノ五百九拾八萬九千五百五拾六圓五拾五錢減債方法ニテ引揚タルモノ七拾萬貳千貳百六拾貳圓七拾五錢公債證書ヲ以テ交換引揚タルモノ拾五萬千拾圓銀貨ト交換引揚タルモノ四百四拾九萬四千六百六拾五圓七拾錢其他描改引揚高千七拾參圓八拾五錢ニシテ引揚高合計千百參拾參萬八千五百六拾八圓八拾五錢ナリ此額ヲ以テ其發行高千百六拾九萬八千四百拾五圓八拾錢ト差引クトキハ參拾五萬九千八百四拾六圓九拾五錢ハ全ク散失シタルモノト云フヘシ而シテ此散失高ヲ以テ發行高ト比較スルニ其百分ノ三〇七ニ相當セリ

第三章 公債ノ募集

此ノ如クニシテ拾錢紙幣ノ處分ハ既ニ全ク其結末ヲ告ケ其他ノ紙幣ニ至リテモ明治三十二年十二月ヲ以テ其通用ヲ禁止セラレタルカ故ニ自今五年ノ後ニハ全ク其處分ヲ了スヘキモノナリ

明治二十九年ニ於テ經畫セラレタル事業公債及北海道鐵道公債並明治二十五年ヲ以テ決定セラレタル鐵道公債ノ總額ハ實ニ貳億六千貳百參拾九萬八千參百四拾參圓(法律發布後豫算ニ於テ増額セラレタル員數ヲ含ム)ノ巨額ニシテ其内五千六百八拾萬七千參百五拾圓ハ明治三十年度以前ニ於テ之ヲ募集シタリト雖モ實際市場ニ於テ募集スルコトヲ得タル金額ハ僅ニ貳百萬圓ニ止マリ其他ノ五千四百八拾萬七千參百五拾圓ハ總テ大藏省預金及債金ヲ利用シ以テ特別發行ヲナセシモノナリ而シテ明治三十一年度及三十二年度ニ於テ募集ヲ要スル額ハ實ニ壹億貳拾五萬八千八百七拾九圓ノ巨額ニ達シ若シ之ヲ募集シ得サルカ如キコトアラシカ諸般ノ事業ハ到底之ヲ中止スルノ外ナキ窮境ニ陥リタリ正義此時ニ方リテ大藏大臣ノ職ニ就キ内外經濟市場ノ狀況ヲ熟察シタル上内地市場ニ於テ公債募集ノ餘地ヲ見サリシカ爲メ已ムヲ得ス明治三十二年一月ヲ以テ外國債ヲ募集スルノ議ヲ提出シ之ニ關スル諸般ノ準備ヲ爲シタル後勅裁ヲ得テ同年六月英國倫敦ニ於テ英貨壹千萬磅(本邦通貨ニ換算シタル)ノ公債ヲ募集シ以テ諸般ノ事業ヲシテ其進行ヲ繼續セシムルコトヲ得タリ其詳細ニ就テハ嚮ニ倫敦ニ於ケル公債募集ノ顛末報告書ヲ編纂シ明治三十二年十月二十一日ヲ以テ閣下ニ上呈シ置キタレハ既ニ了知セラルル所ナルヘシ而シテ尙ホ前記三公債ノ明治三十三年度以降ニ募集スヘキモノ壹億七百九拾六萬九百九拾參圓アリ之ヲ我金融市場ニ於テ募集セントスルハ固ヨリ頗ル難事ナランモ幸ニ毎年度ノ豫算ニ於テ公債償還基金アリ又大藏省預金ノ運用ア

リ專ラ此等ヲ利用シ其餘ハ我市場ニ於ケル資金ノ供給ニ依頼スルコトト爲シ以テ充分ノ注意ヲ加ヘ之ヲ處理スルニ於テハ必スシモ豫定ノ如ク内地ニ於テ之ヲ募集シ得サルコト無カルヘク我公債募集上ニ於ケル一難關ハ今ヤ正ニ經過シタルモノト謂フヲ得ヘシ

第一 明治三十一年度以前ニ於ケル公債募集ノ經畫

明治二十七八年戰役ノ後ニ於テ諸般ノ經營ニ應センカ爲メ新ニ經畫セラレタル公債ノ明治三十一年度末ニ於ケル募集豫定總額ハ明治二十九年法律第五十九號事業公債條例ニ據リテ募集スヘキ事業公債壹億四千八百九拾九萬千八百參拾四圓(法律發布後豫算ニ於テ増額ヲ合ム)及同年法律第九十三號北海道鐵道敷設法ニ據リテ募集スヘキ北海道鐵道公債千八百五拾六萬貳千五百拾圓(法律ニ規定ノ百萬圓ナルモ此處ニハ唯其使途ノ確定セルモノハミヲ掲ケタリ)ニシテ之ニ戰役以前ニ於テ既ニ經畫セラレタル明治二十五年法律第四號鐵道敷設法ニ據リテ募集スヘキ鐵道公債九千四百八拾四萬四千四百五拾九圓(法律發布於テ増額ヲ合ム)ヲ加フレハ合計實ニ貳億六千貳百參拾九萬八千參百四拾參圓ニ達シタリ然ルニ明治二十七八年戰役以後ニ於ケル我邦ノ金融市場ハ戰時ニ要シタル軍事情債ノ募集及戰後ニ於ケル官民事業ノ勃興等種種ノ事情ニ因リテ常ニ逼迫ノ狀況ニアリシカ爲メ右三種公債ノ明治三十一年度以前ニ於ケル募集總額ハ五千六百八拾萬七千參百五拾圓ニ及ヒタリト雖モ其内實際市場ヨリ募集シタルモノハ僅ニ明治二十六年度ニ於テ募集シタル鐵道公債貳百萬圓ニ止マリ其殘額五千四百八拾萬七千參百五拾圓ハ何レモ皆大藏省預金又ハ債金ニ屬スル資金ヲ利用シテ募集ニ應シタルモノナリ

明治三十一年度ニ於テ募集スヘキ公債ノ豫定額ハ七千九百貳拾九萬貳千貳拾八圓ナリト雖モ

内地金融ノ逼迫ハ明治二十九年及三十年ノ兩年ニ於ケル米穀ノ不作等ニヨリテ益共度ヲ加ヘ到底之ヲ募集シ得ルノ見込ナカリシカ故ニ當時ノ大藏大臣伯爵井上馨ハ右ノ内八百六拾參萬七千九百八拾九圓ノ使用ヲ翌年度以降ニ繰延ヘ其殘額七千六拾五萬四千參拾九圓ハ一時之ヲ債金ノ現在金ヨリ繰替支辨シ他日外國ニ於テ公債ヲ募集シタル上債金ヘ戻シ入ルルノ見込ヲ以テ之ニ關スル法律ノ制定ヲ企圖シタリシモ明治三十一年ノ夏季ニ召集セラレタル帝國議會ハ會衆議院ノ解散セララルニ遇ヒ内閣各大臣モ亦皆其職ヲ辭シタルカ爲メ終ニ之ヲ果スコトヲ得スシテ止メリ正義明治三十一年十一月ヲ以テ復大藏大臣ノ職ヲ奉スルコトトナルヤ年度既ニ其半ヲ經過シ最早外國債ヲ募集シ得ルノ暇ナカリシカ爲メ嚮ニ伯爵井上馨カ定メタル債金ヲ以テ一時繰替支辨ヲ爲スノ經畫ヲ繼承シ以テ之カ法律案ヲ提出スルノ議ヲ建テシカ廟議ノ容ルル所トナリ第十三議會ノ協贊ヲ經テ終ニ明治三十二年二月法律第八號ヲ以テ債金繰替支辨ノ法律ヲ公布セラレ僅ニ一時ノ急ニ應スルコトヲ得タリ

第二 外債募集

如斯明治三十一年度ニ於テ募集スヘカリシ公債ノ募集ヲ爲ササリシ結果明治三十二年度ニ至リテハ債金ヨリ繰替タルモノノ返償ニ充ツヘキ七千六拾五萬四千參拾九圓及前記ノ三十一年度ヨリ繰延ヘタル八百六拾參萬七千九百八拾九圓ニ明治三十二年度相當ノ募集豫定額貳千九拾六萬六千八百五拾壹圓ヲ加ヘ合計壹億貳拾五萬八千八百七拾九圓ノ公債ヲ募集スヘキ必要ニ迫リタリ然ルニ内地ニ於ケル金融ノ狀況ハ依然トシテ逼迫ヲ極メ到底此ノ如キ巨額ノ公債ヲ募集シ得ヘキ見込ナカリシカ故ニ正義ハ外國市場ニ於テ公債ヲ募集スルノ愈已ムヘカラサルコトヲ認メ

之ニ關スル法律ヲ制定スルノ議ヲ建テ第十三議會ノ協贊ヲ經終ニ明治三十二年法律第百一號ヲ以テ之カ公布ヲ見ルコトヲ得タリ抑外國ニ於テ公債ヲ募集セントスルニハ先ツ年々之カ元利金ノ支拂ニ充ツルカ爲メ外國ニ輸送スヘキ正金貨ノ供給ニツキテ成算ナカルヘカラス故ニ正義ハ本邦財政ノ現状ヲ精査シタルニ通商條約ノ改正ニ伴ヒ海關稅率ノ變更ニ由リ明治三十二年度以降ニ於テ毎年度凡ソ壹千萬圓ノ收入増加ヲ得ルノ見込アルニ依リ此正貨ヲ以テ外國債元利金ノ支拂ニ充ツルモノトスレハ凡壹億四千萬圓ノ外國債ヲ負擔スルコトヲ得ヘク此金額ノ内ヨリ既ニ倫敦ニ於テ元利金ノ支拂ヲ爲スヘキ約定ヲ爲シタル軍事公債四千參百萬圓ヲ差引クトキハ凡壹億圓内外ヲ限度トシテ新ニ外國債ヲ募集スルモ之カ償還ニ關シテ支障ナキコトヲ認メタリ是ニ於テカカ特ニ此旨ヲ具シテ外債ヲ募集スルノ議ヲ閣議ニ提出シ勅裁ヲ經タル後直ニ倫敦ニ於テ之カ募集ニ著手シ明治三十二年六月一日ヲ以テ「シンデケート」ニ英貨壹千萬磅ノ公債ヲ募集スルノ契約ヲ締結スルコトヲ得タリ茲ニ契約ノ要領ヲ擧クレハ公債ノ募集總券面金額ハ英貨壹千萬磅ニシテ利率ハ一箇年四分發行價格ハ壹百磅ニ付九拾磅トシ別ニ此發行價格ノ内ヨリ「シンデケート」ノ手数料トシテ券面金額ノ百分ノ四ヲ引去ルヘク即チ政府手取金額ハ券面金額壹百磅ニ付キ八拾六磅タルノ約定ニシテ元金ハ明治三十二年一月一日ヨリ十箇年間据置キ爾後四十五箇年間ニ政府ノ都合ニ依リ隨意ニ償還シ得ヘシト云フニ在リ其他抵當又ハ保證等ノ如キ條件ニ至リテハ毫モ之ヲ附加スルコト無カリシナリ

此ノ如クニシテ「シンデケート」ハ同年六月二日ヲ以テ目論見書ヲ公ニシ倫敦ハ同六日他所ハ同七日ノ朝ヲ以テ應募ノ申込ヲ締切リ十月十八日ニ至ルマテノ間數回ニ應募金額九百萬磅ノ内「シン

デケート」ニ於テ其手数料四拾萬磅ヲ控除シタル殘額八百六拾萬磅ノ領收ヲ完全ニ了シタリ

募集金額壹千萬磅ト其實收金額八百六拾萬磅トノ差額壹百四拾萬磅(凡壹千四百萬圓)ハ恰モ政府ノ損失ニ歸シタルカ如キ觀アリト雖モ從來我公債ノ利率ハ一箇年五分ノ割合ナリシニ此公債ハ四分ノ利率ヲ以テ募集スルコトヲ得タルカ爲メ此點ニ於テ一箇年拾萬磅凡百萬圓ノ剩餘ヲ國庫ニ生スヘク上述シタル差損(凡壹千四百萬圓)ノ如キハ此差益ニ依リ十四箇年ニシテ之ヲ補填スルコトヲ得ヘシ而シテ若シ假リニ此公債元金ヲ以テ十箇年ノ据置年限經過後平均二十五箇年目ニ償還ヲ了セラレルモノト看做ストキハ即チ起債ノ初年ヨリ三十五箇年ノ間償還セラレサルコトトナリ其間ニ於ケル利子ノ差益ハ參百五拾萬磅(凡參千五百萬圓)ニシテ右ノ差損ヲ差引モ尙ホ貳百拾萬磅(凡貳千百萬圓)ハ國庫ニ剩餘ヲ生シ却テ國庫ヲ利益スルノ計算トナルナリ

此ノ如クニシテ募集シタル英貨壹千萬磅ノ公債金ハ之ヲ各事業ノ費途ニ使用シ以テ各事業進行ノ上ニ聊不便ヲ感セシメザリシノミナラス又之ヲ以テ嚮ニ債金ヨリ繰替タル金額ノ全部ノ返戻ヲ了リ以テ債金特別會計ニ於ケル支拂ニツキテモ亦些少ノ不便ヲ感セシメヌ満足ナル結果ヲ與ヘタリ

第三 今後ノ公債募集ニ關スル見込

既ニ本章ノ初ニ於テ述ヘタルカ如ク第十四議會迄ニ決定セシモノヲ合計スレハ上述シタル三種公債ノ募集豫定總額ハ貳億六千貳百參拾九萬八千參百四拾參圓ニ上レリ而シテ此内明治三十年度以前ニ内地ニ於テ募集シタルモノ五千六百八拾萬七千參百五拾圓及其後明治三十二年六月倫敦ニ於テ募集シタル英貨公債壹千萬磅ヲ我通貨ニ換算シタルモノ九千七百六拾參萬圓合計壹億

五千四百四拾參萬七千參百五拾圓ヲ控除スレハ差引殘額壹億七百九拾六萬九百九拾參圓ニシテ是等ハ總テ内地ニ於テ之ヲ募集スヘキ見込ナリ茲ニ其募集方法ヲ概言スレハ今後毎年度ノ豫算ニ於テ公債元金ヲ償還スヘキ金額ハ凡七八百萬圓乃至壹千萬圓ニ達スルノ見込ナルカ故ニ此償還金ヲ利用シテ直ニ公債ニ應募セシムルコトヲ務ムルハ勿論大藏省預金部ニ於ケル資金ノ運用ニ依リテモ亦之ニ應募スルコト、爲ストキハ其餘ノ僅僅タル金額ハ之ヲ内地市場ニ於テ募集シ爲ニ外國市場ヲ煩ハサ、ルノ胸算ニシテ國庫金ノ收支上ニ於テモ亦之カ運用ニ充分ノ注意ヲナシ以テ資金運轉ノ圓滑ヲ量ルトキハ公債募集金ヲ以テ支辨スヘキ經費ノ支出上困難ヲ感スルカ如キコトナカルヘシ要ハ唯之カ施行上ノ注意如何ニ在リ

以上陳ヘタルモノ、外尙ホ明治三十二年以後ニ於テ募集サルヘキ臺灣事業公債參千五百萬圓及祿高整理公債壹千萬圓アリ然レトモ前者ハ專ラ臺灣ニ於ケル事業ノ經營ニ充ツヘキモノニシテ臺灣及支那地方ニ於テ之ヲ募集スヘキ見込ニ屬シ後者ハ單ニ之カ證書ヲ交付スルニ止マリ別ニ内地市場ニ於ケル資金ヲ吸收セサル見込ノモノナリ

斯ノ如ク既定公債ノ募集未濟額ハ種種ノ方法ヲ以テ之ヲ内地ニ於テ募集スルノ經畫ヲ立テタリト雖モ此上内地ニ於テ公債ヲ増募センコトハ到底其目的ヲ立ツルニ由ナキカ故ニ追テ經濟社會ノ餘裕ヲ見ルニ至ルマテハ將來公債ヲ募集シテ新ニ事業ノ經營ヲナサントスルノ經畫ハ必ス之ヲ中止セラレンコトヲ豫メ確定シ置クノ希望ニ堪ヘサルナリ尤モ内地市場ノ外外國市場ニ於テ公債ヲ募集スルノ途ナキニアラサルモ近時歐米諸國ニ於ケル金融ハ著シク逼迫ヲ告ケ爲ニ市場ノ狀況非常ノ激變ヲ來シツツアルカ故ニ今後數年間ハ外國債ヲ募集スルコトモ亦到底難事タラ

スンハアラス假令外國市場ノ金融ハ他日緩和ニ趣クノ機アルヘシトスルモ本年外國ニ於テ過度ノ公債ヲ募集スルコトハ國家經濟上ニ於テ最モ慎ムヘキコトニ屬シ容易ニ斯ノ如キノ舉措ニ出ツヘカラサルヤ勿論ナリ尙ホ此事ニ關シテハ既ニ明治三十二年十月二十一日外國債募集ノ結果ヲ閣下ニ報告スルニ方リテ詳細ニ陳述シタル所ナルカ故ニ該報告書ニツキテ了知セラレンコトヲ望ム

第四 公債ノ募集公債金ノ收支及公債未償還總額ノ現況

既往ニ於ケル三公債募集ノ景況及將來ニ於ケル公債募集ノ見込ニ關シテハ既ニ項ヲ重ネテ之カ概略ヲ陳述セリ左ニ右三公債ノ募集ニ關スル計算ノ大要募集公債金ノ收支計算及明治三年初メテ九分利付外國債ヲ募集シタル以來ノ國債(金ヲ除ク)ノ起債額償還額並未償還額ヲ表記セン

事業公債鐵道公債及北海道鐵道公債募集計算(明治三十三年二月二十三日現狀)

事業公債	公債種類		募集豫定總額		募集濟額		未募集額	
	費	目	募集豫定總額	募集濟額	未募集額	未募集額	未募集額	
陸軍擴張費	陸軍擴張費	陸軍擴張費	一八、四五九、四八四、〇〇〇	一七、六一九、一八四、〇〇〇	八四〇、三〇〇、〇〇〇			
	海軍擴張費	海軍擴張費	五八、九九九、四三三、〇〇〇	五六、六一〇、六七三、〇〇〇	二、三八八、七五〇、〇〇〇			
	製鐵所創立費	製鐵所創立費	一八、六二二、九三三、〇〇〇	五、二七六、二〇四、〇〇〇	一三、三四六、七二八、〇〇〇			
	空知太旭川間鐵道建設費	空知太旭川間鐵道建設費	一、一七八、三三一、〇〇〇	一、一七八、三三一、〇〇〇				
	葉煙草取扱所設置及資金	葉煙草取扱所設置及資金	一、二二二、三五〇、〇〇〇	一、二二二、三五〇、〇〇〇				
電話交換擴張費	電話交換擴張費	一、二八〇、二一〇、七〇〇	七、五九一、二一四、〇〇〇	五、二一〇、八九三、〇〇〇				

公債種類	事業公債鐵道公債及北海道鐵道公債募集金收支計算(明治三十三年)	
	募集金收入額	支出額
官設既成鐵道改良費	二六,五五三,〇〇〇.〇〇	一五,三〇〇,〇〇〇.〇〇
公債初年ノ利子	一六三,〇〇七,〇〇〇	一六三,〇〇七,〇〇〇
公債額面ノ都合ニ依リ發行増		八七,〇〇〇
計	一四八,九六一,八三四.〇〇	一五,九五二,二五〇.〇〇
鐵道建設費	九四,八四四,四五九.〇〇	三五,四八五,一〇〇.〇〇
北海道鐵道敷設費	一八,五六二,〇五〇.〇〇	三,〇〇〇,〇〇〇.〇〇
計	一一三,三〇六,〇〇九.〇〇	三八,四八五,一〇〇.〇〇
合 計	二六二,三九八,三四三.〇〇	一五四,四三七,三五〇.〇〇
陸軍擴張費		一三,六六七,四九六.五六
海軍擴張費		四三,四五四,八五三.五六
製鐵所創立費		四,九五二,〇六五.〇三
空知太旭川間鐵道建設費		一,一七六,七〇〇.六三
葉煙草取扱所設置及資金		九,二〇五,八四五.九一
計	二〇二,九三八,五二九.四六七	六〇,一三一,三〇七.三八
事業公債		一一,九一七,三四八.八九
計		四六八,八八〇.九四六
電話交換擴張費		九〇,八五四,四九八.八三
官設既成鐵道改良費		二,八三五,三九二.三六一
公債發行費		一一,〇一四,五四一
計	一〇二,九三八,五二九.四六七	一一,〇一四,五四一
北海道鐵道敷設費		二,八四七,四〇六.九〇
公債發行費		三二,〇四三,九一八.六五〇
計	二,六二二,〇〇五.三〇六	一〇五,五九四.二九一
鐵道建設費		三一,一四九,五一二.九四一
公債發行費		一一四,八五一,四一八.六八二
計	三二,六五一,三七三.一四	一二四,八五一,四一八.六八二
合 計	一三八,二一一,八六二.〇八七	一三三,三六〇,四四三.四〇五

備考
本表△印員額ハ公債額面ノ都合ニ由リ既定募集總額ヨリ募集超過トナリシ額ヲ示セシモノナリ

種 類	國債ノ起債額償還額及未償還額一覽表(明治三十三年)	
	起債額	償還額
官設既成鐵道改良費	二六,五五三,〇〇〇.〇〇	一五,三〇〇,〇〇〇.〇〇
公債初年ノ利子	一六三,〇〇七,〇〇〇	一六三,〇〇七,〇〇〇
公債額面ノ都合ニ依リ發行増		八七,〇〇〇
計	一四八,九六一,八三四.〇〇	一五,九五二,二五〇.〇〇
鐵道建設費	九四,八四四,四五九.〇〇	三五,四八五,一〇〇.〇〇
北海道鐵道敷設費	一八,五六二,〇五〇.〇〇	三,〇〇〇,〇〇〇.〇〇
計	一一三,三〇六,〇〇九.〇〇	三八,四八五,一〇〇.〇〇
合 計	二六二,三九八,三四三.〇〇	一五四,四三七,三五〇.〇〇
陸軍擴張費		一三,六六七,四九六.五六
海軍擴張費		四三,四五四,八五三.五六
製鐵所創立費		四,九五二,〇六五.〇三
空知太旭川間鐵道建設費		一,一七六,七〇〇.六三
葉煙草取扱所設置及資金		九,二〇五,八四五.九一
計	二〇二,九三八,五二九.四六七	六〇,一三一,三〇七.三八
事業公債		一一,九一七,三四八.八九
計		四六八,八八〇.九四六
電話交換擴張費		九〇,八五四,四九八.八三
官設既成鐵道改良費		二,八三五,三九二.三六一
公債發行費		一一,〇一四,五四一
計	一〇二,九三八,五二九.四六七	一一,〇一四,五四一
北海道鐵道敷設費		二,八四七,四〇六.九〇
公債發行費		三二,〇四三,九一八.六五〇
計	二,六二二,〇〇五.三〇六	一〇五,五九四.二九一
鐵道建設費		三一,一四九,五一二.九四一
公債發行費		一一四,八五一,四一八.六八二
計	三二,六五一,三七三.一四	一二四,八五一,四一八.六八二
合 計	一三八,二一一,八六二.〇八七	一三三,三六〇,四四三.四〇五

備考
本表△印員額ハ募集金收入額ニ對シ支出額ノ超過ヲ示セシモノナリ

國債ノ起債額償還額及未償還額一覽表(明治三十三年)

以內ニ拂込ムヘク而シテ初回拂込以後ノ分ニ對シテハ一箇年百分ノ五ノ利子ヲ拂込ムヘキモ若シ批准後三箇年以內ニ全額ノ拂込ヲナストキハ其利子ハ免除セラレ且既ニ拂込ミタル利子ハ元金ノ拂込ニ編入セラルヘキモノナリ而シテ此等ノ債金ハ總テ庫平銀ヲ以テ計算セラレタリ然ルニ當時清國ハ債金ノ仕拂ヲナス爲メ歐洲ニ於テ公債ヲ募集スルノ經畫アリ而シテ我邦ハ爾後數年ノ間歐洲ニ向テ多額ノ仕拂ヲナスノ必要アリシノミナラス當時銀價ノ大勢ハ日ニ下落ノ一方ニ傾キ我邦ハ時機ニ依リ金貨本位制ヲ採用スルノ意思アリシヲ以テ正義ハ該債金全額ヲ一時ニ英貨ニ換算シ英貨ヲ以テ拂込マシムルノ議ヲ時ノ總理大臣伊藤伯爵ニ提出シ清國駐劄本邦特命全權公使ニ訓令シテ清國政府ト協議セシメ終ニ明治二十八年十月六日ヲ以テ其事ノ協定ヲ得債金ノ全額ヲ一時ニ英貨ニ換算シ(明治二十八年六月七八ノ三箇月間倫敦市場ノ銀價英國倫敦ニ於テ英貨ヲ以テ每次之ヲ領收スルコトヲ追約セリ然ルニ清國ハ條約ニ從ヒテ軍費賠償金ノ第三回ノ拂込ヲ爲シタル後明治三十一年五月七日ニ至リ債金ノ殘額ヲ一時ニ拂込ミシヲ以テ下ノ關條和條約ニ依リ既ニ拂込ノ利子ハ之ヲ元金ニ編入シタリ此ノ如クニシテ清國ヨリ我政府ニ拂込ミタル英貨ノ總額ハ左ノ如シ

- 一 英貨參千貳百九拾萬九百八拾磅七志四片七五
- 一 英貨四百九拾參萬五千四百七拾七磅壹志壹片七五
- 合計英貨參千七百八拾參萬六千六百七拾七磅八志六片五

今若シ此等ノ債金ヲ一時ニ英貨ニ換算セシメテ各領收當時ニ於ケル時時ノ銀相場ヲ以テ英貨ニ換算シ領收スルモノト假定スルトキハ貳億參千萬兩ノ英貨ハ參千六百拾貳萬七千六百四拾貳磅

軍費賠償金貳億兩
對スル英貨
遼東半島還付報償金參千萬兩ニ對スル英貨

七志拾片四壹ニ相當スルヲ以テ之ヲ實際ノ領收額參千七百八拾參萬六千六百七拾七磅八志六片五ニ比スレハ百七拾萬八千四百八拾五磅〇志八片〇九ヲ減少スル計算ナリ然ルニ債金ノ庫平銀總額ヲ前記明治二十八年六七八三箇月間ノ平均相場ヲ以テ一時ニ英貨ニ換算シ領收スルコト、爲シタルヲ以テ國庫ハ幸ニ右ノ減收ヲ免ル、コトヲ得タリ

此等ノ外尙ホ我邦ハ威海衛ノ占領中條約ニ依リ毎年ノ守備費償却金トシテ五拾萬兩ノ英貨換算額八萬貳千貳百五拾貳磅九志ヲ清國ヨリ領收シタルコト前後三回ニシテ其合計貳拾四萬六千七百五拾七磅七志ハ何レモ領收當時ノ一般會計ノ歲入ニ編入シテ之ヲ整理シタリ

以上敘述シタル軍費賠償金並遼東半島還付報償金ハ其金額巨大ニシテ之カ領收ノ時期數年ニ互リ其仕拂モ亦必要ニ應シテ漸次ニ之ヲ爲サ、ルヘカラス加フルニ之ヲ本邦ニ回收スルニハ可成金融市場ニ變動ヲ及ホサ、ランカ爲メ或ハ爲替ニ依リ又ハ地金ヲ現送スル等其時機ノ宜キヲ見テ適應ノ手段ヲ採ラサルヘカラサルノ結果一時ニ之カ回收ヲ爲スコト能ハサルヘキヲ以テ其間ハ一時有價證券ヲ購入シテ保有スルノ必要モアルヘク又國庫ノ融通ヲ得ンカ爲ニハ其地金又ハ英貨ヲ日本銀行ニ預ケ入レ之ニ對シテ兌換券ヲ借入ル、等ノ必要モアルヘシ是ニ於テ當時ノ大藏大臣子爵渡邊國武ハ債金特別會計法ノ制定ヲ必要トシ明治二十九年一月該法案ヲ議會ニ提出シ其協贊ヲ經テ同年三月法律第六號ヲ以テ之カ公布ヲ見ルニ至リタリ之ニ依リテ軍費賠償金及遼東半島還付報償金ハ債金特別會計ヲ以テ整理セラレ其資金ハ金銀地金及有價證券ヲ以テ之ヲ保有スルコトヲ得且其金地金ヲ以テ日本銀行ニ預入ヲナシ之ニ相當スル兌換券ヲ借入レテ相互ニ貸借勘定ヲ組成シ得ルノ途開カル、コト、ナレリ

第二 償金ノ使途並償金經營ノ事業

前項ニ於テ敘述シタル軍費賠償金貳億兩並遼東半島還付報償金參千萬兩ニ對スル英貨參千七百八拾參萬六千五百貳拾七磅八志六片五ヲ各領收當日ニ於ケル橫濱ヨリ倫敦宛ノ參著爲替相場ニ依リ換算スルニ參億五千五百九拾八萬參百六拾參圓八拾參錢五厘ニシテ又此金額ノ外償金ノ運用ヨリ生シタル利殖金ニシテ償金特別會計ノ收入ニ歸シタルモノ九百五拾四萬八千七百參圓四拾四錢アルカ故ニ償金特別會計ノ總金額ハ合計實ニ參億六千五百五拾貳萬九千六拾七圓貳拾七錢五厘ナリトス

抑此償金タル我國戰勝ノ結果トシテ之ヲ領收シタルモノニシテ其使用方法ニ付テハ大ニ慎重ヲ要セスンハアラス故ニ先ツ之ヲ以テ明治二十七八年戰役ニ於ケル軍資金ノ不足ヲ補充スルコトトシ其殘額ノ大部分ハ之ヲ陸海軍ノ擴張其他國防ノ充實及國權ノ伸張等ニ必要ナル費途ニ供用スルコト、爲セシカ後更ニ尙ホ殘存セル金額ノ一部分ヲ以テ帝室御料ニ編入シ他ノ幾分ヲ以テ教育基金災害準備基金及軍艦水雷艇補充基金ヲ設置シ且増稅法律成立ノ遲延シタル爲ニ生シタル歲計ノ不足ヲ補填スルコトニ供用シタリ蓋シ國民教育ノ今後益、忽諸ニ付ス可ラサルハ殆ント言フヲ要セス又我國ノ地勢上風水ノ災害頗ル頻繁ニシテ爲ニ往往經常歲入ノ減少ヲ來スノミナラス府縣災害土木費ノ補助ヲ要スルコト少カラス又海軍ノ擴張ニ伴ヒテ艦艇ノ補充ヲ要スルモノ多キニ至ルヘキハ明カナル事實ナリ是償金ヲ以テ教育基金災害準備基金及軍艦水雷艇補充基金ヲ設置シタル所以ナリ今現ニ確定セル償金ノ使途及金額ヲ擧クレハ左ノ如シ

償金使途計算

一金參億五千五百九拾八萬參百六拾參圓八拾參錢五厘
一金九百五拾四萬八千七百參圓四拾四錢
合計參億六千五百五拾貳萬九千六拾七圓貳拾七錢五厘

償金貳億參千萬兩ノ
我通貨ニ換算總額
明治三十三年一月末日
マテニ生シタル利殖金

内

金參億六千八拾壹萬千參百六拾參圓參拾七錢參厘

償金使途確定高

内譯

金五千六百八拾萬貳百參拾參圓九拾四錢壹厘
金壹億參千九百貳拾五萬九千七百拾七圓五拾七錢七厘
金五拾七萬九千七百六拾貳圓貳錢
金七千八百九拾五萬七千六百六拾四圓九拾八錢九厘
金參百貳拾壹萬四千四百八拾四圓八拾四錢六厘
金貳千萬圓
金參千萬圓
金千萬圓
金千萬圓
金千貳百萬圓
小以々如本高

陸軍擴張費(一般會計へ繰入)
海軍擴張費(一般會計へ繰入)
製鐵所創(立)費
一般會計へ繰入
臨時會計へ繰入
三十年度臨時軍事費及運輸
通信部費(一般會計へ繰入)
帝室御料編入
軍艦水雷艇補充基金へ繰入
災害準備基金へ繰入
教育基金へ繰入
三十一年度一般會計
不足補充ノ爲メ繰入

差引

金四百七拾壹萬七千七百參圓九拾錢貳厘

殘額使途未定高

此ノ如ク債金ノ使途既ニ決定セルモノヲ控除スレハ其殘額四百七拾壹萬七千七百參圓九拾錢貳厘ニ過キスシテ此內參百六拾參萬九千九百六拾圓ハ明治三十年及三十一年ニ於テ我金融市場ノ逼迫ヲ救済センカ爲メニ已ムヲ得ス債金ノ運用上日本勸業銀行發行ノ勸業債券ニ應募シタリ債金ヲ以テ經營シ又ハ經營スヘキ諸種ノ事業中特ニ茲ニ一言スルコトヲ要スルモノハ明治三十年法律第十六號ヲ以テ實施セラレタル貨幣制度改革ノコト是ナリ抑幣制改革ノコトタル債金ヲ以テ經營シタル事業ニ相違ナシト雖モ債金ハ之カ爲ニ毫厘モ費消セラレタルニアラスシテ唯其運用上一時ノ作用ニヨリ之ニ要スル巨額ノ金貨準備ヲ供給シタルニ止マレリ換言スレハ債金特別會計ノ保有セル金塊ヲ使用シテ金貨ヲ鑄造シ以テ壹圓銀貨ヲ交換引揚クルノ資ニ供シ而シテ其引揚タル壹圓銀貨ハ更ニ之ヲ地金トシテ市場ニ賣却シ之カ代價トシテ得タル金貨ヲ以テ債金部ヘノ返償ヲ了シタリト云フニ過キサルナリ

第三 債金ノ回收及其運用

既ニ述ヘタル如ク清國ヨリ本邦ニ拂込タル債金ハ總テ倫敦ニ於テ英貨ヲ以テ領收セシカ其出納及保管等ノコトニ關シテハ特ニ慎重ナル注意ヲ加ヘ先ツ日本銀行ヲシテ其代理店ヲ倫敦ニ設置セシメテ之ニ債金ヲ寄托シ且倫敦ニ日本銀行監理官ヲ派遣シ之ヲ監理セシメタルノミナラス更ニ英國駐在ノ本邦公使ヲシテ日本銀行代理店並在倫敦日本銀行監理官ヲ監督セシメ加ナルニ右寄托債金ハ特ニ大藏大臣ノ命令アルニアラサレハ之ヲ出納スルコトヲ得サラシムルコト、シテ萬一ニ遺漏ナカラシムルコトヲ期シタリ此ノ如クニシテ倫敦ニ保管セル英貨ハ之ヲ軍艦購入代價

ノ仕拂等ニ對シテ爲替拂ヲ爲スノ資金ニ供シ其他本邦ニ於ケル經費ノ仕拂基金ニ充ツヘキモノハ其需要ニ從ヒ漸次之ヲ本邦ニ回收スルコト、ナシタリ而シテ此債金英貨ヲ回收スルニ際シテハ特ニ内外各地ノ狀況ヲ精査シ勉メテ金融市場ニ動搖ヲ與フルコトヲ避ケ或ハ金銀塊ヲ購入シ或ハ英貨ヲ以テ回送シ又ハ直接ノ爲替ヲ取組或ハ米國清國等ノ地ヲ經タル間接ノ爲替ヲ取組ム等臨機便宜ノ方法ヲ以テ之カ回收ヲ行ヒタリ今當初ヨリ明治三十三年一月末日迄倫敦ニ於ケル是等ノ計算ヲ舉クレハ左ノ如シ但倫敦ニ於テ受拂ヲ爲シタル金額ハ債金ノ外軍事公債賣却代金及四分利付公債ノ募集金等ヲ合シテ出納シタルモノナルカ故ニ其全部ヲ掲ケタルモノナリ

倫敦ニ於ケル我政府所有金受入ノ部

- 一 英貨參千貳百九拾萬九百八拾磅七志四片七五
- 一 英貨四百九拾參萬五千四百拾七磅壹志壹片七五
- 一 英貨拾萬九千七百拾四磅六志五片
- 一 英貨四百參拾八萬六千磅
- 一 英貨貳拾四萬六千七百五拾七磅七志
- 一 英貨八百六拾萬磅
- 一 英貨貳百參萬四千五百磅
- 一 英貨六萬九千參百六拾磅五志四片
- 一 英貨參萬四千磅

合計

軍費對債金 貳萬
 兩東半島對債金 參萬
 千兩對債金 參萬
 運倫敦ニ於テ債金ヲ 參萬
 參事公債賣却代金 四萬
 威海衛守備費債却金 四萬
 四分利付英貨公債取 萬
 萬磅募集金政府手取 萬
 於テ爲替手形取付倫敦 萬
 日本銀行ヘ預金利子 萬
 預金部所有有價證券利子 萬

英貨五千參百參拾壹萬六千四百五拾九磅七志參片五

内

拂出ノ部

英貨千百五拾七萬四千八百七拾六磅八志拾壹片

英貨參百九萬五百四磅六志參片

英貨千九百八萬千貳百六拾壹磅拾志貳片

英貨千貳百六拾四萬九千四百四拾參磅拾六志六片五

英貨百五拾參萬磅

合計

英貨四千七百九拾貳萬六千八拾六磅壹志拾片五

差引

現在高ノ部

英貨五百參拾九萬參百七拾參磅五志五片

此ノ如クニシテ現ニ債金ヲ以テ倫敦ニ保有セル英貨ハ五百參拾九萬參百七拾參磅五志五片ナリ
債金ヲ收領シテヨリ之ヲ經費トシテ支出スルマテノ間ニ於ケル一時ノ餘裕金ヲ以テ我金融市場
ヲ補助シ又ハ倫敦ニ於ケル餘裕金ヲ以テ英國大藏省證券印度大藏省證券又ハ印度英貨證券等ヲ
購入シテ變分ノ利殖ヲ圖リ又ハ我邦正貨ノ海外ニ流出スルニ際シテハ之ヲ防カシカ爲メ爲替ノ
資金ニ供シ或ハ明治三十一年度ニ於テ内地ニ於テ公債ノ募集ヲ爲スコト能ハサリシニヨリ公債

貨金現塊 購入及英
銀塊 購入及英
爲替 回收 高
各省經費 振替 拂高
軍艦水雷艇補充基金へ繰
入ノ爲預金部へ引渡高

ヲ以テ支辨スヘキ經費ニ對シ債金ヲ以テ一時繰替支出ヲナシタル(一時繰替支出ヲナシ)等種々ノ
運用ヲ爲セシカ是等ノ運用上ヨリ生シタル利益金ハ九百五拾四萬八千七百參圓四拾四錢ニシテ
即チ債金特別會計ノ歲入ト爲シタリ
右ノ外明治二十七年法律第十六號ニ依リ日本銀行へ預入金ヨリ生シタル利子ノ收入六拾九萬四
千九百拾八圓八拾九錢八厘ハ一般會計ノ收入ニ組入レタリ

第四 債金ノ現計

債金ノ收支及運用ノ現狀ヲ明瞭ナラシメンカ爲メ明治三十三年一月末日ニ於ケル計算ヲ示セハ
左ノ如シ

一金參億五千五百九拾八萬參百六拾參圓八拾參錢五厘

一金九百五拾四萬八千七百參圓四拾四錢

合計金參億六千五百五拾貳萬九千九百六拾七圓貳拾七錢五厘

内

金貳億七千九百貳拾九萬四千四百貳拾壹圓五拾錢六厘

内譯

金七千八百九拾五萬七千六百六拾四圓九拾八錢九厘

金四千參百六拾六萬貳千六百六拾貳圓拾參錢四厘

金七千八拾八萬參百四拾七圓五拾壹錢七厘

金五拾七萬九千七百六拾貳圓貳錢

軍費時價(貳億兩及遼東半島還付報
債金參千九百貳拾七萬八千七百
八拾參圓六千六百六拾貳圓拾參
錢四厘)換算通算高
債金運用利殖金等收入額

債金部歲出濟額

臨時軍費特別
會計へ入額
陸軍擴張費(一般會計
陸軍擴張費(同上)
海軍擴張費(同上)
製鐵所創立費(同上)

金參百貳拾壹萬四千四百八拾四圓八拾四錢六厘
 金千貳百萬圓
 金貳千萬圓
 金參千萬圓
 金千萬圓
 金千萬圓

三十一年度臨時軍事(一般會計)費及運輸通信部費(經入)
 三十一年度歲計補足(同上)
 明治三十一年度ニ於テ
 帝室御料ニ編入濟額
 明治三十二年度ニ於テ軍艦
 本雷艇補充基金ニ編入濟額
 同年度ニ於テ災害
 準備基金ニ於テ
 同年度ニ於テ
 育基金ニ於テ

差引

金八千六百貳拾參萬四千六百四拾五圓七拾六錢九厘

內譯

金貳千九百八拾七萬八千貳百拾圓六拾九錢八厘
 金參百六拾參萬九千九百六拾圓
 小以ハ金參千參百五拾壹萬八千七百七拾圓六拾九錢八厘
 右ハ本邦ニ於テ保有スルモノナリ
 金五拾萬七千五百六拾壹圓五錢七厘
 此英貨五萬七百六拾貳磅七志四片
 金四百參拾九萬四千四百八拾壹圓五拾貳錢八厘
 此英貨四拾五萬磅
 金九百七拾六萬四千參百六拾五圓六拾八錢五厘

本邦通貨在高
 勸業債券
 英貨在高但英蘭銀行寄託
 同上但日本銀行代理店保管
 日本銀行爲替元渡

此英貨百萬磅

金千八百五拾八萬千參拾四圓拾七錢五厘

日本銀行ハ利付預入

此英貨百九拾萬磅

金九百五拾貳萬參千參百七圓九拾錢七厘

英國大藏省證券

此英貨九拾七萬五千參百拾貳磅七志

金百壹萬五千九百五拾九圓八拾七錢

清國公債

此英貨拾萬貳千七百六拾貳磅

金百九拾七萬六千五百七拾四圓五拾壹錢六厘

保證付軍事公債

此英貨貳拾萬參百八拾八磅八志參片

金六百九拾五萬參千九拾圓參拾參錢參厘

四分利付英貨公債

此英貨七拾壹萬千四百七拾七磅九志拾片

小以ハ金五千貳百七拾壹萬六千四百七拾五圓七錢壹厘

此英貨五百參拾九萬參百七拾參磅五志五片

右ハ倫敦ニ於テ保有スルモノナリ

明治三十三年一月末日ニ於ケル債金使途既定ノ總額參億六千八拾壹萬千參百六拾參圓參拾七錢參厘ノ内一般會計其他ニ繰入支出濟額貳億七千九百貳拾九萬四千四百貳拾壹圓五拾錢六厘ヲ差引殘額八千五百五拾壹萬六千九百四拾壹圓八拾六錢七厘ハ即チ陸海軍擴張費ノ繰入未濟額ニシテ前表ニ示セル債金ノ現在高八千六百貳拾參萬四千六百四拾五圓七拾六錢九厘ノ内ヨリ必要ニ隨

ヒテ漸次ニ支出シ以テ一般會計ノ歳入ニ繰入ルヘキモノナルカ故ニ之ヲ右ノ現在高ヨリ控除スルトキハ其殘額使途未定ノモノハ正ニ四百七拾壹萬七千七百參圓九拾錢貳厘ニシテ前ニ述ヘタル如ク此金額ノ内參百六拾參萬九千九百六拾圓ハ勸業債券ヲ以テ之ヲ保有スルモノタルナリ

第五 海外ニ於ケル軍艦代金仕拂ノ見込

明治二十九年以以降軍艦代金ノ海外ニ於ケル仕拂ニ就テハ彼此遞送ノ勞費ヲ省キ且經濟上ノ動搖ヲ避クルノ目的ヲ以テ償金ノ内凡千七百餘萬磅ハ之ヲ倫敦ニ於テ保有シ實際軍艦代ノ仕拂ヲ爲スニ至ルマテノ間ハ短期ノ外國公債等ヲ購入シ又ハ日本銀行ヘ利付當座預トナス等幾分カ利殖ノ途ヲ講シ以テ逐次軍艦代金ノ仕拂ニ充ツルノ豫定ナリキ然ルニ明治三十年度ニ於テ内地ニ於ケル金融逼迫ノ爲メ公債ヲ募集スル能ハサリシヲ以テ償金ヲ以テ一時公債ヲ引受ケタルコト千四百六拾七萬餘圓ニ及ヒ又明治三十一年度ニ於テハ金融更ニ逼迫シテ商工業會社等孰レモ資金ノ缺乏ニ苦ミ或ハ將ニ破産セントスルモノアルノ狀況ニシテ若シ之ヲ自然ノ趨勢ニ放任スルトキハ一大恐慌ヲ來スノ危險アリシヲ以テ之カ救濟ノ爲メ已ムヲ得ス償金ヲ以テ公債ヲ買上ルコト參千六百九拾九萬餘圓及勸業債券ノ募集ニ應セシモノ參百七拾四萬餘圓ナリシノミナラス内地金融ノ狀況ハ斯ノ如クニシテ到底公債ノ募集ヲ許サ、リシカ爲メ公債支辨ノ費途ニ對シテ繰替支辨スヘキモノモ亦七千六拾五萬餘圓アリ其他増稅案成立ノ遲滯セシカ爲メニ生シタル明治三十一年度一般會計ノ不足ヲ補充センカ爲メニ支出スヘキモノ千貳百萬圓及明治三十二年一一般會計補足繰替支辨ヲ爲スヘキモノ九百七拾壹萬餘圓アルノ計算ナリシヲ以テ若シ後年度ノ支出ニ屬スヘキ軍艦代金ヲ倫敦ニ存置スルトキハ爲メ内地ノ金融逼迫ヲ幫助スル能ハサルノミナ

ラス國資ノ運用ヲモ圓滑ニ行フヲ得サルニ至ルノ惧アリ且外國貿易上連年ノ輸入超過ハ正貨ノ流出ヲ來シテ兌換制度ノ基礎ヲ危カラシムルノ虞アリシカ故ニ後年度ニ於ケル軍艦代金ノ支辨ニ充テタル英貨ハ之ヲ我邦ニ回收セサルヘカラサルコト、ナリ從テ此結果外國ニ於テ仕拂フヘキ軍艦代金ハ却テ正貨ヲ彼ニ輸送セサルヘカラサルニ至リタリ

此時ニ當リテ偶々明治三十二年六月新ニ壹千萬磅ノ英貨公債募集ノ成ルアリ正義ハ此公債ニヨリテ得タル英貨ヲ償金部ヘ戻入シ以テ軍艦代金支拂ノ基金ニ充ツルノ外他ノ目的ニ費消セサルノ得策ナルヲ認メ同年十月ヲ以テ之ヲ閣議ニ提出シ上奏シテ裁可ヲ經タリ爾來此方針ニヨリテ進行シ軍艦代金海外拂當初ノ豫定額千七百參拾四萬九千四百八拾九磅八志ノ内海外ニ於テ仕拂ヲ要セサルコト、ナリシモノ百七拾七萬九千貳百六拾五磅九志〇片五及明治三十三年一月末日マテノ仕拂濟高千五拾五萬五千參拾五磅〇志五片五合計千貳百參拾參萬四千參百磅九志六片ヲ差引キタル殘額五百壹萬五千八百八拾八磅八志六片ニ對シテハ償金特別會計ノ現在英貨五百參拾九萬參百七拾參磅五志五片ヲ以テ之ニ充ツルノ見込ナリ

第六 軍艦水雷艇補充基金教育基金及災害準備基金ノ設置

軍艦水雷艇補充基金教育基金及災害準備基金設置ノ顛末ニ就テハ明治三十二年十月十三日ヲ以テ既ニ之ヲ報告シタリシカ今更ニ其始末ノ大要ヲ述ヘン
先是明治二十七八年事件ノ始メテ終結ヲ告クルヤ財務當局者ノ間ニ於テハ夙ニ清國ヨリ領收スヘキ償金ノ一部ヲ割キテ非常準備金ヲ設ケ以テ國家有事ノ日ニ備ヘントスルノ議アリシカ明治三十一年五月清國償金ノ全部ヲ領收スルヤ當時ノ大藏大臣伯爵井上馨ハ非常準備金設置ノ議ヲ

閣議ニ提出シテ其決定ヲ得タリト雖モ會衆議院ノ解散セラル、アリ内閣各大臣モ亦其職ヲ辭セシニヨリ未タ之ヲ果スニ至ラスシテ止ミタリ

明治三十一年十一月正義ノ大藏大臣ノ職ニ就クヤ之カ方法ヲ反覆熟慮シタル末終ニ債金ノ使途未定額ノ内參千萬圓ハ之ヲ軍艦水雷艇補充基金ト爲シ其資金ハ金貨金塊又ハ確實ナル外國公債ヲ以テ之ヲ保有シ幾分カ其利殖ヲ圖ルト同時ニ明治三十八年度以降ハ艦船價格ノ幾分ニ相當スル金額ヲ一般會計ヨリ繰入セシメ以テ將來艦船補充ノ資金ヲ充實セシムルコト、シ又壹千萬圓ハ之ヲ教育基金ト爲シ本邦公債ヲ以テ之ヲ保有シ其利殖金ニ依リテ教育ニ關スル經費ヲ補給スルコト、シ又壹千萬圓ハ之ヲ災害準備基金ト爲シ教育基金ト同シク公債ヲ以テ之ヲ保有シ其利殖金ニ依リテ府縣災害土木費ヲ補助シ且災害ニ因ル經常歲入ノ減少ヲ補填スルコト、爲スニ於テハ是等三基金ノ總額五千萬圓ハ一面ニ於テ軍用準備ノ目的ニ供シ得ルト同時ニ一面ニ於テハ諸般行政ノ便利ヲ計ルコトヲ得ヘキヲ信シ明治三十二年二月八日ヲ以テ軍艦水雷艇補充基金教育基金及災害準備基金ノ各特別會計法案ヲ具シテ之ヲ閣議ニ提出シ第十三議會ノ協賛ヲ經テ明治三十二年三月二十日法律第七十九號第八十號及第八十一號ヲ以テ公布セラル、コト、ナレリ是等ノ法律ノ規定ニ依レハ三基金ノ運用及利殖ハ大藏省預金部ニ於テ之ヲ爲スヘキモノナルカ故ニ明治三十二年六月七日其方法ニツキテ左記ノ事項ヲ閣議ニ提出シ之カ決定ヲ得タリ

一軍艦水雷艇補充基金ハ半額ハ金貨又ハ金地金ヲ以テ半額ハ外國公債ヲ以テ之ヲ保有スルコトトシ預金部ヨリ該基金ヘ支拂フヘキ利子ハ一箇年一分七厘五毛以内トスルコト

軍艦水雷艇補充基金ノ金地金ヲ以テ保有スル分ハ日本銀行ニ預入レ利殖ヲ爲スヘキモ同行正

貨準備ニシテ九千萬圓以内トナルトキハ直ニ之ヲ返却セシムルコト

二教育基金及災害準備基金ハ帝國五分利付公債ヲ以テ之ヲ保有シ預金部ヨリ右等基金ヘ支拂フヘキ利子ハ教育基金ニツキテハ一箇年五分災害準備基金ニツキテハ同シク四分五厘トスルコト

右ノ決定ニ從テ教育基金及災害準備基金ハ直ニ帝國五分利付公債ヲ購入シ以テ之カ利殖ヲ圖ルコト、シ又軍艦水雷艇補充基金ニツキテハ其金貨又ハ金地金ヲ以テ保有スヘキ分ハ金地金ノ購入ニ從テ明治三十二年十月ニ至リ之カ繰入ヲ了シ其外國公債ヲ以テ保有スヘキ分ハ差向キ債金部ニ保有セル帝國四分利付英貨公債ヲ以テ之カ繰入ヲ爲シ之ニ對シテ預金部ヨリ支拂フヘキ利子ハ閣議決定ノ範圍内ニ於テ一箇年一分五厘ト定メタリ今預金部ニ於ケル三基金ニ關スル現計ヲ擧クレハ左ノ如シ

一金參千萬圓

軍艦水雷艇補充基金

此内譯

金千五百四萬千八百貳拾七圓貳拾壹錢九厘

金貨及金地金

金千四百九拾五萬八千七百七拾貳圓七拾八錢壹厘

帝國四分利付英貨公債

此帝國四分利付英貨公債額面百七拾萬磅買入代價百五拾參萬磅

一金千萬圓

教育基金

此内譯

金九百九拾九萬九千九百八拾八圓八拾錢

帝國五分利付公債

此帝國五分利付公債額面千七拾七萬五千八百五拾圓

金拾壹圓貳拾錢

現 金

一金千萬圓

現 災 害 準 備 基 金

此內譯

金九百九拾九萬九千九百八拾八圓八拾錢

帝 國 五 分 利 付 公 債

此帝國五分利付公債額面千七拾七萬五千八百五拾圓

金拾壹圓貳拾錢

現 金

合計金五千萬圓

而シテ軍艦水雷艇補充基金ニ屬スル金貨及金地金ノ内千四百九拾四萬五百四拾六圓九拾九錢貳厘ハ現ニ年利壹分貳厘五毛ヲ以テ之ヲ日本銀行ニ當座預ト爲セルモノナリ

第四篇 金融及金融機關ノ設備

第一章 明治二十七八年事件以後ニ於ケル金融ノ概況

明治十九年紙幣整理ノ事其效ヲ奏シテヨリ我經濟社會ハ一般ニ平穩ナル進步ヲ爲スノ狀勢ニ向ヒ明治二十三年ニ於テ前年ニ於ケル米穀ノ不作等ニ基ツキ貳千五百餘萬圓ノ輸入超過ヲ來シタルカ爲メ一時金融ノ逼迫ヲ招キ東京市中ノ割引歩合ニ其年ノ二月ニ於テ平均日步參錢壹厘マテニ昇リタルコトアリシモ爾後漸次順調ニ復シ金利次第ニ下落シテ終ニ明治二十六年六月ニ於テハ割引歩合ノ平均日步壹錢七厘トナリ整理公債ノ價格百八九圓乃至百拾圓前後ノ間ヲ昇降スルニ至リタリ而シテ此間外國貿易ハ常ニ我ニ順ニシテ加フルニ銀價ノ下落ニヨリ物價漸次ニ騰貴

ノ傾向ヲ取リシヨリ一般ノ人心漸ク新事業ニ向フノ狀況ヲ示シ爲ニ明治二十六年ノ下半季ニ入リテヨリハ金利次第ニ上昇ノ有様ヲ呈シタリシカ明治二十七年ニ至リテ朝鮮ニ於ケル狀況不穩ノ徵候ヲ示シ同年八月ニ於テ遂ニ清國ト戰端ヲ開クコト、ナルヤ割引歩合ハ更ニ上昇シテ平均日步貳錢七厘以上ヲ唱ヘタリ尤モ戰爭ノ開始セラル、ヤ上下ノ人心一ニ之ニ向ヒ爲ニ經濟上ニ於ケル新事業ノ企圖ハ一時中止セラレタリ斯クテ明治二十七八年ノ戰役ハ結局我邦ノ勝利ニ歸シ明治二十八年四月ヲ以テ下ノ關條和條約ノ締結セラル、ヤ戰爭中ニ於ケル軍事公債募集等ノ事情ニヨリ引締リタル金融モ平和ノ回復ト共ニ稍、緩和ヲ告ケ明治二十八年十月ニハ東京市中割引歩合ノ平均日步貳錢五厘以下ニ降リタリ而シテ之ト同時ニ明治二十六年以降急激ナル銀價ノ下落ニヨリテ影響セラレタル我邦ノ物價ハ益、騰貴ノ一方ニ傾キ諸般ノ事業總テ著シク利益アルノ外觀ヲ示シタリ市場ノ狀況此ノ如クナルニ際シ恰モ明治二十七八年戰役ノ結果清國ヨリ領收シタル債金貳億參千萬兩ハ日ナラスシテ本邦ニ輸入セラレ我金融社會ニ於ケル資本ノ供給ヲ潤澤ナラシムヘシトノ希望ハ一時戰爭ニヨリテ中止ノ狀況ヲ呈シタル經濟上ノ人心ヲシテ益、新事業ニ向テ狂奔セシムルノ原因トナリ爲ニ諸會社株券ノ市價著シク騰貴シタルヲ以テ更ニ會社ノ新設若クハ増資ノ計畫ヲ促カシタルモノ少カラス當時ノ勢實ニ僅僅數圓ノ保證金ヲ拂込ミタルニ過キサル權利株ノ如キモ尙ホ甚シキ高價ヲ以テ賣買セラレタリシナリ
此ノ如クニシテ明治二十九年中ニ於テ計畫セラレタル新設會社ノ資本及増資ノ金額ハ參億參千九百八拾四萬餘圓ニ及ヒ之ヲ從來ノモノニ合算スルトキハ九億參千九百五拾四萬餘圓ノ巨額ニ達セリト傳ヘラレタリ然レトモ此ノ如キ巨額ノ資本ノ急激ナル需用ノ増加ニ對シ我經濟社會ハ

實際之カ供給ヲ爲スコト能ハス加之明治二十九年ニ於テハ米國ニ於テ經濟上ノ困難アリシカ爲メ我輸出貿易ニ著シキ障害ヲ受ケタルノミナラス日清戰爭ノ結果トシテ資金下級社會ニ散布シテ其購買力ヲ加ヘタルコト及新事業ノ勃興ニ伴ヒ機械其他原料品ノ輸入増加ヲ來シタルノ結果明治二十九年ノ外國貿易ハ五千參百八拾參萬餘圓ノ輸入超過ヲ致シ又明治三十年ニ於テモ明治二十九年ノ秋ニ於ケル米穀ノ不作ニ因リ著シク米ノ輸入ヲ増加シタルノミナラス機械其他原料品ノ輸入モ亦同年ニ於テ更ニ増加シタルカ爲メ終ニ五千六百拾五萬餘圓ノ輸入超過ヲ來シタリ諸般ノ經濟事情既ニ此ノ如キ狀勢ナリシヲ以テ明治二十九年ノ八月頃ヨリ金利ハ次第ニ上進ノ傾向ヲ示シ同年十二月ニ於テ東京市中ノ割引歩合ハ平均日步貳錢七厘以上ニ及ヒ明治三十年ニ入ルモ尙ホ其勢ヲ改メス同年十二月ニ至リテハ更ニ平均參錢以上ニ上リタル有様ニシテ金融ノ緊縮ハ終ニ一般ニ感セラレ、ニ至リ明治三十年中ニ於ケル東京同盟銀行不渡手形ノ口數ハ百一個ニシテ其金額ハ六萬貳千五百餘圓ニ達シタリ然ルニ明治三十年ノ秋ニ於ケル米穀ノ不作ハ前年ニ比シテ一層甚シク加フルニ新關稅率ノ實施期ニ逼リテ見越輸入ヲ爲スモノ多カリシカ爲メ遂ニ壹億千七百七拾四萬餘圓ノ輸入超過ヲ見ルニ至レリ而シテ金融益々逼迫スルト共ニ金利愈々騰貴ヲ來シ明治三十一年四月ヨリ五月ニ入りテ終ニ東京市中ノ割引歩合ハ平均日步參錢貳厘トナリ整理公債ノ價格ハ九拾圓以下ニ落ントスルニ至リ同年六月マテニ東京同盟銀行不渡手形ノ口數ハ六十箇ニシテ其金額ハ五萬千四百餘圓ノ巨額ニ上リタリ

此ノ如キ狀勢ナリシヲ以テ増資若クハ新設ヲ爲シタル會社ハ往往ニシテ資本ノ拂込ヲ得ルコト能ハサルノミナラス米穀ノ連年不作ナリシカ爲メ世間ハ一般ニ不景氣ニ陥リ從テ貨物ノ需用減

少セシヲ以テ既設ノ會社ト雖モ尙ホ其維持ニ困難ヲ感セサルモノ少キニ至リタリ若シ之ヲ自然ノ勢ニ放任スルトキハ我經濟社會ハ終ニ甚シキ慘狀ニ陥ルコトヲ免ルヘカラサルノ狀況ナリシヲ以テ當時ノ大藏大臣伯爵井上馨ハ臨機ノ救濟處分トシテ一時價金ノ餘裕金ヲ運用シ以テ參百七拾四萬餘圓ノ勸業債券ニ應募シ日本勸業銀行ヲシテ前途ノ見込アル會社ニ貸付ヲ爲サシメ又額面參千八百七拾萬餘圓ノ公債證書ヲ市場ヨリ購入シテ資金ノ融通ヲ計リ僅ニ此難局ヲ經過スルコトヲ得タリ爾來金融ハ漸ク緩和スルノ傾向ヲ取リ金利モ亦漸ク下落セントスルノ勢ヲ示シ明治三十一年ノ十二月ニハ東京市中ノ割引歩合平均貳錢八厘餘トナルニ至リタリ而シテ明治三十一年ニ於ケル秋期ノ收穫ハ前二年ニ反シテ非常ニ豐饒ナリシト明治三十二年ニ入りテハ生絲羽二重銅等ノ賣行好況ニシテ外國貿易モ平調ニ復シ金融ハ唯緩和ノ一方ニ傾キタルヨリ明治三十二年一月中ノ平均割引歩合ハ日步貳錢七厘ヨリ次第ニ下落シ九月ニ至リテハ平均貳錢トナルニ至リタリ

斯クテ内地ノ經濟事情ハ同年十月ニ於テモ亦九月ト殆ント同様ナル狀況ニアリシト雖モ世界金融ノ中樞タル英國ニ於テトランスヴァール事件ノ爲メ金融著シク逼迫ヲ告ケ英蘭銀行ハ連リニ金利ヲ引上ケ吸金ノ政策ヲ執リ加フルニ印度ニ於テハ多年企圖シタル金貨制度ノ施行ニ臨ミテ金ノ吸收ヲ努メタルカ故ニ十月ヨリ十一月ニカケテ我邦ノ金貨ハ續續印度ニ向ヒテ流出ノ狀況ヲ呈シタリ是ニ於テカ日本銀行ハ十一月十日ニ於テ割引歩合ヲ壹錢六厘ヨリ壹錢七厘ニ高メ東京市中ノ割引歩合モ亦此月ニ於テ平均貳錢參厘トナリ金稍融、緊縮ノ傾向ヲ取ルニ至リシヲ以テ同月二十七日日本銀行ハ更ニ割引歩合貳厘ヲ引上ケタリシニ市中或ハ誤リテ日本銀行ハ貸出ニ

應セント傳フルモノアリシカ爲メ三四日ノ間ニ諸株式悉ク急激ナル暴落ヲ來シ一時非常ノ危機ニ臨ミタルカ如キ狀況ナリシモ其真相ノ明白トナルニ及ヒテ平調ニ復シタリ然レトモ十二月ハ以上ノ諸原因ニ加フルニ節季ニ屬セルヲ以テ金融ハ更ニ緩和ヲ見ルニ至ラス日本銀行ハ制限外兌換券ノ發行ニヨリテ無事ニ明治三十二年ヲ經過シタルノ狀況ナリシナリ

第二章 明治二十七八年事件以後ニ於ケル金融機關

我邦ノ金融機關ハ其一般普通ナルモノハ明治二十七八年事件以前ニ於テ略ホ之カ整理ヲ爲シタリ唯國立銀行處分未了ノモノアリタルカ爲メ其整理ニ著手シ明治三十二年ニ至リテ國立銀行ハ悉皆私立銀行ニ形ヲ變シ其發行セル紙幣モ亦明治二十九年法律第八號ノ結果ニ依リ同年十二月九日限り之カ通用ヲ禁止スルコト、ナレリ此ノ如クニシテ一般金融機關ノ整理ハ粗ホ其結果ヲ告ケタルヲ以テ茲ニ力ヲ其特殊ナルモノニ致スコト、シ先ツ農工業者ニ對シ長期低利ノ資金ヲ供給スルカ爲メ日本勸業銀行及農工銀行ヲ設立シ又臺灣ニ於ケル金融上ノ中央機關トシテ臺灣銀行ヲ設立シタリ而シテ尙ホ北海道ニ於ケル金融ヲ疏通センカ爲メ北海道拓殖銀行設立ノ經畫ヲ立テ今ヤ既ニ其設立ノ手續ヲ了シタルカ故ニ其開業スルモ亦近キニアラントス又有價證券ノ取引ニ關シ金融機關ヲ設クルノ必要ヲ認メ日本興業銀行設立ノ經畫ヲ爲シ今ヤ第十四議會ノ協贊ヲ經タリ其他戰後ニ於ケル我國ノ經濟ニ適合センカ爲メ日本銀行ノ兌換券保證準備發行制限額ヲ擴張シ又日本銀行及橫濱正金銀行ハ共ニ其増資ヲ決行シタリ是ニ於テカ我邦ノ金融機關ハ稍、完備ニ近ツキタルモノト云フヲ得ヘシ以下更ニ項ヲ分テテ其事情ノ概要ヲ陳述セン

第一 日本勸業銀行及農工銀行ノ設立

抑農工業ハ商業ト異ナリ固定資本ヲ要シ永遠ニ其利益ヲ期スヘキモノナルヲ以テ之ニ對シテハ商業銀行以外ニ於テ別ニ長期低利ノ資金ヲ供給スヘキ特別ノ金融機關ヲ設立スルノ必要アリ是正義カ明治十五年日本銀行設立ヲ建議シタルノ際已ニ之ヲ論シタル所ナリシカ當時我經濟社會ノ狀勢ハ一時ニ此等ノ機關ヲ並設スルコトヲ許サ、リシカ故ニ之ヲ他日ノ經畫ニ讓リシカ其後明治二十七八年事件ノ終結ヲ告グルヤ我農工業者ニ長期低利ノ資金ヲ融通スヘキ機關ノ設立ヲ急トスルノ狀況ニ迫リタルカ爲メ當時ノ大藏大臣子爵渡邊國武ハ之ニ關スル法律案ヲ第九議會ニ提出シ其協贊ヲ經テ終ニ明治二十九年四月法律第八十二號第八十三號第八十四號ヲ以テ日本勸業銀行法及農工銀行法並農工銀行補助法ノ發布ヲ見ルニ至リタリ是ニ於テカ日本勸業銀行ヲ中央機關トシ農工銀行ヲ地方機關トシテ農工業ニ長期低利ノ資金ヲ融通スルノ途開カル、コトトナレリ

是等ノ法律ニ依リ政府ハ直ニ日本勸業銀行ノ創立委員ヲ任命シ之カ設立ノ準備ニ著手セシカ明治三十年六月ヲ以テ日本勸業銀行ハ資本金千萬圓ヲ以テ設立セラル、コト、ナリ資本總額四分ノ一ノ拂込ヲ以テ其營業ヲ開始シタリ時偶、金融逼迫ヲ告ケ資金ノ需用頗ル急ナリシヲ以テ著著貸付ヲ實行シ明治三十二年十二月マテニ債券ヲ發行シタルコト六回其金額七百四拾九萬七千百圓ニシテ貸付ヲ爲スコト八百七拾七萬四千八百四拾貳圓參拾五錢ニ及ヒタリ今此貸付金ヲ其借主ニ依リテ區分スレハ即チ左ノ如シ

- 金百五拾五萬九千參百九拾七圓七拾九錢
- 金貳百參拾貳萬八千七百六拾貳圓參拾九錢
- 公共團體貸付
- 農業貸付

金四百八拾八萬六千六百八拾貳圓拾七錢
計金八百七拾七萬四千八百四拾貳圓參拾五錢

工業貸付

而シテ明治三十一年下半年マテハ時創業ニ屬シ經費多端ニシテ相當ノ利益ヲ見ルコト能ハサリ
シニ依リ日本勸業銀行法第五十五條ニ依リテ政府ヨリ補給シタル金額ハ計金拾壹萬五千九百參
拾五圓拾七錢貳厘トナリシモ明治三十二年上半季ニ於テハ六分六厘ノ配當ヲ爲スコトヲ得最早
政府ノ補給ヲ要セサルニ至リタリ

農工銀行ハ明治三十年以後各府縣ニ於テ之カ創立委員ヲ設ケ著者共設立ニ從事シ明治三十二年
十二月マテニ三府四十二縣ニ於テ之カ設立ヲ見タリ其資本總額ハ貳千七百九拾貳萬圓ニシテ其
内八百貳萬八千六百貳拾圓ハ農工銀行補助法ニ依ル政府ノ交付金ニ屬スルモノナリ而シテ此資
本金ノ内千五百九拾參萬六千九百八拾參圓八拾錢六厘ハ已ニ拂込済(埼玉新潟ノ二縣ハ十一月末日ヲ以テ計算ス)ニシ
テ其内四百七拾壹萬七千五百四拾圓ハ政府ヨリ交付シタルモノニ係レリ此外沖繩縣農工銀行ハ
明治三十二年四月五日開業シタルヲ以テ農工銀行補助法ノ規定ニヨリ同年ニ於テ貳千八百五拾
貳圓七拾參錢九厘ヲ補助シタリ

今明治三十二年十二月末日(埼玉新潟ノ二縣ハ十一月末日ヲ以テ計算ス)ニ於ケル農工銀行ノ貸付金額ヲ見ルニ其總額
千貳百參萬參千四百四拾五圓七拾九錢貳厘ニシテ其内譯ハ即チ左ノ如シ

年賦貸付金

金七百拾四萬四千參百九拾七圓壹錢貳厘
金貳百五拾六萬參千參百拾九圓參拾七錢八厘

農業貸付
工業貸付

金七拾八萬參千四百六拾四圓參拾五錢壹厘
計金千四拾九萬千八百八拾圓七拾四錢壹厘

公共團體貸付

定期貸付金

金拾五萬千貳百九拾五圓
金貳拾八萬五千七百拾貳圓五拾錢
金貳拾五萬貳千七拾六圓九拾錢五厘
金六拾八萬四千六百五拾四圓六拾四錢六厘
金拾六萬八千貳百貳拾六圓

農業貸付
工業貸付
公共團體貸付
農業者二十人以上連帶貸付
工業者二十人以上連帶貸付

計金百五拾四萬千九百六拾五圓五錢壹厘
合計金千貳百參萬參千四百四拾五圓七拾九錢貳厘

農工銀行ニシテ明治三十二年十二月末日マテニ債券ヲ發行シタルモノハ未タ五行ニ過キス而シ
テ其金額ハ僅ニ五拾參萬圓ナリ

今後勸業銀行及農工銀行ニシテ尙ホ十分ニ其業務ヲ擴張スルニ至ラハ我農工業ノ發達進歩ニ對
シ少カラサル效果ヲ及スヘキヤ疑ヲ容レズ

第二 臺灣銀行北海道拓殖銀行ノ設立

明治三十年勅令第九號ヲ以テ臺灣ニ於ケル貨幣並銀行ニ關スル政務ハ特ニ大藏大臣ノ管理ニ屬
セシメラレタルヲ以テ爾來正義ハ之ニ關シテ大ニ注意スル所アリシカ貨幣制度ノコトニ付テハ
第三編第一章ニ於テ述フル所ノ如クナレハ茲ニ之ヲ云ハス銀行ノコトニ關シテハ先ツ同島ノ金

融ヲ疏通シ經濟上ノ發達ヲ謀ルハ勿論南洋及南洋諸島ニ對スル貿易機關ノ必要ニ應シ特ニ一朝事アルニ臨ミテ能ク同島經濟上ノ獨立ヲ維持セシムルノ基礎ヲ爲サンカ爲メ臺灣全部ニ對スル金融上ノ中央機關ヲ設クヘキ必要ヲ認メ臺灣銀行法案ヲ提出シ第十議會ノ協贊ヲ經明治三十年三月法律第三十八號ヲ以テ公布セラレタリ

此法律ニ依リ政府ハ明治三十年十一月ヲ以テ其創立委員ヲ任命セシカ該委員ハ審議ノ末臺灣ノ事タル百事尙ホ草創ニ屬シ保安ノ道未タ鞏固ナラス信用モ亦未タ普及スルニ至ラス隨テ臺灣銀行ノ營業上利益ヲ見ルコト困難ナルヘキヲ以テ政府ノ保護アランコトヲ上申シ正義モ亦其止ムヲ得サルコトナルヲ認メ豫算ヲ以テ議會ノ協贊ヲ經壹圓銀貨貳百萬圓ヲ無利子ニテ貸付シ又臺灣銀行補助ノ爲メ政府ニ於テ該銀行株百萬圓ヲ引受クルノ法律案ヲ第十三議會ニ提出シタリ該法律案ハ議會ノ協贊ヲ經テ明治三十二年三月法律第三十一號ヲ以テ公布セラレ之ニ由リテ政府ハ其株式百萬圓ヲ引受ケ之ニ對スル配當ヲ其損失補填準備金ニ繰入レシムルコト、ナレリ又臺灣銀行法ニ依リ無記名式ノ一覽拂手形ヲ發行スルニ當リ臺灣ノ情況金貨手形ヲ發行スルハ困難ナルヲ以テ銀貨引換ノ銀行券ヲ發行スルノ改正法律案ヲ提出シ議會ノ協贊ヲ經テ明治三十二年三月法律第三十四號ヲ以テ之カ公布ヲ見タリ

爾來創立委員ハ設立ノ準備ヲ爲シ明治三十二年六月ヲ以テ臺灣銀行ハ其資本總額五百萬圓ヲ以テ創立セラレ九月ニ至リ資本總額四分ノ一ノ拂込ト政府ノ貸付金貳百萬圓トヲ以テ其營業ヲ開始シタリ

臺灣銀行ハ創立後日ヲ經ルコト未タ幾何モアラサルヲ以テ其營業ハ尙ホ見ルヘキモノナシト雖

モ之カ管理經營其宜キヲ得ルニ於テハ數年ノ後ニ於テ當初ノ目的ヲ達シ臺灣ノ經濟ニ鴻益ヲ與フヘキコト疑フ容レス

臺灣銀行ノ設立ニ次キテ述フヘキモノハ北海道拓殖銀行設立ノコトナリ抑北海道ハ我國北門ノ鎖鑰ニシテ面積廣ク其拓殖ハ一日モ忽ニスヘカラサルモノナルヲ以テ維新以來之カ經營ヲ怠ラス今ヤ其事業漸ク緒ニ就カントスルニ至レリト雖モ金融機關ニ至リテハ尙ホ適當ナル設備ヲ缺キ頗ル不便ヲ感スルノ有様ナリ然レトモ農工銀行ノ組織ハ時機未タ北海道ニ適セサルモノアルヲ以テ正義ハ更ニ同道ノ事情ニ適切ナル方案ヲ調査シ之ヲ開議ニ提出セシカ終ニ第十三議會ノ協贊ヲ經明治三十二年三月法律第七十六號ヲ以テ北海道拓殖銀行法ヲ公布セラレタリ

政府ハ此法律ニ依リ明治三十二年五月ヲ以テ之カ創立委員ヲ任命シ直ニ其設立ノ準備ヲ爲シ明治三十二年十二月ヲ以テ之カ設立ノ認可ヲ爲シタレハ其業務ヲ開始スルモ亦遠キニアラサルヘキナリ

第三 日本銀行及橫濱正金銀行ノ増資並日本銀行兌換券保證準備發行制限額ノ擴張

明治二十七八年ノ戰役以後國運ノ擴張ニ伴ヒテ經濟社會モ亦著シキ發達ヲ爲セシニ從ヒ我邦金融機關ノ中樞タル日本銀行及我國外國貿易上ニ於テ殆ント唯一ノ金融機關タル橫濱正金銀行ノ如キハ其任務ヲ完全ニ盡サントスルニハ勢ヒ其業務ヲ擴張セサル可カラサルコト、ナレリ是ニ於テ日本銀行ハ從來貳千萬圓ノ資本金ナリシヲ明治二十八年八月ニ於テ之ヲ増加シテ參千萬圓トナスコト、シ明治三十一年二月ニ於テ其拂込ヲ了シ更ニ名古屋及北海道ニ支店ヲ設ケ且京都

小樽及福島ニ出張所ヲ設ケ大ニ其業務ヲ擴張シ又横濱正金銀行ハ明治二十九年三月ニ於テ從來ノ資本金六百萬圓ヲ増シテ千貳百萬圓トシ明治三十二年六月ニ於テ悉皆其拂込ヲ了セシカ更ニ同年九月株主總會ニ於テ從前ノ資本金ヲ倍加シテ貳千四百萬圓トシ其新株式ニ對スル拂込金ハ明治三十三年三月ニ於テ其半額ヲ拂込マシムルコトニ議決シタリ而シテ内ニ在リテハ東京及長崎ニ出張所ヲ増設シ又外ニ在リテハ香港ニ出張所ヲ増設シ且北清地方ニ其業務ヲ擴張スルノ目的ヲ以テ天津ニ之ヲ設ケ更ニ進ミテ牛莊芝罘ニモ亦之ヲ設ケントシ今ヤ其準備中ニ在リ

今明治二十七八年事件以後日本銀行及正金銀行ノ營業ノ如何ニ擴張セラレタルカヲ見シカ爲メ明治三十一年ニ於ケル營業取引ノ總額ヲ以テ明治二十六年ニ比較スレハ即チ左ノ如シ

日本銀行		正金銀行	
年次	入金高	出金高	計
二六	九〇六、八三四、七〇三	九〇四、八三二、一九八	一、八一、六六六、九〇一
二七	一、一八六、二一七、三三六	一、二〇七、一六九、七三六	二、三九三、三八七、〇七二
二八	一、五〇四、九二〇、九二二	一、五〇九、〇〇〇、三一一	三、〇一三、九二一、二三三
二九	二、六六一、一三六、〇五三	二、六五九、三九八、一三二	五、三二〇、五三四、一八五
三〇	四、八〇二、六一三、一三〇	四、七五七、四七一、一三四	九、五六〇、〇八四、二六四
三十一	四、五〇九、四七四、〇四九	四、五〇九、八五六、一八三	九、〇一九、三三〇、二三二
三十二年	三、六〇二、六三九、三四六	三、六〇五、〇二三、九八五	七、二〇七、六六三、三三一
三十二年ニ比シ増加高			
三十一	二、八八三、七〇三、七七六	二、八八二、六七三、六九三	五、七六六、三七七、四六九
三十二年ニ比シ増加高			

明治財政第一卷

正金銀行		日本銀行	
年次	入金高	出金高	計
二六	七三三、六六三、五四八	七二四、二〇七、六四二	一、四二七、八七一、一九〇
二七	一、〇三六、〇一七、四六九	一、〇四二、七三五、四七八	二、〇七八、七五二、九四七
二八	一、一八二、三六二、三九六	一、一八一、六五二、八八二	二、三六四、〇一五、二七八
二九	二、三六〇、四七六、八六二	二、三六二、〇八〇、一五七	四、七二二、五五七、〇一九
三〇	二、八三三、一八一、八八七	二、八三三、三〇五、五二五	五、六六五、四八七、四一二
三十一	三、五九七、三六七、三二四	三、五九六、八八一、三三五	七、一九四、二四八、六五九
三十二年	二、八八三、七〇三、七七六	二、八八二、六七三、六九三	五、七六六、三七七、四六九
三十二年ニ比シ増加高			

如斯戰後我經濟社會ノ膨脹スルニ伴ヒ又銀貨下落ノ結果通貨ノ價格減少シタルニ依リ通貨ノ需要漸ク加ハリシカ爲メ遂ニ日本銀行兌換券ノ保證準備發行制限額ノ狹隘ヲ感スルコト、ナリ制限外發行ハ殆ント常態ヲ爲スニ至リタルヲ以テ正義ハ從來ノ保證準備發行制限額八千五百萬圓ニ參千五百萬圓ヲ増シテ壹億貳千萬圓トナスノ適當ナルヲ認メ兌換銀行券條例ノ改正法案ヲ提出シ之ト同時ニ兌換券發行ノ特典ニ依リテ日本銀行カ得ル所ノ利益ハ同銀行ニ於テ獨占スヘキモノニアラサルヲ以テ其幾分ヲ國庫ニ納付セシムルノ至當ナルヲ認メ日本銀行納付金法案ヲ提出シタリシカ兌換銀行券條例ノ改正ハ議會ノ協賛ヲ得タルモ納付金法案ハ議會ノ修正ヲ受ケ兌換券發行稅ニ關スル法律トナリ共ニ明治三十二年三月法律第五十五號及第五十六號ヲ以テ公布セラレタリ

此ノ如クニシテ増加セラレタル兌換券保證準備發行制限額參千五百萬圓ノ運用方法ニ付テハ正義ハ特ニ日本銀行ニ訓示シ其千五百萬圓ハ之ヲ内地金融ノ用ニ供シ以テ高等爲替ノ途ヲ開キ手形ノ再割引ヲ爲シ及支店ヲ増設スル等ニ力ヲ致サシメ又他ノ貳千萬圓ハ之ヲ歐米及東洋各地ニ對スル貿易上ニ於ケル金融ノ用ニ供シ特ニ支那貿易ニ付テハ橫濱正金銀行ヲ使用シテ力ヲ盡サシムルコト、爲シタリ而シテ尙ホ此等ノ外貨幣制度ノ基礎ヲ維持スル上ニ於テ正貨準備ノコトハ一日モ忽ニスヘカラサルモノナルヲ以テ最モ注意ヲ加ヘ十分力ヲ盡シテ金ヲ吸收セシムルコト、ナシタリ

第四 國立銀行ノ處分結末並普通銀行及貯蓄銀行ノ狀況

明治十三年以降紙幣整理ノコトニ著手スルヤ正義ハ國立銀行ノ制度ヲ改メ且銀行紙幣ヲ處分スルノ必要ヲ認メタルカ故ニ之ニ關シテ建議スル所アリシカ明治十六年五月第十四號布告ヲ以テ國立銀行條例ノ改正アリ各國立銀行ハ開業免狀下附ノ日ヨリ滿二十箇年ヲ以テ營業年限ト定メ之カ延期ヲ許サ、ルコト、ナリ其發行紙幣ハ合同銷却ノ方法ニ依リ營業年限内ニ於テ銷却セラレヘキコト、ナレリ當初國立銀行紙幣ノ發行總額ハ參千四百參拾九萬六千八百八拾圓ナリシカ次第二銷却セラレテ明治二十八年末ニハ其流通殘額貳千七拾九萬六千七百八拾六圓トナレリ而シテ國立銀行營業年限ノ滿期ハ漸ク近ツキシヲ以テ當時ノ大藏大臣子爵渡邊國武ハ國立銀行ノ處分及其發行紙幣ニ關スル法律ノ制定ヲ必要トシ議會ノ協贊ヲ經テ明治二十九年三月法律第七號及第十一號ヲ以テ營業滿期國立銀行處分法並國立銀行營業滿期前特別處分法ノ公布アリ且同年法律第八號ヲ以テ國立銀行紙幣ハ明治三十二年十二月九日限り其通用ヲ禁止セラレ其後滿五

箇年ヲ以テ引換期限トナスコトニ定メラレタリ此等ノ法律ニ依リテ國立銀行ハ其營業滿期ニ至リ又ハ其滿期前ニ於テ私立銀行ニ變シテ業務ヲ繼續シタルモノ多ク終ニ明治三十二年二月ニ至リ全國中一モ國立銀行ノ存在ヲ見サルニ至リタリ而シテ此等銀行ノ發行セル紙幣ハ著著其銷却ヲ實行セラレ明治三十二年十二月末日ニ於ケル殘高ハ僅僅九拾七萬四千九百九拾九圓ニ過キス此ノ如ク國立銀行ニシテ私立銀行ニ變シ其業務ヲ繼續シタルモノ、外銀行條例並貯蓄銀行條例ニ從テ各種銀行ノ設立セラレタルモノ頗ル多ク之カ爲ニ投セラレタル資本モ亦少カラス明治三十二年十二月末ニ於ケル各種銀行ノ總數(外國銀行ヲ除ク)ハ二千二十五ニシテ其資本金額ハ四億參千參百九拾七萬五千拾九圓ナリ

抑貯蓄銀行ハ細民ノ爲メ零碎ナル資金ヲ預リ之ヲ複利増殖シテ一國ノ資金ト爲スヲ目的トスル機關ニシテ其預ケ人ノ數頗ル多ク社會下流ノモノ之カ大部分ヲ占メ隨テ此種ノ銀行ノ整否ハ一國國民ノ貯蓄心ニ關係スル所多大ナルカ故自ラ普通ノ銀行ト異リ特別ノ監督ヲ爲スノ必要アリ是特ニ貯蓄銀行條例ノ制定アル所以ニシテ其預金ニ對シ四分ノ一以上ニ相當スヘキ有價證券ヲ供託セシメ又其重役等ヲシテ無限ノ責任ヲ帶ハシムル等一ニ其基礎ノ鞏固ナルヲ期スルハ畢竟此趣意ニ出ツルニ外ナラス明治三十二年六月末日ニ於テ該條例ノ下ニ營業セル銀行數ハ四百五十九ニシテ其資本總額ハ貳千九百四拾八萬九千參百圓現拂込額ハ千六百九拾萬參千六百拾九圓ニ上リ該預金ノ總額五千五百參拾參萬五千七百參拾貳圓ニシテ其内貯蓄預リ高ハ參千七百餘萬圓ノ巨額ニ達シ預ケ人ノ總數モ亦殆ント三百萬人ノ多數ニ達セリ然レトモ現行ノ貯蓄銀行條例ニ依レハ資金運用ノ制限ニ關スル規定完カラサルカ爲メ精細ニ是等貯蓄銀行ノ營業ヲ觀察スル

トキハ右ノ資本金及預金ノ内貳千五拾餘萬圓ハ他ノ銀行へ諸預ケ金ト爲セルモノニシテ或ハ他銀行ノ預金吸收ノ機關トナレル嫌ナキニアラス且其貸付ノ如キモ確實ナラサル會社ノ株券又ハ債券若クハ價格變動ノ定マラサル商品等ヲ擔保トシ甚シキハ右ト同様ノ有價證券ヲ所有セルモノアリ斯ノ如キ危險ナル資金ノ運用ヲ爲スハ多數人民ノ貯蓄預金ニ對シ最モ避クヘキコトナルヲ以テ更ニ充分ナル監督ヲ爲スノ必要アリ故ニ正義ハ之ニ關スル法律案ヲ起草シ之ヲ第十四議會ニ提出シタルモ遂ニ成立スルニ至ラスシテ閉會トナレリ來期議會ニ於テハ必ラス完備セル貯蓄銀行法案ヲ提出シ以テ貯蓄銀行制度ノ改良ヲ謀リ國民ノ多數ヲ占ムル下流ノ者ノ爲ニ貯蓄ノ基礎ヲ鞏固ナラシメント欲ス

終ニ臨ミテ各私立銀行ノ貸付及手形ノ割引ノ概況ヲ示サン各私立銀行中普通銀行ノ貸付總額ハ明治三十一年十一月ニ於テ壹億九千七百五拾四萬五千八百貳拾四圓ニシテ之ヲ明治二十六年十二月末日ノ貸付總額參千九百六拾壹萬五千七百參拾參圓ニ比スレハ殆ント五倍トナリ手形ノ割引ハ明治三十一年十二月末ニ於テ壹億參千九百參拾壹萬四千四百四拾七圓ニシテ之ヲ明治二十六年十二月末ノ割引總額參千五百七拾六萬四千七百拾四圓ニ比スレハ殆ント四倍トナル又貯蓄銀行ノ貸付金總額ハ明治三十一年十二月末ニ於テ千七百壹萬八千五百七圓ニシテ之ヲ明治二十六年十二月末ノ貸付總額九拾八萬四千貳百六拾參圓ニ比スレハ殆ント十七倍餘トナリ手形ノ割引ハ明治三十一年十二月末ニ於テ七百九拾萬九千四百貳拾貳圓ニシテ之ヲ明治二十六年十二月末ノ割引手形貳百參拾五萬六千參百五拾六圓ニ比スレハ約三倍ニ垂ントス其進歩ノ狀況誠ニ見ルヘキモノアリ

第五 日本興業銀行法案ノ通過

明治十四年九月正義ノ紙幣整理及中央銀行設立等ノコトヲ建議スルヤ併セテ株券及債券等ノ有價證券ニ對スル貸付及是等證券ノ引受等ヲ主タル營業ノ目的トシ其流通ヲ滑カニシ其眞價ヲ維持セシメ以テ資本ノ供給ヲ裕ニスルノ銀行ヲ設立スルノ必要ヲ述ヘシカ近時我經濟社會ノ發達愈々著キニ隨ヒ政府ハ終ニ此種ノ銀行ヲ設立スルノ必要ヲ認メ明治三十二年第十三帝國議會ノ開會セラレ、ニ及ヒ動産銀行法案ヲ該議會ニ提出シタリ然ルニ此議會ニ於テ衆議院議員ヨリモ亦政府ノ保證ニヨリ外資ヲ輸入シ工業資本ノ供給ヲ謀ラントスルノ旨趣ヲ以テ日本興業銀行法案ヲ提出セシカ政府ノ提出シタル動産銀行法案ト同一ノ性質ヲ具ヘタルモノナリシヲ以テ兩案ヲ併セ審議ニ附セラレシモ閉會ノ時期切迫シタルカ爲メ終ニ成立ヲ見ルニ至ラスシテ止メリ是ヲ以テ政府ハ再ヒ同一ノ法案ヲ第十四議會ニ提出セシニ議會ハ銀行ノ名稱ヲ修正シテ日本興業銀行ト爲シ且第十四條ニ債券ヲ外國ニ於テ募集スル場合ノ規定ハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ定ムル旨ノ但書ヲ加ヘ以テ兩院ヲ通過シタリ此銀行ノ設立ヲ見ルニ至ラハ金融機關ノ設備ハ大體ニ於テ略ホ其各種類ノ形體ヲ具フルニ至ルモノト云フヘク今後ニ於ケル銀行ニ關スル政策ハ主トシテ是等ノ機關ノ改良發達ヲ謀ルニ在リト云フヘキナリ

第二編 財政機關

第二編 財政機關

第一章 總說

凡ソ財政政務ノ變遷ヲ敍スルニ當テハ須ラク先ツ財政機關ノ沿革消長ヲ説述セサルヘカラス蓋シ政務ノ興廢ハ機關ノ整否ニ負フ所尠シトセサルヲ以テナリ而シテ本來行政ト財政トハ相分離スヘカラサル事柄ナルカ故ニ財政機關ノ意義ヲ擴充スレハ各省府縣廳ヲ初メトシ國家ノ行政機關ハ殆ト一トシテ財政機關ニアラサルナキカ如シト雖モ茲ニハ特ニ財政ノ政務ニ直接ノ關係ヲ有スル機關ニ就キテノミ説述スヘシ

此等ノ財政機關ハ分ツテ四トス曰ク中央機關曰ク地方機關曰ク附屬機關曰ク監督機關是ナリ以下此等ノ機關ニ付キ各別ニ章ヲ設ケテ其變遷ヲ敍シ終リニ中央當局者ナル一章ヲ附シテ以テ財政ノ樞軸ニ當リシ人ニ付キテ記述スル所アラントス

第一 中央機關

中央機關ノ沿革ハ分ツテ之ヲ四期トス曰ク金穀出納所時代曰ク會計事務局時代曰ク會計官時代曰ク大藏省時代是ナリ

- 一 金穀出納所時代 (明治更始乃至元年二月二日)
慶應三年十月十五日征夷大將軍徳川慶喜大政ヲ奉還ス仍テ十二月九日攝政以下ノ官職ヲ廢シ新ニ總裁議定參與ノ三職ヲ置キ同月十二日一乘院里坊ニ參與役所ヲ創設シ其管轄ノ下ニ金穀出納

所ヲ置キ同月二十七日假ニ京都學習院ニ之ヲ設ク而シテ出納所ノ事務ハ其初メ參與ヲシテ假攝
 セシメシカ後之ヲ會計事務課ノ管掌トス仍テ本期間ハ更ニ之ヲ分ツテ二期トナスコトヲ得曰ク
 參與假攝時代曰ク會計事務課時代是ナリ前期ハ明治更始乃至元年正月十七日ノ期間ニシテ後期
 ハ元年正月十七日乃至二月三日ノ期間ナリトス其前期ニ在リテハ出納所ノ事務ヲ管掌スル者ニ
 關シテ別ニ一定ノ官制ナク唯參與ヲシテ其事務ヲ假攝セシメタルニ過キサリキ然ルニ其後期ニ
 入ルニ及ヒ三職ノ職制及ヒ分課ヲ定メ議定官中ニ神祇、内國、外國、海陸軍、會計、刑法、制度ノ七課ヲ設
 ケ各總督ヲ置キ事務ヲ分督シ議事ヲ定決セシメ參與ニ七掛ヲ設ケ以テ事務ヲ參議シ各課ヲ分務
 セシム會計事務課亦實ニ其一ニ居リ金穀出納所ノ事務ヲ掌理セリ(註)會計事務課トハ事務分配上
 會計事務課ノ職務ノ場所即チ役所ノ名稱ナリシカ如シ明治元年一月十日
 七日官制改革以後ト雖モ尙ホ金穀出納所ノ名稱ハ存在セシメテ以テナリ)

二 會計事務局時代 (明治元年二月三日乃至閏四月二十日)

明治元年二月三日會計事務局並ニ金穀出納所ヲ廢シ太政官中更ニ會計事務局ヲ建テ、財政ノ事
 ヲ行ハシム是ニ於テ前ノ七課ヲ改メテ七局ト爲シ本局其一ニ居ル而シテ局ニ督以下ノ職員ヲ置
 キ其管掌事務ヲ科定ス是ニ於テカ官制稍、備ハル

三 會計官時代 (明治元年閏四月二十一日乃至二年七月七日)

明治元年閏四月二十一日官制ヲ改定シ會計事務局ヲ廢シテ新ニ會計官ヲ置キ三職七局ヲ廢シテ
 議政行政、神祇、會計、軍務、外國刑法ノ七官トス本官ハ即チ其一ナリシナリ此ノ日本官ニ出納用度、驛
 遞、營繕、稅銀、貨幣、民政ノ七司ヲ置キ各分掌スル所アラシム之レ財政機關ノ所管事務分掌ノ文書ニ
 徴見スヘキモノ、嚆矢トス而シテ當時其所管事務ノ廣汎ナル名ハ會計トイフト雖モ其實ハ後ノ

内務、外務、司法、逓信、農商務等ノ事務ヲ包含セリ而シテ本期中他官省トノ關係上重要ナル事項ハ明
 治元年九月神奈川縣管スル所ノ大阪以西燈明臺事務ヲ管シ二年正月十六日外國官所管ノ燈明臺
 事務是ヨリ先キ所管トナレル部分ヲ除クヲ管シ四月六日更ニ燈臺事務ハ總テ之ヲ外國官ノ管理
 ニ移セルカ如キ同年二月五日日本官所管ノ貨幣司ヲ廢シテ太政官ニ造幣局ヲ置キ四月八日更ニ右
 ノ造幣局ヲ本官ニ併合シタルカ如キ同年四月八日民政部官ヲ新設シ本官所管ノ驛遞司ヲ之ニ屬シ
 タルカ如キ同年五月十六日外國官中ノ通商司ヲ本官ニ併セ貿易事務ヲ管理セルカ如キ是ナリ特
 ニ同年五月八日ニ於ケル監督司ノ新設ハ本期中ニ於テ最注目スヘキ事件タラスンハアラス蓋シ
 是レ明治財政史上監督機關ノ設置ヲ見ルノ始メナレハナリ

四 大藏省時代 (明治二年七月八日以後)

第一期 (明治二年七月八日乃至四年八月九日)

明治二年七月八日官制ヲ改正シ會計官ヲ廢シテ大藏省ヲ建ツ蓋シ此日行政官ヲ廢シテ太政官ニ
 併セ民政部、會計官、軍務官、外國官、刑法官、内廷職ヲ廢シテ神祇官、民政部、大藏省、兵部省、刑部省、宮内省、
 外務省、待詔院、集議院、大學校、彈正臺、皇太后宮職、皇后宮職、春宮坊、海軍、陸軍、留守官、宣教使、開拓使、按察
 使ヲ建テ大藏省ハ即チ此改革ノ一部トシテ建設セラレタルモノナリ爾來中央機關ノ官制ハ幾回
 カ修正釐革セラレ、所アリタリト雖モ大藏省ナル名稱ニ至テハ遂ニ變易セラレス而シテ此ニ所
 謂大藏省時代トハ四年八月ノ官制大改革以前ニ於ケル大藏省ヲ指示スルナリ本期間ニ於テ本省
 ノ沿革上注目スヘキハ民政部トノ關係ナリ即チ其初メ民政部ト對立シ二年八月十八日之ト並合
 セシカ三年七月十日更ニ之ト分立シ四年七月二十七日ニ至テ遂ニ民政部廢セラレ其管掌事務ハ

本省ニ統轄セラル、ニ至レリ而シテ其第一ノ分立時代ニアリテ二年八月(日關管轄司ヲ廢シテ其事務ヲ民政部ニ屬セシメ)同月十一日租稅監督通商鑛山ノ四司ヲ民政部ニ轉屬セシム而シテ同月十八日日本省民政部ト併合セシ後九月十九日外務省ノ管轄セル燈明臺局ヲ本省及民政部ニ屬セシメ十月二十八日神奈川縣ノ掌理セル橫濱橫須賀製鐵所ヲ本省及民政部ニ屬セシム而シテ三年七月十日再ヒ民政部ト分立セシ後本省ハ更ニ造幣寮出納司用度司租稅司監督司度量衡改正掛ヲ統管ス同月十七日管轄司ヲ新置シ民政部土木司ノ管轄事務ヲ管セシメ同月二十二日民政部ノ通商司ヲ本省ニ屬セシム八月十三日燈明臺局及橫濱橫須賀製鐵所民政部ニ專屬ス十二月二十二日管轄司所管陵墓修繕事務ヲ民政部土木司ニ屬セシメ四年正月二十日通商司所管ノ牧畜事務ヲ民政部ニ屬セシメシカ四年七月二十七日ニ至リテ遂ニ民政部ハ本省ニ併合セラル、ニ至リシコト前ニ述フルカ如シ

第二期 (明治四年八月十日乃至十九年二月二十五日)

明治四年八月十日日本省ニ十一寮一司ヲ改置シ尋テ此月十九日職制及事務章程ヲ改定ス是レ本省官制ノ面目ヲ一新セル一大改革ニシテ財政機關發達史上ノ一新紀元タラスンハアラス蓋シ此大改革ノ行ハレタルハ嚮ニ財務調査ノ爲メ米國ニ派遣セラレタル租稅頭兼造幣頭伊藤博文ノ歸朝シ財務整理ニ關シ建議スル所アリタルト是ヨリ先キ三年九月伊藤博文建議スル所アリ乃チ米國ニ派遣セラレ四年六月合衆國政府大藏省現行ノ法則及出納ノ條規ノ調査ヲ了リ歸朝ノ上復命セルナリ七月十四日廢藩置縣ノ事アリテ隨テ大藏省ノ局面モ亦一變セサルヲ得ナルノ時機ニ際セルトニ因ルナリ今左ニ伊藤博文ノ建議書ヲ掲ケン

博文謹テ大藏省職制章程草案ヲ上ツル抑モ此稿實ニ一時急遽ニ編綴スル所ニシテ唯タ其ノ概略ヲ撮擧スルノミ未タ以テ全體ヲ觀ルニ足ラス然リト雖モ是レ方今宇内ニ於テ最モ會計理財ノ要ヲ得テ之ヲ實際ニ施行スト贊稱セル米利堅合衆國大藏省ノ制度ニ依倣シ其煩ヲ祛キ冗ヲ芟リテ草定スル所ノ者ナリ但タ風俗政體ノ宜シキヲ異ニシ且ツ會計出納ノ方ヲ殊ニスルヨリシテ或ハ彼ニ要ナルモ我ニ冗ナル者アリ或ハ我ニ急ナルモ彼ニ緩ナル者アリ之ヲ要スルニ實際ノ財政ニ於テ壅塞ノ患ヲ除キ疎脫ノ弊ヲ防キ出納ヲ正確ニシ會計ヲ詳明ニスルヲ以テ主要ノ目的ト爲ス故ニ之ヲ取捨刪潤シ以テ我カ大藏省ノ實地ノ處務ニ適合セシム可キナリ若シ夫レ各寮司ノ掌管スル事務ノ章程及ヒ規則考課狀報告書ノ體裁例式等ニ至テハ各寮司ノ事務ノ實況ニ應シテ之ヲ按定スルハ固ヨリ其長官ノ任ナリ幸ニ此ノ草案ヲ採取シテ大ヒニ改革ヲ加フルノ盛舉アラハ則チ能ク財政ノ綱領ヲ總攬スル我大藏省ノ名實ニ適合スルノ効功ヲ收ムルヤ期シテ俟ツ可シ

改制綱領

大藏省ハ全國ノ財政ヲ經綸シ官衙ノ經費ヲ發給シ内外ノ稅法ヲ釐革シ金銀貨幣ノ品位ヲ量定シ公債ヲ募起シ紙幣ヲ發行シ農業ヲ勸メ商事ヲ勵マシ以テ我國家ヲシテ獨立不羈ノ政體ヲ施行ス可キ大基礎タル財計ヲ總管ス今マ其事務ノ大綱ヲ舉ケテ四項トナス第一ニ内外ノ租稅ヲ徵收スル章程ヲ查定シ政府ノ准允ヲ經テ之ヲ法規ト爲シ以テ文事武事ノ經費ノ増減スルニ應シ時時之ヲ更正ス第二ニ内外ノ租稅ヲ徵收シテ之ヲ國庫ニ貯積シ以テ文事武事ノ經費ニ充ツ第三ニ出納ノ計算ヲ明確ニシ常額費ト臨時費トヲ區別シ上ハ政府

ニ稟報シ下ハ人民ニ公告シ以テ政府ノ租稅ヲ專有セサルヲ明示ス第四貨幣ノ流用ヲ疏通シ内外ノ商業ヲ繁盛ニシ公債ヲ募起シ紙幣ヲ發行スル方法ヲ設ケ以テ非常ノ經費ニ應ジ且ツ其ノ償還ノ方法ヲ立テ以テ信義ヲ人民ニ失ハス又々廣ク農事工業ノ諸科ヲ擴張シ以テ能ク國家ヲ殷富ノ域ニ達セシムルヲ要ス此ノ四者ヲ實行セント欲セハ則チ下項ノ條款ニ照シ寮司ヲ設置シテ事務ヲ派課シ以テ之ヲ分擔セシムルヲ要ス

第一ヲ租稅寮ト爲ス凡ソ内外ノ租稅ニハ正租アリ雜稅アリ輸出入稅アリ而シテ之ヲ徵收スルニハ畫一ノ章程ヲ設ケ以テ收斂培克ノ弊害ヲ防キ人民ヲシテ疑惑ノ念慮ヲ懷カシメサルヲ要ス是レ特ニ此ノ一寮ヲ設置シ之ヲシテ全國ノ正租雜稅及ヒ各港ノ輸出入稅ヲ管理セシムルヲ欲スル所以ナリ

第二ヲ出納寮ト爲ス凡ソ金穀ヲ出納スルニハ大藏卿ノ傳票ニ憑據シテ諸般ノ租稅ノ金穀ヲ國庫ニ收入シ又々傳票ニ憑據シテ諸般ノ經費ヲ衙廳ニ支發スル規程ヲ確踐スルヲ要ス是レ特ニ此ノ一寮ヲ設置シ之ヲシテ屬官ヲ府縣ニ差遣シテ其ノ出納ヲ分管シ而シテ寮頭本省ニ在リテ總轄シ以テ諸般ノ出納ヲ提理セシムルヲ欲スル所以ナリ

第三ヲ傳票課ト爲ス凡ソ金穀ヲ出納スルハ各衙廳ノ大藏省ニ請求スル書牒ニ大藏卿ノ署印セシ傳票ヲ副シ正算司検査寮記録寮ノ計查檢證ヲ經由シテ其ノ傳票ニ憑據シテ出納スルヲ要ス是レ特ニ本省中ニ此ノ一課ヲ設置シ之ヲシテ收入支出ヲ認許スル大藏卿ノ署印ヲ取り正算正ニ正算シ検査頭ニ検査シ記録頭ニ記録シ出納頭ニ出納セシムルノ傳票ヲ作ラシムルヲ欲スル所以ナリ

第四ヲ正算司ト爲ス凡ソ出納セル金穀ハ必ス其ノ計算ヲ明確ニシテ以テ政府ニ報告スルヲ要ス是レ特ニ此ノ一司ヲ設置シ之ヲシテ大藏卿ノ傳票ニ憑據シ出納セル金穀數額ノ計算ニ錯誤ナキヲ保任セシムルヲ欲スル所以ナリ

第五ヲ検査寮ト爲ス凡ソ金穀ノ出納ニ關シテ正算司ノ計算ノ果シテ明確ニシテ錯誤ナキカ又々其ノ出納ノ果シテ成規ニ違背セル無キカヲ検査スルヲ要ス是レ特ニ此ノ一寮ヲ設置シ之ヲシテ出納ノ事項ヲ検査シ大藏卿ノ傳票及ヒ衙廳ノ請求書牒ニ檢印シ以テ其ノ成規ニ違背セサルヲ證明セシムルヲ欲スル所以ナリ

第六ヲ造幣寮ト爲ス凡ソ貨幣ノ金銀品位ヲ量定シテ以テ流通ノ便ヲ資ケ内外人民ノ請求ニ應ジ定例ノ貨幣ヲ鑄造スルヲ要ス是レ特ニ此ノ一寮ヲ設置シ之ヲシテ專ラ各種貨幣ノ鑄造ヲ掌管セシムルヲ欲スル所以ナリ又々將來ノ景況ニ從ヒ別ニ金銀料塊ヲ分析シ其料塊ノ價直ヲ量定スル分析所ヲ設置スルヲ要ス

第七ヲ記録寮ト爲ス凡ソ政府ノ准許ヲ經テ大藏省ノ發行スル紙幣及ヒ公債證書ハ其數額ヲ計簿ニ登載シ紙幣ト公債證書トニ證印シ且ツ出納ノ憑據ニ供ス可キ文書ハ悉ク之ヲ書庫ニ藏弁シ管守スルヲ要ス是レ特ニ此ノ一寮ヲ設置シ此等ノ事務ヲ管理セシムルヲ欲スル所以ナリ

第八ヲ紙幣寮ト爲ス凡ソ大藏省ノ發行スル紙幣ハ之ヲ印刷シ且ツ其損毀セル者ヲ交換シ政府ノ准許ヲ得テ紙幣會社ヲ創設スル有レハ則チ其發行スル紙幣及其ノ規則ヲ管理スルヲ要ス是レ特ニ此ノ一寮ヲ設置シ而シテ此レ等ノ事務ヲ管理セシメ且ツ本寮ハ大藏省ノ紙幣會

社ノ紙幣及會社ノ其發行スル紙幣ノ抵當トシテ寄納スル公債證書等ノ物件ヲ料理スルヲ欲スル所以ナリ

第九ヲ統計寮ト爲ス凡ソ全國ノ財計ヲ蒐收シテ之ヲ統計シ甲年ノ收支ヲ量リ乙年ノ出納ヲ定メ以テ政府ニ稟報シ人民ニ公告スルヲ要ス是レ特ニ此ノ一寮ヲ設置シ之ヲシテ物産戶口貨幣紙幣正租雜稅公費官祿等ヲ統計セシムルヲ欲スル所以ナリ

第十ヲ營繕寮ト爲ス凡ソ宮禁及ヒ諸衙廳ノ如キ官費ニ屬スル建築修繕ハ政府ノ裁可ヲ經テ之ヲ舉行スルヲ要ス是レ特ニ此ノ一寮ヲ設置シ之ヲシテ測量圖樣及ヒ費額ノ按定及ヒ工事ノ舉行ニ當任セシムルヲ欲スル所以ナリ

第十一ヲ用度課及ヒ刊行課ト爲ス凡ソ省中ノ需用スル器具雜件紙墨筆膏油蠟燭ノ發給竝ニ簿冊文書ノ刊刻ハ本省ニ於テ之ヲ處理スルヲ要ス是レ特ニ用度課ヲ設置シテ需用物件ノ發給ニ當任シ刊行課ヲ設置シテ簿冊文書ノ刊刻裝釘ニ當任セシムルヲ欲スル所以ナリ

大藏省中ニ分管ノ寮司ヲ設置スル左ノ如シ

- 大藏卿
- 大藏大丞
- 傳票課長
- 刊行課長
- 造幣頭權頭
- 檢查頭權頭
- 大藏大少輔
- 用度課長
- 租稅頭權頭
- 正算正權正

出納頭權頭

記錄頭

統計頭

紙幣頭

營繕頭

大藏卿ノ權力責任ノ制限

大藏卿ハ大藏省ノ首長タル重職ニシテ全國ノ財計ヲ統轄シ内外ノ租稅ヲ國庫ニ收入シ政府ノ准許セル文事武事ノ經費ヲ供發シ金穀ノ出納ヲ明確ニシ貨幣ノ鑄造ヲ監視シ農事工業ヲ勸獎シテ全國ノ殷富ヲ増スヲ謀ル等凡ソ財政會計ノ事項ニ關シテハ政府ト人民トニ對シテ其責ニ任スル樞機ノ宰相ト爲ス故ニ下項ニ列舉スル權限ニ遵フテ其職掌ヲ執行スルノ權限ヲ有ス

大藏卿ハ一歲ノ收入額内外ノ租稅ノヲ概計シテ衙廳ノ經費額ヲ限定シ以テ政府ニ建明シ政府審議准許ス之ヲ准許定額費ト云フ

大藏卿ハ准許定額費ニ供發セシ殘額ヲ貯積シテ臨時費ノ准許ヲ經タル者ニ應給ス

大藏卿ハ政府ノ准許セル令達ヲ得ルニ非サレハ則チ定額費ノ計外ニ係ル金穀ノ供發ヲ拒却スルノ權限ヲ有ス

政府既ニ臨時費ノ支出ノ可否ヲ議決シ准許ノ令ヲ下スニ當タリ先ツ財帑ノ計度ヲ大藏卿ニ諮議ス可シ大藏卿ハ豫備金穀ノ多少ヲ計量シテ之ヲ可トセハ政府始メテ其准許ノ令ヲ下スヲ要ス決シテ大藏卿ニ諮議セスシテ之ヲ准許スルヲ得ス

此ノ准許ノ令達ハ必ス毎時ニ大藏省ニ示付ス

政府ノ准許セルハ明確ナルモ大藏卿自ラ其支出ノ傳票ニ署印セサルヤ一切ニ金穀ヲ出納セシメサルノ權理ヲ有ス

大藏卿ハ全國ノ會計ヲ統轄スルヲ以テ文武經費ノ定額ト臨時トヲ問ハス其銜廳ヲシテ詳細ナル計簿ヲ具シテ報告セシムルノ權理ヲ有ス而シテ其ノ交附日期ハ大藏卿豫メ之ヲ通報ス大藏卿ハ定額及ヒ臨時ノ經費ヲ計量シ時宜ニ應シテ正租雜稅ノ賦課ヲ増減スル方案ヲ政府ニ建明ス

大藏卿ハ文武經費ヲ數額及ヒ其出納ノ計算ヲ明確ニシテ時時政府ニ稟報シ併セテ人民ニ公告ス毎月毎季毎年ノ報告ハ精粗各其體例ヲ異ニス

大藏卿ハ政府ノ諮議ニ應シテ支出額ト見有額トヲ比較シ若シ見有額ノ缺乏ナルヤ時宜ヲ量リテ公債ヲ募起セサルヲ得ス此ノ時會ニ於テハ大藏卿起債ノ意見ヲ政府ニ建明ス

大藏卿ハ每歲公債ノ子母ヲ交支シ及ヒ紙幣ヲ償消スル方法ヲ按定シ計率ヲ設ケテ政府ニ令明シ准許ヲ經テ之ヲ實行ス

凡ソ會計上ニ關スル事項ヲ官省府縣或ハ人民ヨリ政府ニ建言スル者有レハ必ス之ヲ大藏卿ニ轉示ス

大藏卿ハ貨幣ノ品位並ニ尺度量衡ノ制度ニ更正ヲ要スル者有ラハ之ヲ政府ニ建明ス

所屬寮司ノ長官ハ大藏卿之ヲ政府ニ推薦シテ之ヲ任補スルヲ得其以下ノ官吏ハ大藏卿自ラ之ヲ任補スルノ權理ヲ有ス又々寮司ノ長官ハ其僚屬ノ官吏ヲ大藏卿ニ薦舉スル權理ヲ有ス大藏卿ハ所屬寮司ノ長官ノ權限ヲ定メ章程ヲ設ケ政府ノ准許ヲ經テ其事務ヲ料理セシム章

程ノ外ナル事項ハ大藏卿ノ命令ヲ奉承シテ毫モ支吾セシメサル權理ヲ有ス
租稅ノ徵收ニ關シテハ地方官モ亦大藏卿ノ權内ニ屬ス故ニ大藏卿ハ時宜之ニ對シテ命令ヲ下スノ權理ヲ有ス

大藏卿ハ官省府縣ヲ論セス凡テ官府ノ金穀出納ニ關スル規則ヲ設定シ其銜廳ノ會計官吏ヲシテ遵守セシムル權理ヲ有ス若シ其會計官吏ノ規則ノ遵奉ヲ怠リ或ハ拒ム者有レハ大藏卿直チニ其ノ所屬長官ニ照會シテ之ヲ廢黜セシムルヲ得可シ

大藏卿ハ政府ノ准許ヲ得テ領事ヲ海外ニ派遣シ商稅ニ關スル事務ヲ料理セシムル權理ヲ有ス大藏卿ハ統計表ヲ查録スルヲ以テ凡ソ統計ニ關涉スル事項ハ他ノ銜廳ニ對シテ命ヲ下スノ權理ヲ有ス

大藏卿ハ省中ノ事務ノ繁閑ヲ酌量シテ官吏ヲ増減スルヲ得可ク而シテ寮司ノ長官ヲ進退スルハ政府ニ具狀シテ其ノ裁令ニ從フ可シ

大藏大輔及ヒ大藏少輔ハ大藏卿ノ代理者ト爲リテ事務ヲ總裁シ或ハ分管スル有リ故ニ其權力責任ハ都テ大藏卿ニ準ス

大藏省事務章程

第一 責任

大藏省管轄スル會計上ノ事務ニ關シ若シ過誤失錯アラハ細大ヲ論セス大藏卿其ノ責ニ任セサル可カラズ
寮司ノ掌理スル事務ニ關シ若シ過誤失錯アラハ細大ヲ論セス寮頭司正其ノ責ニ任セサル可

カラス寮司ノ長官ヲ除キ其ノ以下ノ官吏ハ書記計算其他ノ職事ニ服スル者ナルヲ以テ長官ノ指揮ヲ奉承シ各其ノ主務ニ勉カス可シ
寮司ハ更ニ其ノ僚屬ヲ分ツテ其課ノ目ヲ設ケ毎課ニ長ヲ置キ而シテ寮頭司正各課ノ事務ヲ總理ス

凡ソ疾病其ノ他ノ事故アリテ他人ニ事務ヲ代理セシムルヤ代理者ニ過誤失錯アレハ委託者共責ニ任セサル可カラス

疾病其他ノ事故ノ爲メニ代理ヲ委託スルハ六月間ヲ以テ限リトナス此ヲ過レハ其職ヲ辭セシム

代理スル日間ノ俸給ハ代理者ニ交附ス但タ政府若ハ大藏卿ノ特命アル者ハ此限リニ在ラス代理者ハ勅任ハ奏任ニ准シ大藏卿上奏シテ之ヲ命シ奏任ハ判任ニ准シ大藏卿專判シテ之ヲ命シ判任以下ハ寮司長官大藏卿ニ申明シテ之ヲ命ス

凡ソ大藏省ノ官吏ハ其職任ノ輕重ヲ論セス一切ニ商事ニ關與シ若クハ商船ヲ所有スルヲ得ス又此等ノ商會ニ伍スルヲ得ス又タ公務ニ頼テ私利ヲ營シ及ヒ貨賄ヲ貪ル勿レ此ノ禁例ニ違犯セハ法律ニ照シテ之ヲ罰責ス

第二 任補罷免

寮頭司正ハ大藏卿簡選シテ政府ニ上稟シ政府更ニ鑿擇シテ勅任ハ勅宣ヲ以テ之ヲ命シ奏任ハ上奏シテ大臣之ヲ命ス

大藏卿ノ薦舉ニシテ政府ノ採聽セサル者ハ其理由ト事實トヲ大藏卿ニ令達ス

寮頭司正ヲ罷免スルニハ大藏卿其ノ事故ト罷免ス可キ理由トヲ政府ニ上稟ス又タ政府ノ之ヲ罷免セント欲スルニハ其事故ト理由トヲ大藏卿ニ垂示シ大藏卿承諾シテ而ル後ニ之ヲ罷免ス但タ重罪ヲ犯シ國律ニ背ケル者ノ如キハ此ノ例ニ在ラス

書記計算等ノ職事ニ服スル官吏ノ進退ハ寮頭司正ヨリ大藏卿ニ具狀ス其順序ハ都テ大藏卿ノ政府ニ上稟スル順序ニ準ス

又タ此等ノ官吏ヲ増減スルハ事務ノ繁閑ニ應スル者ナルヲ以テ寮頭司正其ノ事由ヲ大藏卿ニ具狀ス

第三 周年全年

大藏省會計帳簿ヲ査定スルハ甲年七月朔ニ起リ乙年六月晦ニ訖ル此ヲ周年ト云フ

正月朔ニ起リ十二月晦ニ訖ル之ヲ全年ト云フ

正月朔ニ起リ三月晦ニ訖リ四月朔ニ起リ六月晦ニ訖リ七月朔ニ起リ九月晦ニ訖リ十月朔ニ起リ十二月晦ニ訖ル此ヲ四季ト云フ

正月朔ニ起リ六月晦ニ訖リ七月朔ニ起リ十二月晦ニ訖ル此ヲ半年ト云フ

第四 課税認許

租税頭租稅徵收ノ章程ヲ製設シ正租雜稅商稅等ノ科目ヲ立定シ大藏卿ヲ經テ政府ニ上稟シ政府其ノ比率ノ過不及ノ如何ト課徵ノ當否ノ如何トヲ論定シ而ル後ニ之ヲ認許ス此ヲ課稅ノ認許ト云フ

此認許ヲ經テ而ル後ニ之ヲ全國ニ施行ス

正租雜稅若クハ商稅ノ科目ヲ改定シ或ハ新稅ヲ賦課シ或ハ租稅徵收章程ヲ釐正スルヲ要セ
ハ租稅頭其ノ法案ヲ查定シ大藏卿ヲ經テ政府ニ上稟シ認許ヲ得テ而ル後ニ之ヲ施行ス

第五 准許定額費准許臨時費

大藏卿ハ租稅頭權頭正算正權正檢查頭權頭記錄頭出納頭ノ報告計簿ヲ以テ一歲ノ收入額ト
支出額トヲ概計シ以テ其ノ一歲ノ各衙廳ノ經費ニ供スル豫算ヲ立定シテ周年ノ終末ニ政府
ニ上稟シ政府ハ之ニ據テ各衙廳ノ定額費ヲ准許ス此ヲ准許ノ定額費ト云フ
定額費ノ計外ニ係ル金穀ハ大藏卿一切ニ發給スルヲ許サス各衙廳若シ已ムヲ得サル經費ヲ
要スル有レハ共事狀ヲ政府ニ申明シ政府其ノ可否ヲ議決シ且ツ大藏卿ニ垂問シ大藏卿承諾
シテ而ル後ニ政府其ノ經費ノ發給ヲ准許ス此ヲ准許ノ臨時費ト云フ

第六 准許傳票出納傳票金穀出納

全年ノ終末十二月會計ノ周ニ至レハ政府ヨリ翌年ハ七月初旬ナレノ各衙廳ノ定額費ノ准
許ヲ大藏卿ニ下令ス臨時費モ亦之ニ準ス
大藏卿ハ政府ノ下令ヲ得テ准許傳票ヲ發付ス此准許傳票ハ傳票課正副二通ヲ作り大藏大丞
ヲ經テ大藏卿ニ上呈シ大藏卿親カラ氏名ヲ署シ官印ヲ押スレハ傳票課正副ヲ併セテ檢查頭
ニ送付シ檢查頭檢查シテ計簿ニ登錄シ正副共ニ檢印シテ記錄頭ニ送付シ記錄頭記錄シテ證
印シ正本ヲ留存シテ副本ヲ檢查頭ニ還付シ檢查頭更ニ計簿ニ登錄シテ正算正ニ送付シ正算
正ハ算正計簿ニ登錄シテ之ヲ准許ヲ得タル衙廳ノ長官ニ報送ス衙廳ノ長官其ノ准許傳票
ヲ騰存シテ再ヒ之ヲ檢查頭ニ還付シ檢查頭之ヲ所屬ノ倉庫ニ藏弄ス

正算司檢查記錄寮ハ此ノ發給ノ許可ヲ經タル金穀ハ之ヲ其衙廳ニ交付スヘキ定額ト爲シ
之ヲ大藏省ニ寄置シ其要求ニ應ジテ交付スル者ト看做ス可シ
金穀ノ公納ヲ租稅頭及ヒ他ノ衙廳ヨリ申牒セハ收入金穀傳票ヲ發付ス但タ政府ノ認許ヲ經
タル租稅ヲ收入スル者ニ限ル
金穀ノ發給ヲ各衙廳ヨリ申牒セハ金穀支出傳票ヲ發付ス但タ政府ノ認許ヲ經タル費用ヲ支
出スル者ニ限ル

此等ノ傳票ハ傳票課之ヲ作り大藏大丞其支出及ヒ收入ヲ申告セル文牒ヲ併セテ之ヲ査閱シ
且ツ檢印シテ大藏卿ニ上呈シ大藏卿更ニ審査シテ氏名ヲ署シ官印ヲ鈐シ而ル後ニ傳票課之
ヲ正算司ニ送付ス正算司其ノ傳票ニ記載セル金穀ノ數額ヲ計査シ之ヲ計簿ニ登錄シ且ツ檢
印シテ檢查頭ニ送付シ檢查頭又タ其數額ヲ査算シ且ツ其ノ支出收入ノ書牒及ヒ傳票ノ月日
ニ錯誤セル無キカ支出收入ノ法規ニ違背セル無キカヲ檢查シ而ル後ニ檢查頭署名檢印シ計
簿ニ登錄シテ其ノ傳票ヲ記錄頭ニ送付ス記錄頭傳票ニ帶屬セル書牒ヲ割取シテ之ヲ記存シ
原書ヲ傳票課ニ還付ス傳票課之ヲ叢綴シテ後證ニ備フ又タ其ノ傳票ニハ記錄頭署名證印シ
收入金穀傳票ハ出納頭ニ送付シ出納頭署名檢印シテ領收ノ憑證ト爲シ之レト交換シテ其ノ
金穀ヲ衙廳ヨリ領收ス其ノ公納スル衙廳ハ此ノ傳票ヲ以テ納完ノ憑證ト爲ス
支出金穀傳票ハ記錄頭之ヲ出納頭ニ送付シ出納頭傳票ニ記載セル金穀ノ支出券票ヲ作りテ
記錄頭ニ還付シ傳票ハ金穀ヲ支出セル憑證ニ備ヘテ之ヲ藏弄ス
記錄頭ハ此ノ支出券票ニ記載セル金穀ノ數額番號ヲ計簿ニ登錄シテ出納頭ニ還付シ出納頭

ハ此ノ支出券票ヲ把テ其金穀ヲ交付ス可キ衙廳若クハ本人ニ付與シ遠隔ノ地方ハ郵便ニ付シテ遞送ス

此ノ支出券書ハ派出出納權頭若クハ出納寮支署ニ於テ見金見穀ニ交換シ以テ之ヲ出納頭ニ還納シ出納頭更ニ之ヲ傳票ニ合綴シテ支出セル憑證ト爲ス

收入スル金穀ハ租稅頭若クハ他ノ衙廳ヨリ便宜ニ派出出納權頭若クハ出納寮支署ニ假納シ其ノ領收證票ヲ以テ見金見穀ト見做シ之ヲ出納寮ニ納致ス

又東京ニ於テ納致スルニハ見金見穀ヲ出納寮ニ假納シ傳票ノ順鈔ヲ經テ本納ト爲ス然レトモ假納ハ即チ一時出納寮ニ寄置スル者ニシテ出納寮ニ納致スルニ非ス誤會セサルヲ要ス

出納頭若シ傳票ニ憑據セスシテ金穀ヲ支出セル有レハ官府ノ金穀ヲ私用セル者ト看做シテ之ヲ罰責ス

傳票ノ順鈔ヲ經テ金穀ヲ出納セシ以後ニ其ノ傳票ニ錯誤アルヲ檢出セハ計算ノ差錯ハ正算正法規ノ乖違ハ檢査頭出納ノ超過不足ハ出納頭其責ニ任ス

第七 寮司規則

寮頭司正ハ其ノ寮司ノ事務章程及ヒ處務順鈔並ニ分課長ノ職務制限ヲ查定シ大藏卿認許セハ政府ニ上稟取裁シテ以テ法則ト爲ス

此ノ法則ヲ改更スルヲ要セハ大藏卿ノ命令ヲ奉シ寮頭司正其ノ法案ヲ草定シ前款ノ順鈔ニ從テ稟裁ヲ得可シ

大藏卿ノ認許ヲ得スシテ寮頭司正ノ私設スル規則ハ公定ノ法則ニ非サルヲ以テ僚屬ノ遵奉

スルヲ許サス若シ私設ノ規則ヲ施行スル有ラハ矯命ト看做シテ之ヲ罰責ス
寮司長官ハ大藏卿ノ命ヲ奉シ其ノ寮司ノ規則ヲ改正シ及ヒ創定スル有ラハ先ツ其ノ草案ヲ關係アル他ノ寮司長官ニ協議シ或ハ事理ニ通曉セル學士若クハ衆庶ニモ廣告シ其ノ意見ト辯議トヲ聽取シテ更ニ考定シ其ノ書類ヲ併具シテ大藏卿ニ上呈ス但タ要急若クハ機密ニ係ル者ハ例外ニ在リ

第八 報告公布印刷

報告ハ每一日每一週每一月每三月每半年每一年ノ數種ニ區別ス

寮司中ノ各課長ハ毎日放衙ニ先タチ各官吏ノ本月處理セシ事項或ハ出納セシ金穀ノ報告ヲ手録シテ寮頭司正ニ申告ス寮頭司正之ニ署名檢印ス

寮頭司正ハ此ノ報告ヲ蒐輯シテ其ノ寮司ノ報告ヲ製リ署名證印シテ大藏卿ニ上呈ス每一月每三月每半年ノ報告皆之ニ做フ

一年或ハ周年ノ終末ニハ寮頭司正處務ノ實況及ヒ出納ノ計算等ヲ逐項ニ詳記シテ大藏卿ニ上呈ス

寮頭司正ハ每季ニ其ノ寮司ノ經費ヲ查録シテ正算正ニ報告シ歲抄ニハ翌年ノ經費ノ概計ヲ報告ス

大藏卿ハ毎月ノ報告ニ據リテ見實ノ出納ヲ查覈シ大藏省月報書ヲ政府ニ稟上シ又タ上梓公布シ上ハ官省ヨリ下ハ庶民マテ本月ノ會計ノ實況ヲ知ラシム

大藏卿ハ歲抄ニ寮司ノ年報ヲ蒐集シテ一冊ト作シ大藏卿ノ年報ト併セ翌年定額費ノ准許概

計ヲ算定シテ政府ニ上稟ス此ヲ大藏卿毎年報告ト云フ上梓公布スルハ前項ニ準ス
大藏卿ノ政府ニ稟上スル臨時ノ報告ハ政府ノ下令ニ應スル有リ事體ノ輕重ニ從ヒ大藏卿ノ
直チニ稟上スル有リ故ニ其ノ定期ナシ但タ上梓公布スルハ前項ニ準ス
察司ノ規則若クハ議案ノ類ハ大藏卿ノ認許ヲ經テ時時之ヲ梓行ス

第九 簿冊書牘證書

凡ソ公文ノ簿冊ハ事務ヲ處理スルニ最モ緊要ナル者トス故ニ察司其簿冊ヲ増減スルニハ必
ス長官ノ認許ヲ取ル可ク若シ此ノ制規ニ違背セハ矯命ヲ以テ罰責ス
察司ノ簿冊ハ精密ニ其ノ冊數ヲ條記シ歲抄ニ題目ト冊數トヲ大藏卿ニ報告ス
簿冊ノ欄外ニハ每紙ニ其題目ヲ印記シ欄側ニハ大藏省某察司某課ト印記シ紙端ニハ頁數ヲ
點記ス

簿冊ハ每冊ニ主管者每一名ヲ定メ決シテ數名一冊ヲ使用スルヲ許サス

簿冊ハ必ス主管者ノ机上ニ安置ス可ク決シテ他人ノ机上ニ放移スルヲ許サス他ノ課員ノ質
議スル有ラハ其ノ事項ヲ簿冊ヨリ抄出シテ交付シ決シテ簿冊ヲ貸與スルヲ許サス

簿冊ハ放衙ニ際セハ必ス之ヲ篋中ニ收メ鑰ヲ下シテ主管ノ書記員其ノ鍵ヲ帶フ但タ察司長
官ハ別ニ同一ノ鍵ヲ具フ可シ

簿冊ニ誤寫スル有ラハ能ク之ヲ塗抹シ其傍側ニ朱若クハ墨ヲ以テ填寫ス可ク決シテ削去ス
ルヲ得ス
簿冊ノ空白紙ヲ拔去スルヲ禁ス

他ノ衙廳ニ照會シ或ハ人民ニ往復スル文書ハ都テ察司ノ用紙ヲ以テス此ノ用紙ハ其ノ紙端
ニ大藏省某察司某課ト印記シ官職氏名ヲ具署ス官職若ハ氏名ヲ單書スルヲ許サス其ノ指署
亦タ官職氏名ヲ具書ス本省察司ノ相ヒ往復スル文書ト雖モ重要ノ事件ニハ都テ此例ニ倣フ
封筒ニモ大藏省某察司某課並ニ公用ト印記シ諸般ノ公用ニハ悉ク之ヲ用フ
用紙及封筒ハ私事ニ用ルヲ禁ス若シ官職ヲ署セス唯タ氏名ノミヲ記スル者ハ都テ私信ト見
做シテ之ヲ拒斥ス

金貨楮幣ヲ授受シ及ヒ重要ナル文書ヲ授受スルニハ同僚ノ間ニ於テスルモ必ス領取證書ヲ
徵取ス可ク若シ領取證書ヲ徵取セスシテ之ヲ散亡セル有ラハ必ス其罪ニ當ラシム

凡ソ後日ノ憑據ニ供ス可キ約書及ヒ證書ノ類ハ必ス檢査頭之ニ檢印シ記録頭ノ記録ヲ經テ
後證ニ備フ而シテ其本書ヲ主任察司ヨリ記録寮ニ送付シ以テ書庫ニ收藏セシム

而シテ右四年八月ノ大改革以降十九年二月大藏省官制ノ制定ニ至ル迄ハ官制ノ漸次發達進步セ
ル時代ニシテ之ヲ第二期ト爲ス而シテ第二期ハ更ニ細別シテ前後ノ兩期トナス

第二期ノ前期 (明治四年八月十日乃至十年一月十日)

本期間ニ在リテ中央機關管掌事務範圍ノ消長ニ付キテ特ニ注目スヘキハ他ノ諸官省トノ關係ナ
リ即チ其重ナルモノヲ舉クレハ四年八月二十八日外務省所轄各開港場ノ稅務ヲ管シ九月五日本
省所屬ノ各神社祭典ノ事務ヲ神祇省ノ管掌トス同月十四日日本省ノ管理セル聽訟ノ事務ヲ司法省
ニ屬セシム同月二十九日工部省土木寮ノ管掌橋梁架修ノ工事ヲ本省ニ屬シ十月八日工部省所
轄ノ土木寮ヲ管ス六年一月十九日諸省使府縣ノ徵收スル贖罪金及科料錢ノ類ハ今後總テ司法省

ニ納付セシム二月二日陸軍省ノ管轄セル全國ノ城廓及ヒ地所陣營等ヲ本省ニ交付ス同月三日陸軍省所管ノ越後國新發田城ヲ管セシカ五月十七日陸軍省ニ轉屬ス十二月五日海軍省所轄橫濱製鐵所本省ニ屬シ七年一月九日戶籍、土木、驛遞ノ三寮內務省ニ轉屬シ橫濱製鐵所之ニ伴フ此日租稅寮所管ノ地理勸農ノ事務モ亦內務省ニ屬ス七月二十九日東京府下度量衡ノ取締事務ヲ東京府ニ委ネ八年六月二十七日金券發行會社ヲ除外諸會社設立ノ准允ハ渾テ內務省ノ管掌ト爲ス

第二期ノ後期 (明治十年一月十一日乃至十九年二月二十五日)

明治十年一月十一日官制ヲ改定シ各省中諸寮ヲ廢シ局ヲ設ク此ニ於テ本省ニ十局ヲ置ク然レトモ其事務章程ノ如キ率ネ舊ニ依ル本期間ニ於テ特ニ注目スヘキハ他ノ諸官省トノ關係ナリ今其重ナルモノヲ舉クレハ十年十一月二十八日內務省所管ノ株式取引所及ヒ米商會所ニ關スル事務本省ニ屬シ十一年十二月二十七日同省所轄ノ勸農事務本省ニ屬ス十三年三月本省ノ管掌セル財政監督事務ノ大部分ハ之ヲ會計検査院ニ移ス十四年四月七日本省ノ商務局ヲ廢シテ其事務ヲ農商務省ニ屬セシム同月十九日更ニ本省ノ管掌セル米商會所ノ事務ヲ農商務省ニ屬セシメ又五月十六日本省ノ管掌セル株式取引所ニ關スル事務ヲ同省ニ屬セシム十五年一月從來會計検査院ノ管掌セル出入決算調理ノ事務本省ニ復ス七月三日農商務省所轄ノ府縣交付金遞送事務ヲ本省ニ管シ十九年一月六日農商務省ノ管理セル三池、佐渡、生野三鑛山事務ヲ本省ニ屬セシム

第三期 (明治十九年二月二十六日乃至三十五年十二月三十一日)

前顯明治四年八月ノ官制改革ニヨリ本省ノ官制ハ大ニ其面目ヲ一新シタルノミナラス爾後亦多少改良補修セラル、所アリタリト雖モ猶ホ未タ整備ノ域ニ至ラザリシカ十九年二月二十六日ヲ

以テ制定セラレタル大藏省官制ハ各省官制通則ト相並ヒテ大ニ舊套ヲ釐革シ新路ヲ開發セリ是ニ於テカ綱紀以テ立テ秩序以テ整ヒ煥然トシテ觀ルヘキモノアルニ至レリ爾來本省ノ官制ハ幾度カ改正セラレタリト雖モ其基ク所ハ實ニ此官制ニ在リトス

初メ明治十九年二月改正ノ官制ニ依ルトキハ本省ニ一房十二局アリ又二十三年三月二十七日並ニ六月二十四日改正ノ官制ニ依ルトキハ一房九局アリシカ二十四年七月二十四日改正ノ官制ニ於テハ僅ニ一房五局アリテ事務ヲ掌理シ二十六年十月三十日ノ改正ニヨリ其事務分掌ノ方法ハ更ニ單純トナリ即チ一房三局トナレリ其後三十年四月二十一日更ニ一局ヲ增加セリト雖モ又幾モナク三十一年十月二十二日ニ至リ其一局ヲ廢シ超エテ三十三年四月二十六日別ニ總務局ヲ新設セリ故ニ大臣官房ノ外ニハ僅ニ三局若クハ四局ヲ置キテ事務ヲ分掌セシメタリシナリ

本期間ニ於テ他官省トノ關係上注目スヘキハ三十一年十一月一日本省所管ノ印刷局ヲ內閣ニ屬シ廣島鑛山ヲ農商務省ニ轉屬セシメタルカ如キ是ナリ

第二 地方機關

地方機關ハ分チテ內國稅務地方機關海關稅務地方機關及ヒ臺灣稅務機關トス

一 內國稅務地方機關

內國稅務地方機關ノ沿革ハ大別シテ四期ト爲スコトヲ得即チ第一期ハ地方ノ行政應ヲ以テ收稅ノ機關ニ充テタルノ期ニシテ第二期ハ大藏省租稅局派出ノ機關ヲ以テ之ニ充テタルノ期トス而シテ其第三期ハ更ニ收稅ノ事務ヲ地方應ニ委囑シタルノ期ニシテ其第四期ハ大藏大臣直轄ノ收稅機關ノ存立セルノ期トス

第一期 (明治更始乃至十一年十二月)

維新ノ初ニ當リ租稅ハ金納物納並ニ行ハレ而モ主トシテ物納ナリシカ物納ハ漸次金納ニ改メラレ明治六年七月二十八日地租改正條例ヲ發布シ地租ハ總テ之ヲ金納ト爲スニ及ヒ諸般ノ度支モ亦總テ金錢ヲ用ヒ米穀ハ歲入歲出ノ會計ヲ離レ其經理ハ大藏省中一部ノ會計ニ屬スルニ至レリ斯ノ如ク漸次金納ノ範圍ヲ擴張スルニ隨ヒ現金ヲ納致スルノ不便ヲ感シ明治五年五月十五日府縣送納ノ租稅金ヲ爲換方ニ委任スルノ方規ヲ定ムルニ至レリ而シテ其物納ニ屬スルモノヲ輪納スル順序ノ沿革ヲ述フレハ明治元年十一月二十一日府縣租米運漕方規ヲ定メ府藩縣ハ船舶ヲ僦用シテ運漕シ若シ僦用ニ便ナラサル地方ハ會計官ヨリ輪漕ノ船舶ヲ派遣スルモノトス二年九月十九日租米ヲ運漕スル船舶ヲ提理スルノ方規ヲ定メ租米ヲ運漕スルニハ豫メ郡村ノ租米ヲ港津ニ輸送シ更ニ之ヲ船舶ニ搭載シ船脚浸水ノ定度ニ管轄廳ノ檢印ヲ烙記スルモノトス三年四月四日關東諸國ノ各縣ヲシテ輪漕租米ノ抄掠ヲ取締ラシメ今後各管轄廳ヨリ專掌吏員ヲ差遣シ村長船僮立會シテ船舶ヲ雇用セシム四年九月二十日府縣貢米ニ關スル提理法ヲ定メ遠國ノ回漕貢米ハ搭載ノ毎回ニ石額俵數量數ヲ詳記シ府縣證印ノ送狀ヲ以テ租稅寮出張所若クハ出納寮出張所ニ進致スルモノトス五年八月二十日貢納規則ヲ定メ郡村ヨリ貢米ヲ便利ノ港津ニ運送シ縣官派出シテ之ヲ量查領收シ官廳ヨリ搭載船ヲ其地ニ回送シテ之ヲ漕運セシムルモノトス而シテ此等金納及物納ノ租稅ハ明治四年七月以前ニ在リテハ府藩縣明治四年七月以後ニ在リテハ府縣之ヲ徵收シテ進致セルカ當時未タ確然タル收納ノ法規ナク唯舊慣ニ依リテ之ヲ徵收セリ其ノ之アルニ至レルハ明治八年六月十五日租稅金穀收納順序ノ制定以降トス此順序ニ依レハ地租米ノ正納

ハ各村ノ上納場所ヲ決定シ主任官吏派出シテ之ヲ受領シ回漕米ハ船舶ニ付スルノ後領收證書ヲ各村ニ交付ス府縣預ケ米ニ充ツヘキ處所納米ハ其毎時領收證書ヲ各村ニ交付スルモノトス而シテ租稅金ハ府縣廳ニ於テ之ヲ收入スルノ初メニ上納者ヨリ上納證書ヲ徵取シ主務員檢査シテ其金額ニ捺印シ收入簿及收入日計簿ニ登記シテ上納證書ヲ返付ス上納者ハ租稅金預リ人アル地方ハ現金ヲ預人ニ交付シ切符ト交換シ預人ナキ地方ハ現金兩替座等ノ檢封ヲ受ケ上納者モ亦封印ヲ捺シ檢査既了ノ上納證書ヲ添付シテ其廳ニ進致ス主務官乃チ領收證書ヲ製シ上納者ニ下付ス上納者一人ニシテ數村若クハ數人各種ノ租稅ヲ上納スルモ妨ナシト雖モ上納證書ハ稅目限りニ進致セシメ領收證書ハ必ス毎村每人ニ稅目限りニ下付スルモノトス

北海道ニ在リテハ明治元年四月十二日箱館裁判所ヲ置キ同月十七日裁判所總督ニ蝦夷開拓ノ方法ヲ示シ其租稅ヲ舉ケテ開拓費ニ充當セシム閏四月箱館裁判所ヲ箱館府ト改メ二年七月箱館府ヲ廢シテ開拓使ヲ置ク六年七月十日開拓使ノ諸收入金ハ證票ヲ以テ國庫出納ノ順序ヲ履行セシム蓋シ從來同使ニ專任シテ之ヲ支消セシメシニ由リ出納ノ多寡ヲ知ルニ便ナラサリシヲ以テナリ而シテ其ノ收納スル所ノ租稅中特ニ北海道諸產物出港稅ヲ徵收センカ爲メニ海官所海關船改所ヲ各港ニ置ク又一時北海道產物輸入稅ヲ徵收セシメンカ爲メニ收稅吏ヲ内地ニ特派セルコトアリサレト其他ノ一般ノ租稅ハ開拓使支廳及郡出張所ニ於テ之ヲ收納セシメタリキ唯北海道ニ於テ特別ノ沿革ヲ有シ特別ノ取扱ヲ受ケタルモノハ北海道物產稅ナリトス抑、此租稅ハ北海道ノ水產物ニ賦課スルモノニシテ從前松前氏ノ管轄以來運上若クハ浮小物成等ノ稱ヲ以テ漁場運上金受負上納法ニヨリテ徵收セルモノナリシカ明治二年九月漁場運上金受負上納ノ法ヲ廢シ居民

ヲシテ之ヲ直納セシム六年從來各郡ニ於テ徵收セルヲ罷メ更ニ開拓使支應及出張所ヲシテ之ヲ
收納セシム其方法施設ノ如キハ開拓使ノ便宜規畫スル所ニ一任シ之ヲ北海道物産稅ト稱シテ國
庫ニ上納セリ

琉球國ハ元ト鹿兒島藩ニ隸屬シ出米ト稱スル貢納ヲ爲セルモノナリシカ明治五年九月十四日建
ヲ一藩トナシ尙泰ヲ琉球藩王ト爲シ十一月二十日其貢納ハ之ヲ租稅寮ニ進致セシム六年十二
月四日右ノ貢納ハ之ヲ價金ニ換算シテ進致セシム而シテ同地ニ於ケル租稅徵收ノ法ハ一ニ從來
ノ慣例ニ隨ヘリ

之ヲ要スルニ本期間ニ於ケル租稅徵收ノ地方機關ハ内地ニ在リテハ明治四年七月以前ハ府藩縣
同月以後ハ府縣ヲ以テ之ニ充テ北海道ニ在リテハ箱館裁判所箱館府開拓使等相繼テ之ニ當リ開
拓使支應及ヒ郡出張所其下級機關トナリ海官所(海關船改所)ハ北海道產物出港稅ヲ徵收スル特別
ノ附屬機關トナリ而シテ琉球ニ在リテハ舊慣ニ隨ヒテ藩ニ於テ租稅ヲ徵收セリ

第二期 (明治十一年十二月乃至十七年五月十九日)

明治十一年七月二十二日太政官第十七號布告ヲ以テ郡區町村編制法ヲ制定シ尋テ此年十二月收
稅委員出張所ヲ各地方ニ設置ス十二月二十八日國稅金領收順序ヲ定ム其順序タル戶長ハ徵收シ
タル稅金ヲ稅金預リ人ニ交付シ其預リ切符ヲ以テ郡區長ニ納メ郡區長ハ其預リ切符ヲ收稅委員
ニ送付シ其領收證書ヲ以テ地方官應ニ納進シ地方官應ハ之ヲ以テ租稅決算ヲ爲スモノトス而シ
テ右收稅委員出張所ノ外明治十二年十月大阪外四箇所ニ租稅局出張所ヲ置キ諸稅檢査ノ事ヲ管
セシム十四年八月二十四日租稅局出張所ヲ増置シ其權限ヲ擴張シ之ヲシテ諸稅監査及收稅ノ事

ヲ併管セシム是ニ於テカ二十七日國稅金領收順序ヲ更正シ十月一日以降之ヲ施行シ同日ヨリ收
稅委員出張所ヲ廢ス其順序タル戶長其收束セル稅金ヲ大藏省爲換方ニ交付シ其預リ切符ヲ以テ
郡區長ニ納メ郡區長ハ之ヲ租稅局出張所長ニ送付スルモノトス九月二十八日右順序中ニ郡區長
ハ各稅每納期皆納ニ至ラハ其金額ヲ管轄應ニ報告スルノ一項ヲ追加ス十五年七月三十一日國稅
金送納定則ヲ定ム其順序タル戶長ハ收束セル租稅ヲ郡區長ニ納致ス郡區長ハ之ヲ所在大藏省租
稅局出張所ニ納進ス各應若クハ其各部局ニ於テ直ニ領收シタル租稅モ亦同所ニ納進ス租稅局ハ
其各出張所ヨリ送納セル租稅ヲ領收シ之ヲ國庫ニ納入スルモノトス十六年十二月三日地租金代
米納領收順序ヲ定ム其順序タル町村各納主若クハ一町村納主ノ總代ヲシテ便宜ニ其豫定シタル
港津ニ納米ヲ輸送セシメ戶長ハ其港津ニ在リテ之ヲ收束シテ郡區役所ヨリ派出セル吏員ニ交付
ス郡區吏員ハ之ヲ檢査シテ其港津派出ノ大藏省納米領收員ニ交付ス而シテ戶長ハ其預リ切符ヲ以
テ郡區長ニ納致シ郡區長ハ其預リ切符ヲ租稅局出張所長ニ送付スルモノトス

琉球國ニ在リテハ明治十二年四月四月藩ヲ廢シテ沖繩縣ヲ置ク是ニ於テ從來ノ貢納ヲ廢シ縣應
ニ於テ其租稅ヲ直管收納セリ其徵收ノ順序ハ明治十二年沖繩縣甲第三號布達諸法度ノ儀更ニ改
正ニ及ハサル分ハ總テ從前ノ通り心得申スヘク此旨布達候事トイヘル規定ニ基クモノニシテ縣
ノ下ニ八役所間切番所役場(藏元)村屋等アリ役所ニ役所長以下ノ吏員番所又ハ役場ニ地頭代又ハ
主取以下ノ吏員藏元ニ藏元頭以下ノ吏員村屋ニ掟以下ノ吏員アリテ舊慣ニ從ヒテ徵收ノ事ニ當
レリ明治十三年十月以降沖繩縣ニ租稅局員ヲ派シテ租稅檢査收納ノ事ヲ管セシム仍テ同月十九
日沖繩縣稅品徵收順序ヲ定ム其順序タル沖繩縣管内ノ租稅ハ米穀砂糖反布等ノ物品ヲ以テ明治

十二年調査ノ總額ニ依リテ徵收ス縣令ハ田島段別及稅品ヲ詳記セル稅帳ヲ大藏卿ニ具進シ且ツ別ニ稅帳ニ詳密ナル仕譯書ヲ附シテ縣地派出ノ稅局員ニ交付ス而シテ稅局員ハ其仕譯書ニ照シ物品ヲ精査シ若シ不正ノ品ナリト認ムルトキハ則チ正品ヲ換納セシメ既ニ物品ヲ領收スレハ假領收證書ヲ縣令ニ交付ス縣令ハ之ニ上納書ヲ附シテ稅局長ニ送致シ稅局長ハ之ニ領收證書ヲ交付シ完納ニ至レハ縣令ハ皆濟帳ヲ製シ大藏卿ニ具申シ大藏卿ハ決算證ヲ交付スルモノトス

北海道ニ在リテハ本期ノ初メニ當リテハ未タ別ニ稅局出張所ヲ置カス從來ノ如ク開拓使アリ其下ニ開拓使支廳各郡分署等アリテ一般稅徵收ノ事ニ當ル明治十二年七月十六日各郡分署ヲ改メテ郡區役所ト稱シ十五年三月八日開拓使ヲ廢シテ道ニ三縣ヲ置ク十六年二月二十八日ニ至リ内地一般ノ例ニ倣ヒ函館ニ稅局出張所ヲ設置シ以テ稅ノ檢査收納ノ事ヲ掌ラシム其他北海道諸產物出港稅ヲ徵收スルカ爲メニ北海道諸港ニ船改所及船改派出所アルハ前段述フル所ニ同シ而シテ夫ノ北海道物產稅ハ本期ノ初メ開拓使時代ニ在リテハ支廳及出張所ニ於テ收納セリ然ルニ十五年三月廢使置縣以來ハ縣廳内ノ稅課ニ於テ專ラ其徵收事務ヲ管理シ稅官吏ヲ各地ニ派出シ檢査稅ノ事ヲ掌ラシム而シテ其之ヲ上納スル順序ハ明治十五年六月六日北海道物產稅納付順序ノ規定スル所ナリ其順序タル物產稅歲入豫算帳ヲ製シ前年六月三十日マテニ大藏卿ニ具申セシム而シテ物產稅品ヲ現品同漕ト地拂トノ二種ニ分チ其年三月三十一日限リ其種別數額ヲ稅局箱崎出張所ニ報告ス箱崎出張所ヨリ回送ノ積載船其地ニ到レハ則チ廣業商會代理人ノ立會ヲ得テ其種類等ヲ審査シ現品ヲ交付スルノ順序ヲ爲ス產地拂ニ屬スル稅品ハ其地ニ於

明治稅史第一卷

明治稅史第一卷

テ公賣セシメ其金額ハ毎月之ヲ纏メ翌月十日限リ箱崎出張所ニ送納スルモノトス而シテ其租稅局東京箱崎出張所ハ十五年五月十三日北海道物產稅ノ事務ヲ管理スルカ爲メニ設置スル所ニシテ十六年三月三日之ヲ廢止ス蓋シ同年二月二十八日稅局出張所ヲ函館ニ設置セルヲ以テナリ仍テ十六年五月一日北海道物產稅納付順序ヲ更定ス之ニ依レハ物產稅ハ縣廳ヨリ現品ヲ以テ稅局函館出張所ニ納付スルモノニシテ之ヲ同漕地拂ノ二種トシ更ニ地拂ヲ分チテ產地拂及國債局拂ノ二トス其同漕スヘキモノハ豫メ之ヲ通知シ函館出張所ヨリ同漕船及受領人ヲ派出セシメ產地拂ハ抽籤法ヲ以テ公賣スルモノトス之ヲ要スルニ本期間ニ於ケル稅徵收ノ地方機關ハ内地ニ在リテハ明治十四年十月以前ハ收稅委員出張所其以後ハ稅局出張所ヲ以テ其上級機關ト爲シ郡區長及戶長ヲ以テ其下級機關ト爲セリ而シテ府縣廳ハ多少之ニ關涉セルニ止レリ

沖繩縣ニ在リテハ縣ノ下ニ八役所間切番所役場藏元村屋等ノ下級機關アリテ徵稅ノ事ニ從ヒト三年十月以降内地一般ノ例ニ倣ヒ稅局員ヲ派シテ稅檢査收納ノ事ヲ管セシム

北海道ニ在リテモ亦其稅局出張所ヲ設置セルハ漸ク十六年二月以降ノコトニシテ本期ノ初ニ於テモ從來ノ如ク開拓使アリ其下ニ開拓使支廳及各郡分署アリテ一般稅徵收ノ事ヲ管セリ十二年七月各郡分署ヲ改メテ郡區役所ト稱シ十五年三月開拓使ヲ廢シテ道ニ三縣ヲ置ク同年五月海產稅務ヲ管掌スルカ爲メニ稅局箱崎出張所ヲ置キ物產稅其他北海道各縣ノ收納スル租稅ヲ檢査收納セシム其他北海道ニ北海道諸產物出港稅ヲ徵收スルカ爲メニ船改所及派出所アルハ前段述ヘタル所ニ同シ

第三期（明治十七年五月二十日乃至二十九年十月三十一日）
 明治十七年五月二十日租稅局出張所ヲ廢シ其事務ヲ府縣ニ屬ス是ニ於テカ六月十九日國稅金領收順序ヲ廢シ更ニ國稅收納順序ヲ定ム之ニ依レハ國稅金ハ郡區長毎納期ニ當リ其收納額ヲ各町村納額元帳ニ登記シ納稅期限十五日以前ニ於テ様式ニ照シ納稅切符ヲ製シ其納金額及ヒ納稅期限ヲ記入シ郡區役所ノ信印ヲ捺シ元帳ノ金額ニ割印シ之ヲ戶長ニ送達ス戶長ハ郡區長ヨリ納稅切符ヲ得レハ其町村一人別帳ニ據リ租稅金ヲ徵收シ納稅切符ニ證明シ現金ヲ添付シ國庫金取扱所若クハ大藏省爲換方ニ寄託ス國庫金取扱所若クハ爲換方ハ納稅切符ニ證明シテ戶長ニ交付ス戶長ハ之ニ證明シテ郡區長ニ送納ス郡區長ハ其甲乙納稅切符金額ト納稅元帳トヲ查照シ完納又ハ内納ノ金額ヲ元帳ニ記載シ且甲納稅切符ニ捺印シタル後甲乙ヲ分截シ乙ハ郡區役所ニ存留シ甲ハ戶長ニ付與シ以テ租稅完納ノ證明トス而シテ東京府十五區ニハ戶長ヲ置カザリシヲ以テ區長カ直ニ戶長ノ事務ヲ取扱ヘリ十一月二十四日地稅金代米納領收順序中租稅局出張所長及管轄廳トアルハ總テ收稅長ト改ム

十九年一月二十六日北海道ノ三縣ヲ廢シ北海道廳ヲ置ク三月六日歳入歳出納規則ヲ制定シ現行法規中此規則ニ牴觸スル條項ハ總テ之ヲ廢止セルヲ以テ從前ノ收納規則ハ概テ廢絶ス之ニ依レハ第一部歳入中内國稅ヲ徵收スルトキハ北海道廳長官若クハ府知事縣令ノ命ニ因リ郡區長ヨリ戶長若クハ各納稅者ニ對シ徵稅令書ヲ發ス戶長ハ徵稅令書ヲ受領シタルトキハ其町村一人別納額元帳ニ據リ各納稅者ニ徵稅傳令書ヲ交付スルモノトス關稅稅關ノ諸收入及物品ヲ以テ徵收スルモノ又ハ現金ヲ各應ニ收納スルヲ得ルモノヲ除キ其他ノ歳入ハ總テ納人ヲシテ現金ヲ金庫

ニ納付セシメ金庫ニ於テハ納人ヨリ歳入金ヲ領收スルトキハ其携帶シタル徵稅令書若クハ納額告知書ニ領收ノ證明ヲ記シ之ヲ納人ニ交付ス戶長ニ於テ收束シタル稅金ハ翌日マテニ之ヲ金庫ニ納付スルモノトス之ヲ前ノ十七年ノ領收順序ニ比スルニ大體ニ於テ異ルナシ

後二十一年四月十七日法律第一號ヲ以テ市町村制ヲ制定シ二十二年四月一日ヨリ地方ノ狀況ヲ酌量シテ之ヲ實施スルコト、ナリ尋テ二十二年三月十三日法律第九號ヲ以テ國稅徵收法ヲ定ム之ニ依レハ市町村制施行地方ニ在リテハ市町村ハ共市町村内ノ地租其他勅令ヲ以テ命スル租稅ヲ徵收シ之ヲ金庫ニ納付スル義務アルモノトス此種ノ租稅ヲ徵收スルトキハ府縣知事ハ市ニ郡長ハ町村ニ對シ徵稅令書ヲ發スヘシ市町村長ハ徵稅令書ニ據リ徵稅傳令書ヲ調製シ之ヲ各納稅人ニ發スヘシ各納稅人ハ稅金ヲ市町村收入役ニ拂込ミ其領收證明ニ市町村長ノ檢印ヲ得テ納稅ノ義務ヲ了ルモノトス但町村會ノ議決ヲ以テ町村長ニ收入役ノ事務ヲ委任スルコトヲ得市町村長ハ市町村收入役ニ於テ受領シタル稅金ヲ受取リ之ヲ金庫ニ拂込ミ其別符附領收證明ヲ得之ヲ收入官吏ニ差出シ其別符ノ切離及ヒ領收證明ノ檢印ヲ得テ其義務ヲ了ルモノトス其他ノ國稅ヲ徵收スルトキハ市ニ於テハ府縣知事町村ニ於テハ郡長ヨリ各納稅人ニ對シ徵稅令書ヲ發ス各納稅人ハ稅金ヲ金庫ニ拂込ミ其別符附領收證明ヲ得之ヲ收入官吏ニ差出シ其別符ノ切離及ヒ領收證明ヲ檢印ヲ得テ其義務ヲ了ルモノトス而シテ市制町村制未施行地方ニ在リテハ此法律ニ依リ市町村ノ爲スヘキ職務ハ區戶長ニ於テ之ヲ行フ但シ沖繩縣及東京府管轄小笠原嶋伊豆七嶋ニハ當分ノヲ施行セザルモノトス而シテ明治二十二年五月八日勅令第六十三號ハ各郡市役所所在地ニ府縣收稅部出張所ヲ設置シ收入官吏ノ職務及市ノ國稅徵收ニ關スル事項等ヲ掌理セシム是ニ於テカ此

年九月二十一日法律第二十三號ヲ以テ右ノ國稅徵收法中郡長ノ徵稅令書ヲ發スルノ職務ヲ罷メ地租及勅令ニ依リ市町村ニ於テ徵收スヘキ國稅ヲ徵收スルトキハ市町村ニ對シ其他ノ國稅ヲ徵收スルトキハ各納稅人ニ對シ府縣知事徵稅令書ヲ發スヘキモノトス右府縣收稅部出張所ハ其後地方官官制ノ改正ニ伴ヒ二十三年十月ニハ府縣直稅分署及間稅分署ト稱シ二十六年十月收稅署ト改稱セラレタリ

前顯二十二年三月ノ國稅徵收法ハ沖繩縣及ヒ東京府管轄小笠原嶋伊豆七嶋ニハ當分ノ施行セラルヘキコトヲ規定セルカ同年十二月二十八日勅令第四百一十一號ハ沖繩縣及ヒ東京府管轄小笠原嶋伊豆七嶋ノ國稅徵收ノ件ヲ定メ同所ノ國稅徵收ハ會計法實施後左ノ三條ノ外ハ從來ノ慣例ニ依ルヘントナセリ其所謂三條トハ(一)納稅人ハ稅金沖繩縣酒類出ヲ金庫ニ拂込ミ金庫ヨリ交付シタル別符附領收證ヲ收入官吏ニ差出シ其別符ノ切離及ヒ領收證ノ檢印ヲ受クヘシ(二)國稅品ハ納稅人ヨリ直ニ收入官吏ニ納付スヘシ(三)前條國稅品ハ會計法規ニ依リ收入官吏之ヲ取扱ヒ其賣却代金ヲ領收シテ金庫ニ拂込ムヘシ但稅品ノ會計ハ本稅所屬ノ年度ニ依ル是ナリ又二十三年二月二日法律第四號ハ北海道及ヒ町村制ヲ施行セサル嶋嶼沖繩縣及ヒ東京府管下伊豆七嶋小笠原嶋ヲ除クノ國稅徵收ノ件ヲ定ム之ニ依レハ北海道ニ於テハ水產稅ハ郡區長ヨリ水產物營業人組合ニ對シ徵稅令書ヲ發ス水產物營業人組合ハ其組合中ノ水產稅ヲ取纏メ之ヲ金庫ニ納付スヘシ其他ノ國稅ハ郡區長ヨリ戶長ニ對シ徵稅令書ヲ發ス町村制ヲ施行セサル嶋嶼ニ於テハ嶋司ヨリ戶長ニ對シ徵稅令書ヲ發ス而シテ戶長又ハ水產物營業人組合納稅委員ハ徵稅令書ニ據リ徵稅傳令書ヲ調製シ之ヲ各納稅人ニ發ス各納稅人ハ稅金ヲ戶長又ハ水產物營業人組合納稅委員ニ拂込

ミ其領收證ヲ受クヘシ戶長又ハ水產物營業人組合納稅委員ハ其領收シタル稅金ヲ金庫ニ拂込ミ其別符附領收證ヲ得之ヲ收入官吏ニ差出シ其別符ノ切離及領收證ノ檢印ヲ受クヘキモノトス東京府管下小笠原嶋及伊豆七嶋ニ在リテハ明治二十二年三月ノ國稅徵收法ヲ當分同嶋ニ適用セラルヘキコトヲ規定シ隨テ從來ノ例規ニ從フモノト爲セルカ尋テ同年十二月勅令第四百一十一號モ亦會計法實施後特定ノ條項ノ外ハ從來ノ慣例ニ依ルヘキモノト爲セルハ前ニ述ヘタル所ノ如シ而シテ同嶋ニ於ケル國稅徵收ノ慣例ハ(一)伊豆七嶋ノ地租ハ黃納金納ノ二種トス其納額ハ府知事之ヲ該嶋地役人ニ達ス地役人ハ更ニ各村名主ニ達シ名主ハ之ヲ各納稅人ニ達ス但地租ノ如キ異動ノ少キモノハ毎年達ノ手續ヲ爲サス而シテ其納付スヘキ租稅ハ物品納ト金納トヲ問ハス各納稅人ヨリ地租織立費送納費其他民費等ヲモ合セ相當ノ生絲ヲ以テ各村名主ニ送納ス名主ハ之ヲ織立物品納ノ分ニ對シテハ其製品ヲ金納ノ分ニ對シテハ製品ヲ賣却ノ上其代金ヲ嶋役所(地役人)ニ送付ス但貢納品ニ係ル生絲ハ製絲ノ時ヨリ名主之ヲ監督ス(稅品竝ニ稅金ノ送納費ハ各納稅人ノ負擔ニ屬ス又稅品竝ニ納金ノ不納或ハ地役人取纏メタル後ニ於ケル亡失ニヨリテ官損ニ歸シタルコト未タ曾テ是アラズ蓋シ萬一納メ難キ者アルトキハ名主ノ說諭ニ由リ親屬隣保ニ於テ辨納シ然ラサレハ名主一時之ヲ辨納シ置キ追テ償却ヲ受ク)地役人ハ稅品竝ニ稅金ヲ取纏メ一週年分ヲ翌年八月頃ニ至リ便船ノ節地役人持參東京府廳ニ納付ス收稅部官吏之ヲ領收ス(地役人持參ノ黃納ハ品位ヲ甄別シテ之ヲ領收シ更ニ之ヲ公賣ニ付シ其代金ヲ金庫ニ拂込ムモノトス而シテ其稅品公賣ノ手續ハ豫メ官報及二三ノ新聞紙ヲ以テ公賣時日等ヲ公告シ東京府廳内ニ於テ會計官吏之ヲ行ヒ公賣ノ終リタル後ハ代金及入札書類ヲ收稅部主任官ニ送付ス但公賣ノ節ハ收

税官吏列席スルモノトス(二)小笠原嶋ニハ所得税印紙稅船稅等ノ納税人アリト雖モ徵稅令書ヲ發
 セス嶋司適宜徵收シ置キ便船ノ節現金ヲ送納スルモノトス
 沖繩縣ニ在リテハ明治十七年五月二十日一般府縣ニ於テ租稅局出張所ヲ廢シ其事務ヲ府縣ニ屬
 スルヤ從來ノ縣地派出ノ租稅局員ヲ廢シ縣廳ニ收稅部ヲ置キ以テ其事務ヲ掌理セシム而シテ本
 縣ニ於ケル國稅徵收ノ順序ハ會計法實施以前ニ在リテハ縣ノ下ニ八役所間切番所及ヒ村屋等ア
 リテ徵稅事務ニ從ヒシカ十三年十月ニ至リ内地ト一般ニ租稅局員ヲ派出シテ租稅ノ檢査收納ヲ
 管セシメタルコト前述ノ如シ而シテ又本期ノ初ニ當リテ租稅局派出員ヲ廢止シタルカ十七年八
 月三十日ニ至テ更ニ那覇港ニ主稅局稅品取扱人ヲ置キ租稅ノ内物品收納ニ係ルモノヲ鑑定及ヒ
 保管セシム然ルニ十八年六月三日之ヲ廢シ本縣租稅ノ取扱ハ一ニ縣收稅部ノ所管ト爲ス是ニ於
 テカ本縣租稅領收順序ヲ改定ス其順序タル各納期二箇月以前ニ收稅長ハ各間切納額元帳ニ據リ
 其徵稅額ヲ役所長ニ告知ス而シテ其間順序ヲ經由シ役所長ハ各租稅皆濟期限後二箇月以内ニ皆
 濟報告書ヲ作り收稅長ニ送付ス收稅長ハ皆濟帳ヲ調査シ縣令ノ證印ヲ得テ各稅皆濟期限後四箇
 月以内ニ主稅局長ニ申報シテ決算ヲ爲スモノトス次テ會計法實施以後ニ在リテハ前顯二十二年
 十二月勅令第四百一十一號ハ沖繩縣及東京府管轄小笠原嶋伊豆七嶋國稅徵收方法ヲ規定シ特定ノ
 三條ノ外ハ從來ノ慣例ニ依リテ徵稅セリ而シテ明治二十六年九月ニ至リ其縣令第四十三號ヲ以
 テ國稅徵收法施行細則ヲ定ム之ニ依ルトキハ其地租ノ徵收ハ知事ヨリ各役所長ニ向テ其所轄内
 各間切ノ納額ヲ令達センカ爲メニ納額訓令ヲ發ス此納額訓令ハ地租納額及代金仕出簿ニ基キ收
 稅部稅務課ノ起案ニ依リテ各稅ノ納期ニ先チ發布スルモノトス役所長ハ右納額訓令ヲ受クルト

キハ納額帳ニ記入シテ各間切別ニ徵稅令書又ハ徵稅切符ヲ發ス(金納ニ對スルモノヲ令書トイヒ
 物納ニ對スルモノヲ切符トイフ)間切ニ於テ徵稅令書又ハ切符ヲ受クルトキハ地頭代ハ地租臺帳
 ニ基キテ納額ヲ各村ニ分配シ收納帳ヲ調製シ各村掟ニ宛テ傳令書ヲ發スルモノトス此細則ニ於
 テハ村ヲ以テ納稅者ト看做スナリ從テ徵稅傳令書ヲ得タル後村内ノ一個人ニ對シテハ如何ナル
 手續ヲ爲シ又村ニ於テハ如何ナル帳簿ヲ備フヘキカヲ規定セス蓋シ舊藩時代ニ在リテハ重ニ間
 切ヲ以テ納稅人ト認メ間切内ニ於ケル賦課徵收ノ事ハ一切之ヲ間切番所ニ放任シ唯仕明知行仕
 明請地等ニ付テハ請地狀所有者ヲ以テ納稅人ト認メタルモノニシテ要スルニ當時ハ間切ト個人
 ト二個ノ納稅者アルヲ認メタル組織ナリシナリ然ルニ廢藩置縣ノ後徵收上ノ便宜ヨリ一村ヲ以
 テ納稅者ト認メ藩制中個人別ニ納稅セシメタル仕明地請地等ニ對スル租稅ニ至ルマテ凡テ之ヲ
 村ニ於テ徵收シ納付スルノ組織ト改メタルナリ斯ノ如ク村ヲ以テ納稅者ト認ムルカ故ニ村内ニ
 於テ如何ナル賦課徵收ヲ爲スヘキカニ付テハ固ヨリ一定ノ例規アルコトナシ但シ明治二十六年
 三月縣令第七號ヲ以テ國稅徵收法施行細則ヲ定メタルトキニ當リテハ村ニ於テ傳令書ヲ受ケタ
 ルトキハ一人別帳ヲ調製シ上納告知書ヲ各負擔者毎ニ發布スヘク負擔者カ掟ニ納付スルトキハ
 上納證ヲ添付シ掟ヨリハ領收證ヲ交付スヘキ旨ヲ規定シタリ然ルニ村以下ニ於ケル手續ニ立入
 リテ規定スルハ一村ヲ以テ納稅者ト認ムル置縣以來ノ慣例ニ對シテ穩當ナラストイフノ點ヨリ
 同年九月之ヲ改メテ再ヒ放任ノ姿トナルニ至レルナリ但實際各村ニ就テ見ルトキハ多クハ右ノ
 規定ニ準據シテ一人別帳ヲ備ヘ上納告知書ヲ發シテ徵稅セリ是レ蓋シ施行細則改正ノ當時各役
 所ハ監督ノ必要ヨリ縣令ノ改正ニ係ラス從前ノ通り取扱置クヘキ旨ヲ命シタルニ由リテ然ルナ

リ尤モ是等ハ單ニ表面上ノ帳簿書類ニシテ實際ノ取扱上ニ於テハ舊藩以來ノ帳簿ヲ用フルヲ普通トス要スルニ右ノ細則ニ於テハ村以下ノ賦課徵收ニ關スルコトハ全ク之ヲ各村ニ放任スルノ組織ナリ而シテ右述フル所ノ如キ手續ニ依リ掟ニ於テ村内ノ税金ヲ取纏メタルトキハ上納證ヲ添付シテ地頭代(又ハ主取)ニ納入ス地頭代ハ掟ニ領收證ヲ交付シ徵稅令書分納ノトキハ納付書ヲ添付シテ金庫ニ納入シ其領收書ヲ受ケテ義務ヲ終ルモノトス稅品ノ納付モ亦略ホ同一ノ手續ヲ踏マシメ唯金庫ノ手ヲ經ルコトナク直ニ收入官吏ニ納付シテ其領收證ヲ受クルコトナレリト雖モ實際ニ於テハ税金ト異リ間切番所ニ納入スルコトナク表面上地頭代ノ領收證ヲ受取リタル上各村掟自ラ地頭代ニ代リテ那覇ニ來リ稅品ハ豫メ負擔者ヲシテ直接ニ那覇ニ運搬セシメ納付ノ手續ヲ了ルヲ普通トス而シテ稅品ノ收入及公賣ハ那覇藏所分任收入官吏ノ專ラ擔任スル所トス稅品ヲ收入スルニ當テハ米穀眞綿棕桐繩ノ類ハ收入官吏自ラ其品質ノ善惡ヲ檢査シ砂糖反布ハ鑑定人ノ鑑定ヲ經タル後各其數量ヲ稽査シテ收入スルモノトス而シテ從來砂糖反布ハ大阪ニテ其他ハ凡テ那覇ニテ會計法規ニ據リ競争入札ニ附シ公賣シ來レリ但シ宮古八重山久米ノ三嶋ニ於ケル徵收ノ手續ハ多少上述本嶋ニ於ケル手續ト異ル所ナキニ非スト雖モ繁雜ニ亘ルヲ以テ茲ニ之ヲ省ク其他燒酎稅ノ賦課徵收ハ收稅部直接ニ之ヲ行ハス收稅部ニハ營業者ノ開廢業ニ依リテ加除訂正ヲ爲シタル臺帳ヲ備ヘ置キ徵收上ノ監督ヲ爲スノミニシテ實際ノ賦課徵收ハ從來ノ慣行ニ基キ各役所ニ酒造免許稅臺帳ヲ備置カシメ本縣國稅徵收法施行細則ノ定ムル手續ヲ履ミテ徵收スルモノトス而シテ琉球形船稅ノ賦課徵收モ亦燒酎稅ト同シク專ラ各役所ノ取扱ヲ所ニシテ收稅部ハ單ニ造船解船ノ都度役所又ハ所有者ヨリノ届出ニ基キ加除訂正ヲ爲セル船稅臺

帳ヲ備ヘ役所ノ徵收事務ヲ監督スルニ止レリ而シテ各役所ニ於テハ船稅臺帳ヲ備ヘ有稅船及五反帆以上無稅船ノ現在數ヲ明ニシ置キ之ニ由リテ本縣國稅徵收法施行細則ノ規定ニ從ヒ徵收スルモノトス其他明治二十一年三月二十一日勅令第十二號ハ沖繩縣酒類出港稅則ヲ定メ那覇港ニ船改所ヲ置キテ他府縣ニ輸出スル酒類ニ對シテ課稅セリ然ルニ明治二十九年三月五日勅令第十三號ヲ以テ沖繩縣郡編制ニ關スル件ヲ定メ那覇首里兩區ノ區域ヲ除ク外沖繩縣ヲ畫シテ五郡トシ同日勅令第十四號ハ沖繩縣郡區職員ニ關スル件ヲ定メ同日勅令第十九號ハ沖繩縣區制ヲ定ム是ニ於テカ從來ノ役所及ヒ役場ヲ廢止ス

北海道ニ於ケル國稅徵收ノ手續ハ前顯十七年六月ノ國稅金領收順序十九年三月ノ歲入歲出出納規則二十二年三月ノ國稅徵收法二十三年二月ノ北海道及町村制ヲ施行セサル嶋嶼ノ國稅徵收ノ件等ノ規定スル所ニシテ今茲ニ記述スルノ要ナシ唯特記ヲ要スルモノハ北海道物產稅及北海道諸產物出港稅ヲ徵收スルノ手續ナリトス抑々物產稅ハ前第二期ノ終ニ在リテハ縣ノ租稅官吏ヲ各地ニ派出シテ檢査收稅ノ事ヲ掌ラシメ縣ノ徵收シタル現品ヲ租稅局函館出張所ニ納付スルモノト爲セルカ本期ノ初メ即チ十七年五月二十日租稅局函館出張所ヲ廢スルヤ北海道物產稅品價格査定及ヒ收入整理ノ爲メ特ニ主稅官吏ヲ派シテ從來租稅局出張所ノ掌理セシ所ヲ行ハシム然ルニ十八年四月六日之ヲ廢シ更ニ本道各縣ニ共事務ノ取扱ヲ委任シ北海道物產稅品回漕及ヒ地拂取扱心得ヲ定メ尋テ十九年一月三縣ヲ廢シ道廳ヲ置キ三月十二日十九年以後北海道物產稅收納取扱手續ヲ定メ現金收納ノモノハ每一月額ヲ收束シ稅品各種ノ數量仕譯書ヲ製シ翌月十日ヲ限リ之ヲ大藏省ニ發送セシム收納ノ物品ハ其應ニ於テ之ヲ公賣シ清國直輸出ニ係ル昆布ハ其應

賣却地ノ價格ヲ以テ備荒儲蓄課ニ賣付シ其代金ハ現今收納ノ手續ニ據ル而シテ其賣却シタルモノハ其品目數量代金ノ仕譯書ヲ製シ七日以内ニ之ヲ大藏省ニ發送セシムルモノトス右物産稅ノ外北海道ニ諸產物出港稅ヲ徵收スルカ爲メニ船改所船改派出所ノ存在セルコトハ前第二期ニ於ケルト異ナルナシ然ルニ二十年三月二十八日勅令第六號ヲ以テ北海道水産稅則ヲ定メ水産物營業人組合ヲ置ク其稅則ニ曰ク北海道廳長官ハ水産稅ヲ徵收センカ爲メニ各地ニ水産物營業人ノ組合ヲ定メ營業人ヲシテ必ス之ニ加入セシメ組合ニ收稅委員ヲ置キ其組合ニ係ル徵收納付ノ事ヲ擔理セシムト此時以後北海道諸產物出港稅其他物産稅ニ關スル從前ノ布告命令規則ヲ廢止ス從テ船改所船改派出所モ亦廢セラレ二十年二月法律第八號ハ右北海道水産稅則中ヲ改メ徵收ノ責任ヲ組合ノ負擔ニ歸セシメ收稅委員ヲ納稅委員ト改ム而シテ同月ノ法律第四號北海道及町村制ヲ施行セサル嶋嶼ノ國稅徵收ノ件ハ水産稅ハ郡區長ヨリ營業人組合ニ對シ徵稅令書ヲ發シ營業人組合ハ其組合中ノ水産稅ヲ取纏メ之ヲ金庫ニ納付スヘキモノトシ其他納稅委員ノ職務ニ付キテ規定シタルコトハ前既ニ述フル所ノ如シ

之ヲ要スルニ本期ニ於テハ各地一般ニ地方廳ヲ以テ地方收稅ノ上級機關ト爲セリ唯其下級機關竝ニ特別機關ニ至リテハ處ヲ異ニシ時ヲ異ニシ租稅ヲ異ニスルニ隨ヒテ多少相同カラサルモノアリ之ヲ詳言スレハ内地ニ於ケル下級機關ノ變遷ハ之ヲ四小期ニ區分スルコトヲ得其第一小期一在リテハ郡區長及町村戶長其第二小期(二十二年四月乃至同年六月)ニ在リテハ市町村制施行地方ハ市若クハ郡町村未施行地ハ郡長及戶長其第三小期(二十二年七月乃至九月)ニ在リテハ右諸機關ノ外別ニ府縣收稅部出張所其第四小期ニ在リテハ一方ニ府縣支衙府縣收稅部出張所府縣直稅

分署及間稅分署收稅署他方ニハ市町村市町村制施行地方又ハ戶長若クハ嶋司及戶長市町村制未施行地方ハ二十三年二月以前ハ郡長及戶長同月以後ハ嶋司及戶長ヲ以テ收稅ノ機關トス小笠原嶋ニ在リテハ嶋司伊豆七嶋ニ在リテハ地役人及ヒ名主ヲ以テ收稅ノ機關ト爲ス沖繩縣ニ於ケル下級機關ノ變遷ハ之ヲ二小期ニ分ツコトヲ得其第一小期即チ二十九年三月以前ニアリテハ役所番所役場及ヒ藏元村屋及ヒ村番所其第二小期ニアリテハ一方ニ郡以下間切番所藏元村屋村番所他方ニ區アリテ收稅ノ事ニ關セリ其他本縣ニ於ケル特別ノ機關ニハ他府縣ニ輸出スル酒類ニ對シテ出港稅ヲ徵收スルカ爲メニ二十一年三月以降那覇船改所アリ稅品ノ鑑定保管ヲ掌ラシムルカ爲メニ十七年八月那覇ニ主稅局稅品取扱人ヲ置キ十八年六月之ヲ廢シ更ニ縣收稅部ノ管理ニ屬スル藏所ヲ那覇ニ置キテ稅品ノ收入及公賣等ノ事ヲ管セシム而シテ北海道ニ於ケル上級機關ハ十九年一月以前ハ縣ニシテ同年同月以降ハ道廳ナリトス而シテ其下級機關ニハ一方ニ郡區長他方ニ戶長アリテ收稅ノ事ニ當リ其他本期ノ初メニ當リテハ物産稅品價格査定及收入整理ノ爲メニ特ニ主稅官吏ヲ派出セルカ十八年四月之ヲ廢シ凡テ本道各縣ノ所管トシ越エテ十九年一月三縣ヲ廢シ道廳ヲ置クヤ更ニ之ヲ道廳ノ管理トス此外諸產物出港稅ヲ徵收スルカ爲メニ船改所船改派出所アリ然ルニ二十年三月ニ至リテ物産稅出港稅ヲ一括シテ水産稅トナシ水産物營業人組合ヲ置キテ其特別ノ收稅機關トセリ而シテ其水産物營業人組合ハ二十三年二月以前ニ在リテハ直接ニ道廳ニ屬シ同年同月以後ニ在リテハ郡區長ノ下ニ屬シテ徵稅ノ事ニ從ヘリ

第四期 (明治二十九年十一月一日乃至三十五年十二月三十一日)

(一) 前期

明治二十九年十月二十日勅令第三百三十七號ハ稅務管理局官制ヲ制定シ其附則ヲ以テ此年十一月一日ヨリ之ヲ施行シ但北海道ハ翌三十年四月一日ヨリ施行ス二十六年勅令第二百二十二號各省官制通則及同年勅令第六十二號地方官官制中收稅長收稅屬收稅部收稅署ニ係ル條項ハ本令施行ノ日ヨリ之ヲ廢止シ且同日勅令第三百四十二號ヲ以テ二十四年勅令第十一號北海道廳官制第十九條中財務部事務條項第三號ヲ削リ稅務管理局官制實施ノ日ヨリ施行スルコトハ是ニ於テカ從來久シク地方廳ニ附屬シタル國稅徵收ノ事務ハ全ク大藏大臣ノ管理ニ屬スル稅務管理局ノ管掌スル所トナルニ至レリ而シテ右ノ稅務管理局官制ハ更ニ管理局管內須要ノ地ニ稅務署ヲ設置スヘキコトヲ規定セリ斯ノ如クニシテ稅務行政機關ヲ普通行政機關ヨリ分離シタルハ我國從來ノ官制ニ一新機軸ヲ出シタルモノニシテ之ニ由テ大ニ稅務ノ統一敏捷ヲ得ルニ至リ全國ハ凡テ稅務管理局及稅務署ノ管轄ニ屬スルコトハナレリ尋テ三十年三月二十六日法律第二十一號國稅徵收法並ニ六月二十二日勅令第二百二十一條國稅徵收法施行規則ハ右ノ稅務管理局及稅務署ノ下ニ立テ活動スル所ノ收稅ノ機關ヲ明定セリ之ニ依レハ市町村制施行地方ニ在リテハ市町村ハ其市町村內ノ地租及勅令ヲ以テ命シタル國稅ヲ徵收シ其稅金ヲ國庫ニ送付スルノ責任アルモノトシ國稅ヲ徵收セントスル時ハ收稅官吏又ハ市町村ハ納稅人ニ對シ其納金額期日及納付場所ヲ指定シ之ヲ告知スヘキモノトス收稅官吏國稅ヲ徵收セントスルトキハ納稅人ニ對シ其納金額納期日及納付場所ヲ記載シタル納稅告知書ヲ發シ納稅人納稅告知書ヲ受ケタルトキハ稅金ニ納稅告知書ヲ添ヘ之ヲ指定ノ場所ニ納付スヘキモノトス各市町村ニ於テ徵收スヘキ國稅ハ收稅官吏其金額ヲ調査シ之ヲ市町村ニ通知シ市町村ハ其ノ通知ニ依リ納稅人ニ對シ其納金額納期日

及納付場所ヲ記載シタル納稅告知書ヲ發ス納稅人納稅告知書ヲ受ケタルトキハ稅金ニ納稅告知書ヲ添ヘ之ヲ指定ノ場所ニ納付シ市町村ニ於テ稅金ヲ領收シタルトキハ領收證書ヲ納稅人ニ交付シ市町村ノ領收シタル稅金ハ送付書ヲ添ヘ之ヲ金庫ニ送付スヘキモノトス市制町村制ヲ施行セサル地方稅務署所在ノ戶長ハ稅務署收稅官吏ノ通知ヲ受ケ其町村內ノ國稅酒類 石ヲ徵收シ之ヲ金庫ニ拂込ムヘキモノトシ北海道水產物營業人組合ハ本法ニ於テ市町村ニ準シ水產稅ハ水產物營業人組合ニ於テ徵收シ金庫ニ送付スルモノトス但シ右ノ徵收法ハ沖繩縣及東京府管內小笠原嶋伊豆七嶋ニハ當分ニ施行セサルモノトス隨テ小笠原嶋伊豆七嶋ニ於ケル下級ノ收稅機關ハ前第三期ニ於テ述ヘタル所ニ異ナラス唯沖繩縣ニ在リテハ前期ニ於テ述ヘタル明治二十二年勅令第四百一十一號ニ基キ徵收スルモノニシテ稅務署ノ下ニ收稅ニ關與スルモノハ區間切嶋及村ノ吏員是ナリ而シテ間切嶋及村ノ吏員ニ關シテハ明治三十年三月二十九日勅令第五十六號ノ定ムル所ナリ而シテ右ノ國稅徵收法ハ市町村制ヲ施行セサル地方ニ於テ本法中市町村ニ關スル條項ヲ適用スヘキ公共團體ハ別ニ勅令ヲ以テ之ヲ指定スヘキコトヲ規定セルカ三十三年三月十九日勅令第四十七號ヲ以テ北海道區制ニヨル區ヲ同年六月九日勅令第二百六十號ヲ以テ北海道一級町村制ニ依ル町村ヲ右ノ公共團體ト指定セリ隨テ此時以降北海道ニハ二様ノ機關ノ並行スルコトハナレリ一ハ區及一級町村制ニヨル町村ニシテ他ハ其他ノ町村ニ於ケル戶長ナリトス之ヲ要スルニ本期ニ於テハ全國一般ニ稅務管理局及稅務署ナル收稅機關アリテ內國稅務ヲ主管シ其下ニハ市町村制施行地方ニ在リテハ市町村市町村制未施行地方ニ在リテハ戶長ヲ以テ收稅ノ機關ニ充ツ但シ小笠原嶋ニ在リテハ嶋司伊豆七嶋ニ在リテハ地役人及ヒ名主沖繩縣ニ在リテ

ハ區、間切、嶋及村ノ吏員ヲ以テ下級ノ收稅機關トシ北海道ニ在リテハ三十三年三月及七月以降ハ二様ノ機關並行シ一方ニハ區制ニ依ル區及一級町村制ニ依ル町村他方ニハ一般町村ニ於ケル戶長アリ而シテ水產稅徵收ノ爲メニハ特ニ北海道水產物營業人組合アリテ以テ收稅ノ事ニ當レリ

(二) 後期

明治三十五年十月勅令第二百四十一號ヲ以テ稅務監督局官制ヲ制定シ其附則ヲ以テ此年十一月五日ヨリ本令ヲ施行シ稅務管理局官制及明治二十九年勅令第三百四十六號ハ本令施行ノ日ヨリ之ヲ廢止ス而シテ稅務監督局ハ大藏大臣ノ管理ニ屬シ内國稅ニ關スル事務ヲ監督スルモノニシテ全國ニ十八ノ監督局ヲ置キ同年十月勅令第二百四十二號ヲ以テ稅務署官制ヲ定メ大藏大臣管理ノ下ニ國稅徵收ノ事務ヲ執行セシムルコト、セリ而シテ稅務監督局及稅務署ノ下ニ立テテ活動スル所ノ收稅ノ機關並ニ國稅徵收ノ方法ニ至リテハ稅務管理局及稅務署ノ時ト敢テ異ル所ナシ唯北海道ニ於テハ明治三十五年二月勅令第三十七號ヲ以テ北海道二級町村制ヲ定メ同年勅令第五十五號ヲ以テ國稅徵收法第三十三條第三項ニヨリ之ヲ公共團體ト指定シ又文運ノ進歩ニ伴ヒ北海道經營ノ必要ヨリシテ北海道水產稅ヲ同道地方稅ノ財源ニ移シ沖繩縣ニ於テハ從來地租條例及國稅徵收法施行セラレサリシカ近來土地整理ノ事務略々完成ノ域ニ進ミタルヲ以テ三十五年十二月二十五日勅令第二百七十五號ヲ以テ三十六年一月一日ヨリ之ヲ宮古八重山兩郡ニ施行スル旨公布セラレ同時ニ勅令第二百七十七號ヲ以テ沖繩縣間切嶋ヲ國稅徵收法第三十三條第三項ニヨリ公共團體ト指定セシ等ハ其ノ異ル點ナリトス

二 海關稅務地方機關

海關稅務地方機關ノ沿革ハ分チテ三期トス其第一期ハ大藏省ノ所管外ニ立テルノ時代ニシテ第二期及第三期ハ其所管トナレルノ時期トス而シテ第二期ハ官制ノ未タ完備セサル時代ニシテ第三期ハ官制ノ完備セルノ期トス

第一期 (明治更始乃至四年八月)

安政以降舊幕府長崎、神奈川、函館、兵庫諸港及大阪市場ヲ開キ各港ニハ運上所ヲ置キテ以テ稅關ノ事務ヲ行ハシム明治ノ初メ右四港ノ外大阪ノ開市場ヲ改メテ開港場ト爲シ又新ニ新潟港及東京市場ヲ開キ大阪及新潟兩港ニ運上所ヲ設置シ以テ稅關ノ事務ヲ執行セシム當時之ヲ統轄スルハ外國事務局ニシテ各其地方官ヲシテ其事務ヲ措置セシメタリキ後外國官ノ所管ニ轉シ尋テ外務省ニ移リ明治四年八月ニ至リテ大藏省ノ所管ニ歸ス

第二期 (明治四年八月乃至十九年三月二十四日)

明治四年八月從來外務省ノ管理セル各港開市場ノ稅務ヲ大藏省ニ轉屬スルヤ之ヲ東京、大阪ノ二府、開拓使、神奈川、兵庫、長崎、新潟ノ四縣ニ訓示シ姑ラク舊ニ仍リテ事務ヲ措置セシム尋テ同年十月ニ及ヒテ先ツ神奈川運上所ヲ租稅寮ノ直管ト爲シ五年五月十三日神戸運上所ヲ七月朔日大阪運上所ヲ同日日關長崎運上所ヲ孰レモ租稅寮ノ直管ト爲ス而シテ五年十一月二日橫濱運上所ヲ本局ト稱シ各港運上所ヲ統轄セシム同月二十八日從來或ハ運上所トイヒ或ハ稅關トイヒ稱呼一ナラサリシヲ爾後總テ稅關ト稱セシム七年一月二十日橫濱稅關本局ノ稱ヲ廢シ隨テ各港稅關ヲ以テ租稅寮ノ直管ニ復ス八年八月十五日開拓使ノ管轄セル函館稅關ヲ租稅寮ノ直管ト爲シ九月新潟縣ノ管轄セル新潟稅關ヲ租稅寮ノ直管ト爲ス是ニ至リテ各港稅關ハ總テ大藏省ノ直管ニ歸ス

斯ノ如ク本期内ニ在リテハ稅關ノ管理屢變更シ其關係錯雜ナリシノミナラス其官制モ未ダ整備セザリキ

第三期 (明治十九年三月二十五日乃至三十六年十二月三十一日)

然ルニ十九年三月二十五日ノ稅關官制ハ大ニ從來ノ官制ヲ釐革シ茲ニ初メテ秩序整然タル稅關ノ官制ヲ見ルニ至レリ爾來幾回カ改正セラル、所アリタリト雖モ基ク所ハ此官制ニ在リ

三 臺灣稅務機關

地方ニ於ケル稅務機關中特別ノ地位ヲ有スルモノヲ臺灣ノ稅務機關トス蓋シ臺灣ニ於テハ其歲入歲出特別會計トナリ居ルノミナラス其稅法ノ制定及ヒ租稅ノ賦課徵收等一ニ臺灣總督ノ管理スル所ナリ

臺灣ニ於ケル稅務機關ハ分チテ二トス一ハ中央機關ニシテ他ハ地方機關ナリ地方機關ハ更ニ又內國稅務地方機關及海關稅務地方機關ニ分ツ其中央機關ハ臺灣總督府ニシテ內國稅務地方機關ハ明治三十四年十一月以降廳及支廳街庄社長ナリ而シテ海關稅務地方機關ハ臺灣總督府稅關ナリトス要スルニ是等ノ諸機關ハ孰レモ明治二十九年三月以後ノ設置ニ係ルモノナリトス

第三 附屬機關

廣ク附屬機關トイフトキハ此題ノ下ニ述フヘキ署衙頗ル多シト雖モ今茲ニハ是等ノ附屬機關ノ中最主要ナル四機關ニ就キ其沿革ヲ述ヘ他ノ附屬機關ハ總テ中央機關ノ沿革中附屬署衙ノ題下ニ於テ敘述セントス而シテ所謂最重要ナル四機關トハ第一造幣機關第二印刷機關第三葉煙草專賣機關第四金庫是ナリ

一 造幣機關

造幣機關ノ沿革ハ分チテ二期トス第一期ハ制度上中央機關ノ一部タリシ時代ニシテ第二期ハ事實上竝ニ法制上全然大藏省ノ附屬機關タルノ時代トス

第一期 (明治元年閏四月二十一日乃至十九年二月二十五日)

維新ノ初メ造幣ノ機關ハ太政官ノ管理ニ屬シ舊幕府以來ノ金銀錢座ニ於テ造幣ノ事ニ從ハシメシカ明治元年閏四月二十一日會計官ヲ設クルヤ同官中ニ貨幣司ヲ置キ貨幣鑄造ノ事務ヲ管掌セシムルコト、ナレリ二年二月五日貨幣司ヲ廢シテ太政官中ニ造幣局ヲ置キ爾來暫ク造幣ノ機關ハ會計官ノ所管外ニ立テルカ此年四月八日復タ會計官ニ轉屬スルコト、ナレリ七月八日會計官ノ廢セラレテ大藏省ノ起ルヤ省中ニ造幣寮ヲ置キ十年一月十一日本寮ヲ廢シテ更ニ造幣局ヲ置キ以テ十九年二月ニ至レリ以上明治更始以降十九年二月ニ至ルノ間造幣機關ノ管掌事務事務分掌ノ方法其他職制等ニ關シ幾回カ變革スル所アリシト雖モ要スルニ當時本機關ハ少クモ制度上ハ中央機關ノ組織ノ一部ヲ構成シ其變革ハ大體上常ニ本省ノ變革ニ伴ヒ唯瑣細ナル改革ノ特別ナルモノアリタルノミ

第二期 (明治十九年二月二十六日乃至三十五年十二月三十一日)

明治十九年二月二十六日改正ノ大藏省官制ニ於テハ造幣局ヲ本省官制ノ組織中ヨリ分離シ尋テ同年四月十五日造幣局獨立ノ官制ノ發布アリ茲ニ始メテ事實上竝ニ法制上全然大藏省ノ附屬機關トナルニ至リ爾後數、大藏省官制ノ釐革アリシト雖モ造幣局官制ノ改變ハ必スシモ之ニ伴フコトナカリシ而シテ造幣局官制ハ亦數度ノ更正ヲ經タルカ其詳細ハ之ヲ後章ニ讓ル

二 印刷機關

印刷機關ノ沿革ハ之ヲ分チテ前述造幣機關ノ沿革ト均シク第一期制度上大藏省ノ組織ノ一部ヲ成スノ時代第二期事實上並ニ制度上全然大藏省ノ附屬機關タルノ時代ノ二期トス

第一期 (明治四年七月二十七日乃至十九年二月二十五日)

維新ノ初メ紙幣印刷ノ事務ハ太政官ノ管理スル所ナリシカ明治四年七月二十七日ニ至リ大藏省ニ紙幣司ヲ置キテ之ヲ管掌セシムルコト、ナレリ同年八月十日紙幣司ヲ改メテ紙幣寮ト稱シ十年一月十一日紙幣寮ヲ廢シテ紙幣局ヲ置キ十一年十二月十日更ニ之ヲ印刷局ト改稱セリ而シテ其管掌事務分掌ノ方法其他職制等屢ニ變改セラル、所アリタリト雖モ要スルニ十九年二月以前ハ前述造幣機關ト均シク中央機關ノ一部ヲ構成シ其變革ハ大體上常ニ本省ノ釐革ニ伴ヒシナリ

第二期 (明治十九年二月二十六日乃至三十一年十月二十二日)

明治十九年二月二十六日ノ大藏省官制改革ハ印刷局ヲ本省官制ノ組織中ヨリ分離シ尋テ同年四月十五日印刷局獨立ノ官制ヲ發布シ茲ニ事實上並ニ制度上全然大藏省ノ附屬機關トナルニ至レリ是ヨリ後大藏省ノ官制ハ幾度カ變改セラレタルモ印刷局ノ官制ハ敢テ之ニ關ラスシテ數度ノ改正ヲ經タリ然ルニ三十一年十月二十二日ニ至リ遂ニ大藏大臣ノ管理ヲ離レテ内閣總理大臣ノ管理ニ歸屬スルコト、ナレリ

三 葉煙草專賣機關

葉煙草專賣機關ノ沿革ハ之ヲ分チテ二期トス第一期ハ大藏省主稅局管掌ノ時代ニシテ第二期ハ一箇獨立ノ附屬機關トシテ存立セルノ時代トス

第一期 (明治三十年四月二十一日乃至三十一年十月二十一日)

明治二十九年三月法律第三十五號ヲ以テ葉煙草專賣法ヲ制定シ葉煙草專賣ノ事業ヲ以テ主稅局ノ管掌ニ屬セシメ尋テ三十年四月二十一日葉煙草專賣所ヲ各地方ニ設置シ其官制ヲ制定シ五月三十一日ニハ其消極的ノ管轄區域ヲ定メ十一月十一日ニハ其積極的ノ管區ヲ確定シ以テ專賣ノ機關其活動ノ區域並ニ其方法ヲ明ニセリ然レトモ當時未タ此事業ノ爲メニ一箇獨立ノ機關ヲ設ケテ專管セシムルニ至ラザリシナリ

第二期 (明治三十一年十月二十二日乃至三十五年十二月三十一日)

社會ノ需要ト事業ノ擴張トハ勢ヒ專賣事業ノ爲メニ獨立ノ一局ヲ設置スルノ必要ニ迫マリ遂ニ三十一年十月二十二日專賣局官制ノ制定ヲ見ルニ至レリ是ヨリシテ專賣ノ事業ハ漸ク獨立セル一局ノ提理スル所トナレリト雖モ其地方機關タル葉煙草專賣所ニ至リテハ唯專賣局官制制定ノ當然ノ結果トシテ生セル管理者ノ變更ノ外別ニ釐革ヲ加フル所ナシ然ルニ三十二年四月二十一日ニ至リテ前ノ葉煙草專賣所ヲ廢シテ各地方ニ專賣支局ヲ置ケリ是ニ於テカ葉煙草專賣事業ニ關スル機關ハ中央地方俱ニ其舊態ヲ一新スルコト、ナレリ明治三十五年十月三十一日勅令第二百三十七號ヲ以テ再ヒ專賣局官制ヲ改正シ專賣局ハ葉煙草ノ耕作、檢査、査定、收納、輸入、輸出、保管、賣渡、煙草ノ營業及專賣取締ニ關スル事務ヲ掌ル而シテ專賣局ハ之ヲ東京ニ置キ各地方ニ專賣支局ヲ置クコト舊ノ如シ

四 金庫

此ニ金庫トハ國庫ノ現金ヲ保管出納スル附屬機關ヲ概稱スルモノナリ這般機關ノ沿革ハ明治二

十三年四月一日金庫規則ノ實施ヲ界トシ分チテ二期トス其第一期ハ少クモ中央金庫ノ出納ハ政府直接ニ管掌セル時代ニシテ其第二期ハ現金ノ保管出納ハ一切銀行ヲシテ掌理セシメ政府ハ專ラ監督者タルノ地位ニ立テルノ時代トス

第一期 (明治更始乃至二十三年三月三十一日)

本期ニ在リテハ我國ノ金庫制度尙ホ幼稚ニ屬シ一方ニハ所謂金庫アリ他方ニハ複雑ナル現金出納ノ機關アリ而カモ現金出納事務ノ一部ハ政府直接ニ之ヲ掌理セリ
此ニ所謂金庫トハ二十二年制定ノ金庫規則ニ所謂金庫ニ非スシテ金銀貨幣ヲ藏置スル倉庫ヲ云フモノニシテ斯ノ如キ金庫ハ右ノ金庫規則制定以降全ク廢棄ニ屬セリ而シテ此金庫ノ沿革ハ其主管局司ノ異ルニ隨ヒテ之ヲ二期ニ分ツ其前期即チ十九年一月十六日以前ニ在リテハ金庫ハ主トシテ出納司(寮局)ノ所管ニ屬シ監督司(検査寮局)ノ監督ヲ受ケタリシカ其後期即チ十九年一月十六日以後ニ在リテハ新ニ金庫局起リテ金庫ヲ主管シ唯出納局ノ關涉ヲ受クルコト、ナレリ
現金出納ヲ司ル附屬機關トシテノ金庫ノ沿革ハ二十年四月一日國庫金出納所ノ設置ヲ限界トシテ之ヲ前後ノ二期ニ分ツ得ヘシ其前期ハ機關複雜ニ關係錯綜セルノ時期ニシテ其後期ハ機關單純ニ關係亦明瞭ナル時期トス而シテ前期ハ更ニ十六年五月ヲ界トシテ二期ニ分ツ其前期ハ即チ一種ノ機關ノ存在セル時期ニシテ其後期ハ二種ノ機關ノ竝立セルノ時期トス蓋シ明治元年二月始メテ爲換方ヲ置キ同年十二月ニハ爲換用達ト稱シ二年正月ニハ更ニ復タ之ヲ爲換方ト改メ超テ五年八月爲換方ノ名稱ヲ廢シ本省爲換用掛ヲ置ク十一年十二月更ニ税金預所ヲ置キ十二年五月之ヲ大藏省爲換方ト改メタリ然ルニ十六年五月ニ至リテ從來ノ爲換方ヲ廢シ國庫金取扱所

ヲ置キテ國庫ノ收納金ヲ取扱ハシメ六月金錢取扱方及ヒ現金取扱方ヲ置キテ國庫ノ支出金ヲ取扱ハシム是ニ於テ一時收納機關支出機關ノ二機關相對立スルコト、ナレリ後十八年六月現金支拂所ヲ設置シテ支出主管ノ機關ト爲シ以テ金錢取扱方及現金取扱方ニ代ハラシム右ノ外各應ニハ六年七月以降各應爲換方アリシカ二十年四月一日國庫金出納所ヲ設置シテ從來ノ國庫金取扱所現金支拂所及各應爲換方等ハ凡テ之ヲ廢止セリ是ニ於テカ現金出納ノ事務ハ中央金庫及大阪金庫局出張所ノ出納事務ノ外ハ悉ク日本銀行ノ掌理スル所トナレリ

第二期 (明治二十三年四月一日乃至三十五年十二月三十一日)

第一期ニ在リテハ現金出納ノ事務ハ政府直接ニ之ヲ管掌シタリト雖モ二十二年十二月金庫規則ヲ制定シ二十三年四月一日ヨリ施行セラレ是ヨリシテ金庫ノ現金保管出納ノ事ハ一ニ之ヲ日本銀行ニ委任シ政府ハ唯之カ監督者タルノ地位ニ立ツコト、ナレリ爾來金庫規則及其附屬規定ノ改正ナキニ非サリシト雖モ其根本ノ精神ニ至リテハ敢テ革マルコトナク金庫制度ハ茲ニ完備ノ域ニ達シタリト謂フヘシ

第四 監督機關

監督機關ノ沿革ハ之ヲ分チテ四期トシ第一期ハ中央財政機關ノ一部局ヲ以テ之ニ充テタルノ時期ニシテ第二期以後ハ中央機關ノ一部局ノ外別ニ獨立ノ監督機關ノ存立セルノ期トス而シテ其第二第三第四ノ分期ハ則チ此種獨立機關ノ地位竝ニ權力ヲ標準トシテ之ヲ畫セルモノナリ之ヲ詳言スレハ第二期ハ大藏省ノ一局タル精算局(後ニ調査局ト改稱)ノ外太政官中ニ會計部竝ニ會計検査院ノ二機關竝立スルアリテ監督機關ノ權力ハ最盛ナル時期ナリトス第三期ニ至リテ會計

部ハ廢セラレ大藏省中ノ一局タル調査局後ニ主計局ト改稱ノ外ニハ唯一ノ會計検査院アリテ財政ヲ監督シ而モ其會計検査院ハ昔ニ本期ニ入りテ其權限ヲ減縮セラレタルノミナラス其地位未タ獨立スルニ至ラサルヲ以テ隨テ十分ニ其權力ヲ振フコトヲ得サリシナリ然ルニ第四期ニ入ルニ及ヒテハ大藏省ノ一局タル主計局ノ外全然其地位ニ於テ一般行政機關ヨリ特立セル帝國議會及ヒ會計検査院ノ二機關並立シテ以テ財政ヲ監督シ制度上ニ於テ最完備シ又最權力ノ強大ナル監督機關ノ存在ヲ見ルニ至レリ

第一期 (明治二年五月八日乃至十三年三月四日)

明治維新以降財政監督ノ機關ノ起リタルハ監督司ヲ以テ始トス而シテ此事タル時ノ參與外國官副知事兼會計官副知事大隈八太郎ノ建議ニ出ツ即チ明治二年四月大隈八太郎太政官ニ建議シテ云ヘラク「收支ノ事ト監督ノ務ト擧テ之ヲ出納司ニ委スルハ策ノ得タルモノニ非ラス宜シク別ニ監督ノ衙ヲ設ケ以テ冗濫ヲ防止シ滲漏ヲ譏察スヘシ」ト朝議之ヲ納レ五月八日會計官中ニ監督司ヲ置クニ至レリ監督司ハ後大藏省民政部ニ轉屬シ更ニ復々大藏省ニ屬シ遂ニ四年七月二十七日ヲ以テ之ヲ廢止ス同年八月十日大藏省官制ノ大改革アリ是ニ於テカ本省ニ検査寮及正算司ヲ置キ以テ會計ノ事務ヲ監督セシム是ヨリ先キ租稅頭兼造幣頭伊藤博文書ヲ大藏卿ニ呈シ該省ノ組織ニ關スル意見ヲ陳フ其要ニ曰ク「方今宇內理財ノ法適宜キヲ得ル米國ニ若ク莫シ今建議スル所ノ事款多ク法ヲ米國ニ取ル但シ風俗政體自ラ同シカラス會計出納又其法ヲ異ニセリ今長ヲ取リ短ヲ捨テ以テ意見ヲ上ル幸ニ採納ヲ蒙ラハ則チ庶幾クハ壅塞ノ患ヲ除キ疎脫ノ弊ヲ防キ出納正確ニシテ會計詳明ナラント」四年八月ノ改革ハ蓋シ此議ヲ採ルコト多シトイフ五年十月九日正

算司ヲ廢シ其事務ヲ検査寮ニ並ス後十年一月十一日官制ノ改革アリ検査寮ヲ廢シテ検査局ヲ置ク然レトモ當時財政監督ノ機關ハ大藏省中ノ一局ヲ成シ未タ獨立ノ地步ヲ占ムルニ至ラザリキ其ノ之アルニ至レルハ十三年三月太政官中ニ六部及會計検査院ノ設置アリタル以後ノコトニ屬ス

第二期 (明治十三年三月五日乃至十五年一月十五日)

明治十三年三月三日太政官中ニ六部ヲ置キ其一部タル會計部ヲシテ政府ノ財政事務ヲ統督セシム尋テ同月五日大藏省ノ検査局ヲ廢シ省中ニ精算局ヲ置キ又別ニ太政官中ニ會計検査院ヲ設ケ以テ財政政務ヲ監督セシム蓋シ是ヨリ先キ從來ノ參議兼各省卿ノ制度ハ政務ノ統一ヲ缺クノ虞アリトノ論盛トナリ重要ノ問題トシテ研究セラレツ、アリシカ十三年三月遂ニ右ノ弊害ヲ除去シ權力ヲ太政官ニ集中スルノ目的ヲ以テ專任參議ヲ置キ之ト同時ニ太政官中ニ法制會計軍事內務司法外務ノ六部ヲ置キ以テ各省ヲ監督セシムルコト、爲セリ以後六部設置ノ目的ハ十分ニ達セラレ政務ハ此處ニ統一セラル、ヲ得ルニ至レリト雖モ其結果ハ財政監督ノ事務殆ト全ク會計部ノ權力ニ歸屬スルニ至リ隨テ此強大ナル權力ヲ緩和スルノ必要ヲ感シタルト且ツ是ヨリ先キ參議兼大藏卿大隈重信カ財政整理ニ關スル意見ヲ太政官ニ建議シタルコトアリタルトニ因リ太政官中又別ニ會計検査院ヲ設ケテ財政政務ヲ監督セシムルニ至レルナリ而シテ當時大隈參議ノ建議シタル意見ノ要ニ曰ク「財政ノ根源ハ國庫ニ在リ各廳ノ會計ハ則チ其枝派ノミ今検査局長大藏卿ニ隸屬シ其監督スル所唯枝派ニ止リ根源ニ及フ能ハス蓋シ初メ検査寮ヲ大藏省中ニ置ク當時ニ在リテハ即チ時措ノ宜キヲ得タルナリ爾後十年百般ノ制度逐日振起シ會計ノ法亦漸ク立ツ

是レ方ニ財政ヲ整頓スルノ秋ナリ而シテ會計検査ノ法則ヲ舊ニ仍リテ釐革スル所ナシ此ヲ以テ
 財政ノ整理ヲ求ムルハ所謂舟ニ刻ミテ劍ヲ求ムルノ見ノミ須ラク速ニ一院ヲ設立シ以テ大ニ檢
 査ノ實ヲ舉クヘシト是ヨリシテ後財政監督ノ機關ハ財務行政機關ノ羈絆ヲ脱シ爲メニ其監督ノ
 實亦大ニ舉カルニ至レリ特ニ六部中ノ會計部ハ其權力實ニ強大ニシテ財政ノ事務一トシテ其查
 理督察ヲ受ケサルハナク會計検査院ノ如キモ太政官ニ隸屬セルヲ以テ其豫算ヲ調査シ財務ヲ討
 議スルカ如キニ至リテハ殆ト會計部ノ一機關タルニ過キサリキ

第三期 (明治十五年一月十六日乃至二十二年五月八日)

明治十四年十月二十一日太政官會計部廢止セラレ尋テ十五年一月十六日會計検査院事務章程及
 會計法ヲ改正シ茲ニ検査院ハ政府ノ會計ヲ検査シ會計法規ノ統一ヲ司ル大藏省外ニ立テ唯一ノ
 監督機關トナレリ然レトモ本期ニ至リテハ監督機關ノ權力ハ前期ニ比スレハ却テ大ニ縮少セル
 モノアリ蓋シ夫ノ第二期ニ於ケル會計部ノ權力ノ如キ今之ヲ見ルコトヲ得サルニ至リタルノミ
 ナラス検査院ノ如キハ其地位ニ於テ固ト太政官ニ隸屬シ其職權ノ範圍モ亦稍ニ減縮セラレ、所ア
 リシナリ而シテ其職權ヲ限定シタル所以ハ六部制度ノ廢止セラレ參議ヲシテ省卿ヲ兼ネシムル
 ノ制ヲ復シタルノ結果検査院ノ權限ヲ偏重ナラシメ隨テ之ヲ縮少スルノ必要アリタルニ因ルモ
 ノ、如シ

第四期 (明治二十二年五月九日乃至三十五年十二月三十一日)

以上述フル所ノ如ク二十二年以前ニ在リテハ財政監督ノ機關ハ財務行政中央機關ノ組織ノ一部
 ヲ成スニアラスンハ太政官ノ一部ヲ構成シ若クハ其下ニ隸屬スルモノナリシナリ換言スレハ常

時ハ行政ノ一機關ヲ以テ行政ノ一機關ヲ監督スルノ制度タリシナリ然ルニ萬古不磨ノ大典タル
 帝國憲法ハ明治二十二年二月十一日ヲ以テ公布セラレ五月九日會計検査院法ノ制定アリ此ニ大
 藏省ノ組織ノ一部タル主計局ヲ外ニシテ帝國議會及會計検査院ナル不羈獨立ノ兩監督機關對立
 シ行政機關ノ外ニ在リテ十分ニ監督ノ實ヲ舉クルコトヲ得ルニ至レリ而シテ會計検査院法ハ同
 院長渡邊昇ノ意見書ニ據ル所多シトイフ渡邊昇建議ノ要ニ曰ク「憲法ノ發布國會ノ開設期方ニ近
 キニ在リ而シテ政府ノ制度亦安ソ變更ナキヲ得ンヤ蓋シ本院ノ職タル政府國會ノ間ニ介立シ以
 テ會計監督ノ責ニ任シ實ニ邦家ノ一大機關タリ其組織ノ適否行務ノ舉廢ハ獨財務ノ得失ニ關ス
 ルノミナラス又將ニ行政ノ利害ニ涉ル者アラントス之ヲ講究シ之ヲ稽較シ以テ他日實施ノ準備
 ヲ爲ス今日ニ在リテ實ニ急務タリ其組織大綱ノ如キハ則チ自ラ廟算ノ在ルアリ只行務ノ事ニ至
 リテハ昇固ヨリ任セサルヲ得ス願フニ行政ノ活機ハ慣行不文ノ間ニ存ス古今東西其揆ヲ一ニセ
 リ歐米各邦會計検査ノ法規世之ヲ譯述スル者ナキニ非ス而シテ隔靴ノ感ヲ免レサル者比比皆然
 リ又一ニ外行官吏之ヲ搜討スル者アリ然レトモ本邦ノ現行事務ニ熟スル者ニ非レハ其講究スル
 所多ク皮相ニ屬ス是レ勢已ムヲ得サルナリ伏シテ請フ昇自ラ歐米各邦ヲ經歷シ親ク検査ノ慣行
 作用ヲ觀察シ以テ他時實施ノ資料ニ供セン」ト議行ハレ二十年五月西遊ノ途ニ就キ翌年十二月歸
 朝ス是ニ於テ意見書ヲ作り以テ各大臣ニ頒ツ書中豫算出納決算ノ事ヲ陳ヘ且ツ曰ク「各國會計檢
 査院ノ制度ヲ稽フルニ其整備周到ナルモノ蓋シ孛獨ヲ以テ第一ト爲ス望ムラクハ本邦検査ノ諸
 法亦宜シク標準ヲ此ニ取リ折衷以テ制ト爲サント因テ會計検査院ノ組織權限ヲ論スル縷縷數千
 言ニ及フ後發布セシ所ノ院法及章程此議與リテ大ニ力アリトイフ後明治二十九年五月法律第九

十號及三十三年四月法律第八十一號ヲ以テ官制一部ノ改正アリシモ大體ニ於テ二十二年制定ノ官制ト異ル所ナシ

第五 中央當局者

以上ヲ以テ財政ノ中央地方附屬及監督各機關ノ沿革ヲ概敘セリ而モ機關ノ用ハ人ニ在リ殊ニ中央當局者其人ノ如何ニヨリテ大ニ消長アルヲ以テ其當局者ノ姓名竝ニ其在職ノ期間ヲ附記スルハ決シテ無用ノ業ニ非サルヘシ
中央當局者ノ姓名ヲ敍列スルニ當リテハ中央機關ノ沿革ヲ其名稱ニ依リテ大別シ更ニ其長官ノ官名ニ依リテ小別スルヲ便トス即チ第一期ハ金穀出納所時代第二期ハ會計事務局時代第三期ハ會計官時代第四期ハ大藏省時代ニシテ更ニ之ヲ大藏卿時代ト大藏大臣時代トニ分ツ今此等ノ諸期ノ間ニ中央當局者タル地位ヲ占メタル人ノ姓名ヲ列舉スレハ曰ク林左門曰ク三岡八郎曰ク岩倉具視曰ク中御門經之曰ク淺野茂勳曰ク西四辻公業曰ク博經親王曰ク小原二兵衛曰ク萬里小路博房曰ク大隈重信曰ク伊藤博文曰ク松平慶永曰ク伊達宗城曰ク大久保利通曰ク佐野常民曰ク松方正義曰ク渡邊國武曰ク井上馨曰ク松田正久曰ク西園寺公望曰ク曾禰荒助是ナリ右ノ内在職期間ノ最長キハ松方正義ニシテ財政ノ局ニ當ルコト前後四回其最長キハ明治十四年十月ヨリ二十五年八月ニ至ル十一年間ニシテ氏カ諸般ノ財政政務ヲ整理シテ本邦財政ノ基礎ヲ確定シタルハ實ニ此秋ニ在リ

第二章 中央機關

第一節 金穀出納所時代

第一款 管 務

慶應三年十二月二十七日金穀出納所ヲ設置シ中央政府ノ金穀出納ノ事務ヲ管掌セシム

第二款 職 員

初メ金穀出納所ノ起ルヤ當時未タ一定ノ官制アラス唯名護屋藩士林左門福井藩士三岡八郎ヲシテ共ニ參與ヲ以テ其事務ヲ提理セシム後明治元年正月十七日會計事務局ヲ創設シ金穀出納所ノ事務ヲ管理セシム蓋シ此日總裁議定參與ノ三職ニ神祇内國外國海陸軍會計刑法制度ノ七事務ヲ分科シ會計事務局ハ即チ其一ニシテ課ニ會計事務總督及會計事務掛ヲ置ク中央機關ノ官制ノ萌芽ヲ見ルハ實ニ此時ニアリ同月二十一日金穀出納取締役以下御用掛ヲ會計事務總督ノ附屬トナス

第三款 雜 件

第一 署 麻 慶應三年十二月始メテ金穀出納所ヲ置クヤ假ニ學習院ヲ用ヒ明治元年正月二十七日之ヲ二條城太政官代ニ移ス

第二 附屬署衙 當時金穀出納所ノ附屬機關ニ會計事務裁判所アリ明治元年正月十九日ノ設置ニ係リ會計事務ニ拘リ候儀都テ會計事務裁判所ヘ可申出候事ト達セリ而シテ其署麻ハ初メ之ヲ金穀出納所内ニ置キシカ同月二十七日出納所ノ太政官代ニ移ルニ及ヒ亦之ニ隨フ

第二節 會計事務局時代

第一款 管 務

明治元年二月三日會計事務課並ニ金穀出納所ヲ廢シ更ニ太政官中ニ會計事務局ヲ建ツ蓋シ是ニ至リテ前ノ七課ヲ改メテ七局トナシ會計事務局亦其一ニ居ルコト、ナリシナリ此日同局ノ管掌事務ヲ規定シ戶口賦稅、用度、貢獻、管繕、秩祿、倉庫及商法ノ事務ヲ督スルモノトス

第二款 職 員

初メ會計事務局ヲ置クヤ督、輔、權、輔、判、事及權判事ノ五官ヲ設ク

第三款 雜 件

- 第一 署麻 初メ會計事務局ヲ建ツルヤ其署麻ヲ二條城太政官代中ニ置ク
- 第二 支衙 明治元年二月十八日會計事務局出張所ヲ大阪ニ置キ北濱町商三井元之助ノ家屋ヲ以テ之ニモツ三月十五日之ヲ大阪銅會所ノ城内ニ移ス
- 第三 附屬署衙

- (一)修理職及勤使賄等 明治元年二月九日會計事務局ニ隸屬ス
- (二)江戸金座改役所 同年三月二十三日會計事務局ニ隸屬ス
- (三)大阪銅座役所(通書) 同年二月二十五日之ヲ改メテ銅會所ト稱シ三月朔日鑛山取調掛ノ職員ヲ(置ク蓋シ維新以降鑛山ノ事務ニ著手セシハ之ヲ以テ嚆矢トス
- (四)江戸金銀錢各座 同年四月二十四日之ヲ官ニ收メ太政官銅座役所ト稱ス

第三節 會計官時代

第一款 管 務

明治元年閏四月二十一日會計事務局ヲ廢シテ會計官ヲ設クルヤ其管掌事務ヲ定メ田宅、租稅、賦役、用度、金穀、貢獻、秩祿、倉庫、管繕、運輸、驛遞、工作、稅銀ノ事ヲ掌ルモノトス同年閏四月二十五日商業ニ關スル事務ヲ五月十日租稅ニ關スル事務ヲ七月二十五日鑛山ニ關スル事務ヲ管ス九月大阪以西ノ燈臺ノ事務ヲ掌ル蓋シ燈臺事務ハ六月以降神奈川縣ノ管轄ナリシカ是ニ至リテ會計官之ヲ分掌セシナリ十月二十五日大總督府ノ會計事務ヲ同月二十八日治河ノ事務ヲ掌ル
二年正月十六日神奈川縣ト共ニ管ノ燈明臺事務ヲ專管ス是ニ至リテ燈明臺事務ハ總ヘテ本官ノ所管トナル同月二十日利根川堤防修理事務ヲ管ス同月(日)關府縣人民ノ訴訟事務ヲ管ス同月晦日若松民政局ヲ管ス二月(日)關山陵修繕事務ヲ管ス同月五日貨幣ニ關スル事務太政官ニ轉屬ス三月陸前陸中兩國鑛山及鹽濱生絲ノ產業管理ノ法則ヲ定ム四月六日燈明臺ニ關スル事務ヲ更ニ外國官ニ分割ス同年四月八日本官ノ職掌及處務ノ條規ヲ令示シ本官ハ租稅、用度、秩祿、貢獻、金銀貨幣、倉

庫、檢地、營繕、鑛山等ノ各事務ヲ總理スルモノトス。此日太政官ノ管スル貨幣事務ヲ本官ニ移シ、驛遞ノ事務ヲ民政部官ニ分割ス。四月十三日民政部官トノ管權限ヲ稟申ス。是ヨリ先キ同月八日民政部官ノ設アリタルニヨリ五月十六日外國官中ノ通商司本官ニ轉屬シ、本官外國貿易事務ヲ管理ス。

第二款 分掌

第一項 諸司ノ廢置

明治元年閏四月二十一日日本官ニ七司ヲ置ク。出納用度、驛遞、營繕、稅銀、貨幣、民政是ナリ。但シ稅銀及民政ノ二司ハ開設スルニ至ラスシテ止ム。同年閏四月二十五日商法司ヲ本官中ニ置キ、五月十日租稅司ヲ置ク。七月二十五日大阪銅會所ヲ改メテ鑛山局ト稱シ、尋テ司ニ改メ、本官ニ屬セシム。二年二月五日貨幣司ヲ廢ス。蓋シ此時太政官中ニ造幣局ヲ置キ、貨幣ヲ改鑄シ、楮幣ヲ増製スルコトトナリ。タレハナリ三月十五日商法司ヲ廢ス。四月八日造幣局川崎本官ニ屬ス。同月二十九日日本官ノ驛遞司、民政部官ニ轉屬ス。是ヨリ先キ四月八日民政部官ヲ置キ、聽訟、庶務、驛遞、土木、物產ノ五司ヲ統管セシメタルニヨル。五月八日新ニ監督司ヲ置ク。同月十六日外國官中ノ通商司ヲ管ス。蓋シ通商司ハ二月二十二日貿易事務ヲ幹理セシメンカ爲メ各開港場ニ設置セルモノニシテ外國官ノ統管スル所タリシカ。是ニ至リテ本官ニ轉屬ス。越エテ六月二十一日通商司ヲ東京、大阪、橫濱ニ分置ス。

第二項 諸司ノ管務

第一 出納司 明治元年閏四月二十一日日本司ノ所管事務ヲ定メ、金穀出納ノ事務ヲ管掌スルモノ

トス

第二 用度司 同月同日本司ノ所管事務ヲ定メ、各官廳一切ノ用度物品支給ノ事務ヲ管掌スルモノトス

第三 驛遞司 同月同日本司ノ所管事務ヲ定メ、驛遞ノ事務ヲ管掌スルモノトス。(先是元年二月三日陸内國事務局ニ屬シ、京畿、近畿、及諸國水陸驛路、關市、郡、城、港口、驛臺、市、尹ノ事ヲ管セシム。四月朔日京都ニ宿驛役所ヲ置キ、四月二十一日驛遞役所ト稱ス。)

第四 營繕司 同月同日本司ノ所管事務ヲ定メ、營繕事務ヲ管スルモノトス。十月二十八日治河ノ事務ヲ二年二月(日關)山陵修繕ノ事務ヲ管ス

第五 貨幣司 同月同日本司ノ所管事務ヲ定メ、貨幣鑄造ノ事務ヲ管掌スルモノトス

第六 商法司 同月二十五日日本司ノ所管事務ヲ定メ、商業ニ關スル事務ヲ管掌シ、又權リニ秩祿、田宅、租稅、徭役ノ各事務ヲ管掌スルモノトス

第七 租稅司 五月十日日本司ノ所管事務ヲ定メ、秩祿、田宅、租稅、賦役ノ事務ヲ掌理スルモノトス。十二月各府縣訴訟事件ヲ管ス。後二年正月本官訴訟所ニ移ス。二年六月(日關)舊商法司ノ事務ヲ管ス

第八 鑛山司 七月二十五日日本司ノ所管事務ヲ定メ、金銀銅ノ諸鑛物ヲ買收スル事務ヲ管掌スルモノトス

第九 造幣局 明治二年四月八日造幣局ノ本官ニ屬スルヤ、其所管事務ハ貨幣司ニ同シ

第十 監督司 五月八日日本司ノ所管事務ヲ定メ、金穀ノ出納及百般ノ會計ヲ監督スルモノトス

第十一 通商司 同年二月二十二日日本司ヲ設クルヤ、之ヲシテ貿易事務ヲ幹理セシメシカ。後五月十六日會計官ノ所屬トナルニ及ヒ六月二十四日日本司ノ權限ヲ定ム。一、物價平均流通ヲ計ルノ權、二

兩替屋ヲ建ツルノ權三、金銀貨幣ノ流通ヲ計リ相場ヲ制スルノ權四、開港地貿易輸出入ヲ計リ諸物品賣買ヲ指揮スルノ權五、廻漕ヲ司ルノ權六、諸商職株ヲ進退改正スルノ權七、諸商社ヲ建ツルノ權八、商稅ヲ監督スルノ權九、諸請負ノ法ヲ建ツルノ權是ナリ

第三項 諸司班次

明治二年三月晦日會計官各司ノ班次ヲ定メ出納、用度、驛遞、營繕、租稅、鑛山トス

第三款 職員

明治元年閏四月二十一日官制ヲ改定シ本官ニ知官事、副知官事、判官事、權判官事、書記、筆生、使部ヲ置キ各司ニ知司事、判司事、權判司事ヲ置ク九月二十九日各司ニ判事頭取ヲ置ク同年十月十八日鎮將府ヲ廢シ其管轄ノ會計局ヲ改メ會計官出張所トナスニ及ヒ與頭以下ノ吏員舊ニ依リシカ尋テ同月二十日與頭ヲ廢シ同月晦日、同出張所中作事役、作事役、御勘定、支配勘定ヲ廢ス二年五月權判事ニ本官各司ノ事務ヲ分課ス同月十八日各開港場ニ發遣スル會計官判事ニ通商司ノ事務ヲ專委ス調役ヲ二年四月二十九日用度司ニ、五月二十七日出納司ニ、六月租稅司及監督司ニ置キ、勘定方ヲ元年十二月二日租稅司ニ兼任ス、二年四月用度司ニ置キ、仕丁ヲ六月御膳掛ヲ七月用度司ニ置ク

第四款 雜件

第一項 署 解

第一 本官署解 明治元年閏四月二十一日本官ノ衙署ヲ正二位近衛忠照(都京)ノ邸ニ設ク十月二日更ニ之ヲ京都府廳城内ニ二年二月二日禁内ニ移ス三月晦日ニ至リテ東京出張所署ハ龍口舊幕府評定所ニ在リヲ本衙ト爲シ京都本衙ヲ京都出張所トナス蓋シ此歲帝都ヲ東京ニ遷サレシヲ以テナリ四月二十六日更ニ東京府下馬場先門内舊忍藩邸ニ轉移ス

第二 出納司署解 明治元年閏四月二十一日本司ヲ本官中ニ設ケ爾後本司ハ常ニ本官中ニ在リ

第三 用度司署解 明治元年閏四月二十一日本司ヲ本官中ニ置キ九月其禁内出張所ニ並合ス二年二月七日京都本司ヲ以テ支署ト爲シ東京支署ヲ以テ其本署ト爲ス此月本司ノ麻舎ヲ吳服橋内ニ轉移ス

第四 驛遞司署解 明治元年閏四月二十一日内國事務局所管京都驛宿役所ヲ改メテ驛遞役所ト稱シ以テ驛遞ノ事務ヲ管掌セシメ京都二條城西幕府西町奉行ノ邸舎ヲ以テ其署麻トス十月晦日驛遞司ヲ東京龍口本廳中ニ設ケ二年二月日關其署麻ヲ京都府下河原町二條上高田專修寺里坊ニ轉移ス三月晦日本署ヲ支署トシ東京支署ヲ以テ本署トス署ハ會計官ノ城内ニアリ

第五 營繕司署解 明治元年閏四月二十一日署ヲ舊修理職役所ニ設ク二年三月晦日本署ヲ改メテ支署トナシ東京支署ヲ改メテ本署ト爲ス署ハ東京吳服橋内舊幕府作事役所ニ在リ

第六 稅銀司署解 開設スルニ至ラスシテ止ミシコト前ニ述フル如シ

第七 貨幣司署解 明治元年閏四月二十一日日本司ヲ本官中ニ置キ八月更ニ之ヲ大阪川崎舊幕府米賣ノ地

ニ轉移ス二年二月五日ニ至リテ之ヲ廢ス

第八 民政司署解 開設スルニ至ラスシテ止ミシコト前ニ述フル如シ

- 第九 商法司署麻 明治元年閏四月二十五日署ヲ京都兩替町御池町ニ設ク二年三月十五日ニ至リテ之ヲ廢ス
- 第十 租稅司署麻 明治元年五月十日日本官中ニ置キ爾後本官ト其轉移ヲ共ニス
- 第十一 鑛山司署麻 明治元年七月二十五日大阪銅會所ヲ改メテ鑛山司トシ二年六月日關之ヲ本官大阪出張所ノ域内ニ移ス
- 第十二 監督司署麻 明治二年五月八日本官中ニ之ヲ置ク
- 第十三 通商司署麻 同年二月二十二日本司ヲ各開港場ニ置キ六月二十一日更ニ之ヲ東京、大阪、橫濱ニ分置ス
- 第十四 造幣局署麻 同年四月八日造幣局會計官ニ屬ス局ハ大阪川崎ニ在リ

第二項 支 衙

- 第一 本官支衙
 - (一)大阪出張所 明治元年六月七日大阪出張所ヲ舊幕府大阪町奉行邸ニ移ス二年六月八日大阪府下中ノ島舊商法司ノ署麻ニ轉移ス
 - (二)東京出張所 明治元年十月十八日舊鎮將府所轄ノ會計局ヲ改メテ會計官東京出張所ト稱ス署ハ龍口舊幕府評定所ニアリ同月二十四日東幸供奉ノ會計諸官ヲ管ス二年二月二十八日關東十五國府縣ノ租稅ヲ管轄ス
- 今茲ニ會計官東京出張所ノ由來ヲ釋スルニ其淵源ハ江戸鎮臺及民政裁判所ニアリ明治元年五

明治財政史第一卷

明治財政史第一卷

月十九日社寺裁判所民政裁判所市政裁判所ヲ江戸ニ置キ次テ同月二十日江戸鎮臺ヲ置キ鎮臺判事ヲシテ民政市政社寺ノ三裁判所ヲ分管シ專ラ關東諸國ノ租稅會計及市街社寺等ノ各事務ヲ掌理セシム蓋シ是ヨリ先キ同月十一日京都ニ於テ江戸府ヲ置クノ令ヲ發シ任官ノ宣命ヲ下セリト雖モ其令書未タ江戸ニ達セサルニ先チ此月二十日大總督特ニ江戸鎮臺ヲ置キテ市政ヲ管理セシメシヲ以テ尋テ江戸府判事ヲ鎮臺判事ニ改宣ス故ニ江戸府ハ遂ニ開設スルニ至ラスシテ止ミタリ七月十七日江戸ヲ改メテ東京ト爲シ移躰ノ詔ヲ布キ江戸鎮臺ヲ廢シ鎮將府ヲ置キテ駿河以東十三國(駿河、甲斐、伊豆、相模、武藏、安房、上野、下野、常陸、陸奥、出羽)ヲ總管セシメ市政裁判所ヲ廢シテ東京府ヲ置ク八月八日鎮將府ニ屬スル民政裁判所ヲ改メテ會計局ト稱ス衙門ハ舊ニ仍ル此月日關本局ハ東京ニ漕入スル諸國ノ船舶及其相載スル貨物ノ價額ノ查計及回漕商行ヲ管轄ス九月十八日本局ト東京府トノ管理事務ヲ區定ス十月七日日本局與頭ヲ以テ假ニ五等官ニ準ス蓋シ與頭ノ職目ハ幕府ノ舊稱ニ仍ルナリ同月十八日鎮將府ヲ廢シ其事務ヲ行政官ニ屬セシメ其所轄ノ會計局ヲ改メテ會計官東京出張所ト爲ス

二年三月晦日之ヲ改メテ會計官本衙トス

(三)京都出張所 明治二年三月晦日從前ノ京都本衙ヲ改メテ京都出張所ト爲ス

第二 出納司支署

- (一)大阪支署 明治元年八月日關出納司支署ヲ大阪ニ置ク
- (二)橫濱支署 同年十二月日關出納司支署ヲ橫濱ニ置ク
- (三)東京支署 設置年月詳カナラス二年三月晦日改メテ本署ト爲ス

第三 用度司支署

(一)禁内支署 明治元年閏四月二十一日用度司支署ヲ禁内ニ置ク九月日關用度司本署ヲ禁内支署ニ竝合ス

(二)東京支署 同年十月十八日支署ヲ東京馬場先門内ニ置ク二年二月七日改メテ本署トス

(三)京都支署 明治二年二月七日用度司京都本署ヲ支署ト爲ス

第四 驛遞司支署

(一)東京支署 明治元年六月三日支署ヲ江戶民政裁判所内ニ置キ舊ニヨリ道中方ト稱ス是ヨリ先キ四月十一日大總督熾仁親王江戶城ヲ收メテ督府ヲ開キ五月二十二日舊幕府勘定所ヲ督府ニ屬セシメ假ニ舊道中方ノ吏員ニ命シ郵驛ニ關スル事務ヲ處辨セシメシカ驛遞司支署ノ設置セラルルニ及ヒ支署ヲシテ共事務ヲ管セシムルニ至リシナリ二年三月晦日之ヲ本署ト爲ス

(二)京都支署 明治二年三月晦日京都本署ヲ以テ支署ト爲ス

第五 管轄司支署

(一)大阪支署 明治元年七月十四日支署ヲ大阪川崎ニ置ク

(二)東京支署 同年十月十八日支署ヲ東京吳服橋内舊幕府作事役所ニ置ク二年三月晦日之ヲ本署ト爲ス

(三)京都支署 明治二年三月晦日京都本署ヲ改メテ支署トス

第六 貨幣司支署

(一)大阪支署 明治元年閏四月日關貨幣司支署ヲ大阪長堀ニ設置シ八月日關之ヲ廢ス蓋シ本司署

麻ヲ大阪ニ移セシヲ以テナリ

(二)東京支署 同年十月十八日貨幣司支署ヲ東京元大阪町及眞崎、高橋、小梅ニ置ク二年二月會計官中ノ貨幣司ヲ廢スルニ因テ亦之ヲ廢ス

第七 商法司支署

(一)大阪支署 明治元年閏四月日關本司支署ヲ會計官大阪出張所中ニ置ク六月日關之ヲ大阪舊幕府町奉行ノ邸舎ニ轉移ス二年三月商法司ヲ廢スルニ因テ亦之ヲ廢ス

(二)東京支署 明治元年十二月日關本司支署ヲ東京北八丁堀海運橋側舊西尾藩邸ニ置ク二年三月之ヲ廢ス

第八 鑛山司支署

(一)東京支署 明治元年十二月十五日貨幣司所轄東京銅座役所ヲ以テ鑛山司支署ト爲ス

(二)生野支署 同月日關但馬國朝來郡生野銅山開鑿ノ業ヲ興シ鑛山司生野出張所ト稱ス

(三)相川支署 明治二年四月日關佐渡國雜太郡相川ノ金銀山ヲ開鑿シ公廩ヲ置キ佐渡支廳ト稱ス

第九 監督司支署

(一)京都支署 明治二年五月監督司支署ヲ京都會計官出張所内ニ置ク

(二)大阪支署 同年同月監督司支署ヲ大阪會計官出張所内ニ置ク

(三)橫濱支署 同年七月監督司支署ヲ橫濱ニ置ク

第三項 附屬署衙

第一 本官附屬署衙

(一)訴訟所 明治二年正月(日)關本官中ニ訴訟所ヲ置キ府縣人民ノ訟ヲ聽カシム
(二)民政局 明治元年八月八日民政局ヲ磐城國磐前郡平ニ置キ翌年(月)日關ニ至リテ之ヲ廢ス此他羽前國村上郡柴橋岩代國會津郡若松及羽後國飽海郡酒田ニ民政局ノ設ケアリシト雖モ其廢置ノ年月詳ナラス

(三)貨幣改所 明治二年二月二日貨幣改所ヲ東京府下本町一丁目ニ設ケ此月五日更ニ之ヲ橫濱ニ同月京都大阪兵庫及長崎ニ増置シ贋模造貨紙幣ヲ檢整セシム

(四)金札交換所 同年六月金札交換所ヲ東京府下ニ假設ス

第二 營繕司附屬署衙

(一)治河使 明治元年十月二十八日治河使ヲ山城國八幡大阪網島及島町ノ三所ニ置ク(二年八月營繕司ヲ廢スルニ及ヒテ民政部省土木司ニ轉屬ス)

(二)大難波村製革場 明治二年三月二十四日營繕司ニ於テ舊商法司所轄大難波村製革場ヲ管ス(二年八月營繕司ヲ廢スルニ及ヒテ民政部省土木司ニ轉屬ス)

第三 貨幣司附屬署衙

(一)造幣所 明治元年八月(日)關造幣所ヲ大阪川崎ニ置ク

(二)東京鑄錢座 同年十二月四日東京鑄錢座ヲ廢ス

(三)東京銅座役所 同年同月十五日日本司所轄東京銅座役所(本所游)ヲ以テ鑛山司支署ト爲ス

(四)東京金銀座 明治二年二月十二日東京金銀座ヲ廢ス

第四 商法司附屬署衙

蠶種生絲改所 明治元年閏四月蠶種生絲ノ改所ヲ江戸ニ設ケ海外ニ輸出スル蠶種紙及生絲ヲ檢査シ以テ證印稅ヲ徵收ス

大總督府ヨリ武藏相模上野下野美濃信濃尾張近江丹波丹後但馬越前越中加賀十四國ノ各藩及各代官ニ宣達シテ曰ク各藩封内及各廳管内ノ郡村製造スル種紙及生絲ヲ橫濱港ニ居留スル外國人ニ輸賣スル者ノ爲メニ改所ヲ江戸吳服橋門内牧野駿河守ノ舊邸ニ置キテ之ヲ檢査シ以テ證印稅ヲ徵收ス因テ種紙生絲ヲ江戸ニ回輪シ檢印ヲ乞ヒ然ル後ニ橫濱港ニ輸送スヘシ若シ本局ノ檢印ナキ者ハ港頭ニ於テ其賣付ヲ禁止ス宜ク此旨趣ヲ格奉シ本年五月朔日ヨリ之ヲ改所ニ回輪スヘキヲ普令セヨト

同所ハ初メ大總督府ニ屬シ尋テ五月十九日民政裁判所ニ隸シ八月八日會計局ニ屬シ十月十八日會計官東京出張所ニ屬シ二年三月晦日會計官租稅司ニ歸屬ス九月蠶絲改所ヲ各開港場ニ分置ス

第五 通商司附屬署衙

箱館產物會所 明治元年十一月二十日箱館府ノ設クル所ニ係リ後通商司ニ屬ス

第四項 事務監督

明治二年二月二日會計官ノ管スル治河及營繕ノ事務ハ刑法官之ヲ監ス

第四節 大藏省時代

第一款 第一期 第一項 管務

本期間ニ於ケル本省ノ掌管事務ノ沿革ハ民政部トノ關係上分チテ四期ト爲スコトヲ得第一期ハ民政部ト對立ノ時代ニシテ第二期ハ之ト並合ノ時期ナリ而シテ第三期ハ第二ノ分立時代ニシテ第四期ハ第二ノ並合時期ナリ但シ第二期ニ於ケル並合ハ唯署麻ノ並合ニ過キスト雖モ第四期ノ並合ハ純然タル並合ナリトス

明治二年七月八日會計官ヲ廢シテ大藏省ヲ建テ其事務ハ即チ會計官ノ管掌セシ所ニ依ル八月日關管繕司ヲ廢シ其事務ヲ民政部中ノ土木司ニ屬セシム同月十一日租稅監督通商鑛山ノ四司民政部ニ轉屬ス蓋シ監督司ノ職任タル會計出納ノ當否ヲ監督スルヲ專務ト爲ス然ルニ權限漸次ニ擴張シテ大ニ民政ニ關涉スルニ至ル因テ更ニ民政部ニ隸屬シテ以テ民政會計ノ二事ヲ監督セシム同年八月十八日日本省民政部ト並合ス蓋シ兩省管理ノ事務タル互ニ相關聯シ應署ヲ隔離スレハ則チ不便多キニ因ル九月十九日外務省ノ管轄セル燈明臺局本省及民政部ニ屬シ十月十日大藏省所管ノ御厨子所ヲ宮内省ニ屬セシム同月二十八日神奈川縣ノ掌理セル橫濱橫須賀製鐵所本省及民政部ニ屬ス十一月八日尺度量衡ニ關スル事務ヲ本省ニ管ス

明治三年七月十日民政部ト分立シ本省ハ更ニ造幣寮出納司用度司租稅司監督司度量衡改正掛ヲ統管ス同月十七日營繕司ヲ新置シ民政部土木司ノ營繕事務ヲ管ス同月二十二日民政部ノ通商司本省ニ屬ス八月十三日燈明臺局及橫濱橫須賀製鐵所ヲ民政部ニ專委ス十二月二十二日營繕司所

管ノ陵墓修繕事務民政部土木司ニ屬ス四年正月二十日通商司所管ノ牧畜事務民政部ニ屬ス四年七月二十七日民政部ヲ廢シ土木司(工部省ニ屬ス)ヲ除ク外其管掌事務ヲ本省ニ統轄セシム

第二項 分掌

第一目 寮司ノ廢置

明治二年七月八日日本省一寮七司ヲ統管ス造幣寮出納司用度司營繕司租稅司監督司通商司鑛山司是ナリ八月十一日租稅監督通商鑛山ノ四司民政部ニ轉屬ス同月日關管繕司ヲ廢シ其事務ヲ民政部土木司ニ屬セシム

明治二年八月十八日日本省民政部ト合並スルヤ兩省ヲシテ造幣寮及監督租稅出納土木用度驛遞鑛山ノ七司ヲ管セシム十一月改正掛ヲ置ク(三年五月同掛ヲシテ民政部大藏兩省關係ノ布告ヲ編集セシム)四年八月記録寮ヲ置クニ及ヒ同掛ノ事務該寮ニ專屬ス(三年六月七日大藏民政部兩省中ニ外國掛ヲ置ク(外事及雇外國人ニ關スル事務ヲ取扱ハシム))

明治三年七月十日日本省民政部ト分立スルヤ本省更ニ造幣寮出納司用度司租稅司監督司度量衡改正掛ヲ統管ス(度量衡改正掛ハ七年一月二十五日日本省外課中ニ屬シ十年中議案課ニ屬シ十二年十月二月商務局ニ屬シ十四年四月農商務省ニ轉屬ス同月十七日營繕司ヲ置ク同月二十二日民政部ノ通商司本省ニ屬ス四年七月五日通商司ヲ廢ス

明治四年七月二十七日民政部ヲ廢シテ其事務ヲ本省ニ移スヤ本省ノ統管セル監督用度租稅ノ三司ヲ廢シ更ニ租稅寮及勸農統計紙幣(先是元年正月二十三日參與兼會計事務掛三)戶籍驛遞ノ五司

ヲ置ク造幣寮及出納營繕二司舊ノ如シ八月用度課ヲ置ク

第二目 寮司ノ管務

本期間ニ於ケル諸寮司ノ管掌事務ハ大率前期ニ於ケルト同シ唯其多少變更ヲ受ケタルモノヲ掲クレハ左ノ如シ

第一 造幣寮 明治三年八月八日民部省鑛山司ノ管掌セル金銀銅等諸金屬賣買ノ事務ヲ同月九日官銅ヲ鑄治スル工事ヲ本寮ニ管ス後十二月十日本寮ノ開業ニ至ルマテ金銀銅賣買ノ事務ヲ出納司大阪出張所ニ委囑ス

四年七月出納掛ヲ置キテ金銀塊買收等出納ノ事務ヲ管理セシム

第二 營繕司 明治二年八月(日關營繕司ヲ廢シテ其事務ヲ民部省中土木司ニ屬セシム越エテ三年七月十七日更メテ營繕司ヲ本省ニ置キ民部省土木司ノ營繕事務ヲ管スルコト、爲ス十一月八日西京宮殿ノ營繕ヲ本司ト宮内省ト分掌ス十二月二十二日營繕司所管陵墓修繕事務ヲ民部省土木司ニ分屬セシム

第三 通商司 明治二年八月十一日通商司ヲ民部省ニ轉屬セシメシカ更ニ三年七月二十二日之ヲ本省ニ復シ四年正月二十日其所管牧畜事務ヲ民部省ニ屬セシム

第四 租稅司 明治三年八月二十日分課ヲ定メ甲課地方官申牒書類、臨時文書諸官省往復乙課(收納期限買米廻漕租稅帳大積明細帳石代直段各地方米穀相場御證印計算編輯各地方官管轄地石高租稅五箇年平均勘定帳釐付帳諸縣常備金荒地取下场諸簿冊編輯ノ三課トス九月三日職制及處務

條例ヲ定メ此司ハ大藏省ノ所轄ニシテ一切租稅貢調ノ事務ヲ掌管ストス

第五 監督司 明治三年十二月九日職制ヲ定メ本司ハ大藏省ノ耳目ニシテ略中本省内外ノ事務都テ監視督察スルヲ要ストス

第六 出納司 同年月日關分課取扱大意ヲ定メ當司ノ儀ハ金穀御取締事務ニ相心得云々トシ分課ヲ定メテ御金掛定式掛金庫掛ノ二トス御米掛御藏掛(算勘掛)見證掛、米改掛、調度修理掛、御膳記錄掛ノ五トス(臨時掛)計算掛分析掛トス

第三目 寮司ノ班次

明治二年八月二十二日民部大藏兩省並合セルヲ以テ兩省ニ屬スル寮司ノ序次ヲ班定シ造幣寮監督司租稅司出納司土木司用度司驛遞司鑛山司トス

明治三年八月本省管轄スル寮司ノ班次ヲ更定シ造幣寮監督司租稅司出納司用度司營繕司通商司度量衡改正掛トス

第三項 職員

明治二年七月八日官制ヲ釐革シ大藏省ヲ建ツルヤ本省ニ卿、大少輔、正權、大少丞、正權、大少錄及史生、省掌、使部ヲ寮ニ正權頭、正權助、正權允、正權、大少屬及寮掌、使部ヲ各司ニ正權正、正權、大少佑及大少令史ヲ置ク四年七月二十九日官制ヲ改定シ省ニ卿、大少輔、大少丞、出仕寮ニ正權頭、正權助司ニ正權正、大少佑ヲ置ク

第四項 雜件

第一目 署 麻

- 第一 本省署麻 明治三年閏十月十九日日本省ノ署麻ヲ皇城中ニ轉移ス四年八月三日更ニ之ヲ神田橋門内舊姫路藩邸ニ移ス
- 第二 用度司署麻 明治二年十月七日日本司ノ麻舍ヲ本省ノ城内ニ轉移ス
- 第三 鑛山司署麻 同年八月七日之ヲ大阪川崎造幣寮ノ城内ニ轉移ス

第二目 支 衙

- 第一 本省支衙
 - (一)京都出張所 明治二年十一月五日日本省京都出張所ヲ京都府廳内ニ移ス三年二月八日之ヲ廢シ其事務ヲ出納用度ノ二司ト共ニ京都支署ニ分屬セシム
 - (二)大阪出張所 明治二年八月日關本省大阪出張所ヲ以テ本省民部省ノ出張所トナシ三年八月十四日更ニ專ラ本省ノ出張所ト爲ス四年八月八日京都支署並ニ出納營繕ノ二司ヲ大阪本省出張所ニ竝ス
- 第二 造幣寮支署 明治三年七月二十二日東京和田倉門外釧口ニ造幣寮支署ヲ置キ十一月八日之ヲ廢ス
- 第三 監督司支署

(二)京都支署 (二)大阪支署 (三)橫濱支署 明治四年七月共ニ之ヲ廢ス

第四 出納司支署

(二)大阪支署 明治四年七月十八日出納司大阪出張所ヲシテ爲換會社ノ金券及豫備金ヲ提理セシム

(二)京都支署 同年八月八日出納司京都支署ヲ廢シ之ヲ本省大阪出張所ニ竝ス

第五 用度司支署

(二)東京支署 明治三年十一月七日用度司ノ出張所ヲ皇城坂下門内ニ置ク四年七月二十七日日本省用度司ヲ廢スルニ及ヒテ亦之ヲ廢ス

(二)京都支署 明治四年七月二十七日日本省用度司ヲ廢スルニ及ヒテ之ヲ廢ス

第六 營繕司支署 同年八月八日營繕司京都支署ヲ大阪本省出張所ニ竝ス

第七 通商司支署

(二)堺支署 明治二年十月通商司出張所ヲ堺州^堺ニ設ク

(二)新潟支署 同年十二月通商司出張所ヲ新潟^越ニ置ク

第八 鑛山司支署

(二)東京支署 明治二年九月二十九日東京出張所ヲ鑛山司ト改稱ス

(二)小坂支署 同年十一月二十四日陸中國鹿角郡小坂銀山^{鹿角郡小坂銀山}都^{鹿角郡小坂銀山}家^{鹿角郡小坂銀山}ノ私^{鹿角郡小坂銀山}掘^{鹿角郡小坂銀山}スル^{鹿角郡小坂銀山}所^{鹿角郡小坂銀山}ヲ收^{鹿角郡小坂銀山}メ^{鹿角郡小坂銀山}テ官^{鹿角郡小坂銀山}行^{鹿角郡小坂銀山}トシ支^{鹿角郡小坂銀山}應^{鹿角郡小坂銀山}ヲ置^{鹿角郡小坂銀山}ク

第九 驛遞司支署

- (一) 京都支署 明治三年二月十九日再ヒ京都支署ヲ置キ驛遞ノ事務ヲ管理セシム
- (二) 東京支署 明治四年七月二十七日民政部省所轄驛遞司本省ニ屬スルニ及ヒ東京出張所ヲ管ス
(先是三年閏十月十七日驛遞出張所ヲ設ケ民政部省跡ニ設ケ同月二十三
日馬場先門内大藏省跡ニ移シ四年三月七日四日市郵便役所ニ移ス)
- (三) 大阪支署 同上(先是四年五月二十三日設ク
ル所八年五月郵便局ト稱ス)

第三目 附屬署衙

第一 本省附屬署衙

- (一) 燈明臺局 明治二年九月十九日外務省ノ管轄セル燈明臺局ヲ本省民政部省ニ移シ監督出納二司ノ橫濱支署ヲシテ共事務ヲ處理セシム三年八月十三日之ヲ民政部省ノ專管トス
- (二) 橫濱橫須賀製鐵所 明治二年十月二十八日神奈川縣ノ掌理セル橫濱橫須賀製鐵所ヲ本省民政部省ニ屬セシメ三年八月十三日之ヲ民政部省ノ專管トス
- (三) 金札改所 明治三年閏十月三府二港神奈川 戸 廣模造ノ楮幣ヲ檢鑒スルタメ之ヲ設置ス
- 第二 造幣寮附屬署衙
 - (一) 大阪理學所 明治三年五月二十日造幣寮假ニ之ヲ管シ十月十八日之ヲ大學ニ屬セシム
 - (二) 分析所 同年七月日關民政部省所管ノ分析所ヲ造幣寮ニ移シ十一月日關更ニ出納司ニ轉屬セシム
- 第三 出納司附屬署衙
 - 分析所 明治三年十一月日關出納司ニ於テ造幣寮所管ノ分析所ヲ管ス(四年八月復造幣寮ニ屬ス)

第四 營繕司附屬署衙

神戸鋸木機械所 明治三年八月十四日營繕司之ヲ管ス

第五 勸農司附屬署衙

富岡製絲場 明治四年七月二十七日勸農司之ヲ管ス先是三年閏十月七日民政部省庶務司之ヲ管セシカ此日同省廢セラレ本省ニ屬ス

第六 通商司附屬署衙

箱館產物會所 明治二年八月十一日通商司ノ民政部省ニ轉屬スルヤ產物會所亦共ニ民政部省ニ屬ス越エテ三年三月十二日開拓使ニ屬ス

第七 戶籍司附屬署衙

聽訟所 明治四年七月二十七日本省ニ戶籍司ヲ置キ聽訟所ヲシテ之ニ屬セシム

第二款 第二期

第一項 第二期ノ前期

第一目 管 務

明治四年八月十九日日本省事務章程ヲ改定シ大藏省ハ理財會計ニ關スル一切ノ事務ヲ統理シ全國人民ノ身分地方ノ警邏驛遞郵便等ノ事ヲ總管スルモノトシ又事務ノ綱領ヲ列舉シテ上奏制可ヲ經テ處分スル條款ト上奏制可ヲ經スシテ專決處分スルヲ得ル條款トヲ區定ス同月本省ニ於テ本省處務準序ナルモノヲ定ム後八年十一月二十五日事務章程ノ改正アリ同シク上奏裁可ヲ經ヘキ

モノト否トヲ區別ス

四年八月二十八日外務省所轄各開港市場稅務ヲ管ス九月五日大藏省所管各神社ノ祭典事務ハ神祇省之ヲ管掌ス蓋シ是ヨリ先キ七月二十七日大藏省中ノ用度司ヲ廢シタルニヨリ伊勢大廟ヲ除ク外各神社ノ祭典事務即チ用度司ノ料理セル神饌ノ供調及供用物品ノ採買等ノ事務ハ悉皆神祇省ノ管掌ト爲セルニヨルナリ九月十四日大藏省管理セル聽訟ノ事務ヲ司法省ニ屬セシム二十九日工部省土木寮ノ管掌スル橋梁架修ノ工事ヲ本省營繕寮ニ分屬セシム十月八日工部省所轄ノ土木寮ヲ管ス十二月十八日府縣ニ令達セシ藩鈔交換ノ事務ヲ管ス

五年七月九日東京府下市街煉瓦造家屋ノ工事ヲ本省ニ管理ス
六年一月十二日鐵道ノ建築ハ今後人民ノ會社ニ委付シ本省ヲシテ提理セシム同月十九日諸省使府縣ノ徵收スル贖罪金及科料錢ノ類ハ今後總テ司法省ニ納致セシム同月十四日陸軍省ノ管轄セル全國ノ城郭及地所陣營等ヲ軍事ニ必需ノ分ヲ除キ本省ニ交付ス同月三日陸軍省所管越後國新發田城ヲ管ス五月十七日同城ヲ陸軍省ニ屬セシム十二月五日海軍省所轄橫濱製鐵所ヲ管シ同月十四日日本省驛遞寮ノ所管トス

七年一月九日戶籍土木驛遞三寮橫濱製鐵所及租稅寮所管地理勸農ノ事務ヲ內務省ニ屬セシム即チ地理事務ニ伴ヒ城郭ノ所管自ラ移ル山林ノ事務ハ此時以後內務省地理寮ニ屬セシメ山林課ヲ置キテ之ヲ掌ラシム十二年五月十五日山林局ヲ置キ乃チ山林課ヲ廢ス十四年四月七日農商務省ニ轉屬ス同月十日太政官ヨリ內務省職制章程ヲ回示シ本省事務ニシテ彼ノ省ニ歸屬セルモノヲ廢停スヘキヲ令達ス家祿賞典祿及社寺祿取調並渡方ヲ從前ノ通り取扱フ二月二十八日各府縣貫

屬ノ措置ハ內務省戶籍寮ノ專務ニ屬スト雖トモ家祿ニ關係スル事項ハ大藏省ニ稟候セシム七月二十九日東京府下度量衡取締ハ本省ノ直管ヲ解キ自今東京府ニ屬セシム八月四日蕃地事務局ヲ廢シ蕃地處分ノ事項ハ陸海軍二省ニ委任シ金穀度支ニ關スル諸項ハ大藏省ニ委任ス同月十七日本省內務省ノ管掌スル土地租稅ノ權限ヲ區別ス十一月十五日蕃地事務局所管ノ汽船ヲ本省ニ管ス
八年六月二十七日金券發行會社ヲ除クノ外諸會社ノ准允ハ總テ內務省ノ管掌ト爲ス七月十二日舊蕃地事務局殘務舊ト太政官ノ所管ニ係ルヲ本省ニ管ス同月十八日銀行條例ヲ奉スル會社ノ准允ヲ管ス九月四日正院所轄印書局ヲ管ス
九年二月十三日日本省橫濱出張所ヲ外務省ニ屬セシム

第二目 分掌

第一 寮司ノ廢置 明治四年八月十日日本省ニ十一寮一司ヲ置ク造幣租稅戶籍營繕紙幣出納統計
檢査記錄驛遞勸業ノ諸寮及正算司是ナリ
同年同月二十三日勸業寮ヲ改メテ勸農寮ト稱ス十月八日工部省中ノ土木寮ヲ本省ニ屬シ營繕寮ヲ廢ス五年十月九日勸農寮及正算司ヲ廢ス六年七月十七日日本省中ニ國債寮ヲ置ク七年一月九日戶籍土木驛遞ノ三寮ヲ內務省ニ移ス十年一月十一日造幣租稅紙幣出納統計檢査國債記錄ノ諸寮ヲ廢ス

第二 寮司ノ管務

一 造幣寮 明治四年八月十九日本寮ノ職制及事務章程ヲ制定シ其第一ニ於テ本寮ハ一切貨幣鑄造ノ事務ヲ管掌ストセリ是ヨリ先キ同月十日從前出納司大阪出張所ノ處辨セル金銀料塊買收ノ事務及造幣工業ニ關涉スル出納ノ事務ヲ本省ノ管理トス十一月二日租稅寮管理ノ爲換會社ヲ管ス五年五月事務章程ヲ補正シ十月五日本寮ノ定額費金臨時費金及文書往復ノ事務ヲ記錄寮ニ於テ管掌スルモノトス

六年七月九日從來本寮ニ委任セラレタル出納寮大阪出張所準備金ノ計算及殖益ノ事務ヲ專ラ出納寮ノ擔理ト爲ス八月十八日本寮ノ擔理セル金銀料塊買收ノ事務ヲ出納寮出張所長ノ專任ニ屬セシム

九年五月三十日職制及事務章程ヲ定メ頭ノ意見ヲ具シ大藏卿ノ決判ヲ經ルモノト專決施行スルヲ得ルモノトヲ區別セリ

二 租稅寮 明治四年八月十九日本寮ノ職制及事務章程ヲ制定シ本寮ハ全國ノ租稅賦役及土地ニ關スル事務ヲ管掌スルモノトス十月四日租稅出納二寮ノ管掌セル倉庫收入支出ノ事務ヲ區別ス此月神奈川運上所ヲ管ス十一月四日本寮ノ管理セル爲換會社ノ事務ヲ紙幣寮ニ屬セシム同月二十五日處務條例ヲ定ム

五年正月二十七日日本寮ノ處理セル西洋形汽船及風帆船免許狀ノ處理ヲ記錄寮ノ管理トス五月三日神戸運上所ヲ本寮ノ直管トス同月十四日本寮管理ノ各縣ヨリ收回セル本省附屬官船ノ事務ヲ驛遞寮ニ屬セシム七月朔日大阪運上所ヲ本寮ノ直管トス同月十日勸農寮ノ管理セル牛馬賣買免許稅ノ事務ヲ本寮ニ屬セシム同月二十五日地租改正局ヲ置ク此月長崎運上所ヲ本寮ノ直管トス

八月五日本寮ノ事務章程ヲ改正ス十月九日勸農寮ヲ廢シ其事務ヲ本寮ニ屬セシム十一月二日橫濱運上所ヲ稅關本局ト稱シ各港運上所ヲ統轄セシム

七年一月九日本寮所管地理勸農事務ヲ內務省ニ屬セシム同月二十日橫濱稅關本局ノ稱ヲ廢ス八年三月二十四日本寮中地租改正局ヲ廢シ內務大藏兩省中ニ地租改正事務局ヲ置ク五月十四日舊地租改正局ノ處理セル市街分一稅施行地ニ關スル事務ヲ本寮ニ管ス六月三十日本寮ノ職制並ニ事務章程ヲ定メ稟議ヲ待ツモノト專決施行ヲ得ルモノトヲ區分ス七月二十日條約改正掛ノ殘務ヲ本寮外部課ニ屬セシム八月十五日開拓使所轄函館稅關事務ヲ管ス同月二十四日橫濱稅關築地出張所ヲ改メテ租稅寮出張所ト稱シ本寮之ヲ管ス九月二十一日新潟縣所轄新潟稅關事務ヲ管ス十月十四日相川縣所轄佐渡國夷港繫船所ヲ本寮ノ直管トシ新潟稅關出張所ト稱ス同月二十四日貢納石代相場取調ノ事務ヲ第二課ニ屬セシム九年六月三十日本寮ノ職制並事務章程ヲ定ム

三 戶籍寮 明治四年八月十九日本寮ノ職制及事務章程ヲ定メ全國戶數人員身分及社寺ノ事務ヲ管理スル所トス九月十三日本寮中ノ判理局ヲ本省ノ直管トス十一月十二日本省中ノ新縣掛ヲ廢シ士卒ノ家祿ノ計查ハ本寮之ヲ擔掌ス六年三月二十日士族卒ノ農商ニ歸スルモノニ金穀ヲ貸付スルハ出納寮貸付掛及本寮ノ管掌タリシヲ自今都テ貸付掛ノ管掌ト爲ス七年一月九日內務省ニ轉屬ス

四 營繕寮 明治四年八月十九日職制事務章程ヲ定メ本寮ハ神社、宮殿、諸官廳邸舍、倉庫、橋梁及諸工場屋宇等一切建造修營ヲ管掌スル所ナリトス九月二十九日工部省土木寮所轄道路、橋梁修築事務ヲ管ス十月八日工部省中ノ土木寮本省ニ屬スルニ及ヒ本寮ヲ廢ス

五 紙幣寮 明治四年八月十九日職制及事務章程ヲ定メ公債證書又ハ紙幣金券等一切ノ事務ヲ管掌スル所トス同月二十五日出納寮ノ處理セル紙幣關係ノ事務本寮ニ轉屬ス十一月二日租稅寮ノ處理セル爲換會社ノ事務本寮ニ屬ス

五年正月出納寮ノ處理セル郵便切手製造ノ事務ヲ本寮ニ管ス八月五日職制及事務章程ヲ改メ公債證書又ハ證券紙幣其他諸印紙類等一切ノ事務ヲ管掌スル所トス八月更ニ國立銀行ノ事務ヲ管掌ス十月七日貨幣及金札改所ヲ廢シ其事務ヲ本寮ニ屬セシム

六年十二月二日職制及事務章程ヲ改正ス同月十二日製造工事ニ係ルモノヲ除クノ外公債證書ノ事務ヲ國債寮ニ屬セシム同月二十四日郵便單箋及封符ノ製造ヲ驛遞寮ニ專委ス但印紙ハ本寮ニテ製造セシム

七年十二月七日省中各寮課ニ命シテ各銀行ニ關スル條款ハ都テ本寮ニ知照セシム

八年四月日關記錄寮ノ處理セル證券界紙製造ノ事務ヲ五月二十九日同寮相當ノ押印事務ヲ管ス八月更ニ證券界紙印刷ノ事務ヲ記錄寮ニ屬セシム九月四日正院所轄ノ印書局ヲ大藏省ニ管屬シ此月二十三日之ヲ本寮ニ屬セシム

九年六月三十日職制及事務章程ヲ改定シ紙幣ノ製造交換ヲ管掌シ諸銀行ノ監視ヲ攝理スル所トシ而シテ其事務ヲ大別シテ頭ヨリ大藏卿ニ上稟シテ裁制ヲ待ツモノト專決施行スルヲ得ルモノトヲ區分セリ

六 出納寮 明治四年八月十九日本寮ノ職制及事務章程ヲ定メ本寮ハ一切歲入歲費其他諸出納ノ事務ヲ管掌スル所ナリトス同月二十五日本寮ノ處理セル紙幣關係ノ事務紙幣寮ニ屬ス十月四

日租稅出納二寮ノ管掌スル倉庫收入支出ノ事務ヲ區分ス

五年正月本寮ノ處理セル郵便切手製造事務紙幣寮ニ屬ス十月二十九日石高貸付ノ整理ヲ本寮ノ管掌トス十一月二十三日諸務局管掌セル家作農具代種子夫食等ノ貸付事務本寮ニ屬ス

六年三月二十日士族卒ノ農商ニ歸スル者ニ金穀ヲ貸付スルハ本寮貸付掛及戶籍寮ノ管掌タリシヲ自今都テ貸付掛ノ管掌ト爲ス七月九日從來造幣寮ニ委任セル出納寮大阪出張所準備金ノ計算及殖益事務ヲ解除シ專ラ本寮ノ擔理ト爲ス同月二十七日本寮管理セル府縣爲換事務ヲ諸務局ニ轉屬セシム十二月二日本寮ノ管掌セル準備金及外國債ノ事務ヲ國債寮ニ轉屬セシム但シ準備現金ノ收支ハ之ヲ本寮ニ管掌セシム

七年二月十九日歲入出豫算ノ事務ヲ統計寮ニ移ス同月二十七日日本寮ノ編製セル金穀出納月報ハ本年一月以後ハ統計寮ヲシテ編製セシム十月九日本寮中ノ貸付掛ヲ廢シ其事務ヲ本寮理財課及國債寮ニ分屬セシム

九年六月三十日職制及事務章程ヲ定メ本寮ハ金穀出納ノ事務ヲ管掌スルモノトス

七 統計寮 明治四年八月十九日本寮ノ職制及事務章程ヲ定メ本寮ハ全國ノ歲入歲費及公債證書紙幣又ハ諸印紙發行ノ員數其他戶口地方面積物貨ノ產出海外輸出入品ノ多寡等一切形狀ヲ表出シテ閱覽ニ便スルコトヲ管掌スルモノトス九月四日元租稅司取扱諸簿冊ヲ本寮及租稅寮ニ分屬セシム

五年六月四日本省事務ニ關スル計表圖書ノ出版免許ノ調査ヲ本寮ニ管シ各寮司ニ該掛ヲ置ク

六年三月二十五日傳票課ニ管收セル月計簿ハ自今月次ニ檢査寮及本寮ニ轉致シ本寮ニ管收セシ

メ以テ統計編纂ノ資料ニ供セシム

七年二月十九日出納寮所管ノ歳入出豫算ノ事務ヲ本寮ニ付ス同月二十七日出納寮ノ編製セル金穀出納月報ハ本年一月以後ハ本寮ヲシテ編製セシム

九年六月三十日本寮職制及事務章程ヲ改正シ全國一切事務ノ實數ヲ通算總計セル所ナリトシ事務ヲ分チテ大藏卿ノ判決ヲ要スルモノト頭ノ專行スルヲ得ルモノトノ二トス

八 検査寮 明治四年八月十九日本寮ノ職制及事務章程ヲ定メ本寮ハ一切金穀ノ出納ニ關スル事務ヲ審査検査セル所ナリトス十一月八日事務章程中ヲ改正ス同月十二日本省新縣掛ヲ廢シ共歳入歳出ノ整理現存米金ノ計查ヲ本寮ノ擔掌トス

五年十月九日正算司ヲ廢シ其事務ヲ本寮ニ屬セシム此月晦日府縣ノ備置米金ヲ管理スル本寮諸務局ノ分轄ヲ議定ス

九年六月三十日職制及事務章程ヲ改定シ本寮ハ金穀出納ノ當否ヲ検査シ並ニ計簿ヲ整理スル所トシ且上稟シテ裁制ヲ待ツモノト專決施行スルヲ得ルモノトヲ區分ス七月十三日本省ノ簿記法取調掛ヲ本寮ニ屬セシム

九 記録寮 明治四年八月十九日本寮ノ職制及事務章程ヲ定メ本寮ハ緊要ナル一切ノ諸記録諸簿冊及諸計算ニ關涉スル傳票ヲ付スル本紙又ハ考課狀ノ類ヲ記録編輯シテ之ヲ管守スル事務ヲ管掌スルモノトス蓋シ是ヨリ先キ大藏省改正掛ニ於テ記録編纂ノ事務ヲ管掌セリ是ニ至リテ其事務ヲ本寮ニ屬ス

五年正月二十七日租稅寮ノ處理セル西洋形汽船及風帆船免許狀ノ處理ヲ本寮ノ管理ト爲ス十月

五日造幣寮ノ定額費金臨時費金及文書往復ノ事務ヲ管掌ス

七年三月八日太政官ノ裁批ヲ經タル稟議文書ハ悉ク本寮ニ收管セシム五月二日本寮ノ管理セル造幣寮ニ關スル事務ヲ國債寮ニ移ス同月二十三日本省各寮課ノ考課狀編輯ノ事務ヲ本寮ニ屬セシム七月四日本寮ノ管守セル西洋書籍ヲ本省內課外國往復掛ニ交付ス九月二十日省中一切ノ横文原書ヲ編纂保存セシム十一月考課狀ヲ廢シ年報書ヲ編纂セシム

八年二月七日該事務ヲ本省理財課ノ管理トシ年報掛ト稱ス四月本寮ノ處理セル證券界紙製造ノ事務ヲ紙幣寮ニ屬セシム

九年六月三十日本寮職制及事務章程ヲ改正シ一切金穀出納ノ傳票及公債證書各紙幣ノ記號ヲ記録シ諸公文簿冊ヲ保存スル所トシ而シテ其事務ヲ大別シテ頭ノ意見ヲ具シ大藏卿ノ判決ヲ經テ施行スルモノト專決施行スルヲ得ルモノトノ二トセリ

十 驛遞寮 明治四年八月十九日本寮ノ職制及事務章程ヲ定メ本寮ハ全國驛路遞送及各道郵便ノ事務ヲ管掌スルモノトス

五年四月十四日租稅寮管理ノ各縣ヨリ收回セル官船ノ事務ヲ本寮ニ屬セシム六月職制事務章程ヲ改正シ全國ノ驛路水陸ノ運輸及内外郵便ノ事務ヲ管掌スルモノトス八月回送取扱所ニ委任セル貢米漕運ノ事務ヲ管理ス

六年十二月十四日横濱製鐵所ヲ管理ス同月二十四日郵便單箋及封筒ノ製造ヲ本寮ニ專委ス
七年一月九日本寮ヲ內務省ニ移ス

十一 勸農寮 明治四年八月二十三日本寮ノ職制及事務章程ヲ制定シ本寮ハ勸農(耕織收畜等ニ

關スルノ事務ヲ管掌スル所ナリトシ其他官林ヲ斥賣スル處分モ亦本寮ノ專管トス

五年七月十日日本寮ノ管理セル牛馬賣買免許稅ノ事務ヲ租稅寮ニ屬セシム

十二 正算司 明治四年八月十九日日本司ノ職制及事務章程ヲ定メ本司ハ一切出納金穀ノ券書又ハ傳票ヲ調査正算スル所ナリトス

五年十月九日日本司ヲ廢シ其事務ヲ検査寮ニ屬セシム

十三 土木寮 明治四年十月八日工部省中ノ土木寮ヲ本省ニ移シ營繕寮ヲ廢シテ其事務ヲ本寮ニ竝合ス仍テ事務章程ヲ定メ本寮ハ全國水路ノ分畫、河流派脈ノ探討、堤防ノ新築、橋梁ノ創架、道路ノ變更、修築ノ賦役、堤塘、橋梁、道路ノ修造、河溝ノ浚濟、津港ノ便利ヲ司ルモノトス

五年九月二日本省直轄ノ建築局ヲ管理ス

六年二月七日職制ヲ定メ土木寮頭ハ全國ノ河流、溝、漚、運河、港、津、道路、橋梁、堤防及神社、宮殿、官廳、邸舍、倉庫等公工ノ事務ヲ總管スルモノトス

七年一月九日日本寮ヲ內務省ニ移ス

十四 國債寮 明治六年七月十七日日本寮ヲ創設シ十月十日本省ノ負債取調掛ヲ廢シ其事務ヲ本寮ニ屬ス十二月三日日本寮ノ職制及事務章程ヲ定メ本寮ハ內外國債償還紙幣支消ノ事務ヲ管掌スル所ナリトス仍テ出納寮ノ管掌セル準備金及外國債ノ事務ヲ本寮ニ轉屬ス但シ準備金ノ收支ハ之ヲ出納寮ニ管掌セシム同月十二日製造工事ニ係ルモノヲ除クノ外紙幣寮ノ管掌セル公債證書ノ事務ヲ本寮ニ屬セシム

七年五月二日記錄寮ノ管理ナル造幣寮ニ關スル事務ヲ本寮ニ屬セシム十月七日日本寮ノ造幣ニ關

明治財政史第一卷

スル事務ヲ本寮理財課ニ移ス同月九日出納寮ノ管掌セル石高貸付ノ事務ヲ本寮ニ分屬セシム十一月十日本省及內務省ノ合議ニ係ル水火罹災ノ窮民ニ貸與スル金額支給ノ順序ヲ各府縣ニ申達シ且其貸付ノ還納金ハ準備増殖ノ一項ト爲シ本寮ノ管掌トス

八年一月九日本省理財課管理ノ諸貸下金穀返納ノ事務ヲ本寮ニ屬セシム四月十日理財課ノ管理セル米穀相場會社ヲ本寮ニ於テ管轄ス八月三日貸與金ノ事務ヲ本省理財課ニ移ス

九年六月三十日職制及事務章程ヲ改定シ上稟シテ裁制ヲ俟ツモノト專決施行スルヲ得ルモノトヲ區分セリ

第三 寮司ノ分課

一 造幣寮 明治四年八月十九日日本寮分課ヲ定メ地金局、分析所、鎔金局、試驗分析局、伸金局、極印局、燒生局、秤量局、器具貯藏局、彫刻所、機關所、銅細工所、轉轆所、鍛冶所、硫酸製造所、瓦斯製造所、コーク製造所トス

五年五月庶務出納、營繕ノ三課ヲ増置ス

二 租稅寮 明治四年八月十九日日本寮分課ヲ定メ內部課、外部課、雜部課ノ三課トス蓋シ四年八月以前ニ在リテハ各開港開市場ノ稅務ハ外務省ノ所轄タリシカ是ニ至リテ本省ニ隸屬ス仍テ本寮中ニ外部課ヲ置キ各開港場輸出入稅竝ニ外國人ニ關涉スル一切ノ稅務ヲ管掌セシム但シ右外部課ノ稅務ハ姑ラク舊ニ仍テ地方官ヲシテ措置セシメ漸次本寮ニ於テ管理スルコト、爲セリ

五年七月二十五日寮中地租改正局ヲ置ク八月十九日外部課ヲ廢シ其事務ヲ雜部課ニ竝屬セシム十月十日雜部課ヲ廢シ勸農外部二課ヲ置ク同月內藤新宿試驗場ヲ設ケ富岡製絲場、堺紡績所ヲ管

ス
 六年一月十日印紙課ヲ置ク
 七年一月七日印紙課ヲ改メ印稅課ト稱シ事務條例ヲ定ム一月十八日内部課ヲ廢シテ賦稅課ヲ置キ五月五日改正局舊藩諸稅取調掛ヲ六月十二日計算掛ヲ同課ニ合竝ス七月十二日編纂掛ヲ編纂課ト改稱ス同月二十七日主計課ヲ置キ章程及職制ヲ定ム八月三十日雜稅改正課ヲ置キ十二月十二日同課ヲ雜稅法草制課ト改稱シ職制及事務章程ヲ假定ス十二月十七日外部課ノ職制章程ヲ改正ス
 八年一月十二日收稅課章程ヲ定ム三月二十四日寮中ノ地租改正局ヲ廢ス本省內務兩省中ニ地租改正事務局ヲ置キタルニヨル
 明治八年七月二十日分課ヲ改メ第一課外部第二課祿稅第三課印稅第四課收稅第五課主計第六課編纂ノ六課ト爲ス此日本省中條約改正事務掛ヲ廢シ殘務ヲ本寮ニ屬シ外部課ヲシテ處理セシム十一月九日雜稅法草制課ヲ第六課ト改メ從前ノ第六課ヲ第七課トナス
 九年六月二十八日庶務課ヲ置ク
 三 戶籍寮 明治四年八月十九日分課ヲ定メ本課貫屬課、社寺課ト爲ス
 四 紙幣寮 明治四年十二月檢査、文字、記載、記錄頭押印、出納頭押印、大藏卿押印、倉庫印章ノ七掛ヲ置ク
 五年二月肉製課及製造課課中、檢査、押印、出納押印、記錄押印ノ四掛アリヲ置ク八月更ニ國立銀行ノ事務ヲ管掌シ銀行課ヲ置ク九月彫刻課ヲ置ク

六年一月十二日受付課ヲ置ク同月十四日新紙幣製造課ヲ第一製造課肉製課ヲ第二製造課海運橋製造課ヲ第三製造課ト改稱ス二月十三日明治通寶竝ニ大藏卿押印課ヲ第一押印課出納頭押印課ヲ第二押印課記錄頭押印課ヲ第三押印課ト改稱ス十二月十八日用度課ヲ置ク
 七年二月十五日監督員ヲ置ク同月第三押印課ヲ廢ス三月二十日回議傳票ノ二部竝ニ計算課ヲ置ク同月三十一日印章、職務ノ二掛ヲ竝セテ書記ト稱ス四月二十二日用度課ヲ改メテ用度掛ト爲ス五月七日監督員ヲ罷メ工場掛ヲ置キ工場ヲ分テテ彫刻、舍密、刷版ノ三局ト爲ス六月十三日鈔史編纂掛ヲ置ク八月八日藩札課ヲ廢シ銀行課中ニ交換掛ヲ置キ藩札交換、各種交換ノ事務ヲ取扱ハシム藩札課ノ設
 置年月未詳
 九月四日工場掛ヲ改メテ監工課ト稱ス同月三十日用度掛ヲ改メテ調度課ト稱ス十月十九日鑒定員ヲ置ク十二月十八日取締掛ヲ置ク
 八年一月十二日舍密局ヲ製肉局ト改稱ス五月十七日押印課ヲ廢シ押印局ヲ置ク六月二十四日工場長ヲ工場掛ト工場掛ヲ監工ト改ム此月工場ヲ分テテ刷版、製肉、彫刻、抄紙、押印ノ五局ト爲ス七月二十日押印局ヲ廢シテ調査局ヲ置キ刷版局、裝飾部ヲ調査局ニ合ス九月四日鈔史編纂掛ヲ貨幣史編纂掛ト改稱ス同月四日正院所轄ノ印書局(五年九月二)ヲ本寮ニ屬シ活版局ト稱ス十月三十一日抄紙局ヲ東京府下王子村ニ設ク
 九年一月十二日受付庶務ノ二課ヲ竝セテ受付掛ト稱ス六月二十七日交換工場ノ二課ヲ置ク七月三日銀行課中學局ヲ廢シ翻譯掛ヲ置ク九月一日整理局ヲ置ク十一月十七日工場課ヲ廢ス工場中ニ整理局ヲ設置セラレタルニヨル
 五 出納寮 明治四年八月十九日分課ヲ定メ定額、臨時、簿記ノ三課トス

同年同月二十九日分課ヲ改定シテ常用課調査課ト爲ス
 七年十月貸付掛ヲ廢ス
 八年三月十五日分課ヲ改メ出納、司計、庶務ノ三課ト爲ス十月三十一日納金局ヲ置ク九年二月二十
 八日納金局ヲ改メテ現金納拂局ト稱ス三月二十四日米廩出納掛ヲ廢シ貯蓄課ヲ置ク
 九年七月一日分課ヲ改メ出納掛、司計掛、庶務掛、假納掛、一等金庫、四等金庫、右兩金庫ヲ現金納拂掛
 ト稱ス三等金庫、右金庫ハ府縣寄託金ヲ管ス米廩、二等金庫ト爲ス
 六 統計寮 明治四年九月二日分課ヲ定メ常務編輯、書記ノ三課ヲ置ク
 六年十二月十九日分課ヲ改置シ常計、庶務、金穀通計ノ三課ト爲ス
 七 検査寮 明治四年九月八日日本寮ノ管掌スル事務ヲ分テテ往復編纂、檢案、調査、照查ノ五課トス
 五年六月分課ヲ改定シ成算、檢案、編輯、受付ノ四課ト爲ス
 同年十月九日分課ヲ改定シ檢案、調査、照查、正算、編輯、受付ノ六課ト爲ス蓋シ此際正算司ヲ廢シ其事
 務ヲ本寮ニ竝屬シタルニ依ルナリ十一月十八日正算、照查、調査ノ三課ヲ廢シ更ニ成算、調査ノ二課
 ヲ置ク
 七年三月二十八日分課ヲ改定シ受付、諸務、檢案、編輯ノ四課及第一成算課ヨリ第五成算課ニ至ル五
 課ト爲ス同年八月十四日改正掛ヲ置キ金穀出納檢査法改正ノ事ヲ調査セシム八年三月檢案課ヲ
 廢シ十二月二十八日受付課ヲ諸務課ニ竝ス九年四月五日改正掛ヲ廢ス
 八 記録寮 明治四年八月十九日分課ヲ定メ簿記編輯、刊行、翻譯ノ四課ト爲ス七年一月十二日本
 省翻譯局ヲ管ス三月十八日造幣寮御用掛ヲ置ク同月三十一日紙幣寮第三押印課ヲ廢シ當寮ニ公

債課ヲ置キ紙幣公債證書ノ押印ヲ管理ス七年五月十五日分課ヲ改メ第一照查、第二照查、編纂、簿書
 雜務ノ五課トシ簿書課中ニ倉監ヲ置ク十一月十二日考課狀改正掛ヲ置ク八年二月(日闕)之ヲ本省
 ノ直管ト爲ス
 八年十一月二十五日分課ヲ改メテ第一照查、第二照查、編纂、雜務ノ四課ト爲シ編纂課中ニ庶務、刊行
 ノ二掛ヲ置ク九年七月二十四日考課狀殘務掛ヲ罷ム
 九 驛遞寮 明治五年四月(日闕)分課ヲ定メ會計、庶務、郵便、往復、管船ノ五課ヲ置ク六年一月(日闕)郵
 便課ヲ廢シ更ニ郵便規畫、郵便調製、郵便發著、調度、翻譯ノ五課ヲ置ク其他ノ分課ハ故ノ如シ八月十
 七日調度課ヲ廢ス此月(日闕)郵便爲替課ヲ置ク
 十 國債寮 明治六年十月十日日本寮ニ負債掛、貸付掛考課編纂掛ヲ置ク十二月二日準備掛及外債
 掛ヲ置ク七年一月二十日秩祿課ヲ置ク
 七年五月二十七日分課ヲ改メテ八課ト爲ス内債課、外債課、秩祿課、準備課、貸付課、造幣事務課考課編
 纂課、受付課是ナリ十月七日造幣事務課ヲ廢シ其事務ヲ本省理財課ニ移ス八年一月(日闕)正算課ヲ
 置ク三月十五日編纂課ヲ置ク四月十日株式取引所竝ニ米穀相場會社掛ヲ設ケ六月二十八日之ヲ
 廢ス九年二月十日外債課中ノ舊藩藩外債取調掛ヲ貸付課ニ合竝ス(同掛ノ設置年月未詳)同月(日闕)
 考課編纂課ヲ廢ス六月十二日社寺課ヲ置ク
 十一 各寮 明治八年七月十日各寮ニ年報掛ヲ設ケ年報ノ事務ヲ料理セシム
 第四 寮司ノ班次
 明治四年八月十日寮司ノ班次ヲ改定シ造幣、租稅ノ二寮ヲ一等寮トシ戶籍、營繕、紙幣、出納、統計、檢査

ノ諸寮ヲ二等寮トシ記録驛遞勸業ノ諸寮ヲ三等寮トシ正算司ヲ一等司ト爲ス五年六月二十二日驛遞寮ノ事務ヲ擴張スルニ由リ陸セテ二等寮ト爲ス

六年七月十七日始テ國債寮ヲ置キ二等ニ班ス十月二十九日記録寮ヲ二等ニ陸ス

第五 本省ノ分課

明治四年八月十九日大藏省處務通則ヲ定メ本省ニ傳票往復受付職務用度刊行ノ六課ヲ置テ其事務ヲ分掌セシム九月十三日戶籍寮所管ノ判理局ヲ直管シ專ラ舊藩ノ外國債ヲ審議ス此月(日)關諸務課新縣掛ヲ置ク十一月十二日新縣掛ヲ廢シ其事務ヲ諸務課戶籍寮及檢査寮ニ分屬セシム其諸務課ノ擔掌セル事務ハ舊藩債額ノ查計及償消ノ方法舊藩鈔ノ收回及士族卒授産ノ方圖等ナリ五年二月十三日負債取調掛ヲ置キ舊藩債ニ關スル事務ヲ處理セシム六月十四日翻譯局ヲ置ク七月三日諸務課ヲ改メテ局ト爲シ同時ニ諸務局ノ處務順序ヲ定メテ寮司ノ分課ニ屬セサル省中ノ庶務ヲ處辨スルモノトシ局中ニ三課ヲ分置ス內課外課編集課是ナリ此日舊藩貸付金穀ノ處理ハ目下假リニ負債掛ニ管掌セシメ整理完算ノ後ハ出納寮ニ交割セシムルコト、ス同月十七日建築局ヲ置キ職制並ニ處務規程ヲ設ケ處務掛、築品掛、築場掛、出納掛ノ四課ヲ置ク蓋シ局ハ東京橋以南ノ民屋建築ノコトヲ管スルモノニシテ該工事ハ初メ東京府ノ起工スル所ナリシカ是ヨリ先キ同月九日日本省ニ屬セシヲ以テナリ九月二日建築局ヲ土木寮ニ屬セシム此月翻譯局ノ規程ヲ設定ス十月晦日府縣ノ備置米金ヲ管理スル檢査寮諸務局ノ分轄ヲ議定ス十一月二十二日諸務局管掌ノ種子夫食等ノ貸付事務ヲ出納寮ニ屬セシム

六年一月九日太政官ニ稟議稟申スル事項ニシテ府縣ニ關スルモノハ受付課ノ所管ニシテ往復課

ハ單ニ共官省ニ屬スルモノ、ミ料理セルヲ更メテ都テ太政官ニ稟議稟申スルモノハ往復課ノ所管ト爲ス同月二十一日舊府藩縣及舊幕府臣僚ノ采地ニ貯蓄セル金穀ノ管理ハ負債掛ニ屬付シ整查ノ後之ヲ出納寮ニ交付セシム二月二十三日往復課ノ事務章程中ヲ刪正ス三月十八日太政官ニ稟議スル文書ノ顛末ハ必ス往復課ニ回示シテ簿記セシム同月二十五日傳票課ニ管收セル月計簿ハ自今統計寮ニ管收セシム四月二十九日判理局ヲ廢シ其事務ヲ諸務局ニ屬セシム六月九日諸務局ヲシテ各寮課ノ考課狀ヲ編輯シ之ヲ太政官ニ上進セシム七月十日日本省ノ考課狀ハ各寮局課各自ニ編纂シテ稿本ヲ諸務局ニ送附シ其校正ヲ經テ各自復淨寫シ目次ヲ副具シ諸務局ヨリ上進セシム同月十九日府縣廢合ノ事務ハ諸務局專ラ之ヲ主管シ租稅寮ニ合評シ公園地ノ事務ハ租稅寮專ラ之ヲ主管シ諸務局ニ合評セシム但橫濱公園ハ外國ニ關係スルモノ多キニ由リ從前ノ如ク諸務局之ヲ主管シ租稅寮ニ合評セシム同月二十七日出納寮管理セル府縣爲換事務諸務局ニ轉屬ス九月二十八日訴訟一件取調所ヲ舊判理局ニ置キ英吉利國商人訴訟ノ事ヲ審査セシメ十月七日答辯局ト稱ス同月十日負債取調掛ヲ廢シ其事務ヲ國債寮ニ屬セシム

五日本省答辯局ヲ罷メ其殘務ヲ內課ニ料理セシム同月二十三日本省內課中理財會計掛ヲシテ外國人往復ノ文書ヲ料理セシム五月(日關會社條例取調掛ヲ置ク此月條約改正事務掛ヲ置ク七月四日記錄寮ノ管守セル西洋書籍ヲ本省外國往復掛ニ交付ス七月三十一日翻譯局ヲ廢ス
 七年八月八日本省分課ヲ改メテ三課トシ各掛ヲ分掌セシム即チ理財課議案掛外國文書掛傳票掛卿輔書記文書課職務掛往復掛受付掛簿書掛翻譯掛用度課是ナリ但度量衡改正掛條約改正事務掛會社條例取調掛故ノ如シ此月十五日蕃地事務取扱掛ヲ設ケ臺灣蕃地征討事務ノ經費ヲ監査セシム十月七日國債寮中ノ造幣事務課ノ事務ヲ本省理財課ニ移シ課中ニ造幣事務掛ヲ置ク同月九日出納寮中ノ貸付掛ヲ廢シ其事務ヲ理財課議案掛ヲシテ料理セシメ石高拜借ノ事務ハ國債寮ニ分屬セシム同月十五日各寮局ヲシテ諸貸與金穀ノ事項ニ關スル回議簿冊ハ都テ理財課議案掛ニ協議セシム十一月十五日汽船掛ヲ設ク同月二十二日勸查局ヲ置キ爲換方小野組閉店事務ヲ管セシム(十年一月十一日廢之)

八年二月(日關臨時翻譯取調掛ヲ置ク又同月七日記錄寮考課狀改正掛ヲ直管シテ之ヲ年報掛ト稱シ理財課中ニ置ク四月十日理財課ノ管理セル米穀相場會社ノ事務ヲ國債寮ニ移ス六月二十九日記錄寮ノ管掌セル常用界紙類印刷ノ事務用度課ニ屬ス七月二十日條約改正掛ヲ廢シ殘務ヲ租稅寮外部課ニ屬セシム八月三日國債寮ノ管理セル貸與金穀返納ノ事務ヲ理財課ニ移ス同年十月十日分課ヲ改置シ議案課傳票課外國文書課職務課受付課年報課用度課ト爲ス此日造幣事務掛ヲ議案課ニ置ク又會社條例取調掛ヲ廢ス同月十八日臨時事務取調掛ヲ置ク十一月二十日翻譯課ヲ置ク同月二十五日職制及事務章程ヲ改正ス十二月五日臨時翻譯取調掛ヲ翻譯課ニ並ス同月十四日

事務章程ヲ增補ス同月二十二日考案課ヲ置キ本省金穀ノ收支處分上ニ關スル訴訟等ノ事項ヲ稽査セシム十年一月十一日之ヲ議案課ニ合ス
 九年一月七日簿記法取調掛ヲ置ク同月二十九日卿輔官房ヲ以テ本局ト稱ス三月二十九日出納條例改正取調掛ヲ設ケ各寮ニ委員ヲ置キ以テ簿記計算法釐正ノ事務ヲ專理セシム四月十四日舊蕃地事務局殘務掛並ニ汽船掛ヲ廢ス六月六日用度課ニ於テ本省所屬ノ地所ヲ保管ス同月十九日事務章程中ヲ改正增補ス七月四日貸付掛ヲ置ク(十年一月十一日國債局ニ屬ス)同月十三日簿記法取調掛ヲ檢査寮ニ屬セシム十二月十九日事務章程中ヲ改正ス

第三目 職員

明治四年八月十日本省官制ヲ同月十九日職制事務章程ヲ改定シ本省ニ卿附屬書記、大輔附屬書記、少輔附屬書記、大丞、少丞、大錄權、大錄、中錄、權、中錄、少錄、權、少錄ヲ置キ寮ニ正權頭、正權助(但シ三等寮ニ正權、大中少屬司ニ正權、正權、大中少令史ヲ置ク十二月九日各寮ニ關スル事務ヲ本省丞官ニ分課ス六年五月九日當分事務總裁ヲ置ク六月十八日三等出仕ノ事務ヲ分課ス七年一月二十二日日本省大丞、少丞主務ノ條款ヲ議定ス同月二十四日議案文書ノ卿輔ノ判決ヲ受クヘキ條款ヲ區別ス八年十一月二十五日職制ヲ改メ大少丞ニ權官及筆生省掌ヲ置ク十二月二十八日各寮ニ史生寮掌ヲ置ク但造幣寮ニ於テハ九月十九日大中少技監、大中少技師、大中少技手、大中少技生ヲ置ケリ

第四目 雜件

第一 署 麻

- 一 紙幣寮署麻 明治四年十二月十二日本寮ヲ八代洲河岸舊土木寮測量所址ニ移シ五年二月二十七日更ニ神田橋門内舊鹿兒島藩邸ニ移ス
 - 二 驛遞寮署麻 明治五年三月二日本寮ヲ東京府下四日市郵便役所ニ移シ六年十一月二十四日常磐橋舊府縣出張所ニ移ス
 - 三 翻譯局署麻 明治五年六月十四日濱町二丁目舊品川縣邸ニ置ク七年七月三十一日之レヲ廢ス
 - 四 建築局署麻 明治五年七月十七日築地采女町ニ置ク後九月二日土木寮ニ屬ス
- 第二 支 衙
- 一 本省支衙
 - (一)大阪出張所 明治四年八月二十二日之ヲ廢シ改メテ營繕出納二寮ノ出張所ト爲ス
 - (二)橫濱出張所 明治九年二月十三日外務省ニ屬ス
 - 二 租稅寮支署
 - (一)東京出張所 明治七年九月十五日租稅寮出張所ヲ東京萬世橋内ニ置ク十年一月租稅局萬世橋出張所ト改稱ス
 - (二)大阪出張所 明治五年三月十九日大阪出張所職員並ニ處務順序ヲ定ム七月朔日大阪府所轄ノ運上所事務ヲ管ス七年十二月二十九日同出張所ヲ廢ス

- (三)築地出張所 明治八年八月二十四日橫濱稅關築地出張所ヲ改メテ租稅寮出張所ト稱ス
- 三 營繕寮支署 明治四年八月二十二日本省大阪出張所ヲ改メテ營繕出納二寮ノ出張所ト爲ス
- 四 出納寮支署
 - (一)大阪出張所 明治四年八月二十二日本省大阪出張所ヲ改メテ營繕出納二寮ノ出張所ト爲ス
 - (二)橫濱出張所 明治五年二月八日之ヲ廢ス
 - (三)仙臺出張所 明治八年九月五日陸前國仙臺ニ出納寮出張所ヲ置ク
 - (四)小倉出張所 同月同日豊前國小倉ニ出納寮出張所ヲ置ク九年九月十四日之ヲ肥前國長崎ニ移ス

- (五)長崎出張所 明治九年九月十四日小倉出張所ヲ長崎ニ移ス
- 五 驛遞寮支署
- 京都出張所 明治五年正月二十二日驛遞寮京都出張所ヲ廢シ單ニ郵便役所ト稱ス(三年二月民政部省ニ管屬中設置スル所ニ係ル)

- 六 土木寮支署 明治四年十月八日工部省土木寮所屬ノ大阪土木寮出張所ヲ管理シ十二月之ヲ廢ス(先是元年十月二十八日治河使ヲ京都及大阪ニ置ク二年七月二十七日之ヲ廢シ其事務ヲ民政部省土木使ニ移スコレ其起源ナリ四年七月二十七日土木司ヲ工部省ニ移シ八月十日寮トナス)

- 七 國債寮支署 明治六年十二月(日關)國債寮出張所ヲ大阪ニ置ク
- 八 紙幣寮支署 明治五年九月二十三日紙幣寮出張所ヲ大阪ニ置ク八年十月二十七日ニ至リ之ヲ廢ス
- 九 勸農寮支署 明治五年五月二十九日勸農寮出張所ヲ三陸兩羽便宜ノ地ニ設ケ開拓牧畜及殖

産ノ途ヲ講セシム

第三 附屬署衙

一 本省附屬署衙

(一)地租改正事務局 明治八年三月二十四日地租改正事務局ヲ置キ内務大藏兩省ニ屬シ地租改正ニ關スル一切ノ事務ヲ管理セシム(十四年六月三十日之ヲ廢シ殘務ハ大藏省租稅局ニ屬ス)

(二)銀行學局 明治七年五月銀行學局ヲ開設シ生徒ヲ募集シ銀行必須ノ學科ヲ教授ス九年七月之ヲ廢ス

(三)貨幣改所及金札改所 明治五年十月五日各所ノ貨幣改所及金札改所ヲ廢シ其事務ヲ紙幣寮ニ屬セシム但京都貨幣改所ハ四年九月之ヲ廢セリ

二 租稅寮附屬署衙

(一)内藤新宿試驗場 明治五年十月日關之ヲ設ク七年一月九日内務省ニ轉屬ス

(二)上州富岡製絲場 明治五年十月九日租稅寮之ヲ管シ七年一月九日内務省ニ轉屬ス

(三)泉州堺紡績場 明治五年十一月日關租稅寮之ヲ管シ七年一月九日内務省ニ轉屬ス

三 戶籍寮附屬署衙

聽訟所 明治四年九月二日聽訟所ヲ改メテ判理局ト稱シ同月十三日之ヲ本省ニ直管ス

四 紙幣寮附屬署衙

藩札交換所 明治五年八月二十八日舊藩札交換順序十三條ヲ定メ各地方ニ於テ土地ノ便宜ヲ量リ一所若クハ數所ノ交換所ヲ設ケ縣吏ヲ派出シ且ツ鑒檢ノ技能アル者ヲ選用シ以テ其交換ノ事

明治四年九月二日

務ヲ處辨セシム交換資金ハ參河信濃越後以東ノ各縣ハ東京紙幣寮ヨリ越中美濃飛騨尾張以西ノ各縣ハ紙幣寮大阪出張所ヨリ交付セシメ交換押印等ノ經費ハ大藏省ニ於テ支辨スルモノトス交換セル藩札ハ百兩ヲ以テ一封緘トシ其表面ニ金額種類枚數ヲ詳記シ之ニ地方長次官檢印シ東京大阪兩地ノ紙幣寮ニ納付スルモノトス六年五月二十日更ニ札幌根室樺太留萌浦河松前小樽ノ開拓使本支廳出張所及京都府其他各縣等ノ交換所ヲ增加ス九年十月ニ至リテ藩札交換ノ事務結了セルヲ以テ交換所ヲ廢止ス

五 驛遞寮附屬署衙

橫濱製鐵所 明治六年十二月五日海軍省所轄橫濱製鐵所ヲ大藏省ニ管シ驛遞寮ノ所轄トス七年一月九日本寮ノ内務省ニ轉屬スルヤ同製鐵所モ亦之ニ隨フ

六 勸農寮附屬署衙

(一)上州富岡製絲場 明治五年十月九日勸農寮ヲ廢スルヲ以テ移シテ租稅寮ノ所管トス(同製絲場ハ三年閏十月七日民政部庶務司ノ之ヲ管シタルニ始マル四年七月二十七日民政部ヲ廢シ其事務ヲ大藏省ニ並屬スルヤ勸農司之ヲ管シ以テ是ニ至レルナリ)

(二)泉州堺紡績場 明治五年五月(日關本寮之ヲ管ス(舊鹿兒嶋藩ノ設タル所ニ係ル)十一月日關租稅寮ノ所管トス

七 土木寮附屬署衙

建築局 明治五年九月二日本省建築局ヲ土木寮ニ屬セシム七年一月九日本寮ノ内務省ニ移ルヤ局モ亦之ニ隨フ

第二項 第二期ノ後期

第一目 管 務

明治十年一月十一日太政官達第三號ヲ以テ大ニ官制ヲ改革ス然レトモ本省ノ管掌事務ノ範圍ハ敢テ變更スル所ナシ十三年十二月二日日本省事務章程ヲ改定シ大藏省ハ全國財政ニ關スル事務ヲ管理スル所ナリトシ又主管事務中裁可ヲ經テ施行スヘキモノ十四箇條ヲ列記ス次テ十四年十一月十日諸省事務章程通則ヲ規定セラル、ニ及ヒ同月十七日大藏省管掌事務條款ナルモノヲ定メテ右通則ノ旨趣ニ依リ上奏裁可ヲ請フヘキ條件十五項ヲ規定ス十九年一月十六日當省中官房及各局事務規定ヲ改定シ同時ニ官房處務條款並各局事務章程及處務條款ヲ定ム

明治十年一月十七日舊勘査局殘務掛ヲ置キ八月八日之ヲ廢ス十一月二十八日內務省所管ノ株式取引所及米商會所ニ關スル事務ヲ本省本局(名)銀行課ノ管理トス十一月一日米商會所ニ關スル事務ヲ常平局ニ移ス株式取引所ニ關スル事務ハ依然銀行課ニ屬セシカ十二年十二月本局ノ廢止ニ伴ヒテ銀行課ハ書記局ニ屬シ十三年五月特立ノ一局トナレリ十二月二十七日內務省所轄勸商事務ヲ本省ニ屬セシム十二年三月七日內務省ト共ニ内外博覽會ノ事務ヲ管ス

十三年三月五日本省檢査局ヲ廢シ其管掌セル財政監督事務ノ大部分ヲ會計檢査院ニ移ス同月二十九日書記ニ局外國品調度掛ヲ置キ各應需用外國品ノ購買供給事務ヲ管セシム

十四年四月七日本省商務局ヲ廢シ其事務ヲ農商務省ニ屬セシム同月十九日本省常平局ノ米商會所ニ關スル事務ヲ農商務省ニ屬セシム五月十六日本省銀行局ノ株式取引所ニ關スル事務ヲ農商

務省ニ屬セシム六月三十日地租改正事務局ヲ廢シ殘務ヲ本省租稅局ニ並ス七月八日外國品調度掛ヲ廢シ殘務ヲ報告課ニ屬セシム

十五年一月從來會計檢査院ノ管掌セル歲入出決算調理ノ事務ヲ本省ニ轉屬セシメ調查局ヲシテ管掌セシム三月八日舊開拓使ノ管理セル東京箱崎町物產取扱所大阪敦賀派出所北海道準備米漁業昆布採收資本金貸與等ノ事務ヲ本省ニ管ス同月十六日舊開拓使ノ管理セル家屋改良貸與ノ殘務ヲ處理ス七月三日農商務省所轄ノ府縣交付金遞送事務ヲ本省ニ管ス

十八年一月十三日農商務省ト共ニ貯金取扱事務ヲ管ス

十九年一月六日農商務省ノ管理セル三池佐渡生野ノ三鑛山ノ事務ヲ本省ニ屬セシム同月十二日舊工部省殘務ヲ管理ス

第二目 分 掌

第一 諸局ノ配置

明治十年一月十一日官制ヲ改定シ各省中諸寮廢セラレ各省長官ノ見込ヲ以テ局ヲ設クヘキコトトナリ此ニ於テ本省ノ諸寮ヲ廢シ更メテ本局及租稅關稅檢査國債出納造幣紙幣常平(但十一月七日)記錄ノ十局ヲ置ク明治十一年十二月十日紙幣局ヲ印刷局ト改稱ス十二年一月九日商務局ヲ置ク蓋シ十一年十二月二十七日內務省ノ勸商局ヲ廢シ其事務ヲ本省ニ屬セシメタルヲ以テナリ九月十六日日本局議案課中造幣事務掛ヲ廢シ造幣局出張所ヲ省中ニ置ク十二月十六日日本局(名)ヲ廢シ書記局及議案局ヲ置ク

十三年三月五日検査局ヲ廢シ同月六日精算局ヲ置ク五月七日書記局ノ銀行課ヲ廢シ銀行局ヲ置ク六月十九日精算局ヲ調査局ト改稱ス

十四年四月七日商務局ヲ廢シ其事務ヲ農商務省ニ移ス六月二十七日會計局ヲ置ク

十五年十一月四日常平局ヲ廢シテ庶務局ヲ置ク

十七年五月八日庶務局ヲ廢ス同月二十日租稅關稅二局ヲ廢シテ主稅局ヲ置ク同月二十五日貯金規則取調掛ヲ設ケシカ十八年五月三十日貯金規則取調掛ヲ廢シ預金局ヲ置ク

十九年一月十六日調査局ヲ主計局ト改正シ又議案局ヲ廢シ官房及金庫局ヲ新設ス

第二 諸局ノ管務

一 本局 明治十年一月十一日從來ノ本省及本局ヲ以テ本局ト爲ス其管掌事務ノ範圍ハ舊ニ仍ル同月十二日舊紙幣寮ノ管理セル銀行及銀行類似會社ノ事務ヲ本局ニ管ス同月十七日勸查局殘務掛ヲ置キ勸查局ノ殘務ヲ管シ八月四日之ヲ廢ス十一月二十八日日本局銀行課ニ於テ内務省ノ管理セル株式取引所及米商會所ニ關スル事務ヲ管掌ス

十一年七月一日米商會所ニ關スル事務ヲ常平局ニ屬セシム

十二年一月三十一日日本局議案課ノ管掌セル爲換方ノ事務ヲ出納局ニ屬セシム五月七日火災保險事務取調掛ヲ置ク九月十六日議案課ノ造幣事務掛ヲ廢シ其事務ヲ造幣局出張所ニ屬セシム十二月十六日日本局ヲ廢ス

二 租稅局 明治十年一月十一日租稅寮ヲ廢シ租稅局ヲ置クヤ第一課ヲ割キテ關稅局ヲ置ク而シテ租稅局ノ管掌事務ハ舊ニ仍ル

十四年六月三十日地租改正事務局殘務ヲ管ス

十五年一月十七日租稅局職制並事務章程ヲ定ム十二月十三日庶務局ノ雜收入事務ヲ管ス

十六年十一月九日事務章程ヲ追加シ府縣徵稅費豫算決算ノ事務ヲ管セシム

十七年五月二十日主稅局ヲ設置スルニ及ヒテ租稅局ヲ廢ス

三 關稅局 明治十年一月十一日關稅局ヲ設ケ海關稅ノ事務ヲ管セシム

十五年一月十七日職制及事務章程ヲ改正シ各港稅關ヲ統轄シ海關稅一切ノ事務ヲ管掌スルモノトス

十七年五月二十日ニ至テ之ヲ廢止ス主稅局ヲ設ケタルニヨルナリ

四 検査局 明治十年一月十一日検査寮ヲ廢シテ検査局ヲ置ク其管掌ノ事務ハ舊例ニ準ス十三年三月五日之ヲ廢ス

五 國債局 明治十年一月十一日國債寮ヲ廢シテ國債局ヲ置クヤ其管掌事務ハ舊ニ仍ル此日舊理財課ノ管理セル貸與金ノ事務ヲ管ス

十四年一月七日社寺祿渡方ヲ調査局ニ付シ六月三十日造幣地金購收ヲ造幣局ニ移ス十月七日書記局所管ノ舊商務局引殘事務ヲ掌ル十二月二十三日地金購收ヲ再ヒ管ス

十五年一月十七日職制及事務章程ヲ改定シ内外ノ償還諸貸下金ノ取立準備金起業金外國費金ニ關スル事務ヲ管掌スルモノトス十一月二日常平局ノ管理スル備荒儲蓄ノ事務ヲ管ス同月六日舊常平局ノ管理セル精米所及其事務ヲ管ス十二月七日賞勳年金軍人恩給社寺祿及沖繩縣士族金祿ノ事務ヲ管理ス

十六年三月十五日沖繩社寺役俸給與ノ事ヲ掌ル十一月十二日各廳營業資本及繰替金ヲ一般貸付金ト同シク之ヲ擔理ス

十七年四月十六日恩給及扶助料支給ノ事務ヲ管掌ス五月二十二日起業基金ノ事務ヲ調査局ニ移ス九月二十四日證券取扱事務ヲ司ル

十八年六月八日諸預リ金ノ事務ヲ預金局ニ移ス同月二十四日貸付金及繰替貸其他返納金ノ事務ヲ書記局庶務課ニ轉屬セシム

十九年一月十六日事務章程ヲ改メ諸公債紙幣恩給ノ事務ヲ管掌スルモノトス

六 出納局 明治十年一月十一日出納寮ヲ廢シテ出納局ヲ置キ其管掌事務ハ舊ニ仍ラシム同月十五日舊紙幣寮ノ管掌セル紙幣交換ノ事務ヲ之ニ屬セシム

十二年一月三十一日議案課ノ管掌セル爲換方ノ事務ヲ之ニ屬セシム

十五年一月十七日職制及事務章程ヲ定メ國庫現金ノ出納及官金ノ管守損傷紙幣交換ノ事務ヲ管掌スルモノトス十一月四日日本省庶務局ヲ置キシヲ以テ爲換課所轄ノ爲換方ノ事務ヲ移シテ同局ノ管掌ト爲ス

十九年一月十六日事務章程ヲ改定シ國庫金運轉及出納配賦準備金海外荷爲換金預ケ金貨幣鑄造額貨幣交換大藏省證券ノ發行額一時借入金及國庫金監査等ノ事ヲ管掌スルモノトス

七 造幣局 明治十年一月十一日造幣寮ヲ廢シテ造幣局ヲ置キ其管掌事務ハ舊寮ノ例ニ準ス十五年一月十七日職制並事務章程ヲ定ム

八 紙幣局 明治十年一月十一日紙幣寮ヲ廢シテ紙幣局ヲ置クヤ其管掌事務ハ銀行及銀行類似

會社ニ關スル事務ヲ本局(組)ニ移シ紙幣交換ノ事務ヲ出納局ニ轉屬セル外總テ舊寮ノ例ニ仍ル同月十五日紙幣交換ノ事務ヲ出納局ニ付ス

十一年十二月十日印刷局ト改稱ス

九 常平局 明治十一年六月十七日事務章程ヲ定メ米穀ヲ糶糶シ其價格ヲ平準スルノ事ヲ管掌スル所トス七月一日常平局ヲ開設スルヤ本局(組)銀行課ノ管セル米商會所ニ關スル事務ヲ之ニ屬セシム

十三年六月二十四日備荒儲蓄法實施ニ關スル事務ヲ處理ス十二月四日若津米廩ヲ置ク

十四年四月八日米商會所ニ關スル事務ヲ農商務省ニ轉屬ス七月八日三重縣所屬四日市米廩山口縣所管赤間關米廩ヲ管ス蓋シ四日市下ノ關兩米廩ハ元大藏省ノ所轄ナリシヲ十年十一月以降該米廩保護及米穀出納ノ事務ヲ三重山口兩縣ニ委託ス是ニ至リテ移シテ其所管ト爲セシナリ

十五年十一月十七日職制及事務章程ヲ定メ米穀ヲ糶糶シ其價格ヲ平準シ及備荒儲蓄法ニ關スル事件ヲ管掌スル所トス十一月二日常平局ノ管理セル備荒儲蓄ノ事務ヲ國債局ニ屬セシム同月四日常平局ヲ廢ス

十 記錄局 明治十年一月十一日記錄寮ヲ廢シテ記錄局ヲ置クヤ其所管事務ハ舊寮ノ例ニ準ス十一年六月二十四日舊幕府理財會要取調掛ヲ置ク

十二年十二月十七日日本局(組)議案課十二年十二月十六日廢止ノ管理セル貿易辭書取調ノ事務ヲ之ニ屬セシム

十三年五月二十七日書記議案兩局所管ノ簿書掛ヲ廢シテ共事務ヲ之ニ屬セシム

十五年一月十七日職制及事務章程ヲ改定シ國庫出納ノ傳票各紙幣及公債證書ヲ照查證印シ諸公文簿冊ヲ徵收シ及書籍采輯ノ事務ヲ管掌スルモノトス十二月十八日刊行事務ヲ會計局ニ轉屬セシム

十六年十二月二十七日舊幕府理財會要取調掛ヲ廢ス

十七年十月六日主稅局ノ擔理セル租稅誌編輯ノ事務ヲ管掌ス

十九年一月十六日事務章程ヲ改正シ省中各局ノ文書ヲ保存シ及政府紙幣銀行紙幣諸公債證券等ノ照印ヲ掌ルモノトス

十一 印刷局 明治十一年十二月十日紙幣局ヲ改メテ印刷局ト稱ス職制及事務章程等ハ舊ニ仍ル

十五年一月十七日職制並事務章程ヲ改定シ諸紙幣公債證書印紙切手類ノ製造及布告達類印刷ノ事務ヲ管掌スルモノトス

十二 商務局 明治十二年一月九日內務省勸商局ノ事務ヲ本省ニ移シテ商務局ヲ建ツルヤ其管掌事務ハ內務省舊勸商局ノ所定ニ據ル十二月十七日舊本局(名)ノ管理セシ度量衡事務ヲ管ス

十四年四月七日ニ至リテ商務局ヲ廢ス

十三 書記局 明治十二年十二月十六日本局(名)ヲ廢シ其議案課ヲ以テ議案局ト改稱シ爾餘ノ諸課ヲ合シテ一局トナシ書記局ト稱ス

十三年三月二十九日外國品調度掛ヲ置キ各廳需要外國品ノ購買供給ノ事ヲ管セシム五月七日銀行課ヲ廢シ別ニ銀行局ヲ設置ス同月二十七日簿書掛ヲ廢シ其事務ヲ記錄局ニ屬セシム

明治財政史第一卷

十四年四月十四日舊商務局殘務取調掛ヲ置キ舊商務局ノ殘務ヲ管セシム七月二日翻譯統計二課ヲ廢シ報告課ヲ置ク同月七日外國品調度掛ヲ廢シ殘務ヲ報告課ニ屬セシム十月七日舊商務局殘務取調掛ヲ廢シ其事務ヲ國債局ニ付ス十一月十九日橫濱正金銀行管理掛ヲ置ク同月二十四日火災保險取調掛ヲ議案局ニ屬セシム十二月五日日本鐵道會社會計監查掛ヲ置ク

十五年一月二十五日橫濱正金銀行管理掛ヲ廢ス

十七年五月八日庶務局ヲ廢シ其事務ヲ之ニ並ス六月三十日開拓使事業報告編纂殘務掛ヲ置ク

十八年六月十一日國債局ノ管セル貸付金及繰替貸其他返納金ノ事務庶務課ニ轉シ十九年一月十六日整理課ニ屬ス同日傳票課ヲ廢シ其事務ヲ官房ニ並ス同月二十一日諸貸下金其他返納金等ノ事務ヲ整理課ニ管ス二月十七日開拓使事業報告編纂殘務掛ヲ廢ス

十四 議案局 明治十二年十二月十六日本局(名)議案課ヲ改メテ議案局ト稱シ同月十七日其管理セル貿易辭書取調ノ事務ヲ記錄局ニ屬セシム

十四年十一月二十四日書記局所管ノ火災保險取調掛ヲ議案局ニ屬シ十五年六月三十日之ヲ廢ス

十九年一月十六日議案局ヲ廢ス

十五 精算局 明治十三年三月五日検査局ヲ廢シ太政官中ニ新ニ六部及會計検査院ヲ建テ、財政監督ノ機關ト爲ス是ニ於テカ六日大藏省中ニハ更ニ精算局ヲ設ケ歲入出豫算表ノ調理歲入出ノ追調支出金ノ交付金穀出納ノ傳票檢閱準備金運轉上ノ出納檢閱官有財産計算ノ調理地方稅出入ノ計算調理出納現計表ノ整理收入支出及計算報告表ノ調査等ノ事務ヲ管掌セシム六月十九日調査局ト改稱ス

明治財政史第一卷

十六 銀行局 明治十三年五月七日書記局ノ銀行課ヲ廢シ銀行局ヲ置ク
十四年五月十六日株式取引所ニ關スル事務ヲ農商務省ニ割屬ス
十五年一月十七日職制並事務章程ヲ定メ諸銀行及銀行類似會社ヲ管掌監督スル所トス
十九年一月十六日事務章程ヲ改定シ銀行局ハ諸銀行及之ニ類似スル會社監督ノ事ヲ掌ルモノトス

十七 調查局 明治十三年六月十九日精算局ヲ改メテ調查局ト爲スヤ其管掌事務ハ舊ニ仍ル
十五年一月十七日從來會計検査院ノ管掌セル歲入出決算調査ノ事務ヲ本省ニ轉屬セシメ之ヲ調查局ノ所管トス仍テ職制並事務章程ヲ改定シ歲計ノ豫算決算ヲ調成シ國庫ノ出納ヲ法規ニ照シテ査定シ臨時收支ノ當否ヲ審案シ及地方稅ノ豫算精算ヲ監査スル所トス六月八日國債局主管ノ沖繩縣土族金祿給與ノ事務ヲ管ス
十七年五月二十二日國債局所管ノ企業基金ノ事務ヲ掌ル
十九年一月十六日主計局ト改稱ス

十八 會計局 明治十四年六月二十七日會計局ヲ建テ職制及事務規程ヲ定メ省中一切ノ會計ヲ管掌シ諸般ノ需用及物品ヲ辨給管守シ營繕其他省內取締上ニ關スル事件ヲ管理スルモノトス七月二十三日各局課掛取扱ノ諸經費仕拂計算及諸收入方ヲ管ス十二月十八日記録局ノ管理セル刊行事務ヲ管ス
十五年一月十七日職制並事務章程ヲ改メ省中一切ノ會計ヲ管掌シ本省用所屬ノ地所家屋財產物品ヲ管守辨給シ其他省內取締上ニ關スル事件ヲ管理スル所トス

十六年二月八日各局課掛ニ於テ編成上梓セル圖書類ノ取扱ヲ掌ル
十八年四月七日本省所管歲入及經費豫算書決算書ヲ編成セシム
十九年一月十六日事務章程ヲ改定シ本省中ノ會計用度營繕等ノ事務ヲ管掌スルモノトス

十九 庶務局 明治十五年十一月四日常平局ヲ廢シテ更ニ庶務局ヲ置キ從來出納局ノ管掌セル爲換方ノ事務ヲ處理セシム
十七年五月八日之ヲ廢ス

二十 主稅局 明治十七年五月二十日租稅關稅ノ兩局ヲ廢シテ主稅局ヲ置キ事務章程ヲ定ム同月二十二日分掌規程ヲ定メ七月八日之ヲ更正ス八月二十九日租稅監査規程ヲ定ム九月二日簿記傳習所ヲ置ク十月六日租稅誌編輯ノ事務記録局ニ轉屬ス
十八年六月三十日地租改正殘務掛ヲ廢ス

二十一 預金局 明治十八年五月三十日之ヲ置キ職制並事務章程ヲ定メ預金ニ關スル一切ノ事務ヲ管掌セシム六月八日國債局所管諸預リ金ノ事務ヲ司ル
十九年一月十六日事務章程ヲ定メ各官廳及會社等ヨリ預リ金ノ保管利殖ノ事務ヲ管掌スルモノトス

二十二 主計局 明治十九年一月十六日調查局ヲ主計局ト改稱スルヤ事務章程ヲ改定シ全國ノ歲計國庫原簿ノ管理及官有財產物品會計等ノ事務ヲ管掌スルモノトス

二十三 官房 明治十九年一月十六日官房ヲ置キ書記局中ノ傳票課ヲ廢シ其事務ヲ官房ニ移ス

二十四 金庫局 明治十九年一月十六日金庫局ヲ置キ事務規程ヲ定メ中央金庫ヲ管理シ現金ノ

管守出納國庫金收入所及現金支拂所管理ノ事務ヲ掌ルモノトス

第三 諸局ノ分課

- 一 本局 明治十年一月十一日本局ノ分課ヲ定メ議案課傳票課受付課統計課翻譯課用度課ト爲ス同月十二日銀行課ヲ設ケ銀行及銀行類似會社ノ事務ヲ管理セシム同月十七日勘査局殘務掛ヲ置ク八月四日之ヲ廢ス十一月二十八日銀行課ニ於テ內務省管理セル株式取引所及米商會所ニ關スル事務ヲ管掌ス
- 十一年七月一日其米商會所ニ關スル事務ヲ常平局ニ屬セシム
- 十二年五月七日火災保險事務取調掛ヲ置ク九月十六日議案課ノ造幣事務掛ヲ廢シ其事務ヲ造幣局出張所ニ屬セシム
- 二 租稅局 明治十年一月十一日官制ヲ改革スルヤ事務ヲ處理スルノ順序ハ姑ラク舊寮ノ章程ニ仍リシモ此月二十日分課ヲ改定シ地課掛雜課掛收益掛集計掛編輯掛庶務掛ト爲ス
- 十二年二月二十八日委員掛ヲ置キ十月三十日之ヲ廢ス
- 十三年六月二十五日分課ヲ改メ地稅部雜稅部收稅部集計部地價修正部編輯部庶務掛ト爲ス
- 十四年七月四日地租改正殘務掛ヲ置ク八月二十六日分課ヲ改定シ賦稅部收稅部編輯科庶務科地租改正殘務掛ト爲ス
- 十五年一月十七日職制及事務章程ヲ改定シ分課ヲ改メテ賦稅課收稅課編輯課庶務課ト爲ス
- 十六年三月三日東京箱崎出張所殘務掛ヲ置キ五月三日之ヲ廢ス六月十二日監理課ヲ置キ又編輯課ヲ改メテ編集課ト稱ス

明治十年一月十一日

十七年五月二十日地方稅課ヲ置ク

- 三 關稅局 明治十年一月二十七日分課ヲ定メ議案掛統計掛編集掛洋文掛庶務掛受付掛ト爲ス
- 十一年九月二日審査掛ヲ置ク十月十一日受付掛ヲ廢シ其事務ヲ庶務掛ニ合併ス
- 十五年一月十七日分課ヲ改メ議案課統計課審査課洋文課編輯課庶務課ト爲ス
- 四 檢査局 明治十年一月十一日檢査寮ヲ廢シテ檢査局ヲ置クヤ事務ヲ處理スル順序ハ姑ラク舊寮ノ章程ニ仍リシカ同月二十五日分課ヲ定メ豫算掛院省掛府縣掛追算掛製表掛諸務掛編輯掛ト爲ス
- 十一年六月二十六日製表掛ヲ追算掛ニ並ス七月一日院省掛府縣掛ヲ廢シ調查掛ヲ置ク
- 十三年一月七日追算掛ヲ廢シ簿記掛決算掛ヲ置ク
- 五 國債局 明治十年一月十一日國債寮ヲ廢シテ國債局ヲ置クヤ事務ヲ處理スル順序ハ姑ラク舊寮ノ章程ニ仍リシカ同月十五日課ヲ改メテ掛トシ內債掛外債掛秩祿掛準備掛貸付掛受付掛正算掛編纂掛社寺掛ト爲ス十一月七日秩祿正算兩掛ヲ廢ス
- 十一年四月十八日起業公債掛ヲ置ク七月一日減債掛ヲ置ク
- 十二年六月二十五日司計掛ヲ置ク
- 十四年一月十一日社寺掛ヲ廢ス
- 十五年一月十七日分課ヲ改メ債務課貸付金取立課外國爲換課司計課準備課起業金課受付課編纂課ト爲ス十一月二日常平局ノ管理セル備荒儲蓄ノ事務ヲ本局ニ隸屬セシメ備荒儲蓄課ヲ置ク
- 十七年五月十一日中仙道鐵道公債募集取調掛ヲ置ク七月一日起業金課外國爲換課ヲ廢シ更ニ外

部課ヲ置ク

十九年一月十六日各分課ヲ廢シ更ニ公債恩給計算ノ三課ヲ置ク

六 出納局 明治十年一月十一日出納寮ヲ廢シテ出納局ヲ置クヤ事務ヲ處理スル順序ハ姑ラク
 舊寮ノ章程ニ仍リシカ同月二十五日分課ヲ改定シ出納掛、司計掛、庶務掛、假納拂掛、一等金庫、三等金
 庫、四等金庫、右三金庫ヲ並セテ現金納拂掛ト稱ス、交換掛、倉庫掛ト爲ス、二月三日現金納拂掛ヲ置キ
 舊現金納拂局ノ事務ヲ管セシム

十二年二月四日爲換取調掛ヲ置ク、七月一日紙幣交換掛ヲ置ク

十三年十二月二日出納掛、假納拂掛ヲ廢シテ出納本部ヲ置キ、又紙幣交換掛ヲ改メテ交換掛ト稱ス

十五年一月十七日分課ヲ改メ本課、主計課、庶務課爲換課、主計課ト爲ス、六月三十日現金納拂掛ヲ廢
 ス、七月一日本課ヲ廢シ交換掛ヲ改メテ交換課ト稱ス、十一月七日爲換課ヲ廢ス、蓋シ本月四日庶務
 局ヲ置キ爲換方ノ事務ヲ同局ノ管掌ニ屬セシメタルヲ以テナリ

十七年十一月二十八日處務條款ヲ改定シ本課並ニ主計、經費、庶務、主計交換ノ五課ヲ更置ス

十九年一月十六日分課ヲ改置シ配賦準備金、監査ノ三課ト爲ス

七 造幣局 明治十年一月十一日造幣寮ヲ廢シテ造幣局ヲ置クヤ事務ヲ處理スル順序ハ姑ラク
 舊寮ノ章程ニ仍リシカ二月十六日分課ヲ改定シ地金出納科、地金計算科、試驗分析所、鑄解所、伸金所、
 秤量所、極印所、精銅所、鑄銅所、伸銅所、銅極印所、彫刻所、工作所、製作所、精製分析所、硫酸製造所、文書掛、會
 計掛、貯藏掛、管繕掛、監察掛、電信掛、治療掛、門番所、詰、泉布觀詰、貨幣調方ト爲ス

十三年五月十日地金出納、地金計算ノ二科ヲ併セ地金課ヲ置ク

十四年十一月二十七日會計貯藏兩掛ヲ並セ會計課ヲ置ク

十五年一月十七日分課ヲ改メ地金課、會計課、文書課、管繕課、工場ト爲ス、二月十三日舊監察掛、治療掛
 門番所、詰、泉布觀詰ヲ合セ庶務課ヲ置ク

十六年一月四日精銅、鑄銅兩所ヲ並セ更ニ鑄銅所ト改稱ス

八 紙幣局 明治十年一月十一日紙幣寮ヲ廢シテ紙幣局ヲ置クヤ事務ヲ處理スルノ順序ハ舊ニ
 仍リシカ同月十三日分課ヲ改定シ庶務部、計算部、調度部、倉庫部、編輯部、貨幣史、編纂掛、監工、整理部、刷
 版部、製肉部、彫刻部、抄紙部、調查部、活版部ト爲ス、同月十五日庶務、編輯兩部ヲ並セテ庶務掛ト爲シ計
 算、倉庫兩部ヲ並セテ計算掛ト爲シ、調度部ヲ改メテ調度掛ト爲ス

十一年五月一日製造事務所掛ヲ置ク

九 常平局 明治十一年七月一日分課ヲ定メ庶務掛、審查掛、計算掛、大阪支局、淺草米廩、難波米廩、兵
 庫米廩、長崎米廩、石巻米廩ト爲ス

十三年六月二十四日備荒儲蓄掛ヲ置ク、十二月四日若津米廩ヲ置ク

十四年八月十五日三重縣所轄四日市米廩ヲ管ス、同月二十一日山口縣所轄赤間關米廩ヲ管ス

十五年一月十七日分課ヲ改メ審查課、庶務課、計算課、備荒儲蓄課ト爲ス、大阪支局及各地米廩故ノ如
 シ

十 記録局 明治十年一月十一日記録寮ヲ廢シテ記録局ヲ置クヤ事務ヲ處理スル順序ハ姑ラク
 舊寮ノ章程ニ仍リシカ分課ヲ改定シ照査掛、照印掛、編纂掛、雜務掛、沿革誌取調掛ノ五トス

十一年六月二十四日舊幕府理財會要取調掛ヲ置ク